

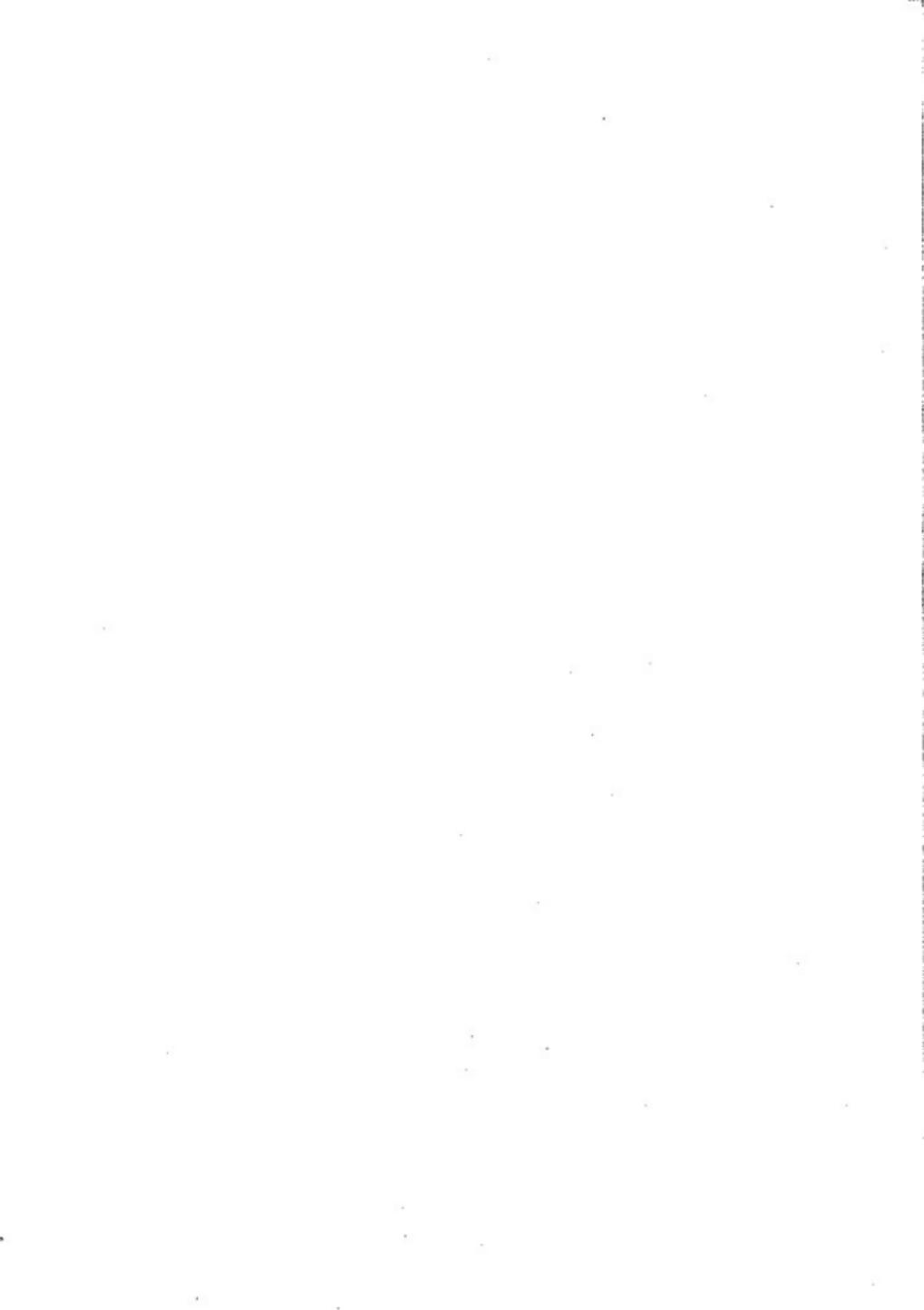
# 豊中・古池遺跡

発掘調査概報

そのⅢ

豊中・古池遺跡調査会

1976. 3





素環頭 遺物番号 1

上池出土（O-19 河川中層、砂混り粘土層）

現存長 10.5cm

5世紀



剣 (上) 遺物番号 3

上池出土 (G-33 河川中層、砂混り粘土層)

長さ 54.8cm 幅 3.1cm

5世紀

刀 (下) 遺物番号 4

上池出土 (I-35 河川中層、砂混り粘土層)

長さ 64.6cm 幅 3cm

5世紀

# 豊中・古池遺跡

発掘調査概報

そのⅢ

豊中・古池遺跡調査会

1976. 3

## 序 文

泉大津の市域には、古い古い歴史を地下に埋めている部分が多々あります。埋蔵文化財の  
包蔵地です。豊中の区画整理の地区もそのような地域でありますので、事業に先立ち本調査  
会による発掘調査が3カ年にわたって行なわれてまいりました。その結果多數の遺構遺物の  
検出を見ました。これらは名もない人々の地味な生活の跡なのです。私達はその遺構遺物を  
通じて、先人の長い長い苦労の道のりを偲んで、当時の人々の生き方を学ぶ必要があります。  
その道程の先端に今日の私達の生活があるわけです。そして今後の進むべき進路の羅針  
盤として広く活用せねばなりません。これが文化財に課された使命といつても過言ではない  
でしょう。本書がそのような時に手助けの一端ともなれば幸甚に存じます。

最後に本調査の関係者並びに本書の刊行にたずさわった人々に感謝の意を表します。

豊中・古池遺跡調査会

理事長 中辻捨二郎

## 例　　言

1. 本書は、豊中・古池遺跡調査会が、泉大津市豊中区画整理地区に於いて行なった、昭和49・50年度発掘調査の記録である。
2. 本調査の経費は、泉大津市区画整理事業よりの委託費による。本調査にあたって、区画整理事務所の高岡所長をはじめ、全職員の方々の御援助を得たことを感謝します。
3. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師井藤 徹（現主査）、泉大津市教育委員会社会教育課坂口昌男が担当して行なった。

期間は、昭和48年10月24日より、昭和50年5月16日までである。この間、西本孝男、杉本俊彦、尾野幸雄、森 茂、芋木隆裕、吉川和則の諸君が調査に参加した。

4. 遺物整理、実測は財団法人大阪文化財センター第2遺物整理室（酒井龍一室長）が行ない、遺物写真撮影は、同センター写真資料室（中西和子室長）が行なった。

5. 本書の作成は、遺構篇を坂口昌男、吉川和則が行ない、遺物篇は、酒井龍一、正富博行、芋木隆裕、杉本朝美が行なった。

6. 骨壺及び鉄鍋の科学的保存処理は財団法人元興寺仏教民俗資料研究所によるものである。

## 目 次

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 地理的環境	2
第3章 歴史的環境	3
第4章 既往調査概略	6
第5章 遺構	7
1. 街路部分	7
2. 上池部分	13
3. 遺構まとめ	14
第6章 遺物	18
1. 豊中遺跡（街路部分）出土遺物	18
2. 上池部分出土土器	32
3. 上池部分出土土器の考察	35
4. 上池部分出土木製品	46
第7章 和泉に於ける「伝統的第V様式」に関する覚え書	49
別 表	
街路部分（河川状遺構他）出土遺物一覧表	71
上池部分出土土器一覧表	85
上池部分出土木製品一覧表	108

## 図 版

1	周辺の遺跡
2	既往調査箇所
3	既往調査遺構図

- 4 ..... 調査箇所  
5 ..... 地区割図  
6～19 ..... 街路部分遺構図  
20・21 ..... 上池部分遺構図  
22～38 ..... 街路部分遺物実測図  
39～45 ..... 上池部分土器実測図  
46 ..... 上池部分木製品出土地点  
47～56 ..... 上池部分木製品実測図
- 
- 57～69 ..... 街路部分遺構写真  
70～72 ..... 上池部分遺構写真  
73～89 ..... 街路部分遺物写真  
90～107 ..... 上池部分遺物（土器）写真  
108～119 ..... 上池部分遺物（木製品）写真

## 第1章 調査にいたる経過

大阪府泉大津市農中には、「大福寺」の字名が残っており、遺跡の存在が早くから予想された。田畠には土師器・須恵器・瓦などの破片が散布し、府道泉大津中央線の道路工事に伴って、遺物が出土したことからその存在は確定的となった。

近年の経済発展により、大阪・和歌山を結ぶ新しい道路が必要とされ、そのため建設省により、昭和40年に新道路が計画された。この道路は第2阪和国道と名付けられ、本市の東部を通過するものとなった。そのルート上に古池が存在するため、埋め立てられることとなり、それに先立ち池が干された。その時、池底から多数の須恵器片が出土した。その結果、昭和47年から48年にかけて、大阪府教育委員会によって発掘調査が行なわれ、旧河川、道路跡、倉庫跡等の遺構が検出された。又、第2阪和国道の予定路線上も同教育委員会によって調査され、住居址、井戸跡、倉庫跡等が発見された。こうして農中遺跡は、相当広範囲にわたるものであることがわかった。その付近は、第2阪和国道に伴う区画整理事業が、泉大津市によって昭和40年に計画されており、以上の調査結果から、その事業区内を調査する必要が生じた。昭和48年10月に、泉大津市教育委員会は、大阪府教育委員会と協議の結果、農中・古池遺跡調査会を設立し、その調査にあたることとなった。昭和48年度は、区画整理地区内に31カ所の試掘坑を掘り、断面観察を行ない調査対象地を設定した。そして、同年度に巾6m、長さ40mの部分を調査し、多数の成果を得た。上地部分及び、残りの街路部分は昭和49年度・50年度に実施し、今回の報告となつた。

## 第2章 地理的環境

泉大津市は、大阪平野の南部で大阪湾に面する位置にある。北は高石市、東は和泉市、南は大津川をはさんで泉北郡忠岡町と接しており、南北に長い形をし、その面積は約 10.61km<sup>2</sup>、人口は約6万8千人の山間部を有しない市である。

地場産業としては、織物工業が盛んで、特に毛布の生産量は全国の約95%を占めている。近年、堺以南の海岸部を埋めたてて、堺・泉北臨海工業地帯が造られ、泉大津市の部分には公共埠頭が建設されつつあり、港湾の町にもなろうとしている。本市の西部を南海本線と国道26号線が平行して走り、大阪と和歌山を結ぶ主要路線となっている。その道路に沿って市街が形成されており、徐々に東部の農村部も市街化へと進みつつある。経済の高度成長により、国道26号線は著しい交通量の増加を示し、麻痺状態となつた。昭和40年に、建設省はそれを緩和するため、大阪・和歌山を結ぶ新ルート、第2阪和国道を万国博開連事業として計画した。そして、それに伴う区画整理事業が、堺市・高石市・泉大津市・岸和田市等、それぞれの市によって行なわれている。

豊中遺跡は、泉大津市の東部にある遺跡で、現在その大半は水田の下に埋もれている。その範囲は広く、国鉄阪和線和泉府中駅より北へ 900m、南海本線泉大津駅より東南東の方へ約1800m の地点を中心として、南北約1000m、東西約800mの規模である。

この遺跡を地形的に見ると、大阪府と和歌山県の境界に、ほぼ東西に走る和泉山脈があり、北に向かっていくつかの丘陵が、その山脈より伸びている。和泉市内の信太山丘陵もその一つである。この丘陵より更に西に派生した舌状の微高地がある。豊中遺跡はその北西端の部分及び、南西側のわずかな谷を隔てた部分に立地し、標高は約12m～18mである。

水資源としては、この遺跡の南西に和泉山脈を源とする大津川が流れ、大阪湾へと続いている。その他には、付近に大きな河川ではなく、溜池が数多く存在する。しかし、現在ではその大部分は埋められてしまっている。（今回調査が行なわれた上池も、調査終了後埋め立てられている。）現地表下には、ほぼ南北方向に幾条もの砂礫層が走り、地下水位も比較的浅く、以前には湧水の箇所が数多く見られた。和泉府中に存在する清水（和泉清水）は、かなりの水量を湧出させ、下流水田の灌漑に利用されていたが、現在では小規模なものとなっている。気候は温暖で降水量は概して少ないのであるが、このように灌漑用水に恵まれていたため、農業生産の場として古くから拓け、条里製造構もよく残されている。

### 第3章 歴史的環境

豊中遺跡が所在する大阪平野の南部では、現在のところ弥生時代以降の遺跡は、多数発見されている。しかし、それ以前の遺跡はそう多くない。昭和40年に、和泉市父鬼町の海拔約390mの地点で、泉大津高校地盤部によって発掘調査がなされ、旧石器時代のサメカイトの石核、及び剝片が発見された。<sup>①</sup>又、最近では堺市野々井遺跡、高石市大園遺跡、岸和田市海岸寺山遺跡等でも、旧石器時代に属すると思われる石器、及び剝片が出土している。これ等からして、この時代の遺跡は今後も発見される可能性は極めて高い。縄文時代の遺跡では、岸和田市箕土路遺跡より中期初頭の土器片が、そして今回の調査地の上池より中期後半のやはり土器片が出土しており、発見された近くには縄文遺跡が存在するものと思われる。又、信太山丘陵から打製の石器が採集されている。<sup>②</sup>堺市四ツ池遺跡は後期・晚期、岸和田市春木八幡山遺跡は、後期の土器が出土しており、くわしい報告がなされているが、和泉地方に於ける縄文時代は未だ明らかにはされていない。<sup>③</sup>堺市四ツ池遺跡は更に弥生時代へと続いている。北九州で始まった弥生文化は急速度で東進し、この地方に伝わったものと思われる。それに続くのが泉大津市池浦遺跡で、畿内第1様式中～新に、和泉市、泉大津市にまたがる池上・曾根遺跡は畿内第1様式新から始まる位置付けられている。この池上・曾根遺跡でも、農耕集落として米作りが生活基盤となっていたことは、飯蛸塗形土器や土師、手網等の漁業関係の遺物を出土しながらも、木製品による農耕用道具や開墾用道具が多數発見されていることにより、明らかである。この集落は大溝によって囲まれており、その発展段階、更には和泉地方に於ける弥生文化の発展段階を示す重要な遺跡として四ツ池遺跡と共に知られている。

東部～中部瀬戸内沿岸に見られる高地性集落は、この地方では和泉市觀音寺山遺跡・惣ヶ池遺跡と2ヶ所が発見され調査がなされている。<sup>④</sup>觀音寺山遺跡の場合は、100箇以上の住居址が存在し、丘陵の中腹を塗がめぐって集落をとりかこんでおり、この遺跡の性格を判明させる上の重要なポイントとなる。又惣ヶ池遺跡からは、弥生後期の窓穴住居と共に、工房跡と思われる窓穴の存在することが調査者によって報告されており、畿内の弥生時代における生産史を解明する一つの手がかりを与えていている。遺体を埋葬した墳墓の一形態として方形周溝墓があげられる。弥生時代前期から始まったこの形態は古墳時代にも引きつがれていることが、泉大津市七ノ坪遺跡によても明らかにされた。古墳時代を把握する方法として、今まででは古墳の調査を主になされてきたが、最近では集落跡も多数調査されるようになった。（これには最近の広範囲による農地の宅地化にも一因があるが）この結果、弥生式土器から土師式土器へ移行する過程を示す多くの新資

料が得られた。豊中遺跡もこの時期から始まるが、他に高石市大園遺跡<sup>①</sup>、和泉市上町遺跡<sup>②</sup>、伯太北遺跡<sup>③</sup>、池上・曾根遺跡<sup>④</sup>、泉州大津市七ノ坪遺跡等があげられ、弥生時代にはまとまって集落が形成されていたものが、古墳時代になるにつれて、その周辺部へと拡がって行き、それぞれグループを成していたようである。ある程度生産は分業化されているが、農業生産を基盤としてのまとまりは、軍事的首長によって統合されていたものと思われる。これはやがて和泉が國としての単位にまで発展していった。和泉は早くから拓かれ、農業が行なわれていたことは既に述べた。このことはこの地方に於いても、条里制が敷かれる条件を満たした。しかしこれは、大化の改新時この地に条里制が敷かれたことを意味するものではない。いつの時期に行なわれたかは不明である。和泉に國府が置かれたのは757年のことであり、それまでは河内國の一部であった。大鳥・和泉・日根三郡が716年に河内國に含まれながら、「和泉監」をして半ば独立した行政体となつた。しかしこの和泉監は740年には廃止され、もとの河内國に併合された。その後、前記の三郡が「和泉國」となり、国衙が設置された。現在の和泉市府中町がそのあたりである。泉州大津市古池周辺の遺跡は、その国衙をとりまく集落の一部と思われる。

古池のすぐ西側に要池があり、この池の南側を昭和49年7月～同50年3月の期間で、大阪府教育委員会によって発掘調査がなされた。<sup>⑤</sup> その結果、桁行6間梁行3間の特異な形をした並び倉が検出された。鎌倉時代に位置づけられ、新しい資料を提供したことで注目される。

#### 註

- ① 和泉市史 第一巻 1965 和泉市史編纂委員会
- ② 中村 浩氏よりご教示
- ③ 井藤 徹氏よりご教示
- ④ ①と同じ
- ⑤ 「池上・四ツ池」 1970 第二阪和国道内遺跡調査会  
「第二阪和国道内遺跡調査報告書」4 1971 同  
「 同 」 1.2.3. 1973 同  
「池上遺跡発掘調査概要Ⅱ」 1973 大阪府教育委員会  
「 同 」 1974 同
- ⑥ 「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」 1965 岸和田市教育委員会
- ⑦ 「館・番・仙」第22号 1972 大阪府教育委員会文化財保護課
- ⑧ ⑤と同じ
- ⑨ 「難波寺山弥生集落調査概報」 1968 難波寺山遺跡調査団
- ⑩ 「和泉市信太山（鶴山台）窓の池遺跡発掘調査概報」 1970 和泉市教育委員会
- ⑪ 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 1969 大阪府教育委員会  
「 同 」 1974 同  
「七ノ坪遺跡試掘調査報告」 1974 大阪府立泉大津高等学校地歴部  
「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 1974 泉大津市教育委員会
- ⑫ 「大園遺跡発掘調査概要Ⅰ」 1974 大阪府教育委員会  
「 同 」 II 1975 同

- 「大國造跡発掘調査概報 I」 1975 大國造跡調査会
- ⑩ 「上町造跡発掘調査概要」 1975 和泉市教育委員会
- ⑪ 灰樹 薫氏よりご教示
- ⑫ 要池造跡発掘調査概要 I 1974 大阪府教育委員会

## 第4章 既往調査概略（図版2・3）

泉大津市の中央部を東西に走る府道泉大津中央線の道路工事の時に豊中地区に於いて土器片の出土が見られ、遺跡の存在が予想された。その後、昭和40年に第2阪和国道に伴う区画整理事業の施行が泉大津市によって計画された。それが実施される同地区内の古池で須恵器の散布が見られたため、昭和47年～48年にかけて大阪府教育委員会によって、池の発掘調査が行なわれ、住居址・倉庫址・河川等が発見された。<sup>⑨</sup>又、昭和48年に行なった第2阪和国道敷地予定地内でも住居址が発見された。こうして豊中遺跡の存在が明らかになったため、本調査会では昭和48年10月～12月にわたって、区画整理地区の街路予定部分に於いて、31箇所にトレンチを掘って範囲確認の為の調査を行なった。その結果、全てのトレンチで耕土・床土の下の黄灰色土中に、土師器・須恵器等の遺物を包含することがわかった。中でもとりわけ、A525・A529・A530からは多数の遺物が出土し、瓦器片も含まれていた。又A525・A531にはピットが見られ、A530からは井戸枠である齒物が検出された。以上の結果から、昭和49年3月5日より同月31日までの間に、18号道路の部分で、巾6m、長さ40mの範囲を発掘調査した。この調査では、ピット・溝・竪穴住居址・土器群が発見された。ピットは、相互に関連性を持っているかどうか不明であった。溝は東側で縁巾1m、溝底巾70cm、西側で縁巾50cm、溝底巾20cm、深さ13cmを測るものであり、竪穴住居址はこの溝を埋めて造られたもので、4m×4mの大きさの規模であろう。この住居址には、炉跡が2箇所に発見された。後世に上面を削平されているため、完全な形で検出することは出来なかつた。溝と竪穴住居からは、庄内式の土器が出土している。このことから、この溝は長い期間存在していないかったものと思われる。土器としては、土師器（細かい叩き目で器壁の薄い、黒褐色の尖底土器。荒い叩き目で乳褐色の平底で弥生第V様式の系統を引くもの。）土製文脚・須恵器、瓦器等が出土した。以上からして、弥生時代から古墳時代へと移行する時期に始まった集落であることがわかり、弥生時代のまとまって集落が営なされていた段階から、その周辺部へと広がつてゆく過程を知る上で貴重な遺跡であることが判明した。

注 石神 怡氏よりご教示

## 第5章 遺構

街路部分では昭和49年11月2日より昭和50年2月6日までの間、前年度に行なった18号道路の残り部分及び23号道路を、又、昭和50年4月5日より5月16日まで25号道路を発掘調査した。すなわちTOC・B地区、TOC・B地区及びTOC・C地区である。又、上池部分では昭和49年10月24日より11月28日までを第一次、昭和50年2月10日より3月31日までを第2次調査として行なった。

### 1. 街路部分

#### TOC・B地区 道路第18号

道路第18号で前年度の続きの部分。巾6m、長さ53m。

##### 上面 (図版6・7・57)

床土約10mを除去すると暗茶褐色土、黄灰色土、灰褐色砂礫等がそれほぼ同一面に見られ、BH～BMは暗褐色砂質土に灰褐色土のピットが多数検出され、井戸も2個発見した(1号井戸・2号井戸)。BN～BPまでは、褐色砂利に小砾混り灰褐色土の入った不整形な大ピット(深さ約5cm～10cm)があるのみだった。BR～BYまでは黄灰色土に灰褐色土の入ったピットが多数検出された。以上の各々ピット間に於ける相互関連性は不明である。BP～BAにかけて、灰色土の入った比較的浅い溝が検出され瓦が含まれていた。

##### 下面 (図版9・10・57)

上面を約20cm位掘り下げる、灰褐色か、あるいは灰黄色の砂質土でこの層は無遺物層であった。BR、BU～BV、BX～BYの付近にかけて、褐色砂利層が見られた。暗灰褐色土の入ったピットが、砂利の面を除いた部分で検出されたが、やはり相互の関連性はつかめえなかった。上面の灰色土の入った比較的浅い溝は、BR付近の砂利層を切って作られたもので、灰色土の下には褐色の砂利層が見られた。

#### TOC・C地区 道路等18号 (図版7)

TOC・B地区の続きで、府道泉大津中央線までの約2mの間である。上面には遺構は検出されなかつたが、下面ではピットが7個検出された。

#### TOC・B地区 (道路第23号)

道路第23号(長さ185m・巾6m)のはば半分の長さの西側部分である。

上面（図版8・9・59）

床土（約10cm）を除去すると灰褐色土があらわれ、BG-O・1、BH-O・1には小砾群が見られた。これは半径約4mの範囲内に、高さ坂頂部約15cmの山状に積まれたもので、瓦、土師器、瓦製攢鉢等破片も含まれていた。中世以降のある時期に積まれたものと思われる。多分、田畠に落ちていたもので、寄せ集めてまとめて捨てられたものであろう。その西側部分には井戸（7号井戸）が検出された。BH-11には直径75cm、深さ25cmのピットがあり、大甕の破片が入っていた。17ラインより西側へ約170cmの所から地形は一段低くなる。BH-4に井戸（3号井戸）が検出された。そこから巾約1m50、長さ約19m、深さ約25～30cmの溝が井戸に付属しており、その先端部は直径約4m、深さ55cmの大きさの水溜状の大ピットとなっていた。BH-14・15には6号井戸が一部検出され、その東側にも溝が発見された。他にBF-18には4号井戸、BF-24には5号井戸が一部発見された。ピットは、14ライン～18ラインの間にややまとまって検出された他は、あまり存在せず、ここでもやはりピット間相互における関連はつかめえなかつた。この面でのピットには灰色土がつまっていた。

下面（図版11・12・59）

15ラインより西側を更に約10cm掘り下げる、灰褐色もしくは灰黄色の砂質土があらわれた。15ラインから21ラインまでの間に、25ラインから37ラインまでの間に多くのピットが見られた。更に26ラインから28ラインの間に巾約4m、深さ南側で約45cm、北側で約17cmの規模の溝があり、土師器群が多数含まれており、特に南壁際で西側部分では炭が多く検出された。この溝の方向は現在の条里制の残されている水田の方向と同一である。

TOB・B地区（道路第23号）

道路第23号の東側半分である。

上面（図版7・58）

床土（約10cm）を除去すると、94ラインより東側（76ラインまで）は、黄灰色砂質土が、そして西側は、灰褐色砂質土があらわれた。遺構としては、94ラインから0ラインまでの間に灰色土の入ったピットが検出された。その中でピット1は井戸（8号井戸）で、ピット5には柱根（図版62）が残されていた。大ピット6は深さ約20cmで不整形をしており、BH-96のポイント付近で、直径約4mの大きさで更に約10cm低くなっている。灰褐色粘質土が入っていた。又86ラインから91ラインにもピットが集まっており、大ピット20からは、土師器製塩土器の破片が河原石と共に多数出土した。この大ピット20は中世に掘られたもので、その中へ河原石と一緒に製塩土器が捨てられたものと思われる。

下面（図版10・11・58）

76ラインから86ラインの間で、南側にトレンチを掘った所、1m～1m30の深さで庄内式土器の破片が多数出土した。その付近を全体に掘り下げた結果、ほぼ南北に走る河川の左岸であることが判明した。（後述・旧河川）

BH-90のトレンチ内で土師器が炭の上にのった状態で発見されたので、86ラインから96ラインまでの間の黄灰色砂質土を掘り下げた。その結果、住居址が2箇重なりあった状態で検出された。（1号住居址・2号住居址）

#### TOC・C地区 道路第25号

##### 上面（図版13・60）

耕土・床土（約10cm）を除去すると、灰褐色土の面に十数個のビットを検出した。多くのものは深さ約10cmで瓦器碗、土師質小皿、羽釜、瓦等が出土した。C-16は直径約130cm、深さ90cmを測り、瓦器碗等出土した。

##### 下面（図版13・14・60）

上面を20cm前後掘り下げるに、黄灰色土（東側）あるいは黄灰色粘質土（西側）となり、溝状遺構3、曲物井戸1（9号井戸）、五十余個のビットを検出した。瓦器、羽釜等の他、古鏡や鉄製鍋を被った骨壺の出土もみた。

溝-1（14ライン） 幅170～200cm、底幅70～110cm、深さ50cmを測り、暗黄灰色粘質土（下層）、黄灰色砂質土（上層）の堆積をみ、瓦器、土師質小皿等が出土した。

溝-2（24ライン） 幅250cm、底幅100～150cm、深さ50cmを測り、暗灰黄色粘質土（下層）、暗灰褐色土（上層）の堆積をみ、瓦器碗、土師質小皿等が出土した。

溝-3（33ライン） 幅120～160cm、底幅50～70cm、深さ15cm～30cmを測り、暗灰黄色砂利（下層）、暗黄灰色粘質土（中層）、暗灰褐色土（上層）の堆積をみ、瓦器碗、須恵器、土師器等の出土をみた。

C-21 薄く灰の堆積した幅50cm、深さ8cmの格円形ビットを切り込んだ、直径60cm、深さ35cmの円形ビットで、鉄製鍋ですっぽりと覆われた中世壺が収まっていた。鉄製鍋（228）は口径約40cm、高さ20cmである。壺（229）は口径24cm、高さ33cmで土師質の様であり、外面に綾杉状の叩き目を施し、内面は下方を細かい、上方は荒い刷毛目である。内から黒塗りの漆器が塗膜だけの状態となり、数枚重なってみられた。又、このビットより東30cm附近より土師質小皿が二十余枚重なった状態でみられた。又、C-24は直径15cm、深さ8cmのビットで、底より皇宋通宝、元豐通宝を始めとする古鏡五枚が、わらを通して出土した。

次に、黄灰色（粘質）土の面を10～20cm位掘り下げるに、土師器のみを包含する層へと変わる。灰黄色粘質土、暗黄灰色粘質土で、漸次砂質土へと変化し、40～60cm余で灰色砂、砂利へと

なる。尚、C U26～C U32にかけて、暗黄灰色粘質土の下層に暗灰黄色粘質土がみられ、比較的多くの土器を包含していた。又、C U18附近で、暗灰褐色砂質土より多量の土器が折り重なった状態でみられたので拡張した。最後に調査地域西、34附近で南北方向にトレンチを設定した。灰色粗砂層からは、小型丸底壺、鉢を始めとする七ノ坪遺跡と関連する様な資料を得た。

以下個々の遺構について詳しく述べる。

### 井戸

遺跡の大部分は砂礫層の上に立地するため井戸は比較的浅く掘られているが、3号井戸と6号井戸は深さ約3mもあり、特異な存在となっている。

#### ・1号井戸（TOC・B地区、図版18・64）

直径3m50、深さ1mの掘り方であり、底部に、直径50cm、深さ30cmの円形掘りこみがある。井戸枠は不明であるが、下部の方に曲物が入れられてあったと思われる。出土遺物として瓦器碗、木片、下駄等がある。

#### ・2号井戸（TOC・B地区、図版19・64）

1号井戸より西へ約1m寄った位置である。円形の井戸で、直径45cm、深さ60cm。底部に、直径40cm、高さ20cmの曲物の井戸枠1箇が存在、底部は敷石らしき石が一面に並べられていた。その上は、灰色の砂が堆積しており瓦器片や曲物片が入っている。更にその上は礫が堆積しており、完形の瓦器碗2個が上向きの状態で置かれていた。遺物として瓦器碗2、桶（一部底板欠損）

#### ・3号井戸（TOC・B地区、図版16・65）

上部瓦積み、中部石組み、下部陶質の井戸枠で構成されている井戸である。瓦積み部分は、上部径60cm、下部径80cm、高さ約45cmで持送りのドーム状をなしている。瓦は平瓦・丸瓦が使用され、最上段には、軒丸瓦及び軒平瓦が、最下段には軒平瓦が多く積まれている。地表より約20cm程高く、黄灰色粘質土で覆われており、上部外周径1m60、下部外周径約1m75である。中部の石組みは高さ約1m30、直径上段で約80cm、下段で約55cmと円形に、河原石を組んだものである。下部の胸製の井戸枠は、大甕の底部を穿ったものを使用し二段に積まれている。直径53cm、高さ52cmのやや削ぶくれをしている。底は小礫を一面に敷いてあった。

この井戸は、瓦積み部分と石組み部分の境目が水平になっていない。井戸掘削時、瓦と石を同時に積んだのではなく、上部が石組みの状態で使用した後、更に瓦を積んで使用したと思われる。内部は粘質土で埋まっているが、出土遺物としては、瓦器片、朱塗り椀等であったが、上部には、30数個の人頭大の石や瓦片が土と一緒に入っており、人為的に埋められたものと思われる。又、瓦積み部の一部分は瓦が全く存在せず、井戸内へ落とされたのであろう。井戸枠に使用され

た瓦は、平安時代後期～室町時代のものである。

この井戸の西側には、深さ10cmの落ち込みがあり、その中に人頭大の石が10数個置かれている。この石は、井戸使用時に踏み石として使われた可能性がある。この部分より西側へ溝が伸びており、その規模は長さ13m、巾1m40、深さ12cmで底は、巾40cm、深さ10cmと一段低い小さな溝が走っている。その先には、直径約4m、深さ約55cmの大ビットが存在する。これは井戸の排水をこの部分で留めるために掘られたものであろう。

。4号井戸（TOC・B地区、図版19、66）

掘り方は直径50cm、深さ85cmである。底に、底部を穿った土釜を1個井戸枠として置かれている。その規模は、口縁部径30cm、腹部径39cm、底部径21cm、高さ22cmである。この土釜の上には、直径36cm、高さ8cmの曲物の井戸枠が一段現存する。

出土遺物として、完形の瓦器碗9枚が無造作に入れられていたのをはじめ、灯明皿4枚、瓦器片や土釜片も多数埋もれていた。

。5号井戸（TOC・B地区、図版17・67）

調査範囲外に掘り方の半分がかかる為、全形は不明であるが、推定で長径約1m65、短径約70cmの椭円形を呈する。深さは1m75。井戸は掘り方の中心より東側寄りに造られている。井戸枠の曲物は7段が遺存しているが、実際はもう少し段数があったであろう。その規模は最上段で、直径41cm、高さ9cm、以下38cm・10cm、34cm・25cm、34cm・17cm、33cm・18cm、31cm・30cm、28cm・16cmで最下段の下には、比較的大きな石が敷かれている。

出土遺物としては、完形の瓦器碗7枚（このうち4枚は重ねられていた）土師灯明皿5枚、曲物底板（一部）がある。

。6号井戸（TOC・B地区、図版17・68）

石組みと曲物の井戸枠の組み合せである。直径80cm、深さ2m50の規模で円形に河原石が積まれておらず、底はすぼまっている。この底部より更に下に、直径41cm、高さ20cm程の曲物の井戸枠が入れられてあった。この井戸の廃絶時には、土と一緒に人頭大の石が30数個、上部に埋められていた。

出土遺物として瓦器片があった。

。7号井戸（TOC・B地区、図版18・68）

礫が多く混ざった褐色砂層に東西90cm、南北65cmの卵形の掘り方をなし西側に井戸枠が置かれている。土釜の底部を穿ったものが3段積み重ねられており、深さは約55cmである。中段の土釜は瓦器質であり、上下段は土師質であった。

出土遺物はなかったが、掘り方内には土釜片が散在していた。

。8号井戸（T.O.B・B地区、図版19・69）

掘り方は円形を呈し、直径1m95、深さ30cm～50cm、底径1m55の大きさのものに更に、直径75cm、深さ70cmの規模で深く掘られ、ここに井戸が造られてある。井戸枠は曲物で2段に積まれ、上段と下段の接合部に、直径50cm、高さ8cmの曲物がはめられている。上段の曲物は、直径47cm、高さ現存高約30cm、下段は直径44cm、高さ現存高約20cmである。上段の井戸枠の外周部には、疊がつめられていた。井戸枠は旧地表面まで積まれていたかどうかは不明である。大規模な掘り方は、土師器片、瓦器片の混ざった土で埋められている。

。9号井戸（T.O.C・C地区、図版19・69）

円形の井戸である。掘り方は、直径1m50、深さ1m、底径40cmである。曲物の井戸枠で4段が現存するが、痕跡からして6段積まれていたものと思われる。その大きさは、上段より直径48cm・高さ27cm（推定）、42cm・16cm（推定）、44cm・20cm、39cm・13cm、38cm・22cm、35cm・20cm（推定）である。

この井戸は48年度調査の時に、トレンチNo.25の南壁面に掘り方があらわれたものである。

この井戸よりの出土遺物はなかった。

住居址（図版15・61）

今回の調査に於いて竪穴住居址が2軒重なり合った状態で検出された。いずれも大半が調査範囲をこえるため、全体の形を知る事は出来なかった。

。1号住居址（T.O.B・B地区）

隅丸方形の竪穴住居である。南辺5m50、西辺6mの規模である。北辺と東辺は不明であるが比較的大きな住居址である。後世大巾に削られているようであるため、その正確な規模は測りえなかったが、床面から現存する壁の立上りは、南辺で10cm、西辺で8～10cm位を測る。壁際には、巾約20cm、深さ約5cmの周溝がめぐっている。そして、南辺の壁際には大形の方形ピットが掘られており、規模は東辺60cm、北辺70cm、西辺90cmで深さ約30cmである。

柱穴は3箇所で検出され、東南隅は、直径40cm、深さ18cm、南西隅は、70cm×40cmの梢円形で底部は2個のピットで深さ33cmと21cm、北西隅は、直径40cm、深さ35cmのもので、壁際より約1m内側に存在する。

床面はフラットである。南西隅の柱穴と北西隅の柱穴を結ぶ線で、5cm程の比高差をもって、外側に高い段を有しているが、南西隅の柱穴に近づくに従って、段差はなくなっている。これはベッド状遺構として考えてよいだろう。

炉跡は、住居のほぼ中心にあって、直径約70cm、深さ約17cmの規模である。底部の土は焼けて

おり、炭及び灰が残存し、その上に土師器が割れた状態で乗っていた。この住居址の時期は庄内式土器平行期である。

・2号住居址（TOB・B地区）

北側は1号住居址によって、又南側は大きな円形ピット（時期は不明であるが、埋め土から考えて、ごく新しい時期のものと思われる。）によって切られているため、正確な規模は不明である。

現存値では、南辺4m、西辺2m30で隅丸方形の堅穴住居である。現存する床面からの壁の立ち上りは、南辺で4cm、西辺で2cm～5cmを測る。床面は、1号住居址よりわずかに高い。柱穴は、1箇所で検出されており、その規模は、直径45cm、深さ40cm位である。

この住居址の時期は、庄内式土器平行期であり、1号住居址より、古いものである。

旧河川（図版17・61）

TOB・B地区の81ラインより東側で旧河川の流路が検出された。その流れの方向は、ほぼ南北方向に走り、南から北へ流れていることは確かである。川巾は6m40、川底巾は4m50、深さ60cmで、左岸川底には、土師器片百数十個体分がびっしりと捨てられた状態で発見されたのをはじめ、自然木や炭も混じっていた。

この河川の右岸は、灰黒色粘土を切って肩となし、灰黒色粘土の東側は砂利層が続いている。この砂利層は大きく統き巾100m以上はあるものと思われる。この大きな河川を切って、庄内式土器平行期に今回発見された河川が、できたのである。

左岸で発見された土師器は、その埋没状態からして、一時に大量に、しかも光形品で捨てられていたことがわかった。

その後、粘土や礫が堆積し、地表面も約25cm高くなったり時期、すなわち古墳時代には、川巾4m、川底巾1m60、深さ50cmの規模になっている。この時期の川底に堆積する灰色細礫層には、須恵器片が発見されている。

2. 上 池 部 分（図版20・21・70・71・72）

上池の中央部を作業用道路で二分して、ヘドロを一方側に移し調査終了後、残りの部分のヘドロを移しかえて上池全域の発掘調査を実施した。その結果、旧河川の跡が発見され、この付近の旧地形が一部新たに確認できた。

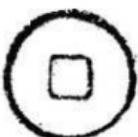
## 河 川

池の東側から巾18m、川底巾 8.5m、深さ75cmの規模の河川が、北に向かって20mほど流れ、そこから北北西の方向へ向きを変え、池の中央部では、巾 8 m、川底巾 5 m50、深さ 1 m などの規模となり、さらに北西へと流れの向きを変えている。そしてそのまま池の西側へと伸び、端では、巾11m、川底巾 6 m、深さ 1 m40 と一段と深さをましている。

この河川は、灰色砂利層を肩とし、内側は、黒色腐植混り粘土層、砂利層、粗・精砂層等が、交互に堆積していた。そして下層は、青灰色砂層が底部をなしており、土師器のみを出土する。中層は、土師器・須恵器を多数含み、中には古式須恵器も見られた。完形品も多く検出され、単に捨てられたと考えるには、あまりにも多い。このほか池の東部 K-29、青灰色砂層下部より、楕文式土器（中期後半・図版107）が出土し、この河川の上流部付近に楕文時代の遺跡が存在することと想定される。他に、M-1 暗灰色砂利層より和銅開珍 1 枚が発見された。東南方向には、和泉国府跡があり、その国府をとりまく集落が、この付近一帯にまでおよんでいたことは想像されうることである。当時貨幣經濟はそれほど発達していなかったにせよ、和泉地方に於いて和銅開珍が何らかの形で使用されていたことを実証する。

河川の右側には杭列が、流路に沿って、東から西の方向へ45mの間、2列ないしは4列に打たれていた（図版72）。何時の時代に打たれたかは不明であるが、河川がある程度埋もれ川底が浅くなった時点で打たれている。

池内の上層から下層まで多数の土師器や須恵器が出土していたが瓦器は発見されなかった。このことは河川が存在していた時期を決める一つの手がかりとなる。出土遺物から判断して古墳時代から奈良時代までは河川として役割を果たしていたが、平安時代初期には遅くとも消滅しており、池が造られたのはその後のことであろう。



## 3. 遺構まとめ

豊中遺跡は、南北約1000m、東西約 800mの広範囲に土器が散布する古墳時代～中世までの複合遺跡であると言える。古墳時代に焦点をあててみると、建築物遺構は、これまでの調査で散在して発見されている。この時期の集落は、弥生時代の池上・曾根遺跡に見られるような、密集し

たものではなくて、わずかの数の住居が1グループとなって、広くまばらに存在し、一つの大きな集落を形成していたようである。この1グループは血縁関係で結ばれ、それぞれが集まって地縁関係を持っていたと考えられる。

今回の調査で発見された遺構で目立ったものと言えば、堅穴住居址と井戸、及び自然河川である。このうち堅穴住居址は2軒分検出され、いずれも隅丸方形を呈している。この住居址は、互いに重なっており、2号住居の方が古く、1号住居はそれを切って造られていた。時期はどちらも庄内式土器平行期で、昭和48年度調査に於いて発見された隅丸方形の堅穴住居址と同時期である。前回の住居址及び今回の1号住居址には、壁際に方形の大形ピットが付属しており、貯蔵穴と思われるものである。1号住居址の底面には、わずかな高さ（比高差、最高5cm）ではあるが、一段高くなつたベッド状遺構と思える施設がある。この住居の規模は、一辺約6mと比較的大きい。このような特殊な施設を持つ住居の主人は、集落の中でも重要な位置にあったのであろうか。それともベット状遺構は当時に於いては普遍的な施設であったのか、集落全体の把握と共に追求されるべきものである。ベッド状遺構に関しては、九州から関東にかけて分布しているが、その発見例は限られており、今後の資料が待たれるものである。

住居址の東側を北に向かって流れる河川は、集落の範囲を限定する位置にあるものと思われる。今のところ、この河川より東側に於いては住居址は発見されていない。又この河川の左岸で大量の土師器が出土したことからも、住居群は河川の西側にあったものと推測される。その大量の土師器の中には、完形品やそれに近いものが多数あり、破損したために捨てたものとは考えがたい。何かの意味を持って捨てられた可能性がある。いざれにしてもその数量より相当数の人間が住んでいたのであろう。これらの土師器は、住居址内より出土したものと比べると若干新しいようであるが、そう大差はない。

大ピット20からは、製塩土器が発見されたが、製塩に伴う遺構は検出されなかった。製塩作業がこの場に於いてなされたのか、それとも保管場所であったのかは多くの資料の検討を要する。

中世の時期の井戸が計9個発見された。その形態は様々であったが、大半は浅い井戸である。（2個は深さ3mを越すものであった。）

類形別に分けると次のようになる。

1. 素掘りの井戸 1号井戸（底絶時に井戸枠を抜き去ったか。）
2. 一種類の井戸枠を積み上げたもの。
  - a. 曲物 2号・5号・8号・9号井戸

b. 土釜 7号井戸

3. 異なった井戸枠を組み合わせたもの。

a. 瓦積み+石積み+陶製窓

3号井戸（瓦積みは後世に積まれたものか。）

b. 石積み+曲物

6号井戸

c. 曲物+土釜

4号井戸

以上の井戸の所有者は、3号井戸・6号井戸を除いては、当時の庶民が使用していたと考えられる。しかし、それは個人所有であったのか共同使用であったのか、住居址がはっきりと把握できなかった為不明である。3号井戸・6号井戸に関しては同様である。当時の井戸は、屋根の施設を備えていたのか、それとも露天であったのか握めえなかった。大半の井戸が示すように、比較的深い井戸ということは、それだけ地下水位が高かったことを物語っている。しかし、3号井戸・6号井戸は深く掘られていた。これはどういうことであろうか。想像ではあるが、日照りが続いたため地下水位が下がり、深い井戸は涸れたのではないかろうか。3号井戸に付属している水溜状の大ピットは、井戸の排水をここで更に溜めて再利用するためのものであろう。和泉地方に多く見られる灌漑用溜池は、こうした日照りが度々起きたため築かれたものである。

調査地の付近には、「大福寺」の字名の他に「小守」があつたりして仏教関係の建物が存在したことなどを想像させる。中世の骨壺が発見されたのは、この「小寺」にあたる場所である。寺院関係の記録は何も残されていない。

上池で発見された旧河川を、明治48年の陸軍測量の地形図（図版1）で、その流路を探してみる。まず谷部分をたどって上流の方へ行くと、府中村のすぐ北側を流れることになる。又反対に下ると、下条大津村へと到達し大阪湾にそそぎ込む。旧河川はこのコースを流れていたのではないかろうか、現在の新川が旧河川の下流であったと思われる。大津川の河口付近に「高津町」がある。これは「国府津」が訛ったのであろう。国府津すなわち國府の港である。<sup>#</sup> 小津の港と昔は呼ばれ、東大津の名の起りとされている。上池内の旧河川の右岸で発見された杭列は、護岸用をかねた港への近道であったかもしれない。

さてこの河川の廃絶期であるが、記録が残されていないので、不明であるが、奈良時代には埋もれたようである。その頃に、河川としての役割があまり果たせなくなり、この水路を利用して

古池が築かれた。上池、古池と現在は二つに分かれているが、元々は古池一つで、池の中央には弁財天が祀られていた。明治以後にこの池は二分されて上池ができたのである。

「イズミ」という地名が発祥したとはいえ、この地域は水資源が乏しかったようである。平安時代には、灌漑用水施設の築造や修理が行なわれたが、それにもかかわらず、日照りによる旱魃や豪雨長雨による洪水で、農民の苦労は相当なものであっただろう。天長三年（826年）に和泉国の農民は、農業用池を築くことを要求し、国司はその要望に答えて五つの池を築いている。<sup>④</sup>これらの池はどの池であるかは不明である。しかし、古池が築かれたのもそのような要望のもとにであろう。

上池に於いて、我が最古型式に属する須恵器が出土した。豊中遺跡の背後にあたる大阪南部の丘陵地帯には、阪南窯址群と呼ばれる1000基を越す須恵器の窯跡群が存在していた。5世紀頃、朝鮮半島より伝えられたと言われる須恵器生産の技術が、日本で最初に根をおろしたのが、この丘陵地帯であることは、疑いない。現在知られている最も古い型式の須恵器を焼いた窯跡も調査され、その整理が進められている。又最近では、この上池以外の集落跡からも、同時期の須恵器の甕・壺・壺・器台等が発見され、初期須恵器生産者集団と地方豪族との関係、あるいは、須恵器生産者と從来の土師器製作者とのかかわり等を解明する上で貴重な資料となっている。

注 和泉市史 第一巻 1965 和泉市史編纂委員会

## 第6章 遺物

### 1. 豊中遺跡（街路部分）出土遺物

豊中遺跡の発掘調査で出土し採集された遺物数は、およそビニール袋で800枚である。種類としては、弥生式土器・土師器・須恵器・瓦質土器・瓦器・瓦・土製品・木製品・柱・古鏡・桃種等があり、時代的には弥生時代末～古墳時代前期及び平安時代～室町時代に所属するものが多數を占める。ここではそれらの内主たる遺物を紹介するにとどめる。

#### I 弥生時代末～古墳時代前期の遺物

##### 「河川」状造構

西岸から投棄された大量の土器群は、壺・壺・鉢・高杯・壺・小口器台・壺・手彫形土器・製塩土器等により構成される。以下順を追って概観する。

**壺 (1)～(6)** 總内第Ⅰ様式壺の伝統をほぼ受け継ぐ壺である。くの字形に屈曲外反する口縁部と細長の胴部それに平底を持つ。その製作には分割成形及び叩き調整が用いられる。内面笠削りが用いられることはほとんどない。口縁端部にキザミを施こされるものが多いのは特徴的である。砂粒を含む胎土の焼成は不良で軟質のものが多い。主に黄色味の強い色調を呈する。

**壺 (7)～(43)** 通例庄内式壺と称され、すべて河内地方からの搬入品である。くの字形に大きく屈曲外反する口縁部と肩の張る球形尖底の胴部を持つ。その製作には分割成形・叩き調整・削毛輪塗・内面笠削りが用いられる。口縁端部を上方へつまみ上げるのを主とするが、方形及び丸くおさまるものも多い。器壁は3mmと極めて薄い。雲母粒を含む胎土の焼成は比較的良好。茶褐色を呈するもの他に灰色味の強い色調を持つもののが加わる。數的には伝統的第Ⅰ様式壺に対しておそらく30%～40%を占めると思われる。

**壺 (44)～(51)** 斜上方へ直線的あるいは途中で屈曲してのびる口頸部を大きな球形体部にのせる。すべて平底がつく。製作にあたっては分割成形・叩き調整・笠削き調整が主として用いられる。(44)は体部外面に使用痕としての籠目がのこる。(50)(51)は口縁部外側に粘土帯を巻き付け巾広の幅部をつくる。この上に竹管文を施すもの(51)がある。

**壺 (52)(53)** 季直氣味の頸部と水平に屈曲更に斜上方にのびる口縁部を持つ。体部は不明。極めて装飾性が強い壺で、櫛描による波状文・直線文や竹管文・断面三角形の貼り付け内帯・指突文・円形浮文等により装飾され、その施文パターンもほぼ限定される。口頸部内外面を

笠磨き調整し、比較的精製された胎土を使用する。各部のつくりもしっかりしている。黄色味の強い色調を呈し、焼成も良好である。

壺 (54) 球形平底の体部にくの字形に屈曲外反する口縁部をのせる。口縁端部が両方に拡張されるのが特徴。外面は笠磨き調整される。

壺 (55) 中央の張るそろばん玉状の体部を持つ。口縁部は欠損の為不明。小さな平底を持つ。外面の細かい横方向笠磨き調整が特徴である。

壺 (56) 球形体部にくの字形に屈曲外反する口縁部を持つ。底部は欠損し不明。体部外面は叩き及び笠磨き調整。内面下半は笠削りされ、外面の煤と考え合わせて煮沸用として製作。

壺 (57) 肩の張る体部に短く垂直に立ち上がる口縁部を持つ。いわゆる短頸壺である。口縁端部は明確に尖る。外面は笠磨き。

鉢 (60)～(66) 口径10cm内外、器高6cm内外の小型品で、外開きの体部と平底を持つ。底部からやや内寄気味にのび、そのまま丸くおさまる。体部と口縁部の区別は全くないか、不明確。外面に叩き目及び笠磨き痕を持つもの他がある。(62)は外面に綫方向の粘土経痕が遺る。

鉢 (67)(68) 口径13～14cm、器高7cm強の鉢。内寄気味の聞く体部と指でのばされた踏んばるあげ底を持つ。外面に叩き目を持つものと刷毛目のものがある。

鉢 (69) 口径11～12cm程度、器高9～10cm程度、内寄気味に高くのびる深い体部とくの字形に屈曲外反する口縁部を持つ。小型の壺を呈するが外面の煤はない。外面には叩き目。

高坏 (70)～(77) 第Ⅰ様式の伝統を受け継ぐ高坏である。屈曲外反する口縁部の坏を高い柱状部と広がる基部の脚台にのせる。口径20～22cm、器高16cm程度の法景が一般的である。坏と脚台は分割成形され接合する。いずれも内外面ともていねいな笠磨き調整を施こされるのが特徴である。砂粒を含み黄色味の強い色調を持つ。

高坏 (79) 半球形の坏部を大きく幅の広がる脚台にのせたもの。脚台に柱状部はない。ていねいな笠磨き調整が施こされている。

高坏 (81)～(83) 半球形の坏部を大きく幅の広がる脚台にのせるが、脚台に極めて短い柱状部がつく。脚端部は坏部口径をはるかに越えるのが特徴。口径10～13cm、器高10～12cm程度。白黄色・白灰色を呈し、キメの細かい胎土だがサクイ感がする。笠磨き調整。

高坏 (80) 坏部は不明だが、短い中実の柱状部と大きく広がる基部の脚台。調整不明。

高坏 (88) 浅い底部から屈曲して立ち更に斜上方にのびる坏部を中空柱状部と半球形基部の脚台にのせたもの。極めて装饰性に富み、坏部内外面を柳描波状文・竹管文のある円形浮文により飾る。笠磨き調整。白灰色を呈し、キメの細かい胎土はサクイ感がある。

高坏 (87) 脚台は不明だが、底部から屈曲、更に屈曲外反してのびる坏部を持つ。坏部

内外面に細かい、箆磨き暗文を施こすのが特徴。即ち外面には横方向、内面には三段の放射状に施される环と脚台は分割成形。橙色を呈し、細かい胎土の焼成は良。

**高坏 (86)** 坏部は欠損の為不明だが、直線的に裾広がる大きな脚台を持つ。外面にはかすかな叩き目がつき、縱方向の箆磨きがなされる。内面には粘土粗痕がみられ、刷毛調整。白赤色を呈し、砂粒を含む粗雑な胎土である。

**壺 (94)～(96)** 口径10cm程度、器高10cm程度の小型壺である。やや肩の張る球形体部にくの字形に屈曲外反する口縁部がつく。すべて小さな平底。外面にかすかな叩き目が遺るものもあるが、箆磨きにより仕上げられる。胎土のキメは細かい。

**壺 (97)** 口径9.1cm、器高7.0cm。半球形に近いやや扁平体部にわずかに屈曲して上方に立ち上がる口縁部を持つ。やや巾窪みの平底底がつく。外面は箆磨き調整が施され、砂粒を含み黄褐色を呈する胎土を持つ。

**小型器台 (90)～(93)** 浅い皿状受部に直線的に裾広がりとなる脚台を持つ。口径10cm弱、器高9cm弱の法量を測る。受部と脚台は比較的はやい時点で接合。(93)の口縁端部は横ナデされる。受部外面は細かい、横方向の箆磨き調整、内面は平滑。脚部外面も細かい、箆磨き、内面は刷毛調整。(92)は受部上半がやや外反する。端部外面は刷毛調整、受部外面は縱方向の箆磨き調整。脚台外面には軽い叩き目の上に縱方向の箆磨きが施される。内面は刷毛削淡。受部の端部がほぼ方形に閉じるものと、やや上方へ立ち上がるものの二者があるが、前者の方がやや古様を呈する。細砂を含む胎土で黄色味の強い色調。

**坏 (59)** 口径11cm程度、器高3.5cm程度が復元される。全体は浅く口縁部はやや内凹気味。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。外面は細かい、横方向の箆磨き調整が施される。淡橙色を呈し、胎土は細かい。

**手焙形土器 (58)** 口径15cm、器高17cmを測る。屈曲して腰の張る体部と天井部を持つ。天井部・体部上半・下半を接合成形。天井部と体部上半は巾1cm程度の粘土粗積み上げにより成形。天井部外面は叩き・箆ナデ・箆削りにより調整。体部下半外面も叩き・箆削りにより調整。底部は不明。砂粒を含む胎土は淡黄灰色。

### 住居址

住居址及びそれに伴なう柱穴状ピットからは、壺・壺・高坏・小型器台等の出土をみている。更に製塩土器片が数個体出土しており、この住居址を個性付けている。いずれも細片で全体の確認出来る土器はない。

**甕** 細片だが粗い叩き目を有する平底壺片が多い。

**壺 (100)** 頸部片。体部より屈曲し垂直に立ち上がり、更に外方へ屈曲する口縁部。頸部器壁が 1.6cm と厚い。頸部外面下端に指突文が施こされる。白赤色を呈し砂粒の多い胎土。

(2号住居址)

**高坏 (104)** 坏部は欠損して不明だが短い中空柱状部と屈曲し水平に大きく開く裾部の高坏脚台である。柱状部外面は面取りされ、裾部には 5 孔遺存するが、10 孔以上穿たれたと推定される。上・下二段に穿たれる。脚台高 2.4cm、脚端径 16.6cm を測る。細砂を含む胎土、橙色を呈する。(2号住居址内暗茶灰色砂質土)

**小型器台 (101)～(103)** 2～3 体片。浅い皿状受部に裾広がりの脚台、端部は上方にわずかに尖るが、「河川」状遺構出土のものに比較して古様を呈する。(101)の外面は箒磨き。(102)は端部外面を梯状のものでナデ、受部外面は削りあるいは指圧、脚台外面は箒磨き調整。白黄色を呈し砂粒を含む胎土。口径は 10cm 程度に復元。

**製塙土器** (別記)

#### 拡張部・南北トレンチ

豊中遺跡を東西に分断する中央線の北側に設定された拡張部・南北トレンチ出土の遺物を一括する。若干時間帯をもって堆積しているが、いずれも先述の「河川」状遺構出土のものより時期的に後続する。出土土器の器種構成は、壺・壺・鉢・高坏・小型丸底壺・小型平底壺・小型鉢・台付碗・製塙土器等がある。以下順を追って概観する。

**壺 (105)～(108)** 第Ⅰ様式の壺を受け継ぐものである。くの字形に屈曲外反する口縁部を縱長胴部にとりつける。平底。胴部外面には粗い叩き目が施こされ、内面は平滑だが箒削りは施こされない。(105)のように内面を粗い刷毛目をもって調整されるものも含まれる。粗砂を多く含む胎土の色調は黄色味を呈する。

**壺 (113)(114)** 通例庄内式壺と称されるが、かなり退化した様相を呈する。細片だがくの字形に屈曲外反する口縁部は外弯してのびる。端部は丸くおさまる。外面は横ナデ、内面は刷毛調整。胴部は欠損して不明だが、平坦底部が伴出している。胴下端部外面は粗・細二種の刷毛調整。内面は箒削り。數的にこの種の壺は少なく、「河川」状遺構で大量出土したのとは対照的である。

**壺 (109)～(112)** 布留式の特徴を持つ壺である。破片だが球形胴部に斜上方に外反する口縁部、すべて丸底である。外面は刷毛調整、内面は箒削りが施こされる。叩き目を有するのは全くない。口縁部の立ち上がりは内寄気味で、端部は上方が内側へ突出あるいは肥厚する。砂粒を含む胎土で、白味の強い色調を呈する。焼成は良好で硬質。

**壺** (115)～(118) 斜上方へのびる口頸部を大きな球形にのせる壺。小さな平底がとりつくとみられる。(115)の体部外表面は刷毛調整。成形は前代の壺とはほぼ同様。口縁端部の多くは上端を機ナデされやや厚味を増して内側へ肥厚する。(116)は内面を刷毛調整、外而を細かい横方向の笠磨き調整されるのが特徴。數的にも主体をなす。砂粒を含む胎土は黄褐色の色調。

**壺** (120) 垂直気味の頸部と屈曲し更に斜上方へのびる口頸部を持つ。体部は不明だがおそらく球形平底となる。全体に装飾性に富む壺で、口縁端部にキザミ、外面には退化した櫛描波状文及び4～6単位の竹管文、頸部外面には刷毛描波状文、縦笠磨き、頸部には三角形の指突文が施こされる。先行する同種壺と装飾パターン及び器形は同一だが、装飾は退化している。明灰黄色を呈し、焼成は良。

**壺** (119) 楕円形体部に斜上方へのびる口頸部を持つ。口縁端部が内側へ肥厚する。体部外面は刷毛調整で、肩部に数本の笠描線刻が施こされる。内面は横方向の笠削り。丸底。明褐色を呈し、粗砂多い胎土。焼成は不良。

**鉢** (128)(129) 口径12cm、器高7～8cm程度の小型の鉢である。外開きの体部と平底もしくは踏んばるあげ底がつく。外面は笠磨きあるいは平滑に仕上げられる。砂粒を含む胎土。

**高坏** (121) 屈曲外反してのびる坏部を持つ。脚台は不明。内外面は笠磨き調整。

**高坏** (122)(125) 底部から直線的あるいは内弯気味にのびる坏部を中空の高い柱状部と屈曲して開く裾部の脚台にのせたもの。坏部と脚台を分割成形し、接合する。外面は細かい横方向の笠磨き削弊や内面には装飾性の強い放射状暗文が施こされるのが特徴。脚台は外面を刷毛調整し、その上を細い横笠磨きをもって調整。内面には粘土紐積み上げ痕が遺る。裾部内面は刷毛調整。いずれも褐色味の強い色調を呈し、焼成良好で硬質。細かい胎土。

**高坏** (126)(127) その他類例が少ない各種高坏がある。

**小型丸底壺** (133)(135)(136) ほとんどが破片からの復元だが、扁平球形の小さな体部から屈曲して斜上方に長くのびる口縁部を持つ壺である。端部内側が薄くなり尖んがって閉じる。内外面とも細かい横方向の細かい笠磨きをもってていねいに調整される。(136)のように内面を刷毛調整し、その上に放射状暗文としての笠磨きが施こされるものもある。高坏(122)等と共に通する製作技法である。各個の個性が強い。褐色味の強い色調を呈し、精製胎土の焼成は良好で硬質である。

**小型丸底壺** (137) 扁平球形の体部に屈曲して斜上方へのびる口縁部を持つ。端部は欠損し不明確だが、前者と比較して少し短い口縁部と考えられる。肩の張る体部外面とりわけ下半は顕著な笠削りでもって調整される。加えて細かい横方向の笠磨き調整。内面は平滑。底部は円板をはめ込み成形する。極細金雲母粒を含み、焼成は良好で硬質。灰茶色を呈する。

**小型平底壺** (134) 烏平気味体部に垂直にのびる口頸部を持つ。平壠底がつく。器形・調整・胎土とも小型丸底壺とは相異する。やや厚味ある口頸部は横ナデされ、頸部下端外面は凹線状に窪む。外面の觸感は不明。黄赤色を呈し粗砂含む胎土は軟質。

**小型鉢** (130)～(132) 二段に屈曲して外方に開く口縁部と外開きの浅い丸底体部を持つ小型鉢である。内外面とも細かい横方向の埴磨き調整されるものと刷毛調整されるもの二種がある。前者は褐色味ある色調で精製胎土。硬質。後者は細砂を含み淡灰黄色を呈し、焼成は中。

**台付枕** (139) 半球形碗部が裾開きの低い脚台につく。外面は刷毛調整、脚台上半部外面には指圧痕。細砂を含む胎土で焼成は中、淡黄色を呈す。

**杯** (138) 外開きの浅い杯、内面は刷毛調整。口縁部外面は横ナデ、底部は指圧か。灰黄色を呈し砂粒の多い胎土の焼成は中。

### 製塙土器

今回出土の製塙土器を一括してここにとりあげた。19個体の出土があるが、1個を除いてすべて脚台部のみにとどまる。

(140) 体部は欠損し脚台のみ。脚高7cm、横径7.0cmを測る。高い中実気味柱状部よりゆるやかに広がる裾部。外面には叩き目、上端外周には粘土帯。白赤褐色を呈し細かい胎土。二次焼成は不明確。(pit 20)

(141) 脚台のみ。脚高6cm以上を測る。裾部は欠損するが中実気味柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目、上端外周には粘土帯。外面叩き目は二次焼成でかなり剥落し上端面は灰赤褐色に変色。裾部は白黄色。砂粒の多い胎土。(pit 20)

(142) 脚台のみ。脚高6cm以上を測る。裾部は欠損するが中実気味柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目、上端外周には粘土帯、裾内面は箒削りされ、上方に稜。黄赤色を呈し砂粒多し。柱状部上端は二次焼成により明赤褐色に変色。(pit 20)

(143) 脚台のみ。脚高6.6cm、横径7.0cmを測る。中実の高い柱状部と広がる裾部を持つ。外面には小さな面がつき、叩き目も施こされる。内面は箒あるいは指削り、端部は内側へ小さく突出する。柱状部上端は二次焼成により白紫色に変色。柱状部は白灰黄色・橙色、砂粒含む胎土。

(144) 脚台のみ。脚高5.5cm、横径6.8cmを測る。中実気味柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目。柱状部上端は欠損か。裾部内面は箒削り、上方に稜。白赤褐色を呈し、砂粒を含む胎土。二次焼成は不明確。(pit 20)

(145) 脚台のみ。脚高5cm以上。中実・中空の柱状部と広がる裾部を持つ。裾端は欠損。外

面は平滑、内面中央に稜。強い二次焼成により白赤色に変色。砂粒の多い胎土。(pit 20)

(146) 脚台のみ。脚高5.8cm、裾径7.2cmを測る。中尖・中空の柱状部に広がる裾部を持つ。外面は平滑。裾部には下方から笠押痕。内面上方には稜。柱状部上端は白赤色に変色。それ以下は白褐色を呈し、砂粒を含む胎土。(1号住居址)

(147) 脚台上半のみ。脚高5cm以上を測り、中空柱状部とおそらく広がる裾部を持つ。外面は平滑、内面に稜。強い二次焼成により黄赤色に変色。細砂粒の多い胎土。(2号住居址)

(148) 脚台のみ。脚高5.6cm、裾径6.1cmを測る。直線的に広がる脚台。外面上半には叩き目、内面は笠割り。脚台上端面は白赤色に変色。それ以下は白灰色。粗砂含む胎土。

(149) 脚台のみ。脚高5.7cm、裾径6.0cmを測る。直線的に広がる脚台。外面に比較的細い叩き目。上端外周に体部下端が帯状にまかれる。内面下端に指圧痕。灰色を呈し砂粒を含む胎土。二次焼成は不明瞭。(南北トレンチ)

(150) 脚台のみ。脚高5.0cm、裾径6.0cmを測る。直線的に広がる脚台。外面に細かい叩き目、内面に削り、上方に稜。上端部は白紫色に変色。黄褐色及び灰黄色を呈し砂粒を含む胎土。

(BH-27 溝状落込み)

(151) 脚台のみ。脚高4.4cm、裾径5.5cmを測る。直線的に広がる脚台。外面には叩き目、内面には削り。内面上方に稜。白赤色・赤褐色に変色。砂粒を多く含む。(pit 6)

(152) 脚台のみ。脚高4.4cm、裾径6.8cmを測る。裾広がりの上半部に更に広がる裾部を持つ。外面には叩き目、内面は平滑。灰黒色を呈し、二次焼成は不明確。砂粒多し。(床土)

(153) 脚台上半のみ。脚高5cm以上。裾広がりの裾部は欠損。外面には叩き目、内面上方に稜。砂粒含み、赤褐色を呈する。(小疊群)

(154) 体部下半と脚台。筒状体部と裾広がりの脚台。脚台高は2cm弱と低い。体部外面には叩き目、脚台外面には指ナデ。白橙色を呈し、二次焼成は不明確。砂粒を含む胎土(BH19・21褐色砂層)

(155) 体部下端と脚台。筒状体部と脚高2cmの裾広がりの脚台。外面には叩き目。内面には指圧痕。白灰色を呈し、二次焼成は不明瞭。砂粒多し。(BG78・80 耕土・床土)

(157) 体部下端と脚台。反鉤鐘状の体部と大きく広がる脚台。脚台高は2cm。外面には指ナデ。体部下内面は明赤白色に変色。脚台は白黄色を呈し、砂粒含む胎土。(「河川」状遺構)

(158) 脚台のみ。製塙土器か不確定。大きく広がる脚台高3.5cm、裾径7.9cmを測る。内外面とも平滑。明黄赤色を呈し、キメの細かい胎土。(床土)

(156) 体部のみ。上半及び脚台は欠損。尖底から直線的に斜上方にのび反鉤鐘状に近い。外面には叩き目。脚台は剥落、白黄色を呈し粗砂粒を含む。体部下端面は白赤色及び灰黒色を呈す

る。（C U18 拡張部灰黄色砂質土）

## II 古墳時代～奈良時代の遺物

### pit 17

須恵器坏壺 (217) 口径14.8cm、器高 5.5cmを測る。天井部と口縁部はなだらかに移行するが深い体部。両面にはほぼ横ナデ調整、肩部のみ箆削り。中窪みの大きなつまみがつく。口縁端部は外方へ屈曲し、内面には端面を持つ。外面は赤茶色、内面は白灰色を呈す。砂粒を含む胎土の焼成や不良。

(218) 口径14.0cm、器高5.1cmを測る。深い体部、口縁部と天井部の稜はにぶく凹線がつく。中位以下両面は横ナデ、天井部外面は箆削り。内面は仕上げナデ。外面に箆描沈線3本。口縁端部内面には凹線がつく。暗灰色を呈し、細砂の多い胎土の焼成は良。

### 5号井戸上層

須恵器坏壺 (219) 口径9.9cm、器高3.3cmを測る。平坦な天井部と直立する口縁部を持つ。端部は丸くおさまる、天井部外面の箆削りを除いて横ナデ。白砂を含む胎土の焼成は良。灰色を呈す。

(220) 口径12cm弱、器高 4 cm弱と思われる。天井部から口縁端部迄なだらかに移行する。中位以下両面は横ナデ、天井部外面は箆削り、内面は仕上げナデ、端部は丸くおさまる。×の箆描記号を持つ。砂粒を含む胎土の焼成は良。淡紫灰色を呈す。

### pit 20

須恵器高壺 (222) 口径11.7cmを測る長脚の高壺である。脚台は欠損。内傾する立ち上がり端部は方形に閉じる。全体はナデ調整、青灰色を呈し、白砂含む胎土の焼成は良。

須恵器壺 (221) 口径14cm程度、器高 4 cm強を測る壺で高台がとりつく。口縁部はやや外寄し、両面は横ナデ、外面下位のみ箆削り。低い高台は外方へ踏んばる。暗灰色を呈し、白砂を含む胎土の焼成は中。

## III 平安時代～室町時代の遺物

### 1号井戸

瓦器壺 (180) 口径15.5cm、器高 5.6cmを測る。比較的深い体部と断面台形のしっかりした貼り付け高台を持つ。口縁端部近くの器壁が厚いのが特徴。内外面とも粗い横方向の暗文が

施こされる。焼成は良好で硬質。

**下駄 (246)** 一本から作り出され、平面梢円形で、長さ19.5cm、巾9.1cm、厚さ2.4cmを測る。鼻緒孔は前方に1個、後方に2個穿たれ、孔の周辺には磨減痕が認められる。台板表面には右足痕が観察出来る。またかかと裏上方には不明の切り込みが存在する。尚向歯ともほぼ垂直につくり出されるが、後歯の方が磨減著しい。

## 2号井戸

**瓦器椀 (181)** 口径15.5cm、器高 5.2cm程度を測る。比較的深い体部と断面方形の貼り付け高台を持つ。口縁部内面に1本の沈線、外面には凹線状の深みがみられる。全体にかなりゆがむ。外面は粗く削られ、その上にやや乱雑な暗文、内面は平滑で横方向の暗文が施こされる。焼成は良好で硬質。

**曲物 極細片**

**板状木製品 (247)** 全長37.4cm、巾10.9cm、厚さ1cmを測る。一見曲物底板の一部分を思わせるが、側邊はすべて加工される。また両端部には若干の突起をつくり出しておらず、その附近には押え痕もみられる。ところが側面には二つの目釘穴が存在している事実から、曲物底板の再利用の可能性も考えられる。尚材質はスギと推定される。

## 3号井戸

**瓦器 極細片にとどまる。**

**木製椀 (242)** 弦部径8.1cm、現在高3.8cmを測る。全面に黒うるしを塗り、更に高台内面以外に朱うるしを塗る。

**軒丸瓦 (251)** 直径13.2cm、厚味 2.2cmを測る三巴文軒丸瓦である。その周囲に円溝及び17個よりなる連珠文を施す。巴文の頭は丸く、尾長である。全体にしっかりとしつくりで、白灰色を呈し、砂粒を含むが焼成は良好硬質である。

**軒丸瓦 (250)** 直径15.0cm、厚味 2.6cmを測る複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。肉厚のない中房に1+6個の蓮子を配する。その周囲には花葦をめぐらす。また蓮華文の周囲には1本圓線をつける。

**軒平瓦 (255)** 弦部巾約20.9cm、厚味 4.0cmを測る宝珠唐草文軒平瓦である。中央に宝珠が位置し、その左右にしっかりと均整唐草文を配し、圓線はない。白灰色を呈し、砂粒を含むが焼成は中。下面には炭素付着。

**鬼瓦 (256)** 復元巾約23cm、遺存高約19cm、最大厚 6.9cmを測る。遺存状況は不良で、

鼻・齒部分が主として遺存する。目は剥落する。砂粒を含む胎土の焼成は不良。軟質

#### 4号井戸

瓦器梶 (182)～(187) 6個と細片が加わる。口径13.6～15.0cm、器高3～4cmの法量を測る。いずれも比較的浅い体部と極めて退化した貼り付け高台を持つ。体部外面下半は粗く削られ、口縁部下には稜あるいは凹線状の瘤みがつく。内面には横方向の粗くまばらな暗文、あるいは連続輪状の暗文が施される。高台の断面は三角形・台形・方形・半円形等と多様である。多くは焼成不良で軟質。器壁表面が剥落気味で、炭素付着も部分的にとどまる。

土師小皿 (188)(189) 口径7.7cm、器高1.4cm及び口径8.1cm、器高1.7cmの2例がある。いずれも浅い小皿で、内面は平滑。底部中央は内方へ瘤む。焼成は不良で軟質。

#### 曲物 極細片

羽釜 (159)～(161) (159)は口径19.9cm、現高13.5cmを測る土師質羽釜である。口縁端部は外方へ短く曲げられ、断面は尖んがって閉じる。体部の肩・腰部に棱を持つ。外面は粗い笠削り、内面は笠ナデにより平滑。底部を抜いて井筒となす。砂粒をまばらに含む淡白褐色、焼成は良。外面には煤付着。

(160)は口径20.0cm、現高12.5cmを測る土師質羽釜である。口縁端部は外方へ短く曲げられる。肩・腰部の張る体部外面は笠削りされるが剥落、内面は横刷毛調整。粗砂含む胎土は焼成不良で軟質。淡白茶色を呈する。外面には煤。底部を抜いて井筒となす。

#### 5号井戸

瓦器梶 (193)～(197)(202)(203) 口径15.3cm～16.3cm、器高5.0～5.9cmを測る。かなり深味のある体部にしっかりした貼り付け高台を持つ。外面には削りによる凹凸があり、その上に横方向の粗い暗文が施される。内面は平滑で、横方向を主体とする暗文が施される。口縁部下外面には稜がつく。外方に踏んばる高台断面はほぼ方形近くにおさまる。焼成は良好で、いずれも硬質。炭素付着も良好。

瓦器皿 (198)(199) 共に口径11.0cm、器高2.8cmを測り、高台は持たない。体部外面下半には指圧痕、内面は刷毛調整。焼成は不良で、炭素付着も殆どない。

瓦器小皿 (200)(201) いずれも口径9.0cm、器高2.5cmと2.0cmを測る。(200)の体部外面下半には指圧痕、内面には横方向あるいは縱方向の暗文が施される。(201)の底部見込みには粗雑な円及び鋸歯文状の暗文を持つ。またわずかに片口風となる。いずれも焼成は良好で硬質、炭素の付着も良。

**土師小皿** (204) 口径9.0cm、器高1.7cmを測る。口縁部内外面は横刷毛調整、内面見込みはナデ、底部中央は内方へ窪む。白黄色を呈し、焼成は中。

**軒平瓦** (253) 片端が欠損、厚味約4cmを測る連珠文軒平瓦である。11個の珠文が遺存。上下縁には1本の圓線がつくが、上縁右側にはつけられない。白灰色を呈し、細砂を含む胎土。焼成は中。

**曲物** (243)(244) (243)は直径37.3cm、現存高22.3cm、側板の厚さは0.5~0.6cmを測る。材質はヒノキと推定され、桜の皮により接合される。一方の端部外面には廻しの側板がみられ、おそらく補強の為であろう。またこの部分の端面には數ヶ所に浅い窪みがみられるが、これは圧力に關係のある加工であろうか。あるいは井筒外の水を井筒内にとり入れる為の加工か。尚この曲物は井筒5段目に使用されていた。

(244)は直径40.9cm、高さ11.6cm、側板の厚さは0.5~0.6cmを測る。材質はやはりヒノキと推定され、桜の皮により接合されている。側板の一方の端部付近には計16個の穿孔がある間隔を置いてみられ、井筒として他の曲物と接合する為のものと思われる。穿孔の一つに木製目釘を確認した。尚いざれも側板内面には垂直方向の切り込みが施こされ、一部左下りの切り込みもみられる。

#### 6号井戸

**瓦器** 細片にとどまる。

**板片** 朱塗が施こされるが不明。

#### 7号井戸

**羽釜** (162)~(166) (162)は口径29.9cm、現高20cmを測る土師質羽釜である。体部上端で断面方形に厚味を持って口縁端部となる。腹の張る体部外面上半は粗い箄削り、下半は箄ナデ、内面は刷毛調整。砂粒を含む胎土、淡黄褐色を呈し、焼成は中。外面には煤。

(163)は口径28.0cm、現高15cmを測る土師質羽釜である。口縁部は体部より短く立ち上がり更に外方へ短く屈曲する。端部は尖んがり気味。肩と腰の張る体部外面は数種の縱方向箄削りを施こし、内面は平滑。黄褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は中、外面には煤。底部を抜いて井筒となす。

(164)は口径31cm、現高21.5cmを測る土師質羽釜である。口縁部は体部より短く屈曲して尖んがり気味にとじる。腹の張る体部外面は箄による斜方向の調整。内面は箄調整をもって平滑化。淡黄褐色を呈し、砂粒を含む胎土の焼成は良。外面には煤。

(165)は口径28.6cm、現高25.4cmを測る土師質羽釜である。口縁部は外方へ強く曲げられ、端部断面は方形にとじる。腹の強く張る体部外面は笠による各種の調整。内面は笠による横ナデ調整。白黄褐色を呈し、砂粒を含む胎土の焼成は良好。外面に煤付着。底部を抜いて井筒となす。

(166)は破片だが、復元口径約32cm、現高14cmを測る瓦質羽釜である。口縁部外面には回線がみられ、端部は平坦面をもっておさまる。直立気味の体部上半外面は笠削りと笠ナデを行なう。内面は笠ナデ調整。砂粒を含む胎土の焼成は良好。外面の炭素付着は良好。黒銀色を呈す。

#### 8号井戸

瓦器 極細片のみ。

曲物 (245) 直径46.3cm、高さ21.5cm、側板の厚さは0.4cmを測る。材質はヒノキと推定され、桜の皮により接合される。側板の一方端部には計り個の穿孔が一部を除いてほぼ等間隔に施こされる。穿孔の直径は0.2cmで、木製目釘が存在するものもある。側板両端面には浅い深みが数ヶ所みられる。側板内面には垂直方向の切り込みが施こされ、一部右下りの切り込みもある。これは井筒1段目に使用されていたものである。

#### 9号井戸

瓦器極細片のみ。

#### 小磚群

羽釜 (168)～(175) (169)は口径17cm程度を測る比較的小型の土師質羽釜である。口縁部は小さく外反する。体部外面は笠削り、内面は刷毛調整。白黄色を呈し、粗砂含む胎土の焼成は中。

(170)は口径20cm程度の土師質羽釜である。口縁部はわずかに内傾し、端部はやや厚味をもってほぼ方形にとじる。体部外面は粗い笠削り、内面は笠調整。白黄色を呈し、金雲母粒をわずかに含む。焼成は良。

(168)(171)(173)～(175)は瓦質羽釜で口径14～28cm程度の法量を持つ。形態的には、直立気味の体部からわずかに内傾する口縁部を持つものが多い。口縁部外面には3本の回線ないしは段を持つ。端部は平坦あるいは回線がつく。体部外面は笠削り、内面は刷毛あるいは笠調整される。(168)は口径14cmと極めて小型で、あるいは三足が付くかも知れない。焼成が良好で明確な瓦質のものから、不良で一見土師質を呈する各種がある。

三足片の出土もみている。(178)(179)

**瓦質土器** (176)(177) 細片だが口径22cm程度。大きな球形体部は欠損するが、それより弯曲外反し水平にのびる口縁部を持つ。端部は上方に突出し、平坦な端面を持つ。頸部には平行叩き、体部上方にはアヤ杉状の叩きが施こされる。内面は剥落。かすかに表面に炭素が付着するが、断面は黄茶色を呈す。この他(177)のような土器片もある。

**土師小皿** (205)～(209) いずれも口径7.6～7.9cm、器高 1.5cm内外を測る。口縁部両面は横ナデ、外面下半には凹転痕あるいは指圧痕、内面はナデあるいは刷毛調整される。黄色味の強い色調で、胎土のキメは細い。焼成は良。

**瓦器坏** (210) 口径6.8cm、器高2.4cmを測る。高台を持つ小型の坏である。口縁部両面は横ナデ、外面下半は未調整。わずかに外力へ踏んばる高台。焼成良。炭素付着。

**軒丸瓦** (249) 直径約15cm、厚味約 2.2cmを測る蓮華文軒丸瓦である。中房上の蓮子は極めて肉薄でその存在は不明確。中房の周囲には花茎をめぐらす。白灰色を呈し、砂粒を含む。焼成は不良で軟質。

**軒平瓦** (254) が遺存、厚味約 5cmを測る唐草文軒平瓦である。陽刻をもって円の中に「蛇」「仏」の二字が遺存する。他の二字は不明。上下線には2本、側辺には1本の闊線。灰黒色を呈し、焼成は良。

#### pit 74

**瓦器楕** (213) 口径16.4cm、器高 6.0cmを測る。深味ある体部にしっかりと貼り付け高台がつく。内外面とも横あるいは斜方向の暗文が施こされる。見込み内面にも経歴状暗文が施こされる。踏んばる高台の断面は方形。内面と外面上半のみ炭素付着。焼成は良。

#### pit 17

**瓦器楕** (214) 口径15.0cm、器高 5.6cmを測る。深味ある体部にしっかりと貼り付け高台がつく。口縁部下外面には連続する削りにより段がつく。外面には粗い、内面には密な暗文が施こされる。器薄の高台断面は方形。内面のみに炭素。焼成は良。

**軒丸瓦** (252) 直径17.0cm、厚味 3cmを測る塔文軒丸瓦である。周囲に二重の内圈をつけ、その間に連珠文を配する。塔文中央に梵字を刻する。灰黒色を呈し、焼成は不良で軟質。細砂を含む。

#### pit 23

**瓦器楕** (215) 口径12.8cm、器高 3.2cmを測る。浅い体部に退化した貼り付け高台がつ

く。内面にはまばらな横方向の暗文が施こされる。焼成は不良、一部のみ炭素が付着。

#### pit 10

**瓦器碗 (212)** 全体の約2片だが、口径15.9cm、器高 5.3cmの法量が復元される。深みのある体部にしっかりと貼り付け高台がつく。体部外面は細かい削り、内面には横及び斜行の暗文が施こされる。両面とも不明瞭。高台断面は方形。焼成は不良。

#### T・O・C地区溝 (CV24付近)

**瓦器碗 (230)～(232)** 口径14.0～15.6cm、器高 4cm弱を測る。いずれも浅い体部に退化気味の簡略な貼り付け高台がつく。外面は削り痕がみられ、内面上半には横方向、下半には平行線をもって暗文が施される。炭素付着の範囲は広いが不十分。

**瓦器小皿 (235)(236)** 口径9.2cm、器高1.6cmを測る。内面に横方向の暗文が施こされる。焼成は良。

**土師小皿 (237)(238)** 口径9cm前後、器高 1.5cm前後のものが多い。口縁部両面を横ナデ、下面には指圧痕、内面は平滑であることを一般的とする。土として橙色を呈し砂粒を含み焼成は普通もしくは不良である。

**土師皿 (234)** 口径13.6cm、器高 2.4cmを測る。口縁部両面を横ナデし、底部には指圧痕がのくる。砂粒含む胎土は白灰色を呈し軟質。

#### T・O・C地区溝 (CV34付近)

**瓦器碗高台片 (240)(241)** 断面方形あるいは三角形を呈する貼り付け高台を持つ。内面に平行線暗文がみられる。

#### T・O・C地区 (CV26 C-16内上層)

**瓦器碗 (239)** 1片だが口径16cm程度、器高 5cm程度の法量が復元される。深みのある体部に外方向へ踏ん張る貼り付け高台を持つ。内面には巾広の横・斜行方向の暗文が施こされる。焼成良好で硬質。

#### その他の遺物

以上これまでとりあげた遺物の他に土鉢・円板・古鏡・桃種等がある。

**土錐** (257)は長さ8.0cm、径 2cm弱の棒状土錐である。両端に穿孔がある。(258)はほぼ

同形を呈するが片である。いずれも細かい胎土を持ち、焼成も良好。(257)の重量は36.5g。两者とも「河川」状遺構出土である。

(259)は長さ9.0cm、最大径5.5cmを測る大型土錠である。径2.5cmの穿孔が施される。細砂を含む胎土を持ち、焼成は中。重量は229g。BG-O床土出土。所属時期は不明。

円板 (223)～(227) 瓦あるいは瓦質土器を剥離あるいは研磨により円形に整形したものである。5個以上の出土をみており、直徑4.5～7.5cmのものが多い。性格は不明。

## 2. 上池部分出土土器

### I 層序と出土状況

今回の出土地は、上池の池床であったために調査開始前には厚いヘドロが全面に堆積していた。これを排除すると砂利層があらわれ、旧河川状遺構の肩を構成する地山となっていた。遺物はこの砂利層内には認められず、旧河川状遺構内より集中して出土したものである。

旧河川状遺構内に堆積した土層には、茶褐色砂質土、灰色砂利層、ブロック状粘土混り灰色砂層、暗茶褐色粘土層、淡青灰色細砂層などがみられた。しかし、これら各土層の関係は一様に全面を覆うものではなく、地区、地点によってかなりの変化をみることができる。比較的明瞭な層序を示す範囲は、おおよそ中央西トレンチ以西すなわち地区割によるところのC-33からK-33を結ぶ線より西側の範囲である。この範囲での堆積土は、西側断面図でみるとヘドロを排除した面より下へ茶褐色砂質土層、灰色砂利層、暗茶褐色粘土層と続いている。なお、茶褐色砂質土層と灰色砂利層の境界は漸移的であり、茶褐色粘土層は部分的に淡青灰色細砂を含んでいる。

遺物は、茶褐色砂質土層、灰色砂利層から6世紀～8世紀の須恵器が出土した。暗茶褐色粘土層からは、口縁端部内面が肥厚する布留式甕やTK208型式に属する須恵器杯身などが出土した。<sup>⑨</sup>従って、暗茶褐色粘土層も一時期の所産と限定することはできなかった。また暗茶褐色粘土層には、土器のほかに大量の木器が包含されていた。木器の個々についてここでは触れないが、これらの木器の年代は少なくとも6世紀初頭以前のものであることを付記しておきたい。

このように、中央西トレンチ以西の範囲では比較的明瞭な層序が認められたのであるが、これより東へ行くにつれて層序はしだいに乱れをみせるようになる。TK208型式の須恵器が多く出土したI-27地区周辺では、灰色砂利層の堆積が厚く、その下半部は粘土が部分的に堆積するようになる。土器はこの下半部に含まれており、須恵器に混って同時期と思われる土師器甕もみられた。中央東トレンチ断面では、砂利層と灰色砂層とが混在し、その下に粘土層と灰色砂層とが互層をなして続いている。互層をなす各層は南から北に向かって下降している。さらに、K-21

からO-21をむすぶ土層観察用畔の断面をみると、8世紀代の土器を含む茶褐色砂質土の下に粘土がブロック状に混る砂利層が厚く堆積する地区と、暗茶褐色粘土が厚く堆積する地区とがみられる。遺物は、M-19地区を中心としてブロック状粘土を混えた砂利層に5世紀末ないしは6世紀初頭から6世紀末までに属する各型式の須恵器を多く含んでいた。このなかには2次焼成を受けた杯も少なくない。また、右岸沿いに堆積した暗茶褐色粘土層からも、6世紀前半に属する須恵器甕が出土している。このように、M-19地区周辺では、砂利層、粘土層に関係なく出土する土器に年代巾がみられるのである。

しかしながら、南岸沿いに堆積した淡青灰色細砂層から出土した土器には土師器が多く、これに古い特徴をもった須恵器が検出された。とくに、H-O地区周辺からは、小型丸底土器、高杯、甕を主体とした土師器の良好な一括遺物が出土したほか、M-1、O-0、L-5など近い地点の同じ層位からは最古式に属する須恵器の出土をみている。

以上のように、遺物は出土した地区と上層の状況によって、H-O地区周辺から南岸沿いに堆積した淡青灰色細砂層と西端部に拡がる暗茶褐色粘土層およびI-27地区周辺の粘土混り灰色砂層さらにM-19地区周辺のブロック状粘土混り砂利層、暗茶褐色粘土層とに大別できる。今回報告する土器は、このような出土地点によるまとまりに従って分類し、観察を行なったものである。

## II 分類

分類は形態的特徴および製作技法の両者を考慮して行なった。また、他地域の土器との時期差や器種構成の比較を考慮して、基本的な器種については各小期ごとの分類基準をあらかじめ明らかにしておくことにした。従って、土師器では、甕、高杯、小型丸底土器などのように畿内中心地域において布留式の全撒を通じて存在し、かつ器形の変化が特徴づけられるものについては、甕A a～A c、高杯A～D、小型丸底土器A～Dに分ける。須恵器は初現期から従来よりいわれているⅠ期の須恵器についてを器形、手法によって杯A～C、甕A、壺A～Cなどに分け、Ⅱ期以降のものについては器種別に観察結果を述べるにとどめた。

なお、土師器については分類基準をあらかじめ明記しておくことが必要と考えられるので以下にその基準を与えておく。

**甕** 布留式に特徴的な甕は、口縁端部内面が肥厚する甕Aである。これは、さらに肥厚の形態によって3種類に分けることができる。A a類は端部が丸く肥厚するもの、A b類は上端に平坦な面をもって肥厚するもの、A c類は内傾する面をもって肥厚するものである。

**高杯** 杯部の形態から基本的にA、B、C、Dの4種類に分けられる。高杯Aは水平方向

にのびる底部より角度をかえて口縁部が大きく外反するものである。調整に丁寧なヘラ磨きを行なうとともに、しばしば暗文風の磨きが施される。高杯Aは初期の段階でヘラ磨き調整を行なうが、しだいにナデを主体とした調整に省略されていく。高杯Bは杯部の深さがAに比して浅く、杯底部から口縁部に屈折する境界が明瞭な稜をもたないものである。高杯Cは口径が小さく塊状の杯部を有するものである。高杯Dは口径が大きく、水平にのびる杯底部から外反する口縁部へ屈折する境界に凸凹ないしは段を有するものである。

**小型丸底土器** 小型丸底土器は布留式を特徴づける器種の一つである。ここでは初現期のものから須恵器を一部となうものまでをA、(B)、C、Dの4形態<sup>①</sup>に分けることにする。Aは口縁部が外上方に大きくひらき、扁球形の小さな胴部をもつものである。(B)は口縁部のひらきが小さくなつて口径と胴部最大径の差が接近する。A、(B)はともに精良な粘土を使用してヘラ磨きを行なつた赤色系の土器である。CはA、(B)よりも口縁部が短少化しているうえに、大きな特徴として從来の赤色系の焼きあがりのものにかわつて淡褐色、淡灰褐色を呈すようになることがある。また、仕上げの段階でのヘラ磨きは省略され、口縁部はヨコナデにより、胴部はナデとヘラ削りを併用して調整するものである。Dは口縁部がさらに短縮したもので、調整に刷毛目仕上げのものが盛行する。

以上が布留式を細分する場合、推移の特徴を示す主な器種についての簡単な識別類である。これらの観点から上池遺跡出土の布留式土器を観察することにしたい。なお、土器の胎土、色調の記述は充分な客觀性を有するものではないが、同様の形態をとる土器にも明確なる色調の違いが認められ、それが何らかの意味をもつ場合があるため記載した。

#### 注

- ① 田辺昭一

「陶邑古窯跡群Ⅰ」平安学園考古学クラブ 1968

「陶邑、深田」大阪府教育委員会 1973 ではC類に相当する。

- ② 最内中心地域という地域設定を古墳時代の土器にあてはめることは、土師器の地域差が明らかではない以上、妥当ではない。ここでは布留式土器の中心地と和泉地方の同時期の上器とは差違がみられる事を考慮して弥生土器に用いられる用語を便宜的に使用した。

- ③ 分類の基準については、おおよそを安達厚三、木下正史

「飛鳥地域出土の古式土師器」 考古学雑誌第60巻2号 1974

に従つた。

- ④ A類とB類は、口径と口縁部の長さが異なるものの、いずれもヘラ磨きを行なつた赤色系の土器であり、その意味においては同一系譜に属するものである。従つて、小型丸底土器の分類は大きくはA、C、Dの3形態に分かれる。

- ⑤ 例えば、小型丸底土器Cの段階には、それまでにみられた赤色系の色調が失なわれるとともに精製土器3種のセットが崩壊していることなどがあげられる。

### 3. 上池部分出土土器の考察

後記で観察するように、上池出土の七器にはいわゆる布留式の土師器から8世紀の須恵器までがみられた。そこで、まず観察結果のまとめとして、細砂層および暗茶褐色粘土層出土の土師器について器種構成を述べ、土師器と古い特徴をもった須恵器が同時期に含まれるものかを検討する。つぎに、上池出土の土師器の成立過程を検討することによって和泉地方における布留式土器の在り方をみる。最後に、上池遺跡で土器が変化する過程を考えることによって、須恵器生産開始期の土師器と須恵器の関係について問題となるべき点を2、3指摘することにする。

#### I 出土土器のまとめ

##### 土師器

上池出土の土師器には、いわゆる布留式土器と呼称される齊一性の強い器形がみられる。これに含まれるものとしては、小型丸底土器D、E、高杯B、C、D、壺A、B、壺A、B、C、小型器台などがあり、布留式の新しい段階<sup>①</sup>にみられる器形である。さらに、各器種をそれぞれ詳細に観察すると、胎土、色調、調整手法などの特徴から2、3のグループに細分できるものがあり、型式的な変化がたどれるものもある。以下において得られた知見をまとめてみたい。

小型丸底土器にはDとEがある。DにはCの流れを受け継いで胴部外面をヘラ削りするD aと、この時期に盛行する刷毛目仕上げのD bとに分けることができる。胎土、色調も、D aが雲母とクサリ礫様の赤褐色の産点を含んだ精良な粘土を使用し、淡灰褐色の焼きあがりをなすのに対して、D bは砂粒含みの粘土を使用して器表面をスリップ調整する灰褐色の土器である。D aの出土量は、本遺跡では少量である。奈良県上ノ井手遺跡井戸S E 030下層からは、小型丸底土器Cに混ってD aが出土し、刷毛目仕上げのD bとの共存が認められている。同じ井戸上層には、口縁部がいっそう短縮し、胴部外面のヘラ削りを部分的に行なうものと全面ナデ調整のものとが出土しており、いずれもD aが退化したものと考えられる。上池では、細砂層にD aとD bの共存はみられたがD aの形態変化を認めることはできなかった。D bでは、口縁基部で外寄したのち端部近くで外反する口縁部に、胴部内面をヘラ削りして薄く仕上げるもの（図版-39 1～3、6～10）が典型となる。これらは調整の仕方も丁寧である。口縁部が外寄し器厚の厚いもののや直立する口縁部をもつものは、胴部内面をヘラで揉いて調整している。調達の仕方はやや粗雑である。これらに対して、単純に外反する器厚の厚い口縁部をもつものや胴部の器形が極端な扁球形を呈するものは胴部の調整も粗雑である。このように、刷毛目手法を用いたD bのなかにも丁寧な作りのものと粗雑な作りのものとが混在している。しかし、H-0地区周辺の土師器一

括資料のなかには、これらの両方がみられることから先後関係を指摘することはできない。また、EのなかにはD bと同様の刷毛目を施した例（図版-39-20）もある。

高杯にはB、C、Dがある。Bは小型丸底土器D bに併なって盛行する器形である。これにも杯底部外面をヘラ削りするB aと杯部全体を刷毛目で調整するB bとがある。しかし、胎土、色調は両種とも大差がない。出土量ではB aが少量で、B bが主体を占めている。杯部と脚部の接合方法には、(i)脚部を先に調整段階まで済ませたうえに杯部粘土を積みあげて成形する方法、と(ii)杯部と脚部を別々に製作し、生乾きの状態で脚部に心棒を差し込んだまま挿入する方法とがみられる。本遺跡の高杯は、B aが(i)の方法、B bが(i)、(ii)の両方法で行なっている。なお、B bで(ii)の方法をとるものには、杯部と脚部がそれぞれ半完成品どおりを接合するために、杯部の刷毛目と脚部内面の刷毛目とで原体を異にする例（図版-40.5）もみられる。杯部が焼形を呈する小型の高杯Cは、本遺跡では器形に高杯Bの特徴を残したC 1が多く、完全な塊形を呈するC 2は細砂層から出土していない。C 1の脚部の形態は、脚柱部からなだらかに裾部へ移行する小形のものである。C 1とC 2の形態差は、C 1がH-0地区周辺の一括遺物に含まれていたのに対して、C 2は一括遺物より後出するとと思われる窯C、Dと同じI-27地区周辺に堆積した粘土混り灰色砂層より出土したことから先後関係を示していると考えられる。調整方法は、C 1、C 2とともに脚部との接合部をヘラ削りしており、刷毛目を用いた例は少ない。船橋01、02の例では、出土したC 2の器形すべてに刷毛目が用いられているとの対照的である。Dは本遺跡とは破片が少量あるだけである。

窯にはA、B、C、D、Eがある。A、BはH-0地区周辺の一括遺物のなかに含まれていたもので、C、DはI-27地区周辺の粘土混り灰色砂層より出土したものである。Eは0-15地区河川右岸の凹部より副部内面スリ消しを行なった須恵器窯とともに出土したものである。Aには、口縁端部が上端に水平な面をもって内側に肥厚するb類と、肥厚部に内傾する面をもつc類とがみられる。A bは少量で、大半はA cに属している。A bとA cとは、単に肥厚の形態が異なるだけでなく、胎土、色調においても違いが認められる。すなわちA bは、小型丸底土器D aと同様の墨跡とクサリ礫様の赤褐色の窓点を含んだ精良な粘土を使用しているがA cは、小型丸底土器D b、高杯B bに通有の砂粒含みの粘土に器表面スリップ調整を行なったものである。副部内面のヘラ削りは、A bでは口縁部との接合部より開始され、0.3cm程度に薄く仕上げられている。A cには、ヘラ削りをほぼ全面に行なうもの（図版-41-2、3）と部分的にヘラ削りを行ない他の部分はナデ調整するもの（図版-41-4、5）とがあり、器厚はだいに厚くなる傾向がみられる。A cには、このほか暗茶褐色粘土層より器体全面に淡赤色の塗付物がみられ、2次焼成をそれは受けていないものが出土している（図版-41-6）。いっぽうBは副部内面を

刷毛目原体で削ったのちナデ調整したものである。器厚は薄く、胴部外面の刷毛目調整も丁寧に行なわれている。Bの器形は、のちに壺Dの器形へと変化するものと思われる。

C、D、Eは、いずれもA、Bよりは後出する器形と考えられる。このうち、Cは口縁端部が内傾する平坦面となっておわる器形をなしており、A cの影響が認められる。Eは前代の器形からの影響が認められない新しい器形である。

壺にはA、B、Cの3種類がある。Aは2重口縁の肩折部と口縁端部に凸凹を有するもので、精良な粘土を使用して淡赤色に焼きあがっている。併出した副部の小破片には、外面に比較的ヨの粗い刷毛目がみられる。上ノ井手遺跡井戸上層にも、2重口縁をもった刷毛目調整の壺が出土しており、上池においても細砂層出土の布留式土器に伴なうものと考えられる。Bは外上方にひらく直口口縁をもつもので、これには口縁端部が内外に肥厚する布留式の壺に通有のものと、口縁端部が丸くなっているものとがある。前者は精製、後者は粗製である。Cは、2重口縁をもち、胴部に壺A cと同様の刷毛目調整を行なったものである。口縁端部も壺A cと同様の肥厚を有している。船橋0 I、0 IIをはじめ布留式の新しい段階に、小型丸底土器D b、高杯B b、壺A cなどとともに盛行する器形である。

小型器台は、小型丸底土器D aと同様の胎土のものと、小型丸底土器D bと同様の胎土で内面に刷毛目を有するものがあり、ともに盛行期の赤色系の精製品とは形態も異なっている。上池出土の土器は、小型精製土器3種のセットが崩壊したものの器形で占められていることから、これらの小型器台も同時期のものと考えたい。類例としては、高槻市那家川西遺跡で小型丸底土器D bに伴なったものが知られている。<sup>9</sup>

### 須恵器

上池出土の須恵器は、いわゆるI期に属するものが多い。なかでも細砂層出土の壺A、壺A、杯身A、杯蓋A、無蓋高杯A、C、把手付壺は古い特徴をもつものである。壺A、杯身A、杯蓋AはTK73型式の特徴を示しており、最古式に属することは確定である。これら細砂層出土の須恵器はII-0地区の一括遺物のなかには含まれていなかったものの、近い地点の同じ層からは、M-1地区で壺A、杯蓋A、N-0地区で壺Aと器台の破片、L-5地区周辺から壺A、無蓋高杯A、C、把手付壺が出土している。また、第2次の調査においても、河川南岸に沿ってII-0地区より続く同様の層位より小型丸底土器D bと須恵器壺Aが出土している。このような事実から、少なくとも層位的には不整合な面を見い出すことのできない細砂層に、布留式の土師器と古い特徴をもった須恵器の共存が認められたのである。そこで同一層内に共存する土師器と須恵器とは同時期に属する土器群として考察を行なうこととする。

このように、層位的には共伴することが確認された布留式の土師器と古い特徴をもった須恵器は、さらに形態、手法においても相互の影響が認められた。

第1に、H-0地区周辺で一括出土した土師器の中に、回転を利用した調整痕がみられることがあげられる。H-0地区出土の高杯（図版-40-1）は、杯部外面の調整に回転を利用したナデが行なわれている。また、杯底部内面に須恵器の粘土紐巻き上げ+ミズビキ痕に類似した溝巻き状の調整痕がみられるものがある（図版-40-5）。回転利用のナデを行なった高杯の器形が高杯Bに属することと考え合わせると、高杯Bの器形が盛行する時期に須恵器の導入がすでに行なわれていたのではないかとも推察できるのである。

第2は、E-37地区暗茶褐色粘土層より出土した土器に、器形は土師器に類似し、手法や焼成については須恵器の特徴を有する模倣土器がみられることである。（図版-40-22）は、2重口縁の土師器壺Cに似ているが、胴部外面には格子叩きが施され、焼成も茶灰色の須恵器生焼け品に似ている。器形を模倣した土師器壺Cは、布留式の新しい段階に盛行するが、須恵器の出現とともにその機能は急速に須恵器へ移行したと考えられる器種である。<sup>⑨</sup>いっぽう、格子叩きは古い段階の須恵器にみられる特徴の一つと考えられている。<sup>⑩</sup>このような模倣土器の存在からは、土師器壺Cが姿を消す以前に古い特徴をもった須恵器の出現が考えられるのである。なお、模倣土器には、土師器壺Eの器形と胴部内面へラ削りの技法をまねて、外面には須恵器の手法である平行叩きを施したもののがO-15地区より出土している（図版-45-21）。模倣土器もまた模倣した土師器の器形によって先後関係が認められるのである。

## II 上池細砂層出土土器の成立過程について

和泉地方における弥生第Ⅴ様式以後の土器は、弥生土器の伝統をそのまま受け継いだ伝統的第Ⅵ様式壺が引きつづいて用いられ、これに中、南河内地方で製作された上田町Ⅰ式壺、さらに2重口縁の口縁部に櫛描き波状文や円形浮文を施した装飾性の強い壺などで構成されることがすでに指摘されている。<sup>⑪</sup>この時期は、巾、南河内地方の土器編年では北島池下層式（上田町Ⅰ式）から上田町Ⅱ式にかけての土器が使用されていた時代である。<sup>⑫</sup>和泉地方では、弥生第Ⅴ様式の器形、手法を踏襲した土器が中、南河内の中、南河内の上田町Ⅱ式期にまで継続するために、和泉の在地系土器による編年を行なうことは困難である。従って、和泉地方ではこの時期を弥生第Ⅵ様式として包括する見解が妥当であろうと考えられる。ここで問題とする弥生第Ⅵ様式以後の土器についても、和泉地方独自の特徴を有すると考えられ、その内容を検討することによって上池遺跡出土土器の年代的位置づけを行ないたい。

## 布留式土器について

布留式土器は、高塚古墳に象徴される古墳時代社会が畿内において出現し、社会体制がしだいに確立する時代に使用された土器である。そのため、布留式土器のなかで特徴的な小型精製3種土器が、齊一性をもった器種として全国的に拡がっていく現象を、小型精製3種土器による祭紀儀礼の整備と全国的な伝播と把える考え方もある。<sup>⑨</sup>しかしながら、古式古墳に小型精製土器を中心に行なった祭祀儀礼の存在が明らかではない現状や、3種のセットが確立する以前にも小型器台が存在する例<sup>⑩</sup>も認められることなどからは、小型精製3種土器の具体的な機能および祭紀儀礼の整備といった政治的な性格についてはなお慎重な検討が必要とされる問題である。このような問題を考えるうえにも、地域ごとに土器の変化過程を把える作業が布留式においても必要不可欠なものと思われる。

現在のところ、土器型式として把えた布留式の成立については、畿内各地とも明確な一線を画することが困難であることが知りうる。内容的には、布留式の精神資料とされる小若江北式の器種構成は、小型精製3種土器に口縁端部内面が肥厚する壺が伴なうものである。ところが、小型精製土器の古相を示すものに伴出する壺には、上田町Ⅲ式壺のように布留式以前の土器と考えられているものが伴出する場合が少なくない。このようなことから、小型精製土器の出現は、壺の形態が変化する時期と一致するものではないことが明らかである。それゆえ布留式成立の概念も小型精製土器の出現を指標とするか、田中琢氏が提唱した庄内式の概念にもとづいて壺の形態変化を重視した小若江北式の成立を初現とするかで意見が分かれるところである。飛鳥地域出土の古式土師器を細分して型式を設定した例は、布留式成立過程と地域性を表現するためにも指標となるものであろう。

## 和泉地方の布留式土器

和泉地方において、小型精製土器の出現は泉大津市七ノ坪遺跡にみられる。七ノ坪遺跡出土の土器には、小頸丸底土器A、B、小型鉢、小型器台の小型精製3種土器が含まれており、小型丸底土器は、全体を丁寧にヘラ磨きしたものと底部をヘラ削りしたものがある。いずれも赤色系の色調を呈している。壺は、Aaが比較的細筋の叩き目を施した伝統的第Ⅳ様式壺と共存している。Aaには、口縁端部の形態が上田町Ⅲ式壺の影響を残して上方に若干肥厚するものと内面に丸く肥厚するものがある。いずれも胴部は細かい刷毛目で調整している。壺には、2重口縁をなし精良な胎土のAと、直口の口縁部に端部が内面に肥厚するBがある。高杯にはAがみられる。七ノ坪遺跡の土器は、小型精製3種土器のセットが確立した時点の器形である小型丸底土器Aにヘラ磨き仕上げのものと底部をヘラ削りのまま仕上げたものがあり、これらに小頸丸底土

器Bを加えることから、器形によってA、Bの各段階を分けることは不可能である。

小型精製3種土器のセットが崩壊した段階になると、今までに得られた資料によれば細砂層出土の土器の器形が盛行するようになる。しかし、土器型式の推移からは、七ノ坪遺跡と細砂層の土器のあいだになお間隙を感じられる。この型式学的な間隙を埋める資料として、県大津市豊中遺跡A地区（大阪ガスKK用地内）溝より出土した一括遺物（挿図2）をとりあげてみよう。

土器は溝の底部に形成された凹部より一括で小型丸底土器7個、高杯、壺、小型鉢、銷壺がそれぞれ1個、須恵器壺Aの口縁部1個体が出土した。このうち一部を示す（挿図2）。小型丸底土器はCとD aが占めている。いずれも焼きあがりは淡灰褐色を呈し、雲母、クサリ礫様の赤褐色の斑点を含んだ精良な粘土を使用している。これらに、2重口縁をなし刷毛目調整の壺C、2段に短かく外反する口縁部に扁球形、丸底の脚部もつ小型の鉢、ナデ調整によって仕上げた高杯Aが併出している。このような豊中遺跡A地区溝内の一括遺物を上池細砂層出土の土器と比較すると、小型丸底土器Cや高杯Aは上池細砂層の土器にはみられず、型式的には上池細砂層の方に新しい要素が認められる。しかし、小型丸底土器D a、壺Cはともにみられる器形である。また、最古式に属する須恵器壺Aも両遺跡で出土している。このような出土遺跡から推察すると、小型丸底土器CからD aへの変化が豊中遺跡A地区溝の土器から考えられる。いっぽう上池細砂層では、D aと刷毛目手法を用いたD bとが併出している。そのうえ両遺跡に小型丸底土器D bとともに盛行する壺Cがみられることから、へラ削りで調整する小型丸底土器Cと刷毛目で調整するD bとは、さほど大きな時期差をもたないと考えられる。むしろ、両系統の土器は、胎土、色調、調整手法などにおいて明確な差違がみられることから、土器の生産地ならびに生産集団の相違が考えられるのである。

このような事例から、和泉地方における布留式土器の推移を次のように要約することができる。第1に、和泉地方において布留式を特徴づける何種類かの土器の出現は、七ノ坪、土生をはじめ多くの遺跡では伝統的第Ⅴ様式壺および上田町Ⅵ式壺ないしは上田町Ⅶ式の影響を受したものと共に伴することが考えられる。また、小型精製3種土器と布留式壺A aとは、純粹なかたちで作出しないまま存在し、伝統的第Ⅴ様式壺が衰退して布留式壺Aが主体を占める頃にはすでに小型精製3種土器のセットは崩壊しつつあったのではないかと考えられるのである。第2に、小型精製3種土器のセットが崩壊したのちにみられる小型丸底土器Cは、器形の変化とともに色調もそれまでの赤色系から淡灰褐色に変化することが注意される。そして、小型丸底土器Cの系譜は、しだいに衰退してD aへと続くのに対して、刷毛目手法を最大限に使用した土器が小型丸底土器Cの出現と相前後して盛行するようになる。細砂層出土の土器は、このような刷毛目手法

を用いた小型丸底土器D b、高杯B b、壺A c、壺Cなどを主体として構成されたものである。また、この時期のある時点からは、最古式の須恵器も出現し、上池遺跡への搬入が行なわれたものと思われる。

### III 須恵器出現期の土器について

近年における古式土師器の研究によると、布留式の新しい段階には最古式の須恵器を一部伴なうことが知られている。細砂層出土の土器には、このような同伴関係がみられた。さらに細砂層の土師器より型式的には先行すると考えられる豊中遺跡A地区溝内一括遺物にもTK73型式の須恵器壺Aが伴出した。これらの事実を重視すれば、和泉地方では小型精製土器3種のセットが崩壊した後に出現する小型丸底土器C、Dについて先後関係を認めることはできないと考えられた。

次に須恵器出現期前後の土器の型式的な変化をみるとことによって上池遺跡の土器を特徴づけてみたい。

なお、前提として、古い特徴をもった須恵器には壺、壺のような実用品が多く、土師器のうち貯蔵用の壺は須恵器の出現とともに急速に衰退し、その機能を須恵器が階襲したとする従来の考え方を肯定する。また、上池遺跡そのものが5世紀中葉から8世紀前半に至るまで連続して営なされたとの仮定に立っている。

細砂層出土の土器は、出土量では土師器が大半を占め小型丸底土器、高杯、壺、小型器台等の器種に貯蔵用の壺もみられる。これらに最古式の須恵器が伴なっている（図版39～図版42、図版43）。しかし、いわゆるⅠ期の須恵器のうちでTK208型式の段階になると、須恵器は器種、量ともに急増するとともに、杯、高杯の類が圧倒的に主体を占めるようになる。これに土師器壺C、D、E、と高杯C 2が伴なっている（図版43）。つまり細砂層出土の布留式の土師器は、5世紀中葉に出現したと考えられる最古式の須恵器が搬入されたのちも5世紀後半までは共存したと考えられる。最古式の須恵器は上池全体を通じて一時期を構成する程の量をもたず、最古式の須恵器は独自では存在し得ないと思われるからである。しかし、5世紀末ないしは6世紀初頭の段階では、須恵器の杯、高杯に土師器の小型丸底土器、高杯の機能が吸収されるのかあるいは全く新しい用途に変化するのかどちらかであろうが、土師器は煮沸用の壺と高杯の一部が残るだけとなる。このような土器の推移から、上池遺跡における土器型式変化の画期は、最古式の須恵器が出現しその一部が上池遺跡へも搬入された段階よりも、むしろ須恵器の杯、高杯が急激に増加したTK208型式前後の段階に認められるのである。従って、上池遺跡における布留式の土師器と最古式の須恵器との関係は相互補完的なものと考えられ、その後須恵器のセットが確立するなかで布留式は崩壊していったものと考えられる。そして、その完成はTK208型式の段階

にはみられ、土師器壺C、Dなどにわずかに前代の影響が認められるほかは壺Eのような須恵器出現後の器形が主体を占めるようになると考えられるのである。

以上、上池遺跡における土器の変遷について若干の見解を述べてきた。次に、和泉以外で須恵器出現前後の土器を出土した例を参照してみることにする。

和泉地方以外で古い特徴をもった須恵器を出土した遺跡としては、古墳を除くと河内では船橋01<sup>1</sup>、大和では平城宮跡第39次溝<sup>2</sup>、平城京左京三条二坊溝SD 681<sup>3</sup>、布留<sup>4</sup>、攝津では郡家川西などがあげられる。また、紀伊の楠見<sup>5</sup>でも最古式の須恵器が大量に出土している。

このうち最古式の須恵器を伴出した船橋01<sup>1</sup>、平城宮跡第39次溝出土の土師器は、器形、手法に2、3の共通する特徴を有することが指摘されている。壺は、口縁端部内面に肥厚を有するA cが少量で、端部が内傾する平坦面となっておわるもの（壺C）、口縁部が単純に外反して端部がそのまま平坦面となっておわるもの（壺E）、単純に外反する口縁端部が薄く尖っておわるものなどが主体を占めている。小型丸底土器はD bが盛行し、高杯にはB b、C 2、Dがみられる。高杯は、杯部全体と脚裾部内面に刷毛目を施したものがみられ、口縁端部や脚裾端部をヘラで削って平坦面に仕上げる特徴もみられる。

平城京左京三条二坊溝SD 681から出土した土器も類似した構成である。壺はA cのほかに、単純に外反する口縁端部が薄く尖っておわるもの、外反する口縁部の端部がさらに反転するものがある。いずれも脚部内面のヘラ削りは器表面の凹凸を調整する程度に行なわれている。小型丸底土器にはD bとEがあり、Eには調整に回転を利用したものがみられる。高杯にはB b、C 2、Dがあり、B bの杯部と脚裾部内面に刷毛目を施す手法もみられる。報告書ではこれらの土器を5世紀末ないしは6世紀初頭に比定している。

このような2、3の類例によると、須恵器を伴う最末期の小型丸底土器は刷毛目調整のD bと考えられ、壺では口縁端部が内傾する平坦面となっておわるものや単純に外反して端部が薄く尖っておわるもののがみられる。高杯もB bとともにC 2が盛行する特徴がみられる。これに対して、細砂層出土の土師器には小型器台が残存することや高杯にC 2がみられないこと、さらに小型丸底土器D aが含まれることなど、古い要素が多く認められる。

いっぽう、最古式の須恵器が大量に出土した楠見遺跡の土師器は、口縁部が単純に外反し端部が薄く尖っておわる長胴の壺、高杯C 2、Dが多くを占めている。小型丸底土器は、すでに消失しているのかみられない。このような構成から、楠見遺跡の土師器は布留式にみられる特徴を失なった以後のものかと思われる。ところが最古式の須恵器のなかには、外離する口縁部の端部が内傾する平坦面となる土師器壺を模倣したものがあり、同様の土師器壺は平城宮跡第39次溝、平城京左京三条二坊溝SD 681などから出土していることが知られている。しかし共伴する須恵器

の器形からは、少なくとも楠見遺跡出土の須恵器よりも古式のものは、前者のなかには認められないことから考えても、楠見遺跡の土師器は、同時期にみられる器形のうち小型丸底土器D b、模量土器にみられる器形をなす窓、高杯B bなどを欠くという特徴を示しているのである。

このように、須恵器出現期の土師器には、布留式の特徴を受け継いだ器形と須恵器出現後にあらわれる新しい器形とがみられ、同時期の須恵器とのあいだにさまざまな構成をなすことが考えられる。そして、須恵器出現期の土師器が受けた変化は、須恵器の搬入時期と器種構成の成立時期によって地域差や集団による差が存在すると推察できるのである。

#### IV 小 結

これまで上池遺跡出土土器の器形、器種の構成と時間的な推移の仕方から2、3の問題点を抽出し、若干の考察を加えてきた。最後にまとめを行なうことで結びとしたい。

第1に、細砂層出土の土師器は、和泉地方の地方色を脱して畿内中心地域と齊一性をもったものであることが指摘できる。その意味においては、細砂層出土の土器は和泉地方にあって純粹なかたちで出土した布留式土器として位置づけることが可能である。

第2に、和泉地方で上池細砂層出土の土器が出現するまでの過程をみると、小型精製3種土器のセット崩壊後にみられる小型丸底土器については、それまでの形態、手法を継承しながら色調が淡灰褐色に変化したC類と細砂層より出土した削毛目手法のD b類とは、それ程大きな時期差を認めることができなかった。小型丸底土器Cは、同じへラ削り手法を用いるD aへと続く系譜がみられ、いっぽう小型丸底土器D bは、高杯B b、窓A cなどとともに一つの系譜を構成するものとなる。そして、この2つの系譜に属するD aとD bとが細砂層において共存していた。

第3に、これら布留式の新しい段階の土師器には、古い特徴をもった須恵器が併出した。しかし細砂層より出土した古い特徴をもった須恵器は、量的にみても、時期を構成するものとは考えられず、布留式の土師器使用時に搬入されたものと思われる。また、上池遺跡全体にみる土器の推移からは、TK 208型式の段階に須恵器窓、高杯が急激に増加し、土師器の器形も変化したことがわかる。従って、上池遺跡において用いられていた土器が大きく変化する時点は、最古式の須恵器が出現した時期よりもむしろTK 208型式の段階にあると考えられる。他遺跡の類例によると、須恵器を伴なう土師器は、小型丸底土器D b、高杯B b、C 2、D、が主体をなし、窓はA cよりもD、Eが主体を占めている。また、楠見遺跡のように、同時期でありながらも土師器の器形には布留式の特徴を残さないような例もある。このような現象は、須恵器を主体とした新しい器種構成の成立が布留式の土師器の衰退と関係をもつと考えられ、上池では、その時期をT

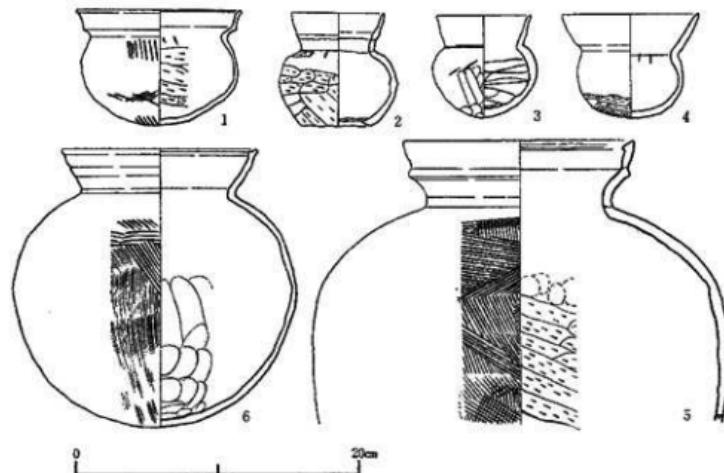
## K 208 型式の段階におくことができるるのである。

以上のように土器型式変化の過程をとらえると、上池遺跡を含めた一地域内における布留式土器の変遷には2、3の画期が認められる。とりわけ細砂層出土の土器にみる畿内中心地域との齊一化は、上池および隣接する古池の両遺跡の特有な現象と考えるか、和泉地方の集落遺跡全般の傾向と考えるかで相違はあるが、いずれにしても弥生後Ⅴ様式以降の上巻のなかでは七ノ坪などにみられる小型精製土器の出現期にもまして大きな画期となるものであり、この頃に背後の信太山丘陵において中期古墳が出現するのと呼応していることが注目されるのである。細砂層出土の土器は、さらに5世紀末ないしは6世紀初頭の段階でTK 208型式の須恵器を主体とした新しい器種構成へと変化する。この時点において、それまでの器種が有していた機能を吸収あるいは変化させたことが推察され、上池遺跡内部における画期をもたらしたものと考えられるのである。

類別表その他の基礎資料を提示し得ないまま、きわめて大まかな見通しを述べてきたが、上池遺跡出土遺物の重要性を考えるうえでの手がかりになればと思ひ考案を加えた次第である。大方の御批評をお願いしたい。

なお、末筆ではあるが、本項目の作成にあたっては井藤徹、酒井龍一、坂口昌男の各氏より御教示をいただいた。また、大阪文化財センター第2遺物整理室の方々には何かにつけてお世話になった。ここに記して深くお礼を申し上げます。

(芋本隆裕)



挿図2 豊中遺跡A地区溝内出土土器

注

- ① 布留式の純粹資料としては、昭和8年に公表された小若江北遺跡出土の土器が知られている。坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」しかし、昭和4年に平城宮下層より出土した土器には、布留式よりも古い要素をもったものが併出したことから、布留式を広義にとらえて細分する考え方が提起された。安達厚三「古墳時代溝出土の遺物」奈良国立文化財研究所年報 1968
- 昭和49年、飛鳥地域出土の古式土師器を資料として布留式の細分が具体的に示され、最末期に属するものとして上ノ井手遺跡井戸上層の土器があげられた。安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」考古学雑誌第80巻2号 1974 また、平城京左京三条二坊の報告書では、小型丸底土器を3段階に分けて第3の段階に転換Ⅰ出土のものをおいている。「平城京左京三条二坊」奈良国立文化財研究所学報第25巻 1975
- ② 前掲① 安達・木下
- ③ 「高槻市史」考古編に掲載されたものを高槻市教育委員会資料収蔵庫で実見。
- ④ 船橋遺跡では、須恵器を伴なわないⅠの段階に出現し、最古式の須恵器を伴なったⅡの段階まではみられるが、須恵器の出土量が増加するⅢ、Ⅳ以降は姿を消している。
- 原口正三「船橋Ⅱ」平安学園考古学クラブ 1958
- ⑤ 船橋遺跡ではⅡの段階に格子叩き目をもつ土師器として報告されている。前掲④ 原口 また、須恵器のなかでも初期期にみられる特徴の一つと考えられている。
- 田辺昭三「須恵器の誕生」日本美術工芸第390号 1971
- ⑥ 濱井龍一  
「弥生式土器から土師器への移行過程について」上町遺跡調査概要 和泉市教育委員会 1975
- ⑦ 都山比呂志「古墳出現前夜の集団関係」考古学研究80号 1974
- ⑧ 岩崎卓也「古式土師器考」考古学雑誌第48巻3号 1962
- ⑨ 繩向遺跡水路下層(繩向Ⅰ式) 石野博信「奈良県繩向遺跡の調査——三輪山麓における古墳時代前期聚落の問題」「古代学研究」65号 1974  
東奈良遺跡庄内期構内 現地説明会パンフレット 1975 などにみられる。和泉地方では泉大津市豊中遺跡構内より伝統的第V様式型、上田町Ⅱ式窓と併出している。
- ⑩ 船橋K I ~Ⅳ 前掲④  
鬼塚遺跡 東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ 1975  
東奈良遺跡・疊中遺跡 前掲⑨  
これらは上田町Ⅱ式窓を伴なっている。  
平城宮下層 安達厚三「古墳時代溝出土の遺物」奈良国立文化財研究所年報 1968  
繩向遺跡水路上層(繩向Ⅲ式) 前掲⑨ 石野  
布留遺跡山口池地点 置田雅昭「大和における古式土師器の実態——天理市布留遺跡出土資料」古代文化第26巻2号 1974 などにおいても大和の庄内式と考えられている窓が併出している。
- ⑪ 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 1974
- ⑫ 前掲④ 酒井
- ⑬ 七ノ坪遺跡調査概要に掲載された土器も、小型精製土器を含む段階と、3種のセット関係崩壊後的小型丸底土器D b、壺A e、高杯B bなどを含んだ段階とに大きく2分できる。
- ⑭ 「土生遺跡第2次発掘調査概要」「土生遺跡第3次発掘調査概要」岸和田遺跡調査会 1975
- ⑮ 高島忠平「最古の須恵器」大和文化研究 第13巻12号 1968
- ⑯ 前掲①「平城京左京三条二坊」
- ⑰ 置田雅昭「天理市布留遺跡出土の須恵器」古代文化第24巻11号 1972
- ⑯ 「高槻市史」考古編 1974
- ⑰ 「和歌山市における古墳文化」関西大学文学部考古学研究室紀要4 1972
- ⑱ 前掲① 安達・木下

## 4. 上池部分出土木製品

上池一次及び二次調査において多量の木製品の出土をみた。特に二次調査においては細片も含めればその数は数百点に達する。この様な多量な木製品のはほとんどは暗茶褐色粘土層から出土しており、伴出土器（須恵器及び土師器）から、その時期は6世紀初頭以前のものと推定される。ところでこれらの木製品のはほとんどが用途不明木製品である。ただ、概観してみると、刀剣類・農耕具・服物・紡織具・運搬具・建築用材・部分材等が認められる。さて、それでは以下に一群を形成する木製品それぞれについて述べてみたいと思う。

**刀・剣類（1～5）** これらの木製品は武備（刀、剣類）の形態を有してはいるが、材質が木である為、武器としての機能は保持していないものと思われる。とするならこれらの木製品は鉄製武器（刀、剣類）を模して製作されたものだが、鉄製のものとは当然その性質を異にするものと考えられる。ところで、木刀が二種類出土していること、あるいは小型剣状の木製品が出土していること、さらには2～5には磨滅痕跡が認められないことなどはいくつかの重要な問題を示唆しているように思われる。<sup>④</sup>また、木製素環頭の場合、他に出土例はほとんど認められず、その性質も不明であるが、本遺跡においては木剣、木刀などと共に本遺跡を特徴づけている。

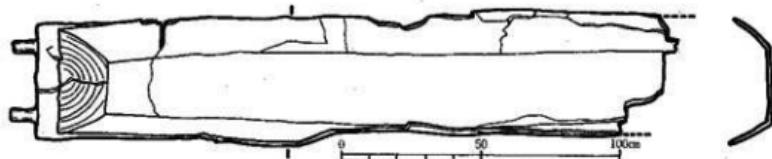
**農耕具（9～13）** 農耕具は5点出土しているが、そのうち4点までも鋤である事実は重要である。また鋤についても形態がナスピ状を呈するもの（11は不明確）とスコップ状を呈するものとが存在するが、これらはそれぞれの用途に側して使用されるものと思われる。ところでナスピ形鋤は他の古墳時代の遺跡からも出土している。それらの鋤と比較すると、鉄の刃先が着装されると思われる部分が、本遺跡のナスピ形鋤の場合さほど顕著に表現されていない。また又鋤には使用痕跡が明確に認められない。

**下駄（16～17）** 同地点から出土している。一方は杉、他方はヒノキのように思われる。ほぼ同一の形態、同一の機能の個々の材質の差や性格不明の削り痕跡はそれらの所有のあり方を示すものなのかもしれない。ところでこれらの下駄には明確に使用痕跡が認められるが、古墳時代の遺跡における下駄の出土はその遺跡の性格を知る一つの手がかりとなり得る。

**紡織具（18、20～23）** まず、紡錘車状木製品について述べることにするが、この木製品を紡錘車と断定するにはまだ多くの問題を残している。例えは重量の問題であるが、この紡錘車状木製品（重量6g）は石製あるいは土製の紡錘車と比較してかなり軽い。しかし木製のものであっても軸の迴転にハザミを与えることが出来る可能性が考えられ、他にいくつかの条件がそ

らうことによって使用に耐えうるものであったかもしれない。もっとも模造品の可能性もあり得る。チキリ状木製品は4個体出土しているが、それぞれに特徴を持っており、材質も一定していないようである。

**田舟状木製品 (26~27)** 田舟状木製品は破損しているものも含むと数個体出土している。ほとんどは外見上の観察ではあるが杉のようである。ところが最も大きい田舟状木製品(挿図3)のみはそれらとは材質を異にしているようである。ところで、これらを「田舟」と呼ぶにはまだ問題が残るが、運搬用具の一種と考えられる。また、本遺跡の場合、その大きさにおいて相違をみせているが、これは用途的には問題であろう。



挿図3 青灰色細沙掘出上田舟状木製品実測図

**有孔木製品 (60~62)** 60~62は基本的に類似形態を有するものであるが、62は他の二個体とはその表現が若干異なっているように思われる。ただこれら三個体に共通なのは一端に円孔の部分を有することである。つまり同じような箇所を破損していると思われる。尚この他にも有孔木製品は出土している。

**把手付板材 (81~84)** 81~83は類似形態をもつものである。84については81~83と類似形態をもつものを加工した可能性が考えられる。81~83については孔を有するものとそうでないものとに分れる。外見上の観察であるが材質は一定のようである。以上簡単に述べてきたがこの他に建築材、組材、板材などがかなり多数出土している。ところで建築用材の場合、全面あるいは部分的に焼けた痕跡が認められるものが数点存在する。

#### 工具について

今回の調査では、工具類の出土は認められないが、出土木製品には大多数製作にかかる工具痕が確認された。その工具痕から手斧・刀子(あるいはヤリカンナと思われるものも一例ある)といった工具の存在が理解された。それらを細かく観察すると、手斧の場合削り幅から4cm~4.5cm以上の刃幅をもつものによって加工され、刀子は数種類を使用していることがうかがえる。つまり本遺跡出土木製品の大多数はそのカット面から鉄製の刀を持つ手斧と数種類の刀子によって加工されたものと考えられる。

### 材質について

本遺跡出土木製品の材質鑑定は、専門外の人間による肉眼観察であることをおことわりしておく。出土木製品のうち広葉樹系に属するものは極くわずかであり、大多数は針葉樹系に属するものであろう。おそらく50%ないしは60%は杉と推定される。2~5の刀剣類も杉の可能性が強い。また農耕具はカシの可能性が考えられる。杉の占める割合がかなり大きいことは極めて重要な問題であろう。

遺跡周辺の植生を知ることは極めて重要なことであり、木製品を理解する上において必要不可欠である。その意味においては自然木も価値を有するものであろう。

以上簡単にとりまとめて述べてきたが、最後に整理しておきたいと思う。

一、本遺跡出土木製品のうち磨滅度が認められないものが少なからず存在する。

二、今回の調査では工具痕は認められても工具類が出土していない。

三、木製の刀剣類が出土している。

四、下駄が数点出土している。（使用痕有）

五、未製品と思われるものが出土していない。

六、木製品製作過程において生ずる削りカス（木クズ）が出土していない。

以上六点から出土木製品に視点を限定するなら、本遺跡の隣接地にある程度の政治的権力を有する集団の存在が考えられる。本遺跡はそのような集団と深いかかわりあいをなしていたものであろう。

（正富博行）

### 注

- ① 常なる使用になるものではなかったと理解される。
- ② 亂崎直氏によると、弥生時代より古墳時代になれば鉛より銅の出土率が高くなる現象が認められる。
- ③ 静岡県伊場・愛媛県福音寺遺跡等

## 第7章 和泉に於ける「伝統的第V様式」に関する覚え書

—— 豊中遺跡出土遺物の整理をして ——

### I はじめに

ここ数次にわたる豊中遺跡の発掘調査に於て、弥生時代末～古墳時代前期に位置付けられる諸遺構の検出と相まって多数の土器群が出土し、個々についての簡単な観察事項は別に載せた。これら土器群は、単に弥生式～土師式土器の移行過程を明示するのみならず、まさに「古墳出現前夜」というすぐれて重要な歴史的位置にある由に近年とりわけ研究者の注目を受けるところである。この和泉地方でもこれ迄多数の資料蓄積をみ、和泉市池上遺跡や多数の周辺遺跡群の調査により、それらが初期農耕集落としてこの地の拠点的役割を果してきた池上弥生時代集落が強い对外的諸関係動向の中で中期後半（第Ⅴ様式）のある時点を境に変質し多数の小集落群への分解を指向するという歴史過程の中に位置付けられることが理解されるに至った。筆者は遺物整理の立場から得られた知見をこれ迄にもとりまとめたが、今回更に豊中遺跡出土遺物を整理する機会を得て、ここに從来の認識を踏えつつそれらの持つ歴史的意義を考えてみたい。とりわけそれらが既に認識論的に設定した「伝統的第V様式」土器群の具体的実態を示すものとして注目することになる。また鹿中遺跡でも出土をみたが和泉地方の製壺土器についても若干紹介しておく。なお本論は、和泉市上町遺跡出土土器群の整理過程でまとめた拙稿「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について——認識論的作業仮説として——」「上町遺跡発掘調査概要」1975年に後続し、かつ重複する部分も多いが参照していただければ幸である。

### II 認識の整理

これ迄和泉地方の弥生時代後期（第Ⅳ様式）～古墳時代前期（布留式）に至る土器群を梗概していくつかの知見を得ている。即ちこの過渡期に実在するのは「伝統的第V様式」・「庄内式」土器群に加えて、なおまだ整理概念としての「裝飾性の強い」・「外来系」・「布留式傾向」土器群等が存在する。後者の土器群の実態は現時点迄には十分把握してはいない。

それら土器群は時間差により組み合わせ構成に変化をみせ、第V様式——過渡期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ——布留式と区分し得ることが理解されることとなった。

これには次の補足が必要となる。「第V様式」と「布留式」の「過渡期」とは、都出比呂志1974年の「第Ⅴ様式」にはば該当する。また「布留式」とは坪井清足1965年の指摘する「小若江

北式」を該当させるが、広義の「布留式」に於て「小若江北式」はやや後出する位置を占めており、より先行する土器群の存在が考慮される。和泉地方では七ノ坪遺跡が「小若江北式」より先行する一括遺物を出土し、この地方の様式となる。都出氏は河内地方の編年で「上田町Ⅰ式」直後に「小若江北式」を位置付けるが、この時点では既に小型三種土器そのものの形態がややくずれており、七ノ坪遺跡のより典型的土器は先行することになる。「外来系」土器群としては「庄内式」壺・「酒津式」壺・「S字状口縁」壺等が知られるが、なお不確定の土器群が多い。「装飾性の強い」土器も不確定である。「外来系」土器群に対して、論理的には「在地系」土器群が存在する。これ迄の調査成果から、和泉地方には「第Ⅳ様式」以後もその製作技術が基本的に踏襲されるとする立場をとり、「伝統的第Ⅳ様式」を設定し、「在地系」土器群を表象する。もし他地方でも同様に「第Ⅳ様式」の踏襲が検証されれば、各地の「伝統的第Ⅳ様式」を認め得ることになる。私見では「庄内式」壺といふ極めて先進的土器製作を実施する(諸)集団を除き、大多数はなお「伝統的第Ⅳ様式」土器群を継続・製作していたと理解する。その後「布留式」の伝播はかなりの全国的規模を持ち、この時点で各地の上器製作をめぐる諸状況が大きく変換することになる。「布留式」出現の実状はまだ十分に理解しないが、ついてはいくつかの示唆的状況が観察される。即ち、各地の「伝統的第Ⅳ様式」と河内の「庄内式」壺は技術体系を別個にする諸集団により製作されており、河内の「庄内式」壺と「布留式傾向」壺は製作技術や形態が近似するにもかかわらず、胎土や色調が全く異なる。かつ「庄内式」壺は「布留式」直前に於てその製作・供給が衰退し、土器そのものも退化する。由に「布留式」壺の出現が、河内の「庄内式」壺生産集団とは別個集団とのかかわりをもったことが推定され、その同定については「伝統的第Ⅳ様式」及び「庄内式」に平行する「布留式」以前の「布留式傾向」壺の製作集団所在地が問題となる。従来知られている諸集団には「布留式傾向」壺の製作は検証されていない。しかし河内の「庄内式」壺生産集団との技術的近密性や壺の丸底化・刷毛調整の先行から人和地方の特定集団が考慮されるかも知れない。

「製塙土器」あるいは「土器製塙」に関する認識はこの地方では不十分であり、我々も岸和田市上生遺跡出土遺物の整理を踏み台として、ようやく製塙土器の識別を始めたばかりである。ここでは代表的な製塙土器を紹介し、それにかかる知見を簡単に述べておきたい。

### III 「庄内式」の意義と実態

和泉市池上遺跡出土土器を概観した佐原真・井藤謙1970年は「池上遺跡の終末」に関して次のように述べた。「第Ⅳ様式土器は多くない。しかし壺・長頸壺・細頸壺・鉢・器台・壺など一通りの器種をみる。長頸壺には、記号、絵画をつけたものがある。なお、第Ⅳ様式における他の地

域からの搬入品としては河内の土器として西ノ辻Ⅰ式がある。つぎの庄内式の甕も数箇体あるがいずれも河内からもたらされた土器である。同時期の和泉自体の土器をつかむことが急務である。」。そこでは和泉地方に於ける弥生式～土師式土器の移行過程を究明する出発点として、一つの示唆的な作業課題を提示した。とりわけ河内窯「庄内式」甕に対して、まだ実態が不明だった在地系土器群を想定し区別して究明しようとする方向性は当然かつ重要でありながら、各地域に於ける諸研究に必らずしも十分理解されているとは言えない。

そもそも弥生時代後期の「畿内第Ⅳ様式」に後続し、古墳時代前期の「布留式」に先行する土器群を「庄内式」として論理的に位置付けたのは田中彌1965年である。氏はその様式たる甕が「第Ⅳ様式」と「布留式」の両者にかかる技術をもって製作されていることに注目し、それに伴出するとと思われる土器群を含めて「庄内式」土器として紹介した。そして「この庄内式は、現在のところ、須津・河内・山城には確実に存在し、和泉にもおよんでいるらしい。」と記述し、その時点での和泉地方にも出土することをほぼ推定している。また「和泉にもおよんでいるらしい。」という文章ニュアンスからすれば、和泉地方に「庄内式」土器群が搬入され、時間的に並存する在地系土器群の存在を前駆としているともとれる。しかしこの時点には甕の胎土が暗褐色の色調を呈することが多いとしながらも、なおまだそうした問題を十分に意識しなかったとするのが妥当であろう。

それに先立って原口正三他1962年は、船橋遺跡を調査し、K地区Ⅰ層でのこの種甕がⅢ地区Ⅰ層での第Ⅳ様式風土器群に後出すると理解したが層位的資料としては必らずしも良好でないとされた。そして上田町遺跡の調査をむかえる。1968年同氏は同遺跡をⅠ～Ⅲ層に区別して発掘し、その第Ⅰ層にまさしく「庄内式」甕（上田町Ⅲ層甕B）が包含され、第Ⅳ様式風甕と共に存し、かつ下位の第Ⅱ層にはまだ出現していないことを確認した。更にその胎土が田中彌氏が観察したと同じく暗褐色ないし黒褐色を呈することに注目し、これが「器壁を内面から薄く削る技法に伴なった焼成技法であろう。」と述べ、器種・製作技法・胎土の色調（焼成技法）の関連と共に更には煮沸用器としての機能に至る迄の一連の関連を指摘した。この種の胎土は金・黒蜜母粒を含み地質的には河内地方の堆積土壤に関連するものとされ、今日では中河内南部～南河内北部のより限定された地域に関連することが理解されている。

こうしたことを前提とすれば、極めて重要な問題が提起されることになる。「庄内式」甕が黒褐色系の色調と蜜母粒を含み河内地方のより限定された地域の胎土を持っているとすれば、それと伴出する他の土器群はいかなることになるのだろうか。和泉地方での觀察結果による限り、「庄内式」甕を除いてはこうした胎土を持つ土器はほとんどない。この状況は単に和泉地方にと

とまらず、他地方等でも同様である。搬入地たる地域では当然のことながら、河内地方に於てすら「庄内式」壺のみが他と区別された特殊な胎土が用いられる現象は注目されよう。同一地域で製作された土器群中「庄内式」壺のみに特殊化された胎土が使用されたのか、あるいは壺のみが他の土器群とは異なった特定の地域で製作されたのか、論議が分れよう。田中琢氏が、尖底気味の丸底・内面笠削り技法・細かい叩き目・刷毛目調整等に特徴付けられる壺をもって「庄内式」を規定付けたにもかかわらず、氏が一括紹介した他の土器群がいかにその標式的壺と関連するのかは十分検討されてはいなかった。胎土のみならず形態や製作技術からも両者の共通性はほとんど検証されないので現状である。例え伴出しても型式学的に考える限り両者は明確に分離されるのが正当と考えられる。

それでは型式学的に「庄内式」土器が厳密には特定の壺のみに該当するとすれば、それ以外の土器群はいかなる呼称がなされ得るのか。いわゆる「庄内式」壺に顕著な内面笠削りや底部の尖底に近い丸底化・細かい叩き目や刷毛目調整といった諸技術は、同時代の畿内各地方ではほとんど確立をみないまま「布留式」の時代を迎えることになる。即ち「庄内式」壺にみられる先進的な土器製作の技術はある限定された特定集団のみの所有であり、他地域の諸集団はその土器を大量に搬入しつつも全くその製作技術をとりいれることはなかった。その壺が使用されている時代という意味で「庄内式」を用いることは可能だが、各地の実態を重視する立場をとればあくまで特定集団の作り出すその壺のみに該当さすのが妥当であろう。こうした状況は、各地で第Ⅳ様式風の伝統をそのまま受け継いだ多くの土器群と明確な河内地方からの搬入品たる「庄内式」壺と共に存出することにより検証される。そこで第Ⅳ様式以後「庄内式」を特徴付ける新技術が出現する時点をほぼ境にし、それ以前の土器群を「第Ⅳ様式」、それ以後継続して第Ⅳ様式の伝統をほぼ受け継いで製作され続けるものを「伝統的第Ⅳ様式」と呼んで区別する。もちろんすべての土器を無制限に総称するのではなく、この時期には他地方の各種土器群の搬入も考慮されるが、これ等を「伝統的第Ⅳ様式」の土器群に含み込む意図はない。

さて田中琢氏は「庄内式」提唱の時点で「古墳時代の土器が土師器であり、壺の内面へらけずりに代表される技法が畿内の土師器に固有のものならば、現在さかのぼり得る最古の土師器である。」とした。やはりこの場合でもそうした技術による壺のみを限定して「土師器」とするのか、あるいは伴出する土器群全体を「土師器」とするのかが不明確である。筆者はこの「庄内式」壺が畿内諸集団に対して搬入・供給されるべくかなり規格性を持っていること、河内中～南部のより限定された地域に於てある特定の(諸)集団により製作された可能性が考慮されること、煮沸用といふ限定された機能を持たせた一つの器種のみが大量に製作されていること、供給・搬入を受けた消費集団が壺の付着状況の同一性からみてある一定の使用法が限定された可能性が強

いこと、等から「庄内式」壺に「統率化された土器製作の専業集団が製作した土器」との可能性を認め、こうした意味から最古の「土師器」に該当させる。古墳出現前夜の集団関係を論じた都山比呂志1974年は、「これを古墳出現時の土器と認めない立場に立ち、土師器と呼ばないで弥生式土器に含ませようとなれば、畿内第Ⅰ様式との連続面と共に、内面窓削り技法の西からの伝播が加わっている点も考慮して、これに畿内第Ⅱ様式の呼称を与えては如何であろうか。」と提唱した。しかし和泉の地ではあくまでこの時代に「庄内式」壺を製作しているのではなく、これを搬入しつつも前代からほぼ継続して「伝統的第Ⅰ様式」土器群を製作している事実があり、こうした意味から同時代の土器でも先進的な庄内式壺を「土師器」とし、「伝統的第Ⅰ様式」土器群を「弥生式土器」と区別するのも極めて妥当性があると考える。

なお「庄内式」壺の器表面を観察すれば、かなり厚味をもって煤が付着していることが通例である。より古い、「第Ⅰ様式」や「伝統的第Ⅰ様式」の煮沸用壺表面が日々に複雑なバラエティーを持つことは対照的である。「庄内式」壺の濃い煤は、酸素供給が不十分な方法での使用が想定され、中世の羽釜類の器表面の煤付着状況程はいかないにしてもかなり近い様相をみせており、あるいは「カマド」状施設の利用も推定される。

ところで豊中遺跡「河川」状遺構出土の「庄内式」壺は当然のことながらその基本的特徴に於ては一般的なものと共通するが、細部については若干の特色が観察される。法蓋や器形について問題ないが胎土中には全般的に雲母粒がより細かいものが多く、観察が困難なこともある。また色調が黒褐色や暗褐色のものもあるが、かなり灰色味が強くなっている。更に形態的なことでは、口縁端部が明確に上方へつまみ上げられているもの他に、方形や丸味を持ってそのままおさまる例が多くみられる。「上六万寺～北島池式では口縁部外面のヨコナデが強調されて二段に外反する口縁形態となる。そして、この種の口縁は北島池以後、退化しながらも上田町Ⅲ式の丸底で内面窓削りを行なう壺にまで存続する。」芦木隆裕・稻山数士1975年という河内地方の口縁端部の流れからみれば、端部が上方へつまみ上げを特徴とする通例の「庄内式」壺より更に退化した様相と言える。これは豊中遺跡内に於いて第1次調査でのやや先行するAV-3土器群中には13個体以上の「庄内式」壺が出土したが、いずれも黒褐色を呈し口縁端部が上方へ明確に突出したし、C地区の最も新相の庄内式壺が丸くおさまる口縁端部を持つことからもいえる。細部の特徴を問題とするには理由がある。時代的には「庄内式」壺の次に来るべきは「布留式」壺だがやや内窓気味にのびる口縁部と内側に肥厚する端部をもってその基本的特徴の一つとされ、両者に細部ながら相反する流れをみせている。加えて、形態・製作技術・胎土といった基本的特徴についても「庄内式」壺と「布留式」壺とは、内面窓削り技法を除いて共通しないことは、両

者の相対的関係の実態を明白に示している。田中塙氏が「庄内式」壺を「布留式」壺の時間的先行土器として位置付けたのは適確な作業だが、両者の直接的な相対関係を必ずしも明確にしていたとは言えない。なおまだ現在に至っても「布留式」土器群の成立経過は明らかではないが、各地の「伝統的第V様式」や河内の「庄内式」以外の「布留式傾向」壺を既に生産している集団の存在が考慮される。「庄内式」壺の粗雲母粒を含み黒褐色を呈する胎土から、極細雲母粒を含み灰色味の強くなる胎土への大まかな変化についてはいくつかのことが考えられよう。従来の研究から衆知されるように河内地方中～南部の平野部の沖積土壌中には通常極めて粗い雲母粒が包含され、そうした胎土や色調の変化は使用粘土の変化や製作地の変化と理解することも可能である。製作地の変化を認めない限り現時点の認識では「庄内式」壺に用いられる胎土がやはり煮沸用としての機能に資する目的で人為的に配合されたと考えている。この場合より粗い雲母粒を含む堆積土壌から、より細かい丘陵地土壌への配分移行が考えられる。

最近の各地の遺跡でもこの「庄内式」壺の実態が明確にされつつある。今後の課題としてその生産地の実態究明が必然となる。「庄内式」壺に関する限り消費地での壺はすべて使用痕跡たる煤が付着しており、これに対しおそらく生産地では当然のことながら煤が付着していない可能性が極めて強い。かつ器壁3mm程度という高度の技術による製作過程では、その中途時点で破損・放棄された未使用の「庄内式」壺片が非常に多いと考えられる。こうした諸資料の発見される遺跡がまさしく「庄内式」壺の製作地でもあり、今後それらの資料発見を課題とし河内中～南部のより台地上の踏査を実施して行きたいと考えている。

#### IV 「伝統的第V様式」土器群について

和泉地方に於て「伝統的第V様式」土器群を一括出土した代表的遺跡・遺構として、池上遺跡（I・K・C・II・B-10地点 土器窯遺構他）、上町遺跡（「井戸」状遺構）、豊中遺跡（「河川」状遺構他）をはじめとして極めて多数にのぼる。この他池上遺跡やその周辺に群在する森・七ノ坪・古池北・古池・要池・上池・府中・大園・伯太・伯太北といった諸遺跡でも「伝統的第V様式」あるいはそれに後続する土器群の出土をみているが、現時点ではいずれも発掘もしくは整理中であり、将来より一層これらの実態が明確にされよう。対してこの地に於ける様式的な「第V様式」土器群を一括出土した遺跡・遺構としては、池上遺跡（I・K・B・J地区 2号井戸及び3号井戸 他）があげられる。

#### 「過渡期」

最も先行する「過渡期I」の時点に位置付けられる池上遺跡・（I・K・C・II・B-10地点

土器窓)では、壺・高坏・壺等が確認されているが、「庄内式」壺の付属は全くない。特徴的観察しやすい壺は2個体あり、いずれも上・中・下部の接合をもって胴部を成形している。外面は叩き調整だが、上位は水平方向、中位は水平方向と左下り、下位は左下りと明確に区別される。内面は平滑にされ、箇削りは施されない。高坏は「第Ⅳ様式」を受け継いで、壺状の坏部及び屈曲して外反する口縁部の坏部を持つ二種が存在する。前者はこれ以後ほとんどみられなくなる。

### 「過渡期Ⅱ」

それ以後続する第Ⅲ段階に位置付けられる上町遺跡(「井戸」状遺構)では、壺・壺・高坏・鉢・コップ形土器・短頸壺等が確認されており、若干ながら「庄内式」壺片も加わる。また注意されることは、報作成時には識別されたなかつたが10個余の製塙土器脚台部の出土をみている。現在この地方で最も先行する製塙土器である。壺は平底で内面は箇削りを施さない。なおまだ壺・高坏・大型鉢・コップ形土器等は「第Ⅴ様式」の伝統を強くとどめているが、高坏・壺には粗雑ながら装飾性を持つものが含まれる。横描き波状文・円形浮文・凸帯・竹管文により構成されている。

今回調査された豊中遺跡(「河川」状遺構)では、壺・壺・鉢・高坏・壺・壺・小型器台・手焙形土器等により構成される多数の土器群と40個体を上まわる「庄内式」壺の出土をみた。加えて西岸に位置する住居址及び周辺地域他から20個体近くの製塙土器の出土がある。壺・高坏には極めて装飾性の強いもの、高坏には箇磨き崎文の施されたものや半球形の坏部を持つ新たなもの等が認められるも特徴である。上町遺跡出土土器群と似た器種構成をなすが「庄内式」壺が著しく多いこと、壺・壺・小型器台といったより新しい器種を含むこと、高坏に新たな技法・器形(これは搬入品と思われる)のものを含むこと、更には全体の器形から判断してより新たな様相が徐々に認められわざかに後出するものである。しかし基本的には「過渡期Ⅱ」の組み合せ構成を持ち、上町遺跡をより(古)相、豊中遺跡をより(新)相として理解することができる。やはり壺には内面箇削りは施されず以前の伝統をそのまま受け継いでいるが、口縁端部にキサミを持つものが多いのは特徴的である。壺・高坏の装飾はこの時点では確立し、ある一定のパターンと丁寧さをみせている。即ち壺は口縁部を横描き波状文と竹管文を有した円形浮文、頸部下端には指突文をつけた断面三角形の貼り付け凸帯、体部上端には横描き波状文を施す。体部は欠損し不明である。高坏は壺口縁部と脚部を横描き波状文・竹管文・円形浮文・横描直線文をもって装飾する。壺については、胎土・成形技法・調整法から判断して在地系の上層と考えられる。「庄内式」壺はいづれも河内地方からの搬入品で、「伝統的第Ⅳ様式」壺と比較してその約30%以上を占める数となる。口縁端部が丸くあるいは方形におさまる等この種の壺では(新)相を呈するも

のが多い。小型器台は小型丸底壺あるいは小型鉢と組み合わさって「小型三種」土器群として次の来るべき「布留式」を特徴付けることになるが、今回は6個体の小型器台のみ単独出土した。外からの影響をもって出現したのだろうが、それらの胎土・製作技法がこの地に一般的な土器群と共通する。粗い叩き目及び箇磨き調整が施こされている実例が含まれる。加えていずれも外面に赤色のスリップが塗られていないことが、「布留式」小型器台より先行するものであることを示している。「関東において、小型器台は前野町期・小型丸底壺は五領期にそれぞれ出現し、古墳時代の開始とともに両者は共存するようになる。しかしこれは関東だけに見られる現象だけでなく、各地に見られる現象である。」（高橋一夫 1975年）という指摘に合致しよう。

### 「過渡期Ⅲ」

豊中遺跡C地区では、やや時間巾をもって「伝統的第Ⅳ様式」土器群として、壺・壺・高壺・鉢等に加えて極めて「布留式」を呈する壺・小型丸底壺・小型鉢・壺・高壺・他が多数加わる。即ち、「過渡期Ⅲ」の組み合わせ構成をもつこの時点では「庄内式」壺の存在はほとんどなく数片にとどまる。それの口縁端部は丸くあるいは方形におさまり、小さな平坦底がとりつくという極めて新らしい様相を呈する。「伝統的第Ⅳ様式」壺は前代と連続するが、内面をはっきりした粗い刷毛目調整するものが含まれる。壺・鉢の主体となるのはやはり前代と連続装飾を持つ壺も遺存する。装飾パターンは基本的に変化ないがかなり簡略化され波状文も乱雑に描かれる。高壺は外反する口縁部の壺を持つものが少數ながら存続する。この時期の特徴はやはり多数の「布留式」土器群であり、細かい横方向の箇磨き調整される小型丸底壺・高壺・壺・小型鉢や刷毛目調整される球形体部の壺・椭円形体部の壺が多放加わる。こうした組み合わせ構成は北接する七ノ坪遺跡出土土器群と共通し、この豊中遺跡C地区がその遺跡の一部であることが理解される。この時期、即ち「過渡期Ⅲ」に追加される「布留式」土器群はいわゆる「小若江北式」土器群よりわずかに先行するものである。同様の組み合わせ土器群を出土する遺跡としては他に土生遺跡（A地区・溝状遺構）がある。前後やや時間巾をもって堆積したものだが、「伝統的第Ⅳ様式」壺・壺・高壺・製壺土器他「庄内式」壺、「布留式」壺・小型丸底壺・小型器台・小型鉢他・高壺他が認められる。

### 「布留式」

このように組み合わせ構成の変化をみせつつも、やがて「布留式」土器群が「伝統的第Ⅳ様式」土器群に代って主体をなす。この時期の標式的遺跡として古池・上池遺跡があり、その「布留式」土器群の検討については宇木隆裕氏が第6章3で実施するところである。

### 「伝統的第Ⅴ様式」

こうした「第Ⅳ様式」～「布留式」の移行過程を示す和泉地方に於て、その在地系土器群として主体をなす「伝統的第Ⅴ様式」土器群はおおむね次のような本質性を持つ。胎土は個々複雑な色調を呈しつつも、黄色味の強い色調で、砂粒を含むことが一般的である。この地方の地質は砂岩をもって主体となし、含まれる砂粒もこれに關係する。焼成は全般的に不良なものが多く、軟質である。その為器壁表面が剥落することが多い。「庄内式」壺や「S字状口縁」壺他著しく器形や製作技術の異なる各種土器群の胎土とは識別されることがある。器種は壺・壺・高杯・鉢・壺・小型器台・壺・手焙形土器・コップ形土器があるが、そのいくつかは時間的に追加されるものも含まれる。これに製塩土器・銷鹽形土器等が遺跡の性格と相まって追加されることもある。「第Ⅴ様式」を特徴付けた長頸壺・器台は全く欠落する。当然長頸壺等によくみられた記号・絵画も全く描かれることはない。基本的な製作技術は粘土紐積み上げ・分割成形・粗い叩き調整・横ナデ調整・ナデ調整・部分的刷毛調整・指圧・キザミ・箆磨き調整等が用いられ、底部は平底を原則としている。技術的には「第Ⅴ様式」のものをほぼそのまま踏襲していると言える。細かい叩き目・壺の内面箆削・刷毛調整の多用・箆磨き暗文・細かい横箆磨き・丸底・壺外面の削り他といったより新しい技術は原則として用いない。より先進的な「庄内式」壺や「布留式傾向」壺の出現が、「伝統的第Ⅴ様式」土器群の技術体系とは別個の歴史的状況で行なわれたことは極めて注目される。和泉地方ではそうした技術にかかる土器はいずれも搬入された可能性が強く、そこにある特定（諸）集団の持つ土器製作技術が単に文化的伝播をもって簡単に移動しない事実が確認されることになる。この時代に於ては既に土器製作の先進的技術はまさに特定（諸）集団の所有であり、単に文化的技術ではなくなっていたのであろう。とりわけ「庄内式」壺が強い社会的側面に裏付けられて存在していたことは明らかである。ある生産物にかかる保証的状況と先進的状況とが共存しているこの時代に於て、和泉に於ける土器製作は「第Ⅴ様式」の体系をほぼ踏襲し、まさに伝統性を遺存させつつ「伝統的第Ⅴ様式」土器群を製作し続けた事実は、和泉地方の持つ歴史的立場を明確に示唆していると言えよう。

## V 製塩土器

大阪湾の東側沿岸の和泉地方で弥生時代末～古墳時代前期の製塩土器が出土することが最近多くなった。豊中遺跡でも約20個体の出土をみた。從来より瀬戸内海沿岸諸地域や紀伊半島沿岸諸地域に於ける土器製塩の実態が究明されつつあるのに対し、両地域の中間に位置するこの地方では極めて不明で、現在ようやく同種資料の蓄積が開始されたばかりである。現時点で土器製塩に關し論述するにはまだ認識不足であり、これ迄の諸経過を簡単に整理し、代表的な製塩土器を

紹介するにとどめる。

さかのばればこの地方で製塙土器の出土をみたのは1959年の高石市羽衣砂丘遺跡がある。それは既に森浩一『製塙についての二つの覚え書』1960年や近藤義郎『吉日良遺跡』1964年に紹介されている。だが出土数も少なく近藤氏の「目良式B類」にはば該当する高い脚台等が含まれるとわかった程度である。当時の「目良式土器」の分布は大阪湾沿岸で羽衣砂丘遺跡1ヶ所に過ぎず、既に製塙遺跡の調査が集中されていた紀伊半島沿岸諸地域の著しい分布とは対照的であった。その地方での諸成果は、前記『吉日良遺跡』や、同志社大学『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学的調査報告』1968年としてまとめられた。

その後和泉地方ではいせん製塙土器の出土をみなかったが、1971年西山要一氏は泉南市双子池遺跡に於てかなりの製塙土器を採集すると共に『泉南市双子池遺跡採集の遺物——特に製塙土器について』と題してそれらを紹介した。それによると、双子池遺跡は男里川の上流 2.5km、現時点の海岸線より 1.5km の標高10~15mに位置する。遺物は双子池の周囲中の粘質黒褐色土層及びこの土層が崩壊して積った池底層より採集された。弥生時代中期以降の土器や須恵器に混って出土した6個の製塙土器脚台を紹介している。高さ 1~3cm を測る脚台は外面に指押痕を持ち、叩き目を持つものが 3 個体ある。遺存部から判断すると体部が細い筒状を呈するもの 5 個と反鉢状を呈するもの 1 個に区別される。そして「紀伊の弥生時代製塙遺跡、あるいは岬町、小島東製塙遺跡などを見ると、その立地は海浜や海に面する狭小な谷あるいは狭小な孤島の海浜である。少なくとも双子池遺跡は、このような条件を満たさないし、とうてい塙生産を行なった遺跡とは考え難い。」と述べた。とりわけ、典型的な紀伊地方の製塙遺跡との立地条件の差異に注目したことは特記される。

また同年双子池遺跡の北東 6km の泉佐野市三軒屋遺跡では攤文式土器～土師器に混って 2 個の製塙土器の出土をみた。藤田正篤氏は「弥生式土器高坏様土器脚部（タタキ文）、底面に指紋らしき痕あり、指整形か？ 弥生式土器・高坏様土器脚部、内面指で斜めらせん状に形成した痕が 10 条程ある。外面も凹凸多し、指捺痕か？ 表面はほとんど灰白色、径 1~2mm の砂粒を多く含む。」と観察した。図示された 4 は双子池遺跡のものとはほぼ同形だが、5 は高さ 6cm 弱の高い裾広きの脚台を持ち、若干異なる形態を持つ。この遺跡も現海岸線より約 3km 入り込む標高 20m 弱に立地する。

こうした諸経験を経て我々の眼前に製塙土器が出土したのは1974年の和泉市上町遺跡である。この遺跡では「井戸」状遺構中より多数の「伝統的第Ⅰ様式」土器群に混って 10 個以上出土したが、当時土器製塙に関する認識が不十分で、それらを製塙土器と識別し得なかった。『上町遺跡発掘調査概要』（1975年）では、「今回確認された高坏は 2 種である。この他脚台のみにとどま

るものも2種あり、いずれも高壙と断定されないので脚台として取り扱っておきたい。」と記述した。いずれも体部を欠損した脚台部だが、その器高が5cm以上～7cmと極めて大型であることが特徴である。それらを紹介すると次のようになる。

- (a) 高さ6cm以上、脚端径約9cmの非常に大型の脚台を持つ。3個体ある。(1)は裾広がりだが、下半で内窓気味により広がる。外面下半には粗い叩き目、内面は極めて平滑。外面に白赤色の斑点、上端は白赤色、(2)は中しばりの中実柱状部と裾広がりの脚台を持つ。やはり下半でより広がる。外面下半に粗い叩き目、内面は平滑。全体に灰黄色。いずれも粗砂粒多し。(3)は裾部が欠損する。白赤色の部分がある。
- (b) 高さ6cm、脚端径7.5cmの脚台を持つ。1個体のみ。中実の高い柱状部に曲線的に広がる裾部を持つ。内外面とも平滑。柱状部及び裾内面は白黄色、裾部外面は灰黒色を呈する。細砂含む胎土。
- (c) 高さ5cm程度、脚端径6cm～7.5cm程度を測る。7個を数え、数的には主体をなす。裾広がりの脚台だが、下半でより広がるものが多い。外面には叩き目、内面には箆押痕がみられる。(6)(?)のように上方あるいは下方より竹管状のもので押圧されたものや、(5)(6)のように体部との接合部に三方の切り込みが施こされるものがある。ほとんどが白灰色に近い色調に変化する。細粒を含む胎土。

作出する土器群は、「過渡期Ⅱ」のより前半に比定され、現在和泉地方の製塙土器では最も先行する。上町遺跡は信太山丘陵から大阪湾に向って源生する標高約17mの小丘陵上に立地し、現在の海岸線より約2kmに位置する。当時の高師浜が現在よりかなり入り込んでおり、それでも1.5kmは離れていたと考えられる。

更に同年、岸和田市土生遺跡A地区「溝」状遺構中他より100個以上の製塙土器が出土した。一部図示されたが多様な形態が混存している。この遺跡の第2阪和国道予定路線内の調査では、堅穴住居址が発掘され、製塙土器の出土はそれを含めて広範囲に及ぶ。現在岸和田市教育委員会が発掘調査中で、更に実態が光明されよう。遺跡は標高15m程度の沖積平野上に立地し、現在の海岸線より2km離れている。

今回調査の泉大津市豊中遺跡では約20個体の製塙土器が出土した。個々について既に別記した。注目されるのは堅穴住居址中及びその周辺からいくつか出土したことで、その使用地がかなり明確となった。やはりこの遺跡も標高12～18mの低位段丘下位面に立地し、海岸線より約2km離れている。

最近大阪府教育委員会による和泉市伯太遺跡の調査でも製塙土器が多数出土し、現在整理され

ている。この遺跡は標高20m近く、現在の海岸線より約2.5km離れた平地に立地する。この他最近では和泉市教育委員会による伯太北遺跡の調査でも多くの製塙土器の出土がある。標高約15m弱、海岸線より2.5km離れることは他遺跡と共通する立地条件を持つ。

さてこれ迄に把握したことを一応整理してみよう。

1. 大阪湾の東側沿岸地方で弥生時代末～古墳時代前期の製塙土器を出土した遺跡として、双子池・三軒屋・土生・伯太・伯太北・豊中・曾根・上町・羽衣砂丘他が知られている。
2. 羽衣砂丘を除き、現在の海岸線より2km程度内陸の標高10～20m程度に立地し、紀伊半島沿岸の製塙遺跡の立地とは極めて異なる。
3. 豊中・土生では堅穴住居址内及びその周辺より製塙土器が出土し、他遺跡も諸状況からその可能性が強い。製塙土器は10～数100個と比較的少ない。また脚台部が遺存するに過ぎないが、その多くに熱あるいは化学反応による胎土・色調の変化が観察できる。現時点では「炉」の検出はない。同様の状況は6世紀代に至る諸遺跡迄も認められる。

次に製塙土器の分類をする。規準は主に脚台部の形状をもって行なう。

- I類 脚台高6cm以上、脚端径約9cmを測る極めて大型の脚台。体部は不明。脚台は大きく裾広がりを呈する。外面下半に叩き目。
- II類 脚台高6cm以上、脚端径約7cmを測る極めて大型の脚台。体部は不明。高い中央柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目が施こされるもの(a)、平滑なもの(b)がある。
- III類 脚台高約5cm、脚端径約6cmを測る裾広がりの脚台。なおまだ上半に柱状部のなごりをとどめるものもある。筒状の体部がとりつく。外面に叩き目が施こされるもの(a)、平滑なもの(b)がある。
- IV類 脚台高約3cm、脚端径約6cmを測る裾広がりの脚台。外面に叩き目の施こされるもの(a)、平滑なもの(b)がある。筒状の体部がとりつく。
- V類 脚台高約2cm、脚端径約5cm弱の小型裾広がりを呈する脚台、筒状の体部がとりつく。外面に叩き目が施こされるもの(a)、平滑なもの(b)、指ナデされるもの(c)がある。
- VI類 脚台高約2cm、脚端径約5cmの小型裾広がりを呈する脚台、反鉤鉢状の体部を持つ。外

面にはかすかな指ナデ痕。

VII類 脚台高約2cm、脚端径約4cmの極めて小型裾広がりの脚台、反鉤鐘状の体部を持つ。外  
面は指ナデがなされる。

以上のI～VII類に形態分類がなされる。一応編年試表を次に作成したが、正確な型式編年はよ  
り検討して今後作成したい。（第1図）

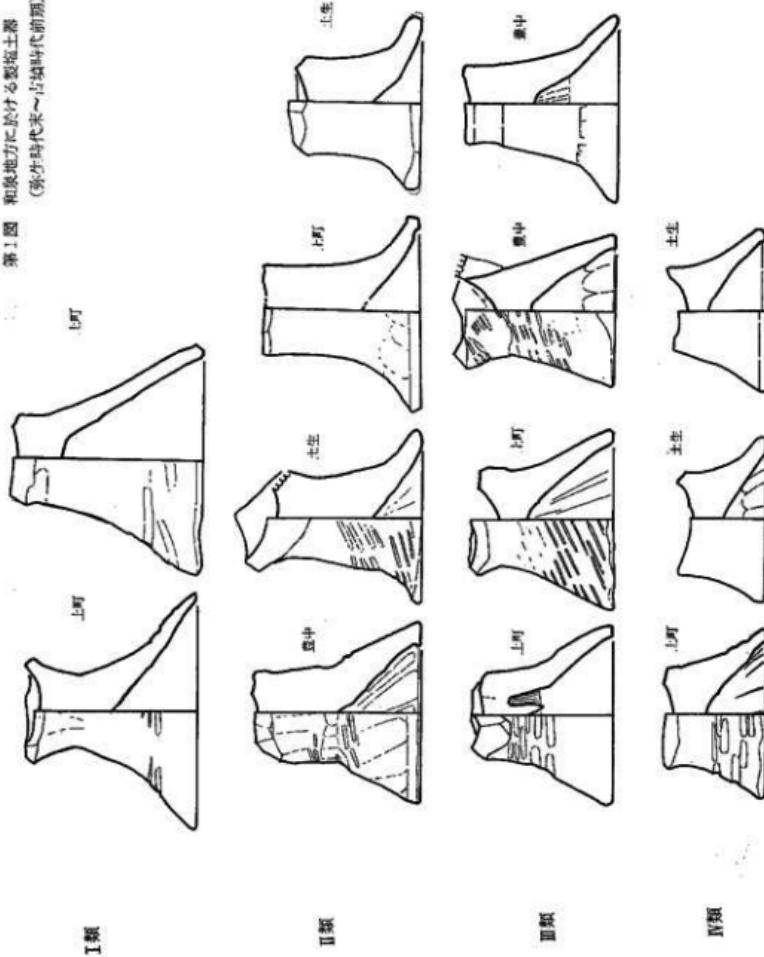
そこで紀伊半島沿岸地域の製塙土器と比較する。『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報  
告』では弥生時代～古代迄の製塙土器をA～G類の7型式に分類し、B類は弥生時代後期、C類  
が古墳時代前半期、D、E、F類が古墳時代後半期、G類が奈良時代をそれぞれ中心とするもの  
と考えた。注目されるのは、A類が唐古第II様式土器に近似することから、弥生時代中期後半に  
さかのぼる蓋然性をもつものとし、「A類の製塙土器がもし弥生中期にまで遡るものであるとす  
れば、弥生後期から古墳時代にかけて各地に出現する脚台付製塙土器が、弥生後期にまず備讃瀬  
戸において成立し、これが各地に影響を与えたとする従来の見解を改めなければならないことにな  
る。」と指摘した。先立って近藤義郎氏は、弥生時代後期後葉の製塙土器として「自良式B  
類」を設定していた。それは同志社大学のB類にはほぼ該当する。そして「弥生時代後期のある時  
点に、北は大阪湾東岸から南は紀伊半島南端から東部沿岸にかけての広い地域に、ほぼ一齊に自  
良式B類土器を使用する製塙がはじまることを示している。この時点は、備讃瀬戸地方における  
台底付簡楽式土器による製塙の開始とはほぼ相前後するものであって、現在知られている限りで  
は、この地方が西日本に於ける土器製塙の先駆的な地方の一つであることを物語っている。」と  
記述した。

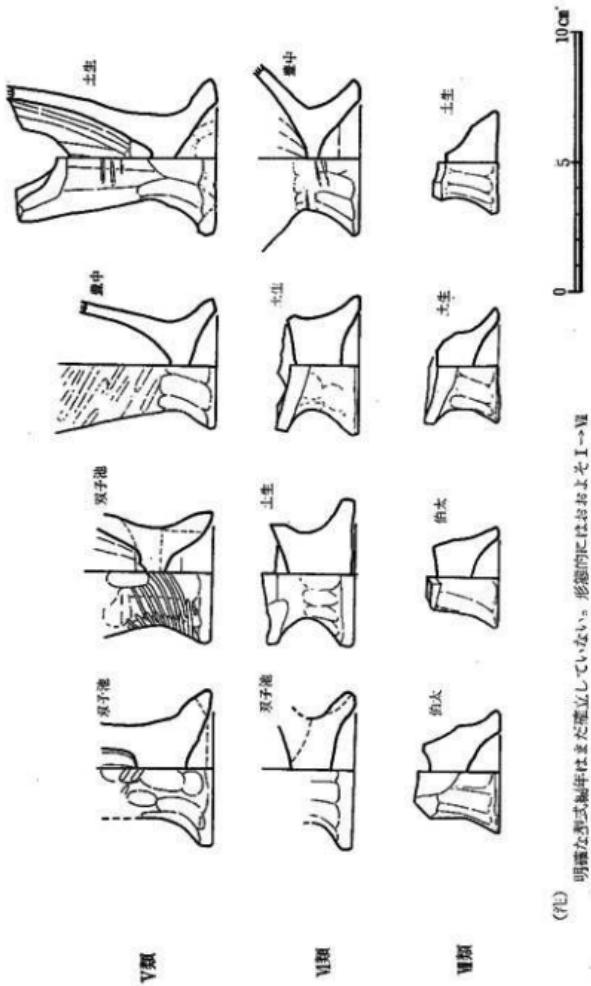
和泉地方の弥生時代末～古墳時代前期の製塙土器は一応I～VII類に分類したが紀伊半島のもの  
と次のように対照される。

和泉	I	II	III	IV	V	VI	VII	(類)
紀伊	A	B	C					(類)

その結果從来迄に紀伊地方であまり出土しない新たな和泉I及びII類の存在が知り得た。即  
ち、紀伊のA類より更に高い脚台のものと、高い柱状部と広がる裾部を持つ脚台のものである。  
体部の形状は不明。形式的には紀伊A類=和泉II類に先行することは、II類にまだ柱状部のな  
どりをとどめることからも理解される。和泉地方でI・II類が出土する遺跡として上町・土生・豊

第1圖 和泉地方に於ける製埴土器  
(第4時代末～古墳時代前葉) 試製





(注) 明確な型式輪生はまだ確立していない。形態的にはおよそ I → II 型へと移行すると思われるが、その変化が短時間に行なわれる為、複数が共存している。

所属時期としては I 種一「伝統的第V種式」 I

II 種一「伝統的第V種式」 II

VIII 種一「伝統的第V種式」 III ~ 「布留式」

を考えているが、検討を要しよう。

中遺跡がある。特にⅠ類は「過渡期Ⅱ」のより古い段階の上町遺跡のみ出土し、それ以降の諸遺跡からの出土はない。「過渡期Ⅱ」以前に出現する可能性も考慮されるが、現在では上町遺跡の時期が最もさかのぼる。Ⅱ類は「過渡期Ⅱ～Ⅲ」の土器群に混存し出土するが、上町遺跡や豊中遺跡からみて「過渡期Ⅱ」を中心と理解される。最も後出するⅣ類は「布留式」に伴出すると考える。全体として紀伊地方と和泉地方と共通に変化するがいくつかの問題点が明確となる。即ち、紀伊地方にはあまり出土しない和泉Ⅰ・Ⅱ類の存在が知られ、その所属時期が「過渡期Ⅱ」もしくはそれを若干さかのぼる可能性があり、和泉Ⅲ類は「過渡期Ⅲ」に一般的で形態的には森・白石氏による第Ⅱ様式の可能性があった紀伊A類と共通する。今後両地方の関係がより検討される必要があるが、少なくとも紀伊A類の所蔵時期が弥生時代中期後半よりむしろ、私見では「伝統的第Ⅰ様式」に伴出すると考える。より高い脚台群のⅠ類が最も先行する製塙土器として問題になろう。だが現在Ⅰ類の出土数は少なく類例発見が必要となる。

更に把握できたことを整理する。

1. 和泉地方に於ける弥生時代末～古墳時代前期の製塙土器は整理上Ⅰ～Ⅳ類に分類される。  
なおまだ十分な型式編年は確立していないが、全体としておおむねⅠ類→Ⅳ類へと変化すると考えている。単期間の為当然共存する。
2. 形態的には最も先行する高い脚台のⅠ類は「伝統的第Ⅰ様式」第Ⅱ段階の古い時点に伴出し、出現はそれより若干さかのぼる可能性がある。だが「第Ⅰ様式」に迄さかのぼる証拠はない。またⅠ・Ⅱ類とも南接する紀伊地方ではあまり出土しておらず、和泉地方に先行形態がある。後出する和泉Ⅲ類と紀伊A類以降は両地方ともほぼ共通する様相をもって変化する。

加えて瀬戸内海北岸地方の製塙土器と簡単に比較しておこう。この地方では弥生時代中期には既に土器製塙が確立しており、はるかに紀伊・和泉地方といった大阪湾沿岸諸地域より先行する。藤田憲司、柳瀬昭彦1974年によれば、この地方の製塙土器はA～Eタイプに分類され、Aタイプは中期末に相当する。基本的には外開きの脚台に深い体部がとりつく形態で、器形変化は一貫した流れとして理解される。体部外面の範削り調整もこの地方の特徴である。和泉Ⅲ類以後はかなり近似した形態を呈するとは言え、製作技法もかなり異なり、両者の直接的関係はなおまだ不明である。とりわけ和泉Ⅰ・Ⅱ類に該当する器形は全く瀬戸内海北岸地域には出土せず、製塙土器にみる限り両地域の土器製塙にはかなりの隔たりが存在する。両地域の相対関係については更

に検討を要しょう。

以上のような諸状況を踏んで和泉地方の土器製塩の実態を概括しておこう。この地方で土器製塩が開始されたのは、現在の知見による限り「第Ⅰ様式」以降の「伝統的第Ⅱ様式」に入ってからである。製塩土器の形態はその出現期に於て瀬戸内海沿岸地域のものとは異なり、この地方の独自性が考慮される。また南接する紀伊地方の土器製塩よりは時期的にわずかに先行する。紀伊地方に出現するのは和泉Ⅲ類の時点で、それ以後両者は継続並行することになる。和泉地方では製塩土器の出土は現在の海岸線より2km～3km、標高10～20mに立地する遺跡に多く認められ、その数も數10～數100個と比較的少ない。可能性として住居址中及びその近辺に使用地が考えられる。これは海岸線に直面して立地する紀伊地方の製塩遺跡とは立地タイプを基本的に異なる。諸状況から判断して、現時点では生産—消費の視点から整理上一応次のA～C型に区分して理解しておきたい。

#### A型 海岸に直面するという製塩

にとっては積極的立地条件を持ち、製塩土器の出土数は無数とも言える多数に及ぶ。おそらく明確な製塩炉を持ち、可能性として生産・供給を実施すると考えられる。

第2図 和泉地方に於ける製塩土器出土主要遺跡



B型 海岸より数km内陸という製塩にとってはやや消極的立地条件を持ち、製塩土器の出土数が數10～數100個と比較的少ない。製塩土器がおそらく一般的集落内の住居内あるいは近辺での使用が考慮される。直接に製塩、二次加工あるいは塩の消費にかかるものかは不確定。私見では二次加工に関するのではないかと推定するが現時点では論拠は少ない。集落内消費が考えられる。

C型 海岸より数10km内陸という製塩にとっては全く否定的立地条件を持ち、製塩土器の出土

が全くないか極く少數にとどまる。内陸で出土する製塙土器は製塙遺跡より何等かの理由で搬入されたと考えられ、当然塙は生産地よりの搬入され消費される。

以上のように近畿地方の製塙土器出土遺跡の性格をおおよその目安をつけて一応整理し、各地の先駆的作業に依拠しつつも、今後とも検討してゆきたい。

## VII まとめにかえて

これ迄「庄内式」「伝統的第Ⅳ様式」土器群及び製塙土器に関する認識を述べてきた。短時間内の記述の為十分窓を得なかつたが、簡単に整理することによりまとめにかえる。

かゝって田中琢氏により「庄内式」と規定された土器は、私見ではその様式となる窓のみに該当し、型式的には他の土器群とは異なる。胎土及び製作技術の諸点からその窓は河内地方中～南部のより限定された土器製作集団にかかる可窓性を持ち、より山麓部に近い丘陵地域の集団と予想している。そして单一器種の大量供給を目的とした生産が行なわれ、畿内を若干越えた供給範囲を有し、かつこの製作にかかる先進的技術は集団の持つ専有技術であり、基本的には他集団、例え近接集団であっても、に伝授されることはない。この時代に於ける土器製作の技術はもはや文化的段階でなく、社会的段階に達していたのである。他集団は原則としておおむね「第Ⅳ様式」を踏襲し「伝統的第Ⅳ様式」土器群を作成していた。いわゆる「在地系土器」で地域内生産・消費が原則的には行なわれる。今回調査された豊中集団は、基本的には「伝統的第Ⅳ様式」土器群を持ち、「庄内式」窓の大量供給を受け、両者を消費していた和泉の一集団である。「布留式」への移行過程は本稿ではあまり触れなかつたが、論理的には各地の「伝統的第Ⅳ様式」及び河内の「庄内式」がそのまま「布留式」へ直続しないことが明確となる。

從来実態が不明であった和泉地方の土器製塙は我々もようやく資料集収が開始することになった。現時点ではこの時代の製塙土器をⅠ～Ⅶ類に分類し、Ⅰ類が「伝統的第Ⅳ様式」第Ⅲ段階に属すると共に紀伊A類は和泉Ⅲ類に該当し、わずかながら先行形態をこの和泉地方に認めた。そして整理作業上紀伊の土器製塙を「生産・供給型」、和泉の土器製塙を「生産・消費型」と推定した。結果として紀伊の土器製塙諸集団と河内の「庄内式」窓生産（諸）集団とは基本的に共通する社会的側面を持つことを理解し、まさに和泉以外の地域には「政治性」への胎動が具体化していたのである。

最後に弥生時代～古墳時代に至る過渡期の史的位置を明確にすべく、それに先立つ周辺の遺跡群動向を概観し、諸認識を重視させておきたい。

豊中遺跡は大阪湾東側沿岸に位置し、この地の拠点的集落として存在した池上弥生時代集落の西南200mに接する由に池上遺跡の動向が前提となる。第Ⅰ様式（新）段階に出現の池上遺跡は、当初よりおそらく環濠としての大溝や方形周溝墓等弥生集落の基本形態を完備し、この時点で環濠の範囲・住居域・墓域他諸機能域が設定され以後数百年間はほぼ踏襲される。集団の労働力と共同性は、大溝掘開やたぶん水田開拓・諸機能域設定の諸作業に発揮され、日常生活でも諸廃棄物を住居域と一定距離の窪地に投棄する等規則性を認めた。対外的には隣接の河内・紀伊地方と諸関係を持ち両地方の土器・石材等を搬入されるが、石材の多様性から交換体系の確立は不十分であると考えられる。前期の遺跡としては和泉地方沿岸部に四ツ池・池浦・春木八幡山他的遺跡が知られ、狭小な平野部入口に位置する四ツ池遺跡も同様に拠点的集落としての役割を果すことになる。

中期初頭以降には近畿中央部に広範囲な生産物交換体系が確立し、生産物移動が顕著となる。池上では更に外側へ新たな大溝が掘開される。当然共同労働の結果だが、矛盾現象も表面化する。即ち有時的大量労働力と共同性で掘開の大溝中には、無数の廃棄物が投棄され、大溝埋没を著じるしく早める結果となる。つまり日常生活の潜在的非共同性が、生活集団全体の持つ有時的共同性と対抗し始める。しかし継続して労働力結集はなされ埋没大溝の再掘開を幾度か繰り返す。中期中頃には大溝が更に外側へ掘開され、おそらく瀧淵用水路の機能を持つべく集落外よりの水路と結合し、前代の大溝が全く滞水していたこととは異なる。また住居個々の自立性と相まって、近接して貯蔵穴・廃棄物処理穴も設けられる。対外的には確立した交換体系に裏付けられることにより、各拠点的集落は生産・消費型の経済体系を持つ。集団内部に於ては前期以来複数の小墓群に加え、中期後半には集落南側に複数の大型方形周溝墓群が新たに出現し、ここに明確な下位単位群の確立が表面化することになる。更に前期以来十数回に及んだ大溝再掘開は中止されることにより、集団全体の共同性の視覚的象徴たる環濠が消滅する。第Ⅱ様式の墓群が大溝埋没後に重複することから、その消滅時期が第Ⅱ様式前半期頃には確實に生じていたことが理解されよう。こうした現象とほぼ時を相前後して周辺平野部の各地域に新たな遺跡（集落）の出現が急激となる。既に中期前半に先行していた伯太遺跡や大園・森・穴師・伯太北・七ノ坪・要池をはじめとした諸遺跡がこの時期に存在し、おおよそ視覚的には池上集落を核としたドーナツ現象を呈する。その出現背景は理解しないが、当然池上集団内部にみる下位単位群の確立及び環濠の消滅等がそうした状況の前提となるべき現象と思われる。この時代に於ても近畿地方中央部では確立した交換体系に裏付けられ、各地域集団間を各種土器類や石器素材をはじめとした各種生産物の移動事実が観察されると共に、各地域の拠点的集落を核とした生産・消費体系をもって地域社会を構成していた。だが第Ⅱ様式の多数の諸遺跡は何故か単期間をもってその存続を一時中止

する。対して後背丘陵上にはいわゆる高地性集落たる惣の池・觀音寺山・上松中尾といった諸集落が急速出現し、和泉地方で活発な遺跡群動向を展開することになる。この地方に於ける高地性集落の出現は第Ⅳ様式末～第Ⅴ様式前半という極めて限定された時間に実施され、第Ⅳ様式での平地遺跡の減少と相まっていることが特徴である。その時点では交換体系そのものの破壊は決定的なものではなく、平地集落でも高地性集落でも各地の石器用石材や西ノ辻・式土器等の移動も行なわれている。高地性集落の中でもとりわけ大規模な觀音寺山遺跡は103軒の住居址と二重の環濠がみられ、集落形態としては中期池上遺跡とほぼ共通する。かつ数群の住居址群は明確な複数下位単位の存在を示し、池上遺跡との関連性をより検討される必要を考えている。第Ⅴ様式の池上遺跡は、住居址・井戸・方形周溝墓他をもって大規模に集落構成されており、生活領域が前代のをほぼ踏襲されるに加えて、方形周溝墓は前期以来の墓域に追加され、中期後半に出現した二群の大型方形周溝墓群のいずれにも全く追加されることはない。この注目すべき状況は中期大型方形周溝墓群を造営した階層諸成員の欠落とみられ、周囲に出現した中期後半諸遺跡との関係が注意されると共に、後続する高地性集落群との関係が更に注目されることになる。和泉平野を概観すれば、現在明確な第Ⅵ様式の遺跡としては池上・七ノ坪・要池・伯太遺跡等が知られているが、池上遺跡を除いてはいずれも集落址としての遺構は確認されてはいない。現時点で言えることは、第Ⅴ様式の平地遺跡が第Ⅳ様式及び伝統的第Ⅳ様式の遺跡数と比較して著しく少ないことは指摘されよう。可能性としては池上集落への回帰もしくは高地性集落への移動が当然考えられる：極端に図式的に整理すれば、池上（平地）――惣の池・觀音寺山・上松中尾（丘陵上）が対比されることになり、第Ⅴ様式に於ける和泉地方平野部での大規模集落としてはまさに池上遺跡のみという異常な状況を呈すことになる。また觀音寺山遺跡がなおまだ中期的集落形態を持つに対し、池上遺跡は既に環濠を持たないに加えて、方形周溝墓は中期の複葬から後期は單葬へと移行し、群構成する井戸は各群毎に独自の小祭祀を持つ傾向を示すという個人や小集団の分化が顕著になる状況をみせている。この時代に於ては土器にみる限り、西ノ辻・式以降～庄内式に至る間しばらく他地方のものが搬入されることは極めて少なくなり、確立した交換体系により供給されてきた石器用石材による石器製作も中止される。そして全く供給体制を異にする鉄製品にすべて変換する。おそらく從来の近畿地方中央部の中期大社会を越えた地域との強い関係をもって鉄製品あるいは鉄素材が搬入されることになったのだろうが、從来の土器移動の中止と遠隔集団との強固な結び付き及び異常な集落配置と立地といった諸状況は、極めて政治的色彩を帯びた感を呈する。

こうした諸状況を経て、今回視点をあてた「伝統的第Ⅴ様式」の時代を迎える。既に高地性集落は放棄され、着じるしい数の小集落が平地上に設定されることになるが、もはやこの時代には

かっての池上集落という拠点的様相を持つ大規模集落は分解しており、極めて広範囲に立地条件に応じて点存あるいは列存する小集落群として視覚的には拡散的に分布するという状況を示す。今回とりあげた豊中遺跡もまさにそれらの中の一つである。この時代に於ては幾度か述べたように河内あるいは紀伊地方では生産・供給型の諸集団の出現をみ、既に政治的社會への移行が具体化かつ表面化しつつある。おそらく相前後して出現する大規模な前期古墳を有する畿内中央部の諸勢力とのかかわり合いをもつてゐることは当然考えられよう。しかしながら等質的様相を呈する多数の小集落が群存する和泉地方に於ては、なおまだ明確な生産・供給型諸集団の存在を確認しておらず、可能性として生産・消費型の傾向をとどめていると言えよう。この時代に於ても和泉地方ではなおまだ現象的に明確な政治的動向を検証することは現時点では困難である。激しい政治的社會への時代的接近という歴史の流れの中で、伝統的な地域社會性を強く遺存させつつ、この地で明確に政治關係が具体化かつ表面化する四世紀後半へと時代が進むことになる。

#### (付記)

本稿作成については、和泉地方に於て発掘調査に從事される多数諸氏をはじめとして西山要一氏には有益な御教示・資料提供を、更に土器製塙に関しては近藤義郎氏に多くの御教示を受けた。文末ながら記して感謝いたします。

(酒井龍一)

#### 引用及び参考文献

- 安達厚三・木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学報誌』第60号第2巻  
石神怡 1975 「大園遺跡発掘調査概要」Ⅱ  
石部正志 1970 「鶴山地区信太山遺跡（その2）調査概報」  
1975 「古墳文化論——群集小古墳の展開を中心に」『日本史を学ぶ』I 原始・古代  
石野博信 1972 「奈良県經向遺跡の調査」『古代学研究』第65号  
牛本謙裕他 1975 「東大阪市遺跡調査会年報 I」  
宇田川誠一 1959 「羽衣砂丘遺跡調査報告」（大阪湾沿岸の古代漁村集落の一資料）  
鹿田雅昭 1974 「大和における古式土師器の実態」『古代文化』第26巻第2号  
近藤義郎 1964 「古目良遺跡」『田辺文化財』8  
酒井龍一 1975 「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について」『上町遺跡発掘調査概要』  
佐原真也 1970 「池上・四ツ池」1970  
高橋一夫 1975 「和泉・鬼高瀬の諸問題」『原始古代社会研究』2  
田中琢 1965 「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号  
都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号  
坪井清足 1965 「羽山県笠岡市高島遺跡調査報告」  
原口正三 1969 「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府島上高等学校研究紀要』  
原口正三他 1972 「船橋 I・II」（復刻）  
藤田藏司・柳瀬昭彦 1974 「上東遺跡」「山陽新幹線建設に伴う調査II」  
藤田正篤 1971 「三井屋大斗木遺跡その後」『会報』8 和泉古代文化研究会

- 西山要一 1971 「泉南市双子池遺跡採集の遺物——特に製塙土器について」『会報』7 和泉古代文化研究会
- 森浩一 1960 「製塙についての二つの覚え書」『古代学研究』第28号
- 森浩一他 1968 「紀淡・鴨門南嶺地帯における考古学調査報告」
- 森浩一他 1968 「觀音寺山弥生集落調査概報」
- 第2阪和国道内遺跡調査会 1971 「池上・四ツ池遺跡」16
- 1970 「池上・四ツ池」
- 1971 「第2阪和国道内遺跡調査報告書」4
- 1973 「第2阪和国道内遺跡調査報告書」1~3
- 豊中・古池遺跡調査会 1974 「豊中・古池遺跡発掘調査概報」そのII
- 大阪府教育委員会 1974 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」
- 1978 「池上遺跡発掘調査報告書」II
- 1974 「池上遺跡発掘調査報告書」III
- 1975 「大瀬遺跡発掘調査概要」II
- 和泉市教育委員会 1975 「上町遺跡発掘調査概要」
- 1973 「和泉の文化財」1・2
- 岸和田市教育委員会 1975 「土生遺跡発掘調査概要」第2次・第3次
- 堺市教育委員会 1975 「土師遺跡49年度発掘調査概報」

その他大阪府・和泉市・泉大津市・岸和田市・高石市他教育委員会等による調査成果を参考にさせていただいた。

# 別 表

# 街路部分(河川状遺構他)出土遺物一覧表

番号	種類	法量(cm)	特徴
1	甕	口径 器高 17.4 22.6	口縁部 くの字形に屈曲外反する。両面は横ナデされ、端部はわずかにつまみ上げられる。端面には底 部 腹 脇 部 内面 上半 には 2~3cm の粘土接合痕。 底 部 やや突出する平底 部 白黄色を呈し、焼成は良。砂粒含む粘土。端部下を除く外側全体に煤付着。 参考 出土地 河川内42
2	甕	口径 器高 18.8 24.6	口縁部 くの字形に屈曲外反する。上縁は底で切りとられて端面となす。 脇 部 瓶長脚部の中央やや下位に接合痕。外面には上方より左下り、水平、左下りの粗い叩き目。 底 部 内面 上半 には 約8本 の粘土接合痕。その上に横方向の底によるナデ調整。下半は板めて平滑。 参考 出土地 河川内117
3	甕	口径 器高 12.2 22.4	口縁部 くの字形に屈曲外反する。両面は横ナデされ端部は丸くおさまる。 脇 部 肩のねじれの瓶部中央やや下位に接合痕。外面は上半、下半ともに下がりの粗い叩き目。 底 部 平底 外側下半に煤付着。橙色、白黄色を呈し、焼成は不良で軟質。砂粒含む粘土。 参考 出土地 河川内52
4	甕	口径 器高 14.0 20.8	口縁部 くの字形に屈曲外反する。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。 脇 部 やや丸がんだ球形を呈し、上・中・下の三部を接合する。外面上方より水平に近い左下り、右下り、そして左下りの粗い叩き目。内面上位には2~3cmの粘土接合痕。中央には窓によるナデ調整。下位は板めて平滑。 底 部 中央部のやや隆む平底。 参考 白赤色を呈し、焼成不良、砂粒の多い粘土。口縁部外面、脚下半外面に煤付着。 出土地 河川内127
5	甕	口径 器高 15.3 21 程度	口縁部 くの字形に大きくなじみ外反する。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。 脇 部 やや緩慢な肩部、接合痕は不明確。外面には上方より左下り、右下り、左下りの粗い叩き目。 底 部 内面は板めて平滑。 参考 白灰黄色を呈し、焼成は不良。砂粒多い粘土。外面は煤が付着し、上部は特に移動割落が はげしい。 出土地 河川内29
6	甕	口径 器高 14.9 12 以上	口縁部 体部 体部よりくの字形に屈曲外反して斜上方にのびる。上方はより外側へそり返る。両面とも横ナデされ、端部はわずかに上方へつまみ上げられる。 脇 部 やや緩慢球形の瓶部外側はとりわけ上半部に粗い叩き。 底 部 中央部はわずかに水平方向の叩きがこのこと。内面はきわめて平滑。上半に窓押痕。 参考 (欠損) 外側は白赤色、内面は白灰色を呈し、砂粒を含む粘土。外面全体に煤。 出土地 河川内B F-178青灰色粘土
7	甕	口径 約18	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外側は横ナデと指圧痕、内面は刷毛。端部は上方へわずかにつまみ上げられる。 脇 部 (欠損) 参考 灰茶褐色を呈し、目立たない金雲母粒を含む。煤はない。 出土地 河川内115
8	甕	口径 約18	口縁部 欠損するが外反する口縁部。内面は横ナデ外側は横刷毛。端部は上方へつまみ上げられる。 脇 部 (欠損) 参考 茶褐色を呈し、目立たない金雲母粒を含む。外側には煤。 出土地 河川内115
9	甕	口径 約17	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は指圧と横ナデ。外側は指圧と横ナデ。端部は上方へつまみ上げられる。 脇 部 (欠損) 参考 灰茶褐色を呈し、ほとんど目立たない金雲母粒を含む。外側には煤。 出土地 河川内
10	甕	口径 約19	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外側には横ナデ、粘土接合、指圧、刷毛の諸痕跡。内面 脇 部 は横ナデ。端部は上方へつまみ上げられる。端面は平滑。 参考 灰茶褐色を呈し、ほとんど目立たない金雲母粒。外側には煤。 出土地 河川内40

番号	種類	法量(cm)	特徴
11	甕	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横ナデと斜刷毛。外面は横ナデとかすかな捺压。 胴部 (欠損) 備考 ほとんど目立たない雲母綿細粒を含み。白灰褐色を呈する。外面は煤。 出土地 河川内40
12	甕	口径 約19	口縁部 くの字形に大きく屈曲外反する口縁部。外面は強いナデ、内面は横刷毛。端部は丸くおさまる。 胴部 (欠損) 備考 白灰褐色を呈し、細金雲母を含む。外面一部に煤。 出土地 河川内B.F.-79、青灰色砂層
13	甕	口径 約17	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。両面とも横ナデ。内面の一部にかすかな刷毛目。端部上方は尖るが、上方へ突出しない。 胴部 (欠損) 備考 茶褐色を呈し、極細雲母を含む。外面に炭酸化。 出土地 河川内B.F.-79青灰色砂層
14	甕	口径 約17	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外面は横ナデ、捺压痕、内面は横刷毛。端部は上方へつまみ上げられる。端面にはかすかな凹凸がつく。 胴部 (欠損) 備考 白灰褐色を呈し、極細金雲母を含む。外面に煤。 出土地 河川内B.F.-79、青灰色砂層
15	甕	口径 約17	口縁部 くの字形に大きく屈曲外反する口縁部。外面は横ナデ、内面は横刷毛。端部はわずかに上方へつまみ上げられ、端面にはかすかな凹凸がつく。 胴部 (欠損) 備考 白灰褐色を呈し、金雲母綿粒を含む。外面に煤。 出土地 河川内B.F.-79、青灰色砂層
16	甕	口径 約18	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外面は横ナデか刷毛、内面は横刷毛。端部は上方へ引き上げられ、中の広い端面には明確な凹線。 胴部 (欠損) 備考 茶褐色を呈し、金雲母綿粒を多く含む。外面は煤。 出土地 河川内B.F.-79、青灰色砂層
17	甕	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。両面は横ナデされ、端部は方形におさまる。 胴部 (欠損) 備考 ほとんど欠損するが、外面には粗い叩きがかすかに遺存する。内面は荒削り。 基褐色を呈し、極細金雲母を含む。外面煤は無し、内面に炭化物。 出土地 河川内117
18	甕	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内外面は刷毛目、端部はほぼ丸味を持って閉じるが、内側下がわずかに凹む。 (欠損) 備考 茶褐色を呈し、金雲母綿粒をまばらに含む。外面煤。 出土地 河川内117
19	甕	口径 約17	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。両面横ナデ、端面に明確な凹線が1本つけられ、端部が上方へわずかにつまみ上げられる。 (欠損) 備考 茶褐色を呈し、金雲母綿粒をまばらに含む。また径5mm程度の白砂粒を含む。煤ナシ。 出土地 河川内B.F.-78、青灰色粘土層
20	甕	口径 約15	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内外面は横刷毛、外面下位に捺压痕。端部はわずかに上方へ引き上げられる。 胴部 (欠損) 備考 ほとんど欠損するが球形の胴部外面は左ドリの細かい叩き目と斜刷毛。内面は斜方向の施削り。器壁2.5~3mm 備考 ほとんど目立たない雲母綿細粒を含む。灰褐色を呈す。外面全体に煤。 出土地 河川内B.F.-78、灰色粘土層

番号	種類	法量(cm)	特徴
21	甕	口径 16.9 器高 21.2	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛、外面は横ナデ。粘土の接合痕、端部は上方へわずかに突出、端面には凹線。 胴部 脊部に張りのある球形の胸部。中央部にて上下接合。上半外側と底部の窓圓外側に細い叩き目。肩部以下には刷毛。内面は極めて平滑に磨削り。器壁 3mm。 備考 黄褐色を呈し、纖金雲母を多數含む。肩部を除いて外面全体に焼。口縁部下内側にも焼、肩部内側より以下には黒色味。 出土地 河川内B F-78
22	甕	口径 約17	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外面は横ナデ、内面は横刷毛。端部はわずかに上方へ突出する。 (欠損) 備考 灰茶色を呈し、金雲母・白砂粒を含む。外面は焼。 出土地 河川内B F-79、灰黑色砂質土層
23	甕	口径 約18	口縁部 くの字形に外反する口縁部。外面は横ナデ、内面は横刷毛。端部はわずかに上方へ引き上げられる。明確な端面を持つ。 (欠損) 備考 茶褐色を呈する。外面はわずかに焼。 出土地 河川内B F-79、灰黑色砂質土層
24	甕	口径 約15	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内・外面は横ナデ。外面には縱方向の旋轉と細かい押痕。内面には捺压痕。端部は上方に尖るが、胴部以上のみ遺存。外面は細かい叩き目。内面は磨削り。器壁 2.5mm。 備考 基褐色を呈し、纖金雲母を含む。また白砂粒もまばらにみられる。外面に焼。 出土地 河川内
25	甕	口径 約15	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横刷毛と横ナデ、外面は横ナデと指圧。端部は上方へ引き上げられ、端面に凹線。 備考 ほとんど欠損するが、細かい叩き目。内面は磨削り。器壁 4mm弱。 備考 茶褐色を呈し、纖黑雲母粒を含む。焼は無し。 出土地 河川内136
26	甕	口径 約18	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。両面とも横刷毛。端部は丸くおさまるがわずかに上方へ突出気味。 備考 上半のみ遺存する。外面には細かい叩き目。内面は磨削り。器壁 4mm弱。 備考 茶褐色を呈し、纖黑雲母粒を多く含む。胴部上端を除いて外面に焼付着。 出土地 河川内97
27	甕	口径 約17	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面上半は強い削り、外面は強いナデ。端部は上方へ明確に突出。端面にはわずかな凹線。 (欠損) 備考 茶褐色を呈し、纖黑雲母粒を含む。外面には焼。 出土地 B G-79, AG③
28	甕	口径 約18	口縁部 外反する口縁部。両面とも横ナデ。端部は上方へつまみ上げられる。端面にはかすかな凹線。 (欠損) 備考 茶褐色を呈し、纖細空泡粒を含む。外面は焼。 出土地 河川内148
29	甕	口径 約16	口縁部 比較的ゆるやかに屈曲外反する口縁部。両面とも横ナデとかすかな刷毛。端部は上方へわずかにつまみ上げられる。端面には凹線がつく。 (欠損) 備考 黑褐色を呈し、纖細空泡粒を含む。外面は焼。 出土地 河川内148
30	甕	口径 16.2	口縁部 くの字形に外反する口縁部。比較的ゆるやかに屈曲する。外面は横ナデ、内面は横刷毛、端部は丸くおさまる。 備考 上半のみ遺存。外面には粗い叩き目とその上に細かい刷毛目。内面は磨削り。器壁 3mm弱。 備考 黑色味の強い灰色。黒雲母粒が含まれる。外面には焼。 出土地 河川内

番号	種類	法量(cm)	特徴
31	斐	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外面横ナデと指圧。内面は刷毛。端部は上方へつまみ上げられる。 胸 部 (欠損) 備 考 黒褐色を呈し、ほとんど目立たない雲母粒。外面には煤。 出土地 河川内45
32	斐	口径 約17	口縁部 くの字形に外反する口縁部。画面は横ナデ、端部は丸くおさまるが、わずかに引き上げられている。端面には細い凹部。 胸 部 球形の胸部、中央に接合部。外筋は細かい叩き目、左下がり、下半は櫛刷毛。内面は横方向の窪削り、下半は特に深く仕上げる。基盤5~2mm。下部は大根。 備 考 金雲母を含み、黒炭褐色を呈する。外面全体煤付着、内面の下半に灰黑色部。 出土地 河川内46
33	斐	口径 約18	口縁部 くの字形に屈曲、外反する口縁部。外面は横ナデ、内面は櫛刷毛。外面かすかに指圧痕か、端部はわずかに上方へ引き上げられる。 胸 部 (欠損) 備 考 黒褐色を呈し、細雲母粒を含む。外面わざかに煤。 出土地 河川内29
34	斐	口径 17.6	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外筋は叩き痕と横ナデ、内面は横ナデ。端部はやや内側上方へつまみ上げられる。端面には凹部。 胸 部 上半のみ遺存。外面には水平方向の叩き目。その上に櫛刷毛。内面は窪削り。基盤3.5mm 備 考 黒褐色を呈し、細雲母粒を多数含む。外面煤、内面下半に黒色部分。 出土地 河川内110
35	斐	口径 約14	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。通例の上町田斐と比較して屈曲角度が少なく、軽上方へのびる。外面は横ナデ・指圧・叩き目等、内面は横ナデ・刷毛。端部は内側上方に大きく突出し、端面には明確な四角がつく。 胸 部 ほとんど欠損するが、底面部近くの破片には粗い叩き目がこる。上方ではその上を細かい刷毛調整する。 備 考 白褐色を呈し、雲母粒はほとんど目立たない。外面には煤。 出土地 河川内140
36	斐	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛・横ナデ、外面は横ナデ・指圧。端部は上方へつまみ上げられる。 胸 部 上半部のみ遺存。上半外筋にはやや粗い叩き目。下半は刷毛のみ。内面は窪削り、極めて平滑。基盤3mm弱。 備 考 黑褐色を呈し、細雲母粒を多く含む。外面全体に煤、内面胴下半に灰黑色部。 出土地 河川内52
37	斐	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛・横ナデ、外面は横ナデ・指圧。粘土の接合痕がこる。端部は上方へわざかに引き上げられる。 胸 部 上半部のみ遺存。上半外筋にはやや粗い叩き目、下半は刷毛のみ。内面は窪削り、極めて平滑。基盤3mm弱。 備 考 基褐色を呈し、細雲母粒を含む。外面全体に煤、内面胴下半に灰黑色部。 出土地 河川内 青灰色砂層
38	斐	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横ナデ・刷毛、外面は横ナデ。端部は上方へ引き上げられる。 胸 部 (欠損) 備 考 黑褐色を呈し、細雲母粒を含む。外面には煤。 出土地 河川内34
39	斐	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛・横ナデ、外面は横ナデ・指圧。端部は上方に尖るが。 胸 部 (欠損) 備 考 黑褐色を呈し、細雲母粒を含む。外面の煤は少ない。 出土地 河川内34
40	斐	口径 約16	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横ナデ、外面は横ナデ・粘土の接合痕・叩き目・指圧。端部は上方へつまみ上げられる。 胸 部 上半部のみ遺存。外面には細かい叩き目。内面は窪削り、とりわけ肩部内面以下を平滑に窪削り。基盤3mm。 備 考 黑褐色を呈し、金雲母粒多し。胴部上端を除いて外面に煤付着。 出土地 B G-79 A615

番号	種類	法量(cm)	特徴
41	甕	口径約15 器高18.5cm	口縁部くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛、外面は横ナデと指圧。端部は上方へつまみ上げられる。 腹部球状を呈し、下半部は尖んがって底部となる。上半外周には細かい叩き目、下半は刷毛。内面は横方向の窪削り、極めて平滑。器壁3mm弱。 備考灰褐色を呈し、細金墨鉛紋を含む。外面全体に黒、内面口縁部下に煤。内面端中央やや上位より下前部分は黒色欠味。 出土地河川内64
42	甕	口径約17	口縁部くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横ナデ・指圧、外面は横ナデ・指圧。端部は上方にややカーブする。 腹部球状を呈し、黒雲母鉛紋を含む。外面に煤。 備考灰褐色を呈し、黒雲母鉛紋を含む。外面に煤。 出土地河川内64
43	甕	口径15.8 器高約21.3	口縁部くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛、外面は指圧、粘土の接合痕。端部は上方へつまみ上げられる。 腹部中央の張るは球形を呈し、下半部は尖んがって底部となる。外面上半には細かい叩き目、中央に横ナデ、下半には刷毛。中央部にて上下を接合する。内面上半は斜方向の窪削り。下半は極めて平滑。器壁3mm。 備考灰褐色を呈し、目立たない細金墨鉛紋を含む。腹部上端を除いて外面に煤。内面中央部より下が黒色氣味。 出土地河川内117
44	甕	口径13.7 器高29.5	口縫部体部より屈曲して斜上方へ直線的に大きくなる。端部はやや尖んがってとし、その両面は横ナデする。外面は縱方向の窪削り。 腹部球形の底部。外面は軽い叩き上の間に窪削り。内面の上半は底による横方向のナデ、中央部は底にて横方向に平滑化、下半は平滑、底部内部は塑壓、内外面に粘土接合痕あるいは接合痕。 備考白黄色あるいは灰白色を呈し、砂鉄を含む粘土。体部下部外面に黑色焼附。そして全面にカブ目紋。口縫、体部上・中・下を接合成形。底部下面がみだれる。 出土地河川内B-79, A615
45	甕	口径14.5	口縫部体部より屈曲して斜上方にのびる。端部は丸くおさまる。両面は横ナデ。 体部ほとんど欠損する。外面は窪削り、内面は刷毛。頸部下内面に指圧痕。 備考白黄色を呈し、オメの細かい粒土。 出土地河川内?
46	甕	口径16.2	口縫部体部より屈曲して斜上方へ直線的にのびる。口縫部内面は横ナデ。外面は横ナデと指圧痕。 体部ほとんど欠損するが、外面は窪削き、内面は粘土接合痕。 備考白黄色を呈し粗砂を多く含む粘土。 出土地河川内63
47	甕	口径13.9	口縫部体部より屈曲して斜上方に立ち上がり、更に屈曲して大きく外開きする。端部は方形におさまる。外面には粘土接合痕。頸部外面は刷毛軋目によるカキトリ。 体部ほとんど欠損するが、外面は窪削き、内面は粘土接合痕と指圧痕。 備考白黄色あるいは灰白色を呈し、細砂を含む粘土。やや軟質。 出土地河川内24
48	甕	口径13.0	口縫部体部より屈曲して斜上方に立ち上がりや屈曲して斜上方に外開きする口縫部。端部両面は横ナデされ、端部は方形におさまる。頸部外表面は横ナデあるいは刷毛か。 (欠損) 備考白黄色あるいは橙色を呈し、細砂を含む粘土。かなり軟質。 出土地河川内44
49	甕	口径17.6	口縫部体部より屈曲してほぼ直方に立ち上がり、やや屈曲して斜上方に大きく外開きする。内面の溝跡は不明だが、外面は縱方向の窪削きがなされ、口縫部は横ナデが加わる。頸部外表面にはわずかに指圧痕がある。端部は下端が尖んがり断面はほぼ方形に近くとする。頸部下端外表面には平行管文が通じてつけられる。 体部下半は欠損するが、外表面は窪削き、内面には粘土接合痕がのこる。巾は3.5cm程度。また内面には指圧痕もみられる。 備考黄褐色を呈し、砂鉄を含む粘土の焼成は不良。 出土地河川内16
50	甕	口径14.3	口縫部体部より屈曲して直方に立ち上がり、更に屈曲して斜上方に外開きする。また口縫部外表面に粘土帶を施して底面を増しているのが特徴。口縫部と頸部との境は段をなす。頸部外表面にはかすかな凹面とり、口縫部内面には窪削きがなされ、端部は丸くおさまる。 体部ほとんど欠損するが、内面には粘土接合痕及び指圧痕がみられる。 備考白黄色を呈し、細砂を含む粘土。 出土地河川内

番号	種類	法被(cm)	特徴
51	壺	口径 16.0 器高 12.8 體部 備考 出土地	口頸部 体部 内面より屈曲してやや外輪側に立ち上がり、更に屈曲して斜上方に外開きする。また口頸部外側と上輪に粘土縫を巻きつけて厚味を増している。口頸部と頸部の境は段をなす。頸部外側にはかすかな環と、口頸部外側には2~3個単位の骨質突起がつけられる。頸部内面は擦磨跡。頸部は丸くおだやかである。口頸部内面は、ややくみればやや盤状気味の大きな体部である。肩部以下外側には無い叩き目がつけられ、それより下位は擦痕多くにとどまる。内面肩部には粘土縫痕がのこり、指圧痕もみられる。それより以下は平底。 貴赤色を呈し、細砂粒を含むといえキメの細かい粘土。
52	壺	口径 17.5 器高 12.4 體部 備考 出土地	口頸部 体部 体部より屈曲して直面に立ち上がり、屈曲して水平にのび、更に屈曲して斜上方にのびる。口頸部外側には4段の環状突起があり、下輪には骨質突起がつけられる。内面は擦磨され、頸部は丸くおだやかである。口頸部下面は横ナテ。頸部外側は崩れ状況により縱方向にナデられ、下部は更に下輪に凹凸がある。下輪下端にはシャーベット状の肩部の貼りつけ凸部がつけられ、扣突とキザがみられる。内面は擦磨され、内面全体には骨質突起が認められる。頸部内面は擦磨跡がなされる。 底灰黄色を呈し、粘土縫、砂粒を含む新土、焼成は比較的の良いとみられる。 河川内E-B-78 青灰色粘土層
53	壺	口径 16.3 器高 11.8 體部 備考 出土地	口頸部 体部 体部より屈曲して直面に立ち上がり、屈曲して水平にのび、更に屈曲して斜上方にのびる。口頸部内面には3段の腰椎形組み合わせ状の状況がつけられ、2個1組3単位の円形突起が下輪外側につけられる。頸部外側は横ナテ、内面は擦磨痕。頸部尖端には横面三角形の貼りつけ凸部がつけられ、骨質突起が加わる。口頸部は丸くおだやかである。 火候するがその上端に擦磨跡が付く。内面は擦磨され、内面全体には骨質突起がみられる。 底灰黄色を呈し、細砂粒を含む新土、焼成は良。 河川内E-B-78 青灰色粘土層
54	壺	口径 11.8 器高 12.4 體部 備考 出土地	口頸部 体部 体部より多くの字形に屈曲外反する。両面は横ナテされ、縫部はとりわけ上方につまみ上げられ、明確な縫跡を持つ。内面にかすかな擦磨痕。 やや弱い張る体部の外側は確認でき。内面は横方向に削り。中央部や下位に上半と下半の接合部。内面の部分に帶状の厚味。 貼りつけの平底。 白灰色を呈し、キメの細かい粘土。体部下部に黒斑。 河川内E-B-78 青灰色粘土層
55	壺	規高 9.3 體部 備考 出土地	口頸部 体部 体部より外反する口頸部は欠損。 中央部の大きさがそろばん不規の体部。外側は横方向の範囲。内面に粘土縫の痕跡、4本が上半にのこる。下部は極めて平底。 中央部がわずかに膨らむ平底。その周囲に面と面。 貴赤色を呈し、砂粒含む粘土。焼成は良。 河川内E-B-79 青灰色粘土層
56	壺	口径 11.5 器高 12.1 體部 備考 出土地	口頸部 体部 体部より多くの字形に屈曲外反する。外側は横ナテの上に擦磨。内面にも擦磨され、縫部は上方に突出気味。 大傾斜するがやや扁平彫形の体部。外側中央にかすかな叩き目痕、その上に擦磨。 内面は削りによりとおりわけ下半を薄くする。 (欠損) 白灰色を呈し、砂粒を多く含む。体部中央外側に窪、下半は熱による器壁剥落。体部上半に黒斑。 河川内E-B-79 青灰色粘土層
57	壺	口径 10.9 器高 12.1 體部 備考 出土地	口頸部 体部 体部より屈曲して短く直面に立ち上がる。両面は横ナテされ、縫部は尖んがってとじる。脛の張る体部の外側は縦方向の擦磨。上半は割落気味、内面上半には指押痕。下半は平滑。口頸部下に接合痕跡。 内板裏の平底。 灰黄色を呈し、砂粒を含む粘土。体部外側に黒斑。 河川内E-B-79 青灰色粘土層
58	手培形土器	口径 15 器高 17 體部 備考 出土地	天井部 体部 体部をおおむる球状の天井部外側には巾1cm程度の粘土縫痕。外側を粗い叩き目を施こし、縫ナテをもって調整。所々に弛削り痕。下縫跡側を縦方向の縫ナテをもって調整。 脇の張る体部だが底部付近は欠損。上半部と下半部をその縫曲部分で接合。上半部はやはり巾1cm程度の粘土縫痕を施し上げて形成。下縫跡側を削り割りによって調整。下半部外側には粗い叩き目底。底部裏面は削りを施す。中縫みの平振痕があるが縫部かは不明。やや位置がずれる。内面上半は擦磨ナテ。 砂粒含む粘土の色調は淡灰黄色。
59	壺	口径 11 程度 器高 3.5 程度 體部 備考 出土地	口頸部 体部 全体は浅い皿底を呈し、口頸部はやや内腹気味に立ち上がる。両面は横ナテされ、縫部は丸くおだやかである。外側は擦磨痕。内面は横ナテ。底部は厚味を持つ。 淡灰黄色を呈し、底成は中、縫部は細かい。全体の片片。
60	鉢	口径 10.7 器高 4.9 體部 備考 出土地	体部 やや内腹気味に斜上方にのびる体部を持つ。縫部は丸味をもって閉じる。外側は粗い叩き目。上部にやはり粗い擦磨が施される。内面は縦方向の擦磨がなされ、盛めて平滑。半楕円平底。 底灰色を呈し、砂粒をまばらに含む。底成は中。 河川内E-B-79 青灰色粘土層

番号	種類	法量(cm)	特徴	産地
61	体	口径 器高 10.1 9.0	体部 やや内壁気味に斜上方にのびる体部を持つ。端部は丸味をもって閉じる。外面は斜方向の窪み、内面も荒唐き。外下面下位底部近くには押痕とかすかな刷毛目がみられる。 底部 かなり丸味をもった平底。 備考 白灰色を呈し、砂粒をわずかに含む。 出土地 河川内29	
62	体	口径 器高 8.9 5.9	体部 やや内壁気味に斜上方にのびる体部を持つ。端部は丸くおさまる。外面に輻方向の粘土筋接合痕。粗い筋瘤き。内面は上半をていねいに荒唐きし、平滑。 底部 繰めて平滑な平底。 備考 灰黄色を呈し、粘土のキメは細かい。 出土地 河川内129	
63	体	口径 器高 10.9 6.1	体部 直線的に斜上方に向いて伸びる体部。端部はやや尖り気味で丸くおさまる。外面は粗い叩き目、内面は繰めて平滑。底部には荒唐底。 底部 繰くわざに盛る平底。 備考 貝褐色を呈し、粘土のキメは細い。 出土地 河川内137	
64	体	口径 器高 9.0 6.4	体部 やや内壁気味に斜上方にのびる体部を持つ。端部は丸くおさまる。外面はやや凸をなし接合痕か。内面は平滑。底部の周囲は指圧痕がめぐる。 底部 体部に比してやや大きな底部。あげ底となる。 備考 黄赤色を呈し繊維を含む粘土。黒斑1。 出土地 河川内B F-78 棕褐色粘土質層	
65	体	口径 器高 11.0 6.0	体部 下位で弯曲して斜上方に直線的にのびる体部。端部は尖り気味で閉じる。口縫部前面は横ナデ。外面は平滑。 底部 半球形。 備考 赤褐色を呈し、砂粒をまばらに含む。 出土地 河川内29	
66	体	口径 器高 8.7 6.6	体部 やや内壁気味に斜上方にのびる体部。端部は丸くおさまる。口縫部前面は横擦毛、外面は横ナデ。口縫部前面下に接。外表面に粗い叩きがのこる。内面は平滑。 底部 平底。 備考 貝褐色を呈し、砂粒を含む粘土。 出土地 河川内135	
67	体	口径 器高 14.0 7.3	体部 内壁気味に大きくながら斜上方にのびる体部。端部は尖り気味にとじる。外面には粗い叩き目、内面は繰めて平滑。 底部 リング状の底部がとりつき、その周囲は指圧痕がめぐる。あげ底。白灰褐色を呈し、キメの細かい粘土。体部に大きな黒斑1。 備考 出土地 河川内88	
68	体	口径 器高 13.4 7.1	体部 内壁気味に大きくながら斜上方にのびる体部。端部は丸くおさまる。外面は刷毛目、内面も刷毛原体により平滑。内面底に荒唐。 底部 指で引きのばして高凸状の底部をつくる。あげ底。 備考 明白赤色を呈し、砂粒を多く含む。 出土地 河川内B G-79 青灰色粘土層	
69	体	口径 器高 12.0 9.6	体部 くの字形に屈曲する口縫部。その前面は横ナデ。外面に接合痕と指圧痕。端部は尖り気味にとじる。 底部 内壁気味に上方に立ち上がる。外面とりわけ下位に粗い叩き目が明確。中央部はかすかに削られる。底部の周囲も輻方向に粗く削られる。内面は繰めて平滑。上半は荒唐きか。 備考 白灰色を呈し、砂粒を含む粘土。体部外面に黒斑1。 出土地 河川内60	
70	窓環	口径 器高 22.0 16.6	环部 窓底から周出し斜上方に外背してのびる口縫部を持つ。口縫部外面は横ナデの上に輻の荒唐底も同様。端部はわざかに上方にカーブして丸くおさまる。底部内外面の荒唐と、中実の高い柱状部に広がる裾部。柱状部外面は輻荒唐。裾部内面は横ナデ。基部に外方からの引がきが穿たれたのが同一箇所により上位に穿け裏されている。 備考 白灰色を呈し、黒砂粒を含む、焼成中。 出土地 河川内	

番号	種類	法量(cm)	特徴
71	高 环	口径 19.6 器高 15.5 前後	环 部 环底部から斜上方に外側してのびる口縫部を持つ柱状部の様はよい。外面は荒削き、内面もおそらく荒削き、端部は尖んがり気味で丸くおさまる。 脚 台 中空の高い柱状部にやや屈曲して広がる裾部を持つ。柱状部外面はやや市広の直擦き、内部に3孔が穿たれる。柱状部上端外周に接合の粘土質。 備 考 赤褐色あるいは灰褐色を呈し、キメの細かい粘土質。 出土地 河川内
72	高 环	口径 21.4 器高 15.1	环 部 环底から里曲し斜上方に外側してのびる口縫部を持つ。口縫部外面は崩毛調整しその上に荒削き。内面と底盤内外面も荒削き、脚部はやや厚味を増してとじる。その両面は横ナデ。 脚 台 中空の高い柱状部に広がる裾部。柱状部外面は雄だが面取り、内面は削り俄。脚部は横ナデ、刷毛・荒削き底。脚部に3孔が穿たれる。脚部外面は横ナデ。 備 考 白灰褐色を呈し、砂を含むが全体にはキメの細かい粘土。 出土地 河川内底B下-78 黄灰色粘砂層
73	高 环	口径 21.2	环 部 环底から斜曲して斜上方に外側してのびる。外面は直擦き、内面は平滑。底部と口縫部の接合外面に横擦き。端部は方形にとじる。 脚 台 (欠損) 備 考 黄褐色を呈し粗砂を含む粘土 出土地 河川内70
74	高 环	口径 20.1	环 部 环底から屈曲して斜上方に外側してのびる。内外面とも荒削き、端部は丸くおさまる。 脚 台 補部は欠損するが、中央の柱状部の外面は面取り状の荒削き、3孔が直存するがその間隔から6~7孔が想定。 備 考 白灰色を呈り、砂粒は多い粘土 出土地 河川内129
75	高 环	口径 20.4	环 部 环底上り大きく屈曲外側して斜上方にのびる。外面は横ナデの上に横擦き、内面は横及び横擦き。端部は上方に突出し端面を持つ。 脚 台 補部は欠損するが中央の高い脚状部。外面は直擦き。 備 考 白灰色を呈し、粗砂を含む粘土。 出土地 河川内83
76	高 环	脚端径12.4	环 部 (欠損) 脚 台 中央柱状部に広がる裾部。柱状部外面は粗い面取り状荒削き、脚内面には荒削痕。端部は丸くおさまる。 備 考 粗砂を呈し、白砂粒を含む粘土。 出土地 河川内B下-78 晴青灰色粘土層
77	高 环	脚端径11.7	环 部 (欠損) 脚 台 中央に近い柱状部に広がる裾部。外面は荒削き。その他駆刺落氣味、3孔がのこるが4孔と思われる。脚部は方形にとじる。 備 考 白赤色を呈し、キメの細かい粘土。 出土地 河川内
78	高 环	脚端径11.2	环 部 (欠損) 脚 台 中央氣味の柱状部に内側して広がる裾部。柱状部は直擦き、裾部も直擦き、脚部内面は平滑、端部は方形にとじその内面は横ナデ。外方向からの3孔が穿たれる。 備 考 白灰褐色を呈し、砂粒の多い粘土。 出土地 河川内
79	高 环	口径 12.6 器高 9.4	环 部 半球状の环部。端部は丸くおさまる。外面は横ナデと直擦き底、内面には不明瞭だが斜擦毛の上に直擦き。 脚 台 中央の低い柱状部に大きく直線的に広がる裾部。柱状部はない。外面は荒削き、内面はかすかに刷毛目底。3孔を有する。 備 考 环・脚接合部外周に粘土縁。 白灰褐色を呈し、キメの細かい粘土。 出土地 河川内53
80	高 环	脚端径14.7	环 部 (欠損) 脚 台 中央の低い柱状部に大きく直線的に広がる裾部。外面は荒削きだが剥落。端部は下方へわずかに突出、内面は横ナデ。4孔を有する。 白褐色を呈し、砂粒の多い粘土。 出土地 河川内146

番号	種類	法量(cm)	特徴
81	高 环	口径 11.9 脚高 10.4	环 部 半球状の环部、底部より曲線的に口縁端部にいたる。端部は丸くおさまる。外面は斜方向、内面は楕円方向の荒磨き。 脚 台 無い中空の柱状部に凹曲して大きく聞く脚部。环部口径より脚端径の方が極めて大。脚部外面は荒磨き、4孔を持つ。端部はぐやぐや方に突出して尖んがってとじる。 備 考 白黄色を呈し、砂粒も含むが粘土のキメは極めて細い。軟質で地成は不良。 出土地 河川内29
82	高 环	口径 13.1 脚高 10.8	环 部 半球状の环部、底部より曲線的に口縁端部にいたる。端部は尖んがり気味に丸くおさまる。外外面と内面とも不規則な凹磨きと思われる。 脚 台 無い中空柱状部に凹曲して大きく聞く脚部。端部近くでわずかに凹曲する。外面は荒磨き、端部前面は横ナナ。端部はぐやぐや気味にとじる。 備 考 白灰色を呈し、キメの細かい粘土。軟質で地成は不良。 出土地 河川内47
83	高 环	口径 9.9 脚高 12.0	环 部 半球状の环部、底部より曲線的に口縁端部にいたる。端部は丸くおさまり、その前面は横ナナ。内外面とも横磨き。 脚 台 無い中空の柱状部に内樹氣味に大きく聞く脚部。端部は方形近くにとじ。その前面は横ナナ。外外面は荒磨き、内面は横ナナ。孔数は不明。 備 考 白黄色を呈し、細砂も含む粘土の地成は良。 出土地 河川内
85	高 环	脚台高 8.6 脚端径16.6	环 部 (欠損) 脚 台 环部靈よりそのまま直線的に大きく聞く脚部。外面上にかすかな凹凸模様がある。そして市面の磁方向荒磨きが施される。内面は刷毛目調整、端部は丸くおさまる。外方向より、4孔を穿たれる。 備 考 黄褐色を呈し、砂粒を含むキメの粗い粘土。 出土地 河川内B G - 78a
87	高 环	口径 23.0	环 部 底部より屈曲して立ち上がり、更に屈曲して斜上方に大きくなる長い口縁部を持つ。端部は上方へ突出し、その前面は横ナナ。端部は丸くおさまる。外面は細かい暗文状の横方向荒磨き、内面は「段」の放射状凹凸を呈す。 脚 台 (欠損) 備 考 橙色を呈し、細かい粘土。地成は中。 出土地 河川内B G - 79a 5
88	高 环	口径 18.7 脚高 12.2	环 部 浅い皿状の底部より屈曲して短く立ち上がり、更に屈曲して斜上方にのびる口縁部。口縁部外側上方に横粗さ波状、内面上方にしらぬき波状。外面上端と下端に円形浮文列。外斜方向の荒磨きと思われるが不明確。 脚 台 細い中空が穿たれたる点い柱状部と半球状の脚部。外面は荒磨き、内面は平滑。端部は方形にとじる。4孔が穿たれる。 備 考 白色、白灰色を呈し、キメの細かい粘土。地成は不良で軟質。 出土地 河川内31
89	高 环	脚端径17.3	环 部 (欠損) 脚 台 高い中空の柱状部は欠損。それより波状を呈する層状ある脚部。外面には3条の横粗さ波状、土端には竹管文列、端部外面は横ナナ。その上に竹管文列。内面は楕円方向の荒磨き。脚部外部は横刷毛。 備 考 波状を呈し、キメの細かい粘土。地成は中。蓋口縁部とも考えられようが、脚部から高脚部と判断。 出土地 河川内底 B F - 79
90	小型器台	脚台高 5	受 部 直線的に把の広がる脚台。外面は荒磨き、外からの4孔が穿たれる。端部はぐやぐや気味に閉じる。 脚 台 備 考 黄褐色を呈し、粗砂を含む粘土。器表は脚落気味。 出土地 河川内
91	小型器台	口径約 10	受 部 浅い皿状の受部。端部は尖んがり気味に丸くおさまる。外面は粗磨き、内面は剥落。 脚 台 (欠損) 備 考 淡灰灰色を呈し、粗砂を含む 8 × 4 cm片 出土地 河川内123
92	小型器台	口径 9.4 脚高 8.9	受 部 斜上方にのびる受部に下方につまみ上げられる口縁端部を持つ。端部は刷毛状のものによるナナ。受部外側上方も横ナナ。外面は粗磨き。 脚 台 直線的に斜広がりとなる脚台。外面は粗い左下がりの叩き目とその上に楕円方向の粗い荒磨き。内面は刷毛と刷毛原体による削り、端部は内側へわざかに突出する。 備 考 白黄色を呈し、砂粒を多く含む。 出土地 河川内61

番号	種類	法量(cm)		特徴	
93	小型器古	口径 部高 9.1 8.7	受 部 脚 古 部 備 考 出土地	浅い皿状受部に上方につまみ上げられる口縁端部を持つ。口縁部内面は横ナデ。外面も横ナデによりわずかに円錐状となる。底部外周は細かい窪界面。内面は平滑。 4孔を持つ。 灰褐色を呈し、砂粒を含む粘土。焼成は良、やや軟質。 河川内	
94	環	口径約 10	口縁部 体 部 底 部 備 考 出土地	体部よりくの字形に屈曲して斜上方にのびる。両面は横副毛。端部は丸くおさまる。 底部に凹りのある扁平球状の体部、下半は欠損。外周は粗面焼き、内面は平滑だが一部に 粘土接着合合。 (欠損) 灰茶褐色を呈し、キメの細かい粘土。 河川内147	
95	環	口径約 7	口縁部 体 部 底 部 備 考 出土地	体部よりくの字形に屈曲して斜上方にのびる。内面は不明だが、外面は鹿皮焼きと横ナデ。 端部は丸くおさまる。 腹部に凹りのある扁平球状の体部、下半は欠損。外周は窪焼き。内外面とも粘土接着合合 がこのこと。 (欠損) 黄灰色を呈し、粘土のキメは細かい。 河川内52	
96	環	口径 部高 8.6 8.0	口縁部 体 部 底 部 備 考 出土地	体部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。 球形の体部外周は窪焼き。下半はずばまる。内面は極めて平滑。 小さな平底窪。 時灰色を呈し、解製胎上。体部外周に1口縁部外周に2の窪窪。 河川内底B-D-78 黄灰色砂質土。	
97	環	口径 部高 9.1 7.0	口縁部 体 部 底 部 備 考 出土地	体部よりかすかに屈曲して上方にのびる。両面とも横ナデされ、端部は方形気味におさまる。 半球状のやや扁平な体部。外面は粗面焼き、内面は荒押焼。 ややあげ底灰色の半球底。 黄褐色を呈し、砂粒を含む粘土。 河川内29	
98	環	口径 部高 9.6 8.0	口縁部 体 部 底 部 備 考 出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横毛。外面は横ナデ。端部は丸くおさまる。 やや付の張る球形の体部、下半はずばまる。外面は平滑に仕上げられるがかすかに右下の 筋の入り跡がこのこと。下半には粗い可見目がこのこと。内面は極めて平滑。上半には刷 毛目がこのこと。 縮めて小さな平底窪がつけられる。 灰褐色を呈し、砂粒を含む粘土。外周2ヶ所に黒斑。 河川内底D-E-79 青灰色砂質土	
99	壺	口径約 15	口縁部 体 部 底 部 備 考 出土地	口縁部より外側する颈部と更に斜上方にのびる口縁部を持つ。内面はひだらかに移行し、外 面には横毛を持つ。器壁剥落の跡調整不明。端部は丸くおさまる。 (欠損) 白粗砂含む粘土は白褐色を呈す。焼成不良で軟質。 Pt-L-20	
101	小型器古	口径約 10	受 部 脚 古 部 備 考 出土地	浅い皿状の受部。端部はわずかに上端で尖るが。外面は粗面焼き。 (欠損) 白褐色を呈し、粗砂含む。6.5×3.5mm 1号住居地内大ビット	
102 + 103	小型器古	口径約 10	受 部 脚 古 部 備 考 出土地	浅い皿状の受部を持つ。端部は上方へわずかに尖るが。端面は粗毛状液体で横ナデされ る。外面は割りあるいは指圧、内面は平滑。 接合しないか同一個体と考えられる。上半欠損し、直線的に縮窄する脚部。端部は突 起する。外周は斜方角の窪焼き。穿孔がみられる。 白褐色を呈し、砂粒を含む。 とともに、7×3.5cm片、7×5.5cm片で全体は不明確。 1号住居地内大ビット	
104	壺	脚端径16.6 脚台高 3	环 部 脚 古 部 備 考 出土地	环 部 (欠損) 脚 古 部 備 考 出土地	中空の短い柱状部と屈曲して水平に大きく広がる脚部。柱状部外周には環によるかすかな 回取り。調整は不明。端部は丸くおさまる。脚部が残存するが、5個穿孔が乱雑に配置 し、全体では10個を越えよう。 褐色を呈し、粗砂含む粘土。焼成不良。 2号住居地B-G-89 青灰色砂質土。

番号	種類	法長(cm)	特徴
105	甕	口径 13.9 器高 18 以上	腹部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。両面とも横ナデされ、端部は上方へ引き上げられる。腹部には凹痕、両側面部には瘤目。脚部の脚部には脚毛がみられるが上、中、下部の後合により成る。上外面は左下りの粗い叩き目。中央部には粗長い水平方向、下すは左下りあるいは水平の叩き筋がみられる。内面は粗い脚毛により平滑に調節。接合部は全く削除される。上外面は煤。中央以下は熱による例湯。器壁は4mm強。
	備考		淡黄色を呈し、砂粒多い胎土。焼成は中。
	出土地	C U = 8	南北方向トレンチ 淡黄色砂質土層
106	甕	口径 12.2 器高 12.3	腹部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。腹部の脚部、外面上部より左下り、水平、左下りの叩き目。内面上端には粘土接合部。その上に刷毛目底。それ以下は接合部で平滑。器壁は6mm強と厚い。
	備考		突出する平底。中央わずかにあげ底底味。
	出土地	C U = 18	白灰素色を呈し、砂粒多い胎土。スズは全くなし、底部面のみ真黒。
108	甕	口径 15.5 器高 16.4	腹部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。両面は横ナデされ、端部は上方へつまみ上げられる。脚部との接合部外面には刷毛目底。叩き目に近い脚部中央外側に接合部。上外面は水平に近い粗い叩き目、下半は左下りの叩き目。内面削めて平滑だが、粘土接合及び接合部。底部近くに窪溝。突出する平底。中央わずかにあげ底底味となる。
	備考		淡灰色を呈し、砂粒多い胎土。焼成中。
	出土地	C U = 18	底張部 灰黄色砂質土層
109	甕	口径約 16	腹部よりくの字形に屈曲し、やや内側斜めにのびる。端部は内側へ丸味をもって肥厚する。内外面とも横ナデ、外面下端を特に強い横ナデ。
	備考		(欠損) 灰白色を呈し、細め青む胎土。焼成良。
	出土地	C V = 34	南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
110	甕	口径約14.7	体部よりくの字形に屈曲し、やや内側斜めにのびる。端部は内側へ丸味をもって肥厚する。内外面とも横ナデ、外面下端を特に強い横ナデ。
	備考		(欠損) 白赤色を呈し、砂粒が多い胎土。焼成良。
	出土地	C V = 34	南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
111	甕	口径約14.6	腹部よりくの字形に屈曲外反する。内壁気味にのびる厚味ある口縁部。端部はわずかに両方に突出。外面中央よりやや上に傾く。両面は横ナデ。
	備考		(欠損) 底褐色を呈し、砂粒が多い胎土の焼成や不良。
	出土地	C V = 34	南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
112	甕	口径約 14	腹部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。端部は内側に肥厚する。両面とも強い横ナデ。脚部下半は欠損するが、球形の脚部。外面は刷毛目、内面は荒削り。器壁3mm強。
	備考		白灰黄色。灰白色を呈し、砂粒が多い胎土。焼成は良。硬質。器外表面全面に煤。
	出土地	C V = 34	南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
113	甕	口径 18.9	腹部よりくの字形に屈曲外反する。端部は丸くおさまる。内側は横刷毛。外面は横ナデ。
114	備考		ほとんど欠損するが上端内面は荒削。
	出土地		同一個体かは確認されないが、平底底。脚部下位外面は粗い刷毛+細い刷毛。底部内面に炭化物。茶褐色を呈し、微細な粒を含む。焼成小。8×3.5cm片 8×7cm片 C V = 6~12 灰黄色砂質土層
115	甕	口径 18.0	体部よりくの字形に屈曲し、斜上方に直線的にのびる。端部は内方へ突出し、上端面を持つ。両面とも横ナデ。
	備考		やや君の強る球形の体部。下半は欠損。外面は刷毛目、内面は粗い荒削り。
	出土地	C V = 28	灰黄色砂質土層
116	甕	口径約20.6	直線的に斜上方にのびる。端部はやや内方へ厚味をもってとじる。内面上半、外面は横ナデ。外面は細かい横荒削り。内面上半は指压板及び刷毛目。
	備考		黑褐色、茶褐色を呈し、相間合む胎土の焼成は良。硬質。
	出土地	C V = 34	南北方向トレンチ 青灰色粗砂層

番号	種類	法量(cm)	特徴
117	壺	口径約 17	口縁部 斜上方にやや外骨気味にのびる。端部は岸味をもってとじる。内外面とも横ナデ。外面の一端に擬泡引きが叩き目。下方に橋目状。 体部 (欠損) 備考 明灰黄色、黒色を呈し、細砂含む粘土。焼成中。 出土地 CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
118	壺	口径 15.7	口縁部 体部より外壁しつつ斜上方にのびる。端部は方形近くにおさまる。外面豊富さと考えられるが突然不明。 体部 球形の体部は欠損。上方外面は平滑だからすこし明き目がのこる。内面は3本の粘土紐糸。その上に滑石斑。 備考 橙色を呈し、粗砂多し、焼成中。 出土地 CV-34 南北方向トレンチ 灰色粘土深細砂層
119	壺	口径 高さ 12.8 23.7	口縁部 体部よりくの字形に傾曲して斜上方にのびる。下端部は体部との接合部よりわずかにとびでる。上端は内側にやや厚味をもってはほほ方削にとじる。両面とも横ナデ。 体部 四円形瓶底の体部外面は剥毛目調整。内面は擬泡削りされ平滑。器壁 3 mm強。 底 備考 大底。 明灰黄色を呈し、粗砂多い粘土。焼成不良。下半部よりやや下位以下外間に煤。 出土地 CV-32 暗灰灰質土層
120	壺	口径 15.3	口縁部 体部より直立する瓶部と外反し更に斜上方にのびる口縁部を持つ。口縁部端面にはキザミ、外側にはやや粗糲な櫛引き放状文。下端には 6 ~ 4 個単位の竹管文がつく。内面は横方向の空窓。 体部 体部外面は刷毛と擬泡引き。下端には指突文列。口縁部下面は横ナデ。 底 備考 (欠損) 明灰黄色を呈し、粗砂含む粘土の焼成良。 出土地 CU-18 扇部 呈灰黄色砂質土層
121	高 环	口径 18.7	环 部 基部より屈曲して外骨気味に大きくのびる口縁部を持つ。端部は丸くおさまり、その両面は横ナデ。外側は擬泡引き、内面も距離感と思われる。环底と口縁部の接合部。その下位には刷毛目。 脚 古 備 出土地 (欠損) 暗灰色を呈し、細かい粘土の焼成は良。 CW-8 南北方向トレンチ 呈灰黄色砂質土層
122	高 环	口径 18.4	环 部 平底な瓶部より屈曲して斜上方にのびる口縁部。端部に内側へわずかに肥厚し、方形近くにおさまる。内面は刷毛調整の後、放射状泡引き。外側は細かい横方向の泡引き。端部下外周は先に横ナデ。 脚 古 備 出土地 (欠損) 白灰褐色を呈し、焼成は良、硬質。細かい粘土。呈 CV-34 南北方向トレンチ 灰色粘土粗細砂層
123	高 环	口径約 17	环 部 瓶部は欠損するが、斜上方にやや内骨気味にのびる口縁部。端部は尖んがり気味にとじる。外側は細かい横方向の泡引き。瓶部との境に四角状の段がある。内面上端は距離原体による一段の削り、その下位に不規則な横方向の空窓。 脚 古 備 出土地 (欠損) 茶色を呈し、細砂を含む粘土の焼成は良。硬質精製。 CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
124	高 环	口径 17.7	环 部 瓶 部 瓶部よりわずかに屈曲して斜上方にのびる口縁部。端部は丸くおさまり、端部下内面とは瓶部外面は横ナデ。瓶部との接合部外面には内線。 脚 古 備 出土地 (欠損) 暗褐色を呈し、細砂含む粘土の焼成は中。 CV-34 南北方向トレンチ 呈灰黄色砂質土層
125	高 环	脚台高11.0 脚端径12.0	环 部 (欠損) 中空の襷開きの柱状部に屈曲して聞く脚部を持つ。外側は刷毛調整の後、細かい横泡引き。柱状部内面には4段の接合部としはり板がみられる。脚部内面は刷毛調整。端部は内側へわずかに突出する。 脚 古 備 出土地 (欠損) 淡白褐色を呈し、細砂多い粘土の焼成は良。 CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
126	高 环	脚台高 5.2 脚端径 10.5	环 部 (欠損) 襷開きの脚台や内壁気味。外面に粗い叩き。内面は斜刷毛で調整。上方に距離痕とナデもみられる。4孔。端部は尖んがり。その外間にキザミが施される。 脚 古 備 出土地 淡白灰色を呈し、細砂含む粘土。焼成中。 CW-26 トレンチ内 呈灰黄色砂利混入砂質土層

番号	種類	法量(cm)	特徴
127	高环	脚台高 9.3 脚輪径 17.2	环 部 脚 台 (欠損) 中空の柱状部に屈曲して大きく開く脚部を持つ。脚柱状部内面には削り底。端部外面は横方向の細かい荒削き。内面にはかすかな刷毛。端部内面には被刷毛。端部は丸くおさまる。 備 考 出土地 C V - 34 灰黄色砂質土層
128	体	口径 11.6 器高 8.0	体 部 やや内壁気味に立ち上がる体部にわずかに屈曲外反する口縁部を持つ。端部は丸くおさまる。体部外面は荒削き。内面は平滑削り。 底 部 外方に踏んばるあげ底。外面には指紋痕、端部は内面に折り返す。 備 考 明黄灰色・灰椎色を呈し、砂粒なし。焼成は良、硬質。 出土地 C U - 18 桂張部 灰黄色砂質土層
129	体	口径 13.0 器高 7.0	体 部 斜上方にのびる下半部とやや屈曲して内壁気味に更にのびる上半部を持つ。外面・内面とも横方向と半径だが調整不明。端部は再び丸くおさまる。底部内面に荒削痕。 底 部 底域ある平底。 備 考 白黄赤色・灰黑色・灰白黄色を呈し、粗砂含む胎土、焼成中。 出土地 C U - 18 桂張部 灰黄色砂質土層
130	小型体	口径 16 程度	口縁部 体部より二段に屈曲して斜上方にのびる。端部は尖がってとじる。側面とも横方向の細かい荒削き。 体 部 底部は欠損するが外開きの浅い体部。内面は横方向の細かい荒削き。外面は不分明だが削り。器壁 2 mmと極めて薄い。 備 考 茶褐色を呈し、焼成は良、硬質、精製。残片による推定固化。 出土地 C V - 34 南北方向トレンチ 灰色粘土混粗砂層
131	小型体	口径 16 程度	口縁部 体部より二段に屈曲して斜上方にのびる。端部は尖がり氣味にとじる。内外面とも横方向の細かい荒削き。 体 部 下半は欠損するが外開きの浅い体部。内面とも横方向の細かい荒削き。外面は荒削り、器壁 4 mm。 備 考 茶褐色を呈し、もとの細かい胎土、焼成は良、硬質、精製。 出土地 C V - 34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
132	小型体		口縁部 体部より二段に屈曲して斜上方にのびる。端部は欠損する。外面は刷毛、内面も刷毛。 体 部 下半は欠損するが外開きの体部。やや膨らが張る。外面は刷毛目、内面は平滑。内面土端に接合痕。 備 考 淡灰黄色を呈し、粗砂多く含む胎土、焼成中。6 × 6 cm 片による推定固化。 出土地 C V - 34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂
133	小型丸底壺	口径 10.3 器高 約 7 1 8	口縁部 体部より屈曲して斜上方に直線的にのびる。端部は内面より薄くなりやや尖がり氣味にとじる。外面は細かい荒削き。内面もほぼ同様であろう。 体 部 下半は大部分連續しないが同一構体と思われる部分が併存している。極めて扁平球形を呈する体部外面は荒削きか。内面上方に圓錐形体と思われるものによるナヂ。 備 考 黄赤色を呈し、焼成は良、硬質、細い胎土、精製土器。 出土地 C V - 34 南北方向トレンチ
134	小型平底壺	口径 8.3 器高 9.0	口縁部 体部より屈曲して垂直に立ち上がる。器壁は 7 mm と体部壁より厚い。端部内面がやや薄くなり丸くおさまる。外面は横ナダ、外面下端の調整は不明。また外面下端は強くナダられ凹凸状をなす。 体 部 半球状のやや扁平な体部下端に小さな平底底がつけられる。外面の器壁剥落、内面は荒削りされ平滑。 備 考 黄赤色を呈し、粗砂含めて多い胎土、軽質粗製。 出土地 C V - 30 南北方向トレンチ断面 噴灰黄色粘土層
135	小型丸底壺	口径 約 11 器高 約 6 強	口縁部 体部より屈曲して斜上方に大きく開く。端部は内面に棱ができる尖がってとじる。内外面とも横方向の細かい荒削き。5 mm と体部の器壁より厚味がある。 体 部 下半は欠損するが、扁平球形を呈する。調整は不明だが外面は平滑、内面は凹凸がある。器壁は 2 mm と薄い。 備 考 外面は茶褐色内面は淡黄赤色を呈し胎土は細かい。焼成不良で軟質。7 × 7 cm 片による復元。 出土地 C V - 34 南北方向トレンチ 灰色砂利層
136	小型丸底壺	口径 12 強	口縁部 (欠損) 体 部 赤褐色を呈し、焼成は良、胎土は細かい。精製土器と言えよう。7 × 5 cm 片より復元。 備 考 出土地 C V - 34 南北方向トレンチ 灰色粘土混粗砂層



# 観察結果

旧河川状遺構南岸淡青灰色細砂層ならびに西端部暗茶褐色粘土層出土土器

## 小型丸底土器Da

外上方にひらく短い口縁部に球形の胴部を有し、胴部最大径は肩部に位置する。口縁部径と胴部最大径は、ほぼ同大である。調整は、胴部の最大径部以下の外面を横方向にヘラ削りし、最大径部以上はヨコナデによって仕上げている。口縁部と胴部の境界は、接合痕を消すべくヨコナデを繰り返すために、口縁部の基部で外彫する器形となる。

団版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土、色調	備考(出土地点、層位)
内版39 4	口 径 9.6 胴 径 9.3 器 高 8.6 口縁部高 2.4 胴 部 高 6.2	口縁部 外上方にひらく短い口縁部。口縁部径と胴部最大径は、ほぼ同大である。 胴 部 調整部外側のヘラ削りを底部近くでタテ方向に行なって小さな平底を削り出している。 胴部内面は、ヘラ削りナナデによつて平滑に仕上げられている。胴部断面には、接合痕が2ヶ所認められる。	砂粒を含まない精良な粘土を使用。 器底の微粒とクサリ斑様の赤褐色の斑点をなに含む。 外表面は淡灰褐色。 内面は灰黒色。	G-29地区 淡青灰色細砂層。
内版39 5 内版90 6	口 径 9.0 胴 径 9.4 器 高 8.6 口縁部高 2.5 胴 部 高 6.1	口縁部 同上。 胴 部 尖りぎみの丸底をもつ。胴部内面は、横方向(左から右)の刷毛目のうえをナナデ調整する。 内面に粘土軸の接合痕が3ヶ所認められる。	砂粒を含まない精良な粘土を使用。器底の微粒とクサリ斑様の赤褐色の斑点をなに多く含んでいる。 外表面は淡灰褐色。 内面は赤褐色。	口縁部と肩部の外側に運付痕。 L-5 淡青灰色細砂層。

## 小型丸底土器Db

外上方にひらく口縁部は、一般に基部で外彫し、端部で外反する形態をとる。胴部は、いずれも最大径部が器体の中位ないしはやや下位に位置し、扁球形を呈するものが多い。調整は、胴部外面に刷毛目を施し、内面はヘラ削りナナデによって仕上げている。さらに、刷毛目には、目の粗いものと細密なものとがあって、一個の土器を製作する際に2種類の刷毛目原体が併用されている場合がある。

団版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土、色調	備考(出土地点、層位)
内版39 1 内版90 1	口 径 9.0 胴 径 10.4 器 高 9.8 口縁部高 2.4 胴 部 高 7.4	口縁部 外上方にひらく口縁部は、基部で外彫し端部でわざかに外反する。 胴 部 最大径は、船体中位にあって底部は尖りぎみの丸底となる。 外表面の調整は、器体下半部に日の細かい刷毛目を用い、上半部では目の粗い刷毛目を用いている。器体中位では、目の細かい刷毛目のうえに粗い刷毛目を重ねている。 内面は、横方向(左から右)に丁寧なヘラ削りを施しており、器厚は0.3cm前後と薄い。	0.1cm前後の砂粒を含むが器表面は平滑である。 外表面は淡灰褐色。 内面は灰褐色。	M-II 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
内版39 2 内版90 2	口 径 10.6 胴 径 10.4 器 高 10.2 口縁部高 3.4 胴 部 高 6.8	口縁部 外上方にやや長くのび、口縁部でわざかに外反する。 胴 部 器体中位に最大径を有し、丸底でおわる。外表面の刷毛目は、器体上位が縱方向、以下は横方向にて施されている。刷毛目原体は、いずれも同一である。 内面は、横方向(左から右)にヘラ削りし、底部は指圧痕のうえをヘラで擻いでいる。	0.1cm前後の砂粒を含むが器表面は平滑である。 内面、外表面ともに淡褐色。	H-0 暗茶褐色粘土層。
内版39 3 内版90 3	口 径 8.6 胴 径 10.4 器 高 9.5 口縁部高 2.8 胴 部 高 6.7	口縁部 基部でわざかに外彫し、そのまゝ上方にのびて端部に至る。 胴 部 器体中位に最大径を有し、やや尖りぎみの底部をもつ。外表面の刷毛目は、器体上位では、ヨコナデによって施されているが、中位で横方向(右から左)、以下は纵方向の刷毛目が認められる。 内面は、全面にわたって横方向(左から右)にヘラ削りされ、器厚を0.4~0.5cmに仕上げている。	0.1~0.3cmの砂粒を含むが器表面は平滑である。石英、雲母を少數含んでいる。 内面、外表面ともに明るい灰褐色。	H-0 暗茶褐色粘土層。

図版番号	法 番(cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版39 6	口 径10.0 肩 径10.0 高 度9.6 口縁部高 2.9 胴 部 高 6.7	口縁部 向上。 胴 部 肢体中位に最大径を有し、肩部でおわる。外側の刷毛目は、器体上位で横方向、中位で横方向(左から右)、下位で乱方向に施されている。内面は、ヘラで器表面を搔いたのちナデ調整する。器厚は0.5-0.7cmと厚い。	0.1-0.3cmの砂粒を含むが器表面は平滑である。雲母、石英の微粒を少量含む。内面、外面とともに灰褐色。	I-37 暗茶褐色粘土層。
図版39 7	既規90 口 径 9.2 肩 径 9.6 高 度 8.3 口縁部高 2.2 胴 部 高 6.1	口縁部 外上方にのびる口縁部は、基部で外脛し端部でわずかに外反する形態となる。球形を呈し、外側の刷毛目は2種が認められる。器体上位は横方向の目の細かい刷毛目が施され、中位では横方向(右から左)に変化する。器体下位は乱方向に目の細かい刷毛目が施されている。内面は、底大径部以下を横方向(左から右)にへら削りして器厚を0.3cm前後仕上げている。	0.1cm前後の砂粒を含み、軟質であるが、器表面は平滑である。内面、外面ともに淡赤褐色。	I-0 暗茶褐色粘土混泥青灰色細砂層。
図版39 8	口 径10.2 肩 径10.8 高 度9.4 口縁部高 2.3 胴 部 高 7.1	口縁部 外形は基部で外脛し端部でわずかに外反するカーブを構ぐが内面は完全に外反する形態となる。器厚は0.5-0.6cmと厚い。 裏 部 球形を呈する。外側の器体上位で横方向、中位で横方向(右から左)、下位で乱方向にそれぞれ目の細かい刷毛目が施されている。内面は、全体を横方向(左から右)にへら削りして器厚を0.3cm前後仕上げている。	0.1cm前後の砂粒を含む。外長、雲母の微粒を少量含む。内面、外面ともに黄褐色。	図版95 大形量と伴出 G-29 淡青灰色細砂層。
図版39 9	既規90 口 径 9.4 肩 径10.4 高 度 8.3 口縁部高 2.5 胴 部 高 6.8	口縁部 器厚は薄く、基部で外脛し、端部でわずかに外反する器形をとる。最大径が器体下位に位置し球形が呈す。外側の刷毛目は、底大径部以上はナメによって剥離しており、最大径部以下は乱方向の刷毛目が認められる。内面は、ヘラで表面を搔いたのちナデ調整する。器厚は0.4cm前後。	砂粒をほとんど含まない精良な粘土を使用。雲母を含む。内面、外面ともに暗赤褐色。	I-0 青淡灰色細砂層。
図版39 10	既規91 口 径 9.0 肩 径10.0 高 度 8.8 口縁部高 2.7 胴 部 高 6.1	口縁部 単純に外反する短い口縁部。器厚は0.6cmと厚い。 裏 部 器体中位に底大径を有する球形の形態である。外側の刷毛目は、全体に目の細かい刷毛目を施したのち、器体上位にのみ乱方向に目の細かい刷毛目を重ねる。内面は、器体上位から中位にかけてへら削りを行なったうち全体をナデ調整する。	0.1-0.2cmの砂粒と若干の雲母を含む。器表面は、内面については平滑であるが外側は刷毛目的一部分が摩滅によって消失している。内面、外面ともに明るい灰褐色。	N-2 淡青灰色細砂層。
図版39 11	既規91 口 径 8.5 肩 径 9.4 高 度 9.3 口縁部高 2.5 胴 部 高 6.8	口縁部 基部で外脛し端部でわずかに外反する器形となる。器厚は0.6-0.7cmと厚い。球形・九筋の器形をもち、外側に刷毛目が認められる以外は底大径法が施されていない。ただし、器厚は0.7-1cmと非常に厚く、粗製であることが特徴となる。	0.1-0.2cmの砂粒を含む軟質の上部である。内面は淡赤褐色。外側はやや黄褐色。	I-0 淡青灰色細砂層。
図版39 12	既規91 口 径 7.8 肩 径10.0 高 度 9.1 口縁部高 2.9 胴 部 高 6.2	直立する口縁部をもつ端部はヨコナテによって平面的な形を形成する。 裏 部 最大径部は、器体中位で張りをもつ算盤土形の形態となる。外側の刷毛目は、底大径部以上を目の細かい刷毛目が縦方向(下から上)に施され、最大径部以下は目の細かい刷毛目が乱方向に施されている。内面は、指圧供のうえをへらで搔いて仕上げている。器厚0.5cm前後。	砂粒を多く含んだ粘土を使用。石英、雲母を含む。内面、外面ともに淡赤褐色。	H-0 淡青灰色細砂層。
図版39 14	既規92 口 径 9.8 肩 径11.2 高 度 9.6 口縁部高 3.4 胴 部 高 6.2	口縁部 “く”の字に外反したのち外脛し、頸部近くで再びわずかに外反する。 裏 部 底大径にて、梯形の小さい算盤土形を呈する。外側には、目の細かい刷毛目が器体上位で縦方向、中位で横方向下位で乱方向にそれぞれ行なわれている。内面は、へらで搔いたのちナデ調整する。	0.1cm以下の砂粒を少量含むが、底大径は底盤で器底は平滑である。雲母、石英の微粒を含む。内面、外面ともに淡赤褐色。	I-37 淡青灰色細砂混泥茶褐色粘土層。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
同版39 図版92 15 1	口 径 9.0 幅11.4 高 6.5 口縁部高 2.2 刷 部 高 7.4	口縁部 単純に外反する口縁部。口縁端部は尖りぎみにおわり、無い様を形成する。内面には、斜方向の日の無い刷毛目が認められる。  刷 部 楕円な球形を呈し、底部は平坦を頂をもつ。外面の刷毛目は、日の無いもので、乱方向に施されている。 内面は、ヘラ削りののちナナ調整する。肩部に2条の接合痕あり。器厚は0.3cmと薄い。	0.1~0.2mmの砂粒を含むが器表面は平滑である。 内面、外面ともに灰褐色。 刷部外面に9cm×8cmの黒斑。	J-1 淡青灰色細砂層。

#### 小型丸底土器E

胴部の形状は小型丸底土器Dbに類似するが、口縁部は2重口縁様の器形となるもの。刷毛目で仕上げたものとナデ仕上げのものとがある。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
同版39 図版92 13 4	口 径 8.6 幅 9.3 高 8.8 口縁部高 2.2 刷 部 高 6.6	口縁部 短く外方にひらく口縁部は、刷毛部との境でヨコナデを繰り返すことによって口縁部の器形は2重口縁部を呈するようになる。  刷 部 完全な球形・丸底をなし、外面には刷毛目を施さず、ヘラで揉いたのちナナ調整する。内面も同様の調整方法をとる。	0.1cm前後の砂粒を多く含む。 内面、外面ともに灰褐色。	I-0 暗赤褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
同版39 図版92 20 3	口 径 9.2 幅12.0 高12.2 口縁部高 3.1 刷 部 高 9.1	口縁部 脇部との境のヨコナデが強調され口縁部は中段に段を有する2重口縁の形態になる。  刷 部 球形・丸底の胴部を有する。外面には細かい亂方向の刷毛目を施し、内面は器底下位を横方向(左→右)にヘラ削りする。	0.1~0.2mmの砂粒を含む。石英粒を含む。 内面、外面ともに灰褐色。	G-29 暗茶褐色粘土層。

#### 小型粗製土器

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
同版39 同版95 19 1	口 径 8.4 幅 4.7 高 7.4	口縁部 単純に外反する口縁  刷 部 口縁部との境は、ヨコナデを繰り返すためくびれる。 球形・丸底の胴部へとづつく。 外面は粗塗なヘラ削りを行ない、内面はヘラで揉いたのちナナ調整する。 内面の表面は平滑である。	0.1~0.2mmの砂粒を含む。器底を少々含む。 内面 黒褐色。 外面 灰褐色。	M-11 暗赤褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
	口 径10.0 幅 9.0 高 5.9	口縁部 単純に外反する口縁、内面はヘラで揉いたのちナナ調整する。 全体に作製は粗陋で、手づくねによって形成したうえをあらかじめただけで仕上げている。	砂粒をあまり含まない精良な粘土を使用。 云母を含む。 内面、外側ともに灰褐色。 外面に7cm×5cmの黒斑。	I-35 暗茶褐色粘土層。

#### 小型器台C

杯部が前代のものとくらべて大きくなり、器厚も分厚いすんぐりした形態である。調整はナナを行なっている。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
同版39 同版92 16 5	口 径10.6 杯 部 高 4.0 基 高 9.6	杯 部 條状の形状をなし、縁部は丸くなっている。  脚 部 基部が細くしまり、「ハ」の字形の形状を呈する。 全体に仕上げはあまり丁寧ではない。 口縁と縁部は刷毛目全体による横方向のナナを施し、その他の部分は指ナナによって調整する。	砂粒をあまり含まない精良な粘土を使用。なかに雲母の微粒とクサヤリ繊維の赤褐色の斑点を含む。 全体に灰褐色。	小型丸底土器Da、腹Abの胎土と類似する。 O-15 淡青灰色細砂層。

### 小型器合D

小型丸底土器Dbおよび高杯Bbと同様の製作手法を有するもので、調整は内外とも刷毛目による。

國版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
國版39 國版92 17	口 径11.2 杯 部 高3.5 器 高8.5 6	杯 部 脚 部 神縁より「く」の字に外反し、外上方にのびたのち口縁部近くで外反する。内面は2つの横筋の刷毛目を施したのちヨコナデ調整する。外縁は脚合部を繩方向(上から右)の刷毛目で貫通するほかはナデ調整による。 ゆるやかに大きくなっている脚部。内面に繩方向(左から右)の刷毛目を行なう。杯部との接合部には棒さし痕が残り、杯部にまで貫通している。	0.1cm前後の砂粒を含むが器表面は平滑である。右矢、雲母を含む。全体に灰赤褐色。	L-5 暗茶褐色粘土層。

### 精査

國版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
	口 径4.0 器 高7.4	形 慎 口縁近くに円孔を1個穿った小型の鉢蓋である。内面はヘラ削りする以外はすべて指おきえナデ調整による。	0.1cm前後の砂粒を多く含むが器表面はナデによって砂粒を押さえ込んでいる。 全体に赤褐色。	K-27 淡青灰色細砂層。

### 高杯Ba

水平方向ないしはいくぶん外上方にのびる杯底部より、ゆるやかに角度をかえて口縁部がつき、外反しつつ端部にいたる。底部と口縁部の境は、漸移的で、明瞭な稜は形成しない。杯底部の外面には、脚部との接合部をへて削って調整している。また、脚部との接合部に棒さし痕は認められない。

國版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
國版39 國版93 21	口 径16.2 杯 部 高5.1 器 高10.4 (現存値) 2	杯 部 脚 部 わざかに外上方にのびる杯底部より、ゆるやかに角度をかえて口縁部がつき、外反しつつ端部にいたる。 杯部との接合部は、ヘラ削りするが、削りの痕跡は弱めではない。脚柱部内面は、しづり痕+ヘラ削りで調整している。	0.1~0.2cmの砂粒を含むが器表面は平滑である。 杯部は黄褐色、脚部は灰褐色のかかった灰褐色。	I-9 暗茶褐色粘土層り淡青灰色細砂層。
國版39 國版93 22	口 径15.6 杯 部 高5.4 器 高12.8 1	杯 部 脚 部 同じ高杯で全体の基形のわかるものはこれのみである。脚部においても刷毛目を使用した痕跡はみられず、刷毛目使用の痕跡の高い脚部内面は、ヨコナデによって仕上げている。	胎土には0.1cm以下の砂粒を含むが、器表面は平滑である。 全体に黄赤褐色。	M-10 淡青灰色細砂層。

### 高杯Bb

水平方向にのびる杯底部より、ゆるやかに角度をかえて口縁部がつき、外反しつつ端部に至る。口縁部は、高杯Baに比して、外反するカーブが明瞭である。底部と口縁部の境は、漸移的で、明瞭な稜は形成しない。調整は、杯部外面に繩方向の刷毛目を施し、内面にも横ないしは斜方向の刷毛目を施す。また、脚部の調整にも刷毛目が使用され、とくに脚部内面に多く認められる。さらに、杯部と脚部の接合部には、脚に心棒をさし込んだまま杯部に挿入されるために、接合部には棒さし痕の残る場合が多い。接合部の外面にはみ出した粘土については、刷毛目原体によって再度調整される。

國版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
國版39 國版93 25	口 径18.0 杯 部 高5.8 器 高11.6 (現存値) 4	杯 部 水水平方向にのびる底部より、ゆるやかに角度をかえて口縁部がつき、外反しつつ端部に至る。外面は繩方向の刷毛目、内面は繩方向の刷毛目によって削壓する。 棒さし痕は認められず、脚柱部内面はしづり痕のうえを横方向(右から左)にへら削りする。 また、外縁のヘラ磨きは、杯部との接合後のものである。	0.1cm前後の砂粒を含む。雲母の微粒を若干含む。 全体に灰褐色。	M-10 暗茶褐色粘土層り淡青灰色細砂層。

回版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
回版39 回版93 26	口径17.4 杯部高5.6 器高13.5 6	杯 部 形態は同じ。 刷毛目調査は、最終段階の仕上げで行われたヨコナデによって完全に消されている。  脚柱部内面の上半部にしばり痕が認められるが、その他の部分はヘラ削りによって消されている。脚部内面は、横方向(左から右)の刷毛目を施している。	0.1~0.2cmの砂粒と石英粒を含む。 全体に淡赤褐色。	G-23 淡青灰色細砂層。
回版40 回版91 1	口径16.4 杯部高5.9 器(現存値) 9.3 3	杯 部 形態は同じ。 調査は、外側に横方向の刷毛目、内面に斜方向の刷毛目を施す。口縁部外面と内面全体は、そのうえにヨコナデを行なっている。ヨコナデは輪軸を利用したものか。  脚柱部の一部が残るのみである。 調査は、外側をヘラ削りし、杯部との接合部はそのうえに刷毛目を施す。内面には伸きし痕が残り、ヘラ削りを行なっている。	0.1cm前後の砂粒を含む。 杯部内面は灰褐色。 杯部外面はやや赤みがかった灰褐色。 脚部は黄赤褐色。	H-0 淡青灰色細砂層。
回版40 2	口径18.0 杯部高5.9	脚 部 脚柱部の一部が残るのみである。 調査は、外側をヘラ削りし、杯部との接合部はそのうえに刷毛目を施す。内面には伸きし痕が残り、ヘラ削りを行なっている。	0.1cm前後の砂粒を含む。 表面は平滑である。	I-0 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
回版40 3	口径16.6 杯部高5.3	杯 部 形態は同じ。外側には縱方向の刷毛目がそのまま残るが、内面はヨコナデによって消されている。	0.1cm前後の砂粒を多く含む。石英粒を含む。 表面は平滑。 全体に灰褐色。	E-29 淡青灰色細砂層。
回版40 回版94 4	口径16.0 杯部高5.0 4	杯 部 形態は同じ。内面の刷毛目はヨコナデによって消されている。 脚部との接合部にみられる伸きし痕の形状が、それまでのものと若干変化していることに注意される。	0.1cm前後の砂粒を含む。グサリ櫛様の赤褐色の斑点と雲母、石英の砂粒を少く含む。 全体に灰褐色。	高杯23と併出した。 I-1 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
回版40 回版94 5	口径17.7 杯部高5.5 器高12.8 7	杯 部 形態は同じ。外側に縱方向の刷毛目、内面に斜方向の刷毛目を施す。口縁部外面と内面の全体は、そのうえにヨコナデを行なっている。ヨコナデは輪軸を利用したものである。特に内底面には、輪軸巻き上げナミツビキの痕跡に似た調査痕がみられる。中空の脚柱部より、ゆるやかに角度をかけて脚部がつく。  脚柱部外面のヘラミガキは、杯部との接合部に行なわれている。内面の調査は、脚柱部をヘラ削り、輪軸を横方向(左から右)の刷毛目で行なう。脚部内面の刷毛目は、杯部の刷毛目とは原体が異なるものである。	0.1cm以下の砂粒を含むが、精良な粘土を使用している。 杯部は黄赤褐色。脚部は赤褐色。	M-11 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
回版39 回版93 23	口径16.0 杯部高4.8 器高9.1 (現存値) 3	杯 部 形態は同じ。 内面、外側ともに、ヨコナデを行ない、高杯Eに特徴的な刷毛目は認められない。 脚部との接合部には、伸きし痕がみられないことから、この高杯の製作にあたっては、脚部を先に作りそのうえに杯部粘土を積み上げていったと思われる。	砂粒は押さえ込まれており、器表面は平滑である。 雲母、石英の砂粒を少量含み、グサリ櫛様の赤褐色の斑点が認められる。 全体に淡赤褐色。	高杯4と併出した。 I-1 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
回版39 回版93 24	口径16.0 杯部高5.8 器高12.5 6	杯 部 脚柱部と口縁部の境界がなく、脚部から内壁しつ外上方にのびる。脚部から内壁しつ外上方にのびる。 内面、外側ともにヨコナデによって仕上げるが、内面には一部に刷毛目が残っている。  脚 部 脚柱部上半が中実の脚部。調査は、脚柱部においては内面をヘラで盛き外面をヘラ削きし、脚部は内面、外側ともヨコナデによって仕上げている。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。石英粒を含む。 全体に灰褐色。	L-5 淡青灰色細砂層。

### 高杯C1

碗状の杯部をもつ類であるが、杯部の形態には底部と口縁部が見分けられ、口縁端部でわずかに外反するものがあるなど高杯Bに類似する点が認められる。調整は、内面・外面ともに口縁部はヨコナデし底部はナデが行なわれている。また、杯部と脚部の接合は搜入法によって行ない、接合部外側にはみ出した粘土はヘラで搔き取っている。脚部は、脚柱部が短く、なだらかに裾部へ移行する形態である。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)	
図版40 6	図版94 2	口径13.8 杯部高5.2 器高11.4 脚部	外上方にのびる底部より、ゆるやかに角度をあげて口縁部がつく。 脚柱部は短く、なだらかに脚部へ移行する。 調整は、内面をしばり十へラ削りで行ない、外側に接合部の調整をかねてヘラ磨きが施されている。脚柱部はヘラ切り十へラヨコアテで調整している。	砂粒をあまり含まない 精良な粘土を使用。 全体に灰褐色、一部黄褐色。	L-1 淡青灰色細砂層。
図版40 7	図版94 1	口径14.4 杯部高4.8 器高10.4 脚部	形態は高杯Bに類似し、口縁部と底部の境が比較的明顯である。口縁部内面には円孔目がみられる。 脚柱部と脚部の境をもたない小形の脚柱。 杯部との接合部には棒さし痕がみられる。 内面の調整は、脚柱にあたる部分がしづらり、脚部は刷毛目(底体は杯部のものと同じ)による。	0.1cm前後の砂粒を含むが器表は平滑である。 全体に黄褐色。	N-4 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
図版40 8	11	口径12.5 杯部高5.5 脚部	外上方にのびる底部より、ゆるやかに角度をあげて口縁部がつく。底部は丸くなっています。 杯部だけが接合部で完全に剥離していることより、杯部と脚部は別々に製作した後、乾燥がかなり進んだ段階で接合されたことが観察できる。	0.1~0.2mmの砂粒を含む、やや軟質の土質である。 全体に赤褐色。	N-6 淡青灰色細砂層。
図版40 9	図版94 6	口径13.9 杯部高5.1 脚部	同上。	砂粒をあまり含まない 精良な粘土を使用。ヨコナデの面がスリップの様をなしている。 全体に鮮やかな赤褐色。	K-21 淡青灰色細砂層。
図版40 10	口径13.6 杯部高5.2 器高7.8 (現存底)	脚部	基部が細いばかりは同上。ただし、脚柱部に円孔が2孔穿たれている。高杯の脚部に円孔を有するものは、本遺跡では数少ない。	砂粒をあまり含まない 精良な粘土を使用。 全体に明るい灰褐色。	L-1 淡青灰色細砂層。

### 高杯C2

図版40 11	口径14.6 杯部高5.2 器高9.3 (現存底)	脚部 脚柱部	完全な楕円を呈し、口縁部は直立しておわれる。内外面ともにナデ調整によって仕上げている。 杯部との接合部には棒さし痕がみられ、杯底内面にまで貫通している。外側にヘラ磨きが施され、内面にはしばり痕が残っている。	0.1cm前後の砂粒を含むが器表は平滑。器底の微粒を含む。全体に明るい灰褐色。	I-33 淡青灰色細砂層に暗茶褐色粘土層上層。
------------	------------------------------------	-----------	--	---	----------------------------

### 高杯脚部

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)	
図版40 12	図版95 4	脚部 径9.4 器高5.0	脚柱部内面にしばり痕がそのまま残り、杯部内面は目の粗い刷毛目で調整されている。	砂粒をあまり含まず、器表は平滑である。器底の微粒を含む。全体に灰褐色。	K-3 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
図版40 13		脚部 径9.5 器高6.0	脚柱部よりゆるやかに脛曲して脚部が広がる。器底が低い小形の脚柱の内面の調整は、脚柱部がしづらり、脚部は横方向の刷毛目による。	精良な粘土を使用。外側は赤褐色。内面は灰褐色。	O-5 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
図版40 14		脚部 径11.8 器高7.2	内面は、脚柱部がしづらり十へラ削り、脚部が刷毛目で調整する。脚部との接合方法は同上。	砂粒をあまり含まず、器表は平滑である。全体に明るい赤褐色。	H-0 暗茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
図版40 16		脚部 径12.4 器高8.8	内面は、脚柱部がしづらり十へラ削り、脚部が刷毛目で調整する。脚部との接合方法は同上。脚部下面は杯部内面としてナデ調整されている。	0.1cm前後の砂粒を含む。器底、石英の微粒を含む。全体に黄赤褐色。	脚部内部にヘラ記号X印あり。 O-15 淡青灰色細砂層。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版40 17	捲部 径12.4 高 8.8	脚部 中空の脚柱部より屈曲して脚部が低くなる。 内外ともナデ調整によって仕上げている。	0.1cm前後の砂粒を含む。 全体に灰褐色。	H-33 暗茶褐色粘土層。
国版40 18	捲部 径12.0 高 8.5	脚部 脚柱部内面はヘラ削りを行なう。脚部と接合部は粘土の剥離が認められ、この窓杯の製作にあたっては脚部を先に作り、心棒を差し込んだままの状態で脚部の粘土経を積み上げていったことがわかる。脚部は横方向のナデ。	0.1cm前後の砂粒を含むが、器表面はヘラ磨きおよびヨコナデの跡がスリップの模をなしている。 全体に灰褐色。	G-22 淡青灰色細砂層。
国版40 19	捲部 径14.1 高 7.5	脚部 脚柱部がヘラ削り、脚部は横方向のナデ調整。脚部と接合方法は、それぞれ別々に成形したものを探入法によって接合する。	0.1cm前後の砂粒を含む。 全体に灰褐色。	G-31 暗茶褐色粘土層。

#### 變Ab

球形、丸底の脚部に、「く」の字に外折し、外脛ぎみに立つ口縁部を有する。口縁端部は、内面に肥厚し、肥厚部分の上端はヨコナデによる水平な面をもつ。調整は、脚部外周を刷毛目調整し、内面をヘラ削りによって器厚を薄く仕上げている。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版41 1	口 径12.5  脚 部	口縁部 「く」の字に外折し、外脣ぎみに立つ。脚部は内方に肥厚し、上端は水平な面となる。 球形、丸底の脚部。 外面の調整は、口縁に近い部分を横方向の刷毛目ヨコナデによる。脚部は横方向の刷毛目に斜方向の刷毛目を重ねる。 内面は口縁部との境よりヘラ削りを開始し、器厚を0.3cm程度に薄く仕上げる。	砂粒を含まない精良な粘土を使用し、器の内側に微粒を含む。 全体に淡灰褐色。	同様の粘土を使用するものに小型丸底器Da小型器C2がある。 O-2 淡青灰色細砂層。

#### 變Ac

基本的な形態については變Abと同一であるが、2、3の相違点を指摘できる。まず第1に、口縁部の外折する角度が鈍く、口縁端部の肥厚の形態も内側に内傾面を有する。さらに、脚部外面の刷毛目は月の粗いものが多く、内面の削りは口縁部との接合部から開始されずに、肩部より行なわれる。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版41 2	口 径24.0 脚 径24.0 高 15.7 (現存値) 7	口縁部 「く」の字に外折し、外脣ぎみに立つ。脚部は内方に肥厚する。脚部の形態は内側に内傾面を有するもの。 球形、丸底の脚部。最大径は中位よりや上方にある。 外面の調整は、脚部を横方向の刷毛目で、以下を乱方向の刷毛目で行なう。内面は、口縁部に近い部分を横方向(左から右)のヘラ削りによって行なう。器厚は0.3~0.4cm程度。	0.1~0.3mmの砂粒を含む。石英粒を含む。 全体に灰褐色。	外面全体に塗が付着する。 O-2 淡青灰色細砂層。
国版41 3	口 径14.3 脚 径21.0 高 21.5 2	口縁部 向上。 脚部 形態は向上。外面の調整は、脚部を刷毛目全体による横方向のナデで仕上げ。最大径部は横方向の刷毛目を重ねる。以下は乱方向の刷毛目を施している。また、脚部には、刷毛原体の先端による剝離が2カ所にみられる。内面の調整は向同上。器厚は0.3~0.5cm程度。	0.1cm前後の砂粒を含む。石英粒を含む。 全体に灰褐色。	脚部下半に撲付着と漆表面の剝離が認められる。 H-33 暗茶褐色粘土層に混り淡青灰色細砂層。
国版41 4	口 径13.8 脚 径22.8 高 25.5 (推定) 3	口縁部 向上。 脚部 脚の彎ったやや長手の器体。 外面の調整は、脚部を横方向の刷毛目で行ない、以下を乱方向の刷毛目で行なう。内面は、口縁部に近い部分をナデ調整し、脚部から最大径部までを横方向にヘラ削りする。最大径部以下はヘラナデ調整による。器厚は0.4~0.6cm程度。	0.1cm前後の砂粒を含むが器表面は平滑である。 全体に灰褐色。	G-0 淡青灰色細砂層に暗茶褐色粘土層。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版41 5	口 径15.2 高 23.1 底 24.4	口縁部 向上。  胴 部 形態は向上。外面の調整は、口部を横方向の細かい刷毛目で丁寧に行なわれている。内面の調整は向上。器厚は0.4cm。	0.1cm前後の砂粒を含む。 外面は赤褐色、内面は灰褐色。	胴部外面に焼が付着する。 J-18 淡茶褐色粘土混り淡青灰色細砂層。
図版41 6	図版96 口 径15.0 高 23.1 底 24.4	口縁部 向上。  胴 部 形態は向上。 外面の調整は、口部から最大径部にかけて横方向に目の細かい刷毛目で行ない、最大径部以下は縱方向(下から上)の刷毛目で行なう。 胴部には、刷毛目原体の先端による削突が3ヵ所認められる。削突は、左から右の方向に行なわれている。 内面の調整は、口縁部に近い部分をナデ調整し、口部以下を斜方向(左から右下)にヘラ削りする。底部では、下から上へ搔き上げるようして筋膜を削っている。器厚は0.3~0.5cm程度。	砂粒を含まない精良な粘土を使用。 全体に淡黄灰色。	2次焼成をそれほど受けず、器表面には、内面、外面ともに赤色繪付物が全面にわたり付着している。 J-33 淡青灰色細砂混り淡茶褐色粘土層。
図版41 7	図版96 口 径13.4 高 19.3 底 21.4	口縁部 形態は向上。 胴部と結合部の外面に縱方向の刷毛目がヨコナデによって消されながらもわずかに残存する。  胴 部 やや長脚化した胴部。 外面の調整は、口縁部に近い部分が刷毛目ナデ調整され、胴部以下は纵方向の刷毛目によって調整されている。 内面の調整は、口縁部に近い部分をナデ調整し、胴部以下を斜方向(左から右下)にヘラ削りする。胴部下手の削りは、器表面の凹凸を搔きならした程度のものである。器厚は0.3~0.6cm程度。	0.1cm前後の砂粒を少量含むが器表面は平滑である。器厚を多く含む。 全体に深い黄褐色。	胴部下に13cm×10cmの黒斑、反対側には焼が付着する。 K-21 淡青灰色細砂層。

#### 要B

球形、丸底の胴部に短く外反する口縁部がつき、口縁端部は外面に若干肥厚し、上端は水平面をなす。腰Aとは、口縁部の形態および胴部の調整方法に相異がある。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版41 8	図版90 口 径13.0 高 21.9 底 22.9	口縁部 口縁端部の肥厚は、端面を水平面とすることのためヨコナデを行なう際に外方へはみ出した粘土を再度ヨコナデしたものである。  胴 部 外面の調整は、最大径部以上を斜方向(左から右下)の刷毛目で行ない、最大径部以下を縱方向(上から下)の刷毛目で行なう。刷毛目は、いずれも目の細かいものである。 内面の調整は、口縁部に近い部分をナデ調整するほか、刷毛目原体による削りナデ調整によって仕上げている。器厚は0.25~0.4cm程度。	0.1cm前後の砂粒を少しあがるが器表面は平滑。 全体に淡赤褐色。	胴部外面の肩以下に焼が付着する。 O-3 淡青灰色細砂層。

#### 要A

二重口縁の大型品で、腰折部の外側は凸状に突出して段をなす特徴をもつものである。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版40 20	図版97 口 径21.5	口縁部 端部分の段は、生焼きの下段部の上に上段をつけたことによって生じたもので、下段の先端は腰口縫状をなす。また、口縁端部の外側には凸状がめぐり、上端は水平な面となっている。  胴 部 形状は不明であるが、破片をみると両部外側には斜方向の目の細い刷毛目が施されていたことがわかる。	0.1cm前後の砂粒を少し含む。器厚も少しづつ認められる。丁寧な作りの上品である。 全体に淡赤褐色。	M-11 淡茶褐色粘土層。

### 壹Bb

外上方にひらく直口口縁を有し、口縁端部は内外に肥厚する。作り方、ならびに胎土が良好なものである。

因版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
因版42 16	11 径17.4	口縁部 外反しつつ上方にのびる口縁部の端部は半抜削となり、内外に肥厚する。  胸部 口縁部から「く」の字にくびれてつながった胸部は、外面を日の細かい刷毛目で調整し、内面は胸部以下を横方向(左から右)にヘラ削りしている。 外面には、刷毛目原体の先端による刺突を2個有する。	0.1cm前後の砂粒を少 量含むだけの精良な粘 土を使用。  表面はスリップ調整 の際のために淡灰褐色 を呈す。スリップ痕の 刺突面は淡赤褐色。	胸部に煤が付着する。 K-21 淡青灰色細砂層。

### 壹Bb

直口口縁の壹のうち、作り方ならびに胎土が粗質のものである。

因版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
因版42 18	因版97 1	口 縫部 径18.2 径29.0 高29.9  胸 部 胸部より鋭くくびれて胸部につながる。高さより最大径の方のがわずかに大きい形をなしている。 外面の調整は、指ナデを行なうが、最表 面には凹凸がかなり残っている。 内面の調整は、胸部以下を横方向(左上 から右下)にヘラ削りをあらかじめ行なうが、 底部には指圧痕がそのまま残っている。	0.1~0.3mmの砂粒を含 む。 全体に暗い灰褐色。	胸部下半に10cm×20cm の炭灰あり。反対側は 不明。 1-0 淡青灰色細砂層。
因版42 17	因版97 5	口 縫部 径15.3 径21.6  胸 部 外面は、あらいヘラ削きによって表面 は平滑にされ、内面は全体をヘラ削りして 底部に近いほど窓原を薄く仕上げてい る。	0.1~0.3mmの砂粒を大 量に含む。 全体に黄赤褐色。	J-1 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。

### 壹C

口縁端部は壹Acと同様に肥厚し、口縁部の中途で外側に鈍い稜を、内側に狭い段をなして二重口縁に仕上げてある。胸部は、頭部よりくびれてつながり肩の張ったやや長手のもので丸底で終る。

因版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
因版40 21	因版97 3	口 縫部 径15.6 径28.0 (補定)  胸 部 肩の張るやや長手のもので丸底でおわる。 外面の調整は、胸部以下に刷毛目で行ない、以降を乱力方向に刷毛目調整する。 内面は、口縁部に近い部分を指圧痕ナデ調整し、胸部以下を横方向(右から左)にヘラ削りする。底面は0.4cm程度。	0.1~0.2mmの砂粒を含 むが表面は平滑にさ れています。 全体に灰褐色。	口縁部内面に黒色塗付 物が付着する。 O-3 淡青灰色細砂層。

### 壹Cを横倣した格子叩き目をもつ壹

因版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
因版40 22	因版97 4	口 縫部 径16.0 径12.5  胸 部 形態は壹Cに類似する。山棱端部は肥厚せずに平坦面となっておわる。  胸 部 球形、丸底と思われる。 外面の格子叩き目が施され、そのうえをスリナメで調整する。 内面は、肩部以下もナデによって仕上げられ、叩き目に対応する当て板の樹脂は認められず。	0.1~0.3mmの砂粒を含 む。石英とクサリ礫様 の赤褐色の斑点をなか に含む。  全体に灰茶色で塊状 がりは須恵器の生焼け 品に類似している。	胸部下半に煤が付着す る。 1-37 淡青灰色細砂層。

### 杯身A

たちあがりは短く内傾し、底部の調整に回転を利用しないヘラ削りを行なったものである。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版42 10	図版98 3	口 径11.2 受 部 径13.4 高 5.4 (推定)  受 部 外方に鋸い縁をもって突出するが、蓋を 支える面は平滑面にならず、斜上方に傾 斜する。調整は、内外とも回転を利用し ないヨコナゲによる。  体 部 器高の深い体部である。外面には、全体 の約4分の1にわたって回転を利用しないヘラ 削りが時計回りに行なわれている。内面 は、横方向のナゲによって仕上げている。 破損面は、粘土紐の接合部が削除したもの	0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に灰褐色をなし、 充分に還元されていな い状態を示す。	1-31 灰色和砂層(暗茶褐色 粘土層の下層)。

### 杯身B

たちあがりは内傾するが杯身Aに比して長く、端部は丸く仕上げる。また体部は回転を利用したヘラ削りによって丁寧に調整されたものである。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版42 9	図版98 4	口 径9.2 受 部 径10.7 高 4.9  受 部 外上方に無く突出し、端部は丸くなっている。 体 部 底部は平坦な部分をもつが、全体に丸み を感じさせる形態である。調整には、回 転を利用した時計回りのヘラ削りが全体 に行なわれ、調整は丁寧である。ま た、内底面はナゲによって平滑に仕上げ る。	きわめて粘土質の粘土を 使用。 内面は暗灰色、外表面は 黒色焼物が付着する。 焼成は堅硬。	K-33 暗茶褐色粘土層裏に淡 青灰色細砂層。

### 杯身C

I期の須恵器として特徴的なたちあがりが高く直立し、全体にシャープな感じのものである。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版42 11	図版98 6	口 径11.5 受 部 径13.3 高 5.0  受 部 外上方に突出し、端部は縁を形成する。 体 部 底部は丸みをもつ。外面の約4分の1を時計回 りにヘラ削りし、内面は回転ナゲ調整する。	精良な粘土を使用。体 部外表面は銀色。黒色焼 物が認められる。そ の他の部分は淡灰褐色。 焼成は堅硬。	体部外面上にヘラ記号 あり。 G-33 灰色砂利層(暗茶褐色 粘土層の下層)。
図版42 12		口 径10.8 受 部 径13.0 高 5.3  受 部 ほぼ水平に張り出し、端部は鋸い縁をも つ。 体 部 底部が丸みをもつ。外面の約4分の1を時計回 りにヘラ削りする。内面は、回転ナゲ、中 央部はスリ淌し状ナゲ仕上げ。	胎土には土師器にみら れるようなクサリ繊維 の断点を含む。 外表面は淡灰褐色、内面 は淡黃褐色。 焼成はやや軟質である。 器表面は平滑である。	E-37 暗茶褐色粘土層裏に淡 青灰色細砂層。

### 杯蓋A

天井部はわずかなふくらみをもち、中心部になか窪みのつまみを有する。器厚は0.5~0.7cmと厚い。口縁部はやや外開きで端部は薄くなつて内傾する。天井部と口縁部、天井部外面に筋による刺突がめぐる。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版42 4 国版98 2-a 国版99 2-b	口 縁 径 11.9 高 4.6	口縁部 短く外反し、端部は内傾する面をもつが内側に棱はない。 天井部 口縁部と天井部の境の線は水平方向に突出する。端部は丸くなっている。 天井部はふくらみをもち、中心につまみがつく。つまみは上面が盛り、中心部分にわずかな突起をもつ。 外面に回転点文が2巻めぐり、そのあいだに直輪文を施す。器口は0.8cm巾に7本。 外面の調整は、全体を時計回りの回転ナゲで行なう。内面は、内底面がナゲ調整、その他の部分は回転ナゲを行なう。器厚は10.7cmと厚く、鉛重な感じの土器である。	精良な粘土を使用。内底面のみ灰褐色、その他は暗青灰色。 焼成は堅緻。	M-0 淡青灰色細砂層。

### 杯蓋B

低く平坦な天井部に、直立する口縁部がつくシャープな感じの杯蓋である。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版42 5 国版98 I	口 径 13.7 天井部径 13.9	口縁部 ほぼ直立し、端部でわずかに外反する。 下端は平坦な面となる。  天井部 口縁部との境の線は鋸く外方に突出し、先端部の径は口径よりもわずかに大きくなる。 天井部は低く平楕で、全周を丁寧にへラ削りしている。削りの方向は時計回り。 内面は、回転ナゲ調整され、中央部のみナゲ調整を行なう。全体に、作りが丁寧で器厚は薄く仕上げられている。	精良な粘土を使用。 全体に暗灰青色。 焼成は堅緻である。	N-19 暗茶褐色粘土層り淡青灰色細砂層。

### 無蓋高杯A

椀状の杯部に、基部が細くしまり裾広がりの脚部がつく小型の無蓋高杯である。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版42 2 国版98 8	口 縁 径 12.2 高 8.7	杯部 棱状なし。口縁端部に凸筋がめぐる。 上端は平坦面となる。(口縁部外面には、断面二方形の小さな凸筋が回転ナゲによって削り出されている。底面の調整は、内面を指揮形ナゲ調整し、外表面を回転ナゲ用のラウナゲ調整する。)  脚部 基部が細く、ゆるやかに下方にひらく脚部を有する。脚端部は上方に拡張されて上端に棱をもつ。	0.1cm前後の砂粒を少 量含む。 全体に暗青色。 焼成は堅緻である。	G-33 暗茶褐色粘土層。

### 無蓋高杯B

杯蓋を逆にしたような杯部と外方に踏んばった脚部を有し、脚部外面に一条の凸筋がめぐる。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版42 3 国版98 7-a 国版99 7-b	口 縁 径 12.5 高 7.7	杯部 杯蓋を逆にした形状。口縁端部はわずかに内傾する平坦面となる。内底面に径6cmの凸筋が円形にめぐる。調整は、内底面がナゲ、底部外面はへラ削り+回転ナゲ、その他は回転ナゲ調整する。  脚部 短い脚柱部、基部は広がりをもつ「ハ」の字形に踏んばった脚部。脚端はそのまま平底面となつて内面が接地面となる。	精良な粘土を使用。 全体に暗青色。 焼成は堅緻。	M-1 淡青灰色細砂層。

### 無蓋高杯C

外面に波状文を施文し、小さな把手を有する大型の無蓋高杯である。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版42 1	口 径20.8	杯部 口縁端部は丸みをもち内側に沈線がめぐる。外側に断面三角形の凸帯が2条、回転ナデによって作り出されている。凸帯間に波状文を一帯施文する。底部との境には小さな把手が付く。	精良な粘土を使用。全体に暗青灰色。焼成は堅緻である。	K-4 淡青灰色細砂層。

### 體

いずれも口縁部が欠失する。胴部は、大型のものと小型のものとがある。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版42 8	國版80 5	胴 径17.6 高12.8 (現存値)  胴 部 口が張り尖りぎみの丸底の底部をもつ。肩部外側は2本のナラズ線で区画したあいだに横引き波状文を施文する。波状文の目は10mm/cmと細かいものである。波状文のあいだに円孔を1個空っている。調整は、外面を時計回りの回転ナデによって行ない、内面は上半部を指圧窓十組回転ナデで、下半部を時計回りのヘラ削りで行なっている。	精良な胎土。 暗青灰色を呈し、焼成は堅緻。	L-3 暗茶褐色粘土層。
国版42 7	胴 径11.8 高 8.2 (現存値)	口縁部 欠失する。  胴 部 底部が平担な球形をなす。肩部に径1.1cmの円孔を1個有する。調整は、回転を利用しない横方向のナデによって行なわれ、内面下部は指成形のままである。	0.1cm筋後の移粒を含む。 全体に暗青灰色。 焼成は堅緻。	I-33 暗茶褐色粘土層。

### 體A

口縁端部近くと口縁部文様帶間に凸帯をめぐらせ、胴部はほぼ完全に叩き目をスリ消している。口縁部から胴部に細かい波状文をめぐらす。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版43 1	國版100 1	口 径18.6 高26.8 (推定)  胴 部 張りをもった胴部。肩部外側に細かい横引き波状文と直線文を施文する。調整は、外表面を縱方向の叩きナスリ消し状ナデによって行ない、内面は全面をナデ調整する。外面の叩き目は、痕跡をほとんど残さないほどに丁寧に消されていいる。	精良な粘土を使用。 全体に暗青灰色。 焼成は堅緻。	K-27 淡青灰色細砂層。

### 體A

口縁端部近くに一条の凸帯を有し、端部を丸く仕上げるTK73型式の體。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版42 13	口 径44.7 (推定) 2	口縁部 直立したのち外反し、端部は丸くなっている。端部近くに凸帯がめぐらす。凸帯の先端は丸く縁をもたない。調整は、端部に近い部分を回転ナデによって行ない、以下はヘラ状器具で擡き削って調整している。削りの方舟は、外面が縦方向に一舟横方向の削りを重ね、内面は横方向(時計回り)に削る。	精良な粘土を使用。 全体に暗青灰色。 焼成は堅緻。	M-1 淡青灰色細砂層。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版42 14	口 径18.1	口縁部 口径が小さいほか形態は同じ。 側 部 調整は、口縁部の内外とも回転ナデ。外向に平行叩き目が残る。内面は横方向のナデによって完全にスリグロシカート。	精良な粘土を使用。 全体に暗灰色。 焼成は堅緻。	M-1 淡青灰色細砂層。

#### 布目压痕を有する小型壺

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版42 15 16	口 径 高 底 7.1 9.8 9.3	口縁部 立立する口縁部。端部は薄く突っておわる。内面はヘラ削りナデ調整。外面には布目の压痕ナデ調整。 側 部 斜めの張った丸底の器身。器厚は口縁部、脚部とともに0.3cmと薄い。 調整は、外面へラミガキ、内面はヘラ削りナデ調整。	精良な粘土を使用。 灰茶色で須恵器の生焼品に似ている。底部 外面は一部灰黒色。	L-6 淡青灰色細砂層。 井戸状構内。

#### 把手付椀

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版42 6	口 径 高 底 10.0 7.3	口縁部 わざかに外反し、端部は薄くなっている。 側 部 口縁部との接に一筋の接縫がめぐる。接縫の下には凹線がみられる。外面に目の細かい波状文が一部施されている。 調整は、底部の内面、外側とともに回転を利用しないヘラ削りを行なう。 他の部分は回転ナデ調整。	精良な粘土を使用。 全体に暗青色。 焼成は堅緻。	L-5 淡青灰色細砂層。

#### I-27地区周辺河川内堆積土(暗茶褐色粘土混り灰色砂層)出土遺物 杯身C

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版43 6	口 径 受 部 器 高 11.6 14.0 5.1	たらあがり 内傾したのち直立し、端部は内傾面をもつておわる。 受 部 外上方に突出し、端部は丸い棱をもつ。 体 部 浅い体部に尖りぎみの底部をもつ。外側のほぼ全面を時計回りにヘラ削りをする。 内面はナデ調整によって半滑に仕上げる。 体部の器厚は0.3~0.5cmと薄手である。	精良な粘土を使用。 体部外側は青灰色。 他は灰緑色。 焼成は堅緻。	I-27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。
図版43 7	口 径 受 部 器 高 11.0 13.3 5.3	たらあがり 内傾し端部は丸く仕上げる。 受 部 ほぼ水平に突出し、端部は丸い棱をもつ。 体 部 受部とのあいだに明瞭な段をもたず外側面の尖を時計回りにヘラ削りをする。 内面はナデ調整、他は回転ナデを行なう。	0.1~0.2cmの砂粒を少 量含む。 全体に灰茶色、一部青 灰色。 焼成されない状態で焼 き上がっている。 焼成はやや軟質。	I-29 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。
図版43 8	口 径 受 部 器 高 12.0 13.8 5.3	たらあがり 内傾し、端部は内傾面をもつておわる。 受 部 外上方に突出し、端部は丸みをもつ。 体 部 底面はほぼ平滑で、外側の尖を時計回りにヘラ削りをする。 内面は全体に回転ナデによって仕上げる。	精良な粘土を使用。 全体に暗褐色。 焼成されない状態で焼 き上がっている。 焼成は軟質。	外側に煤、内側に炭 化物が付着する。 I-29 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。
図版43 9	口 径 受 部 器 高 10.7 12.5 4.7	たらあがり 内傾したのち直立する。端部はわざかに内傾する平底面となる。 受 部 外上方に突出し、端部は棱をもつ。 体 部 浅いが全体に丸みをもつ。外側の尖を時 計回りにヘラ削りし、内面は回転ナデによ って丁寧に仕上げる。	精良な粘土を使用。 全体に暗青灰色。 焼成は堅緻。	I-25 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版43 図版10) 10	口 径10.2 受 部 径12.4 高 5.2 4	口部 内傾したのち高く直立し、端部近くで再び内傾する。端部はそのまま平坦面となっておわる。 受 部 外上方に突出し、端部は鋭い棱をもつ。 体 部 全体に丸みをもつ。外面の筋は時計回りにヘラ削りし、内面は回転ナギによって仕上げる。外側のヘラ削りはとくに丁寧に行なわれている。	精良な粘土を使用。 全体外側は灰茶色、その他の部分は焼成後色焼元されない状態で焼き上がりしている。 焼成はやや軟質。	I-29 暗茶褐色粘土混り灰色砂層。

#### 杯身D

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版43 11	口 径10.5 受 部 径12.6 高 5.2	口部 内傾したのちゆるやかに立ち、端部は丸くなっている。 受 部 ほぼ水平に突出し、端部は丸い。 体 部 全体に丸みをもつ。外面の筋は時計回りにヘラ削りし、内面は回転ナギによって仕上げる。底部の沿厚は0.8cmの厚みをもつ。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 全体に灰褐色。 焼元されない状態で焼き上がりしている。 焼成は軟質。	口縁部から受部外側にかけて2次焼成により器表面が剥離している。 J-27 暗茶褐色粘土混り灰色砂層。

#### 杯蓋B

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版43 5	口 径12.7 高 3.7 (推定)	口縁部 外反し、端部はシャープな内傾面をもつ。 天井部 山縁部との境の辺は鋭く、後の辺は口徑とはほぼ同大である。 天井部は最も平坦である。外面の筋以上を時計回りにヘラ削りし、内面は回転ナギによって丁寧に仕上げる。	0.1cm前後の砂粒を少 量含むが精良な粘土を使用。 外面は灰色、内面は茶褐色。 充分な焼元炎焼成ではない。 焼成は堅質。	I-29 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

#### 杯蓋C

杯蓋Cとセットをなす類である。杯蓋Bに比して天井部はふくらみをもち、口縁部との境の綫もややシャープが欠ける。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版43 4	図版10 口 径13.2 高 4.8 2	口縁部 直立し縁部は平坦面となっておわる。 天井部 ふくらみをもち、口縁部との境の綫は鋭い。 外面の筋は時計回りにヘラ削りし、内面は回転ナギによって平滑に仕上げられている。	0.1~0.3cmの砂粒を含むが精良な粘土を使用。 外面は灰色、内面は茶褐色。 充分な焼元炎焼成ではない。 焼成はやや軟質。	I-27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

#### 有蓋高杯C

杯部は杯身Cの形態をとる。脚部は「ハ」の字形の短い脚が外方へ踏ん張った形態である。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版43 12	口 径11.2 杯 部 径4.9 高 7.6	杯 部 たちあがりはわずかに内傾して高く立ち、端部が内傾面となっておわる。 受部は外上方に突出し、端部は丸い。 体部は浅く、外面はヘラ削り十回転ナギによって調整し、内面は底部に円弧文その他の部分は回転ナギによって仕上げる。 脚 部 基部は大きく、外方へ張り出した脚部の先端は平坦面となって内面が接地面となる。	精良な粘土を使用。 全体に灰色。 焼成は堅質。	H-27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

### 臺B

口縁端部は段を作らず、口縁部外面に細かい波状文と凸帯をもつ形態は臺Aと共通する。臺Bは胴部外面に施文をみない。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版43 国版100 2	口 径18.1 深24.0 高24.3 6	口縁部 外反する口縁部の端部は平底面でおわる。外面に12本/cmの細かい波状文が2帯と凸帯が2条めぐる。  胴 部 肩の張った球形尖底の呑形。外面は叩きナスリ落し状ナデで調整する。叩き原体は器体上半部と下半部とでは異なる。内面はJ平をナゲ調整し、下平を指成形十あらいナデで行なう。	粘質な粘土を使用。 全体に灰青色。 焼成は堅緻。	K-27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

### 臺C

口縁端部は段を作らず、口縁部外面に波状文と凸帯を有する。胴部外面には叩き目がそのまま残っている。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版43 3	口 径22.5 深37.3 高33.6 (推定)	口縁部 外反する口縁端部は平底面でおわる。端部近くは断面三角形の棱をもつ外面に波状文が4帯と凸帯が1条めぐる。最下段の波状文は、跡文後に進行なれた回転ナデ(時計回り)によってはほとんど消えている。  胴 部 最大径部は器体中位にあって大きく張り出す。外面に輻方向の叩き目を施し、底部では斜方山の叩き目を兼ねている。内面は上半部を折おさえ成形し、下半部はその上をナゲ調整する。調整は削鉛を利用せず。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に淡灰色。 焼成は堅緻。	M-27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

### 土師器臺C

口縁端部が内傾面をもっており、肥厚をなさないものである。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版43 15	口 径13.6 深15.0 高12.9	口縁部 外反して立つ口縁部の端部は若干内傾する平底面となっておわる。内面の調整は横方向の粗い刷毛目+ヨコナデによる。器高の低い胴部で丸底となっておわる。内面へラブリによって器厚は0.3~0.4cmと薄い。外面は上半部を輻方向(上から下)の粗い刷毛目、下半部を斜方向(左上から右下)の粗い刷毛目で調整する。	0.1cm前後の砂粒を多く含む。 全体に暗灰褐色。 少量の雲母を含む。	K-31 暗茶褐色粘土混り砂 利層。 最大径部以下に焼が付着。

### 土師器臺D

臺Bの影響が認められるもので、口縁端部は外面に若干肥厚する。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版43 国版100 13	口 径15.6 深18.6 高18.9 2	口縁部 外反し端部は外側に若干肥厚する。中位に最大径をもたらす尖りぎみの丸底でおわる。  胴 部 調整は、外面に輻方向の刷毛目を施し、内面は刷毛目原体による搔き削りナナダ調整。刷毛目原体は内外とも同一で比較的日の細かいものを使用する。器厚は0.4~0.5cm。	砂粒は押え込まれてお り器表面は平滑。 暗灰褐色、底部外周は赤褐色。  外周全体に焼が付着 内面下半に炭化物が付着。	K-31 淡青灰色細砂混り暗 茶褐色粘土層。

## 土器部類E

単純に外反する口縁部をもち、端部はそのまま面となつておわるものである。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版43 14	図版10 1	口縁部 径14.4 径18.7 高18.1  端部 やや歪曲した形状、丸底の胸部。 外側は縦方向の粗い刷毛目を施す。 刷毛目の方向は最大径部を境に上半は上から下へ、下半は下から上に行なう。 最大径部には後合模が認められる。 内面はヘラによる掻き削り+ナダ調整。 割厚は0.6~0.7cm。	0.1cm前後の砂粒を含む。 外側は淡赤褐色。 内面は暗褐色。	O-15 灰色磨砂層。 TK-208型式の須恵器 とともに同川右岸 の凹部に堆積して いた。 外側に煤付着。

## M-19地区周辺出土の土器

### 杯盤C

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版44 1	図版10 1	口縁部 径12.4 高5.0  天井部 ふくらみをもつ、口縁部との境に鈍い棱をもつ。 外側のほぼ全面を逆時計回りにヘラ削りする。内面の中心部はナダ調整。	0.1~0.4cmの砂粒を含む。 全体に灰褐色。 焼成はやや軟質。	M-19 粘土混り砂利層。 口縁部に煤が付着する。
図版44 2		口縁部 径12.4 高4.8  天井部 直立する口縁部。端部は内傾する面となる。 ドーム状にふくらむ。口縁部との境に棱をもつ。 外側の%を時計回りにヘラ削りする。内面の中央部はナダ調整。	精良な粘土を使用。 全体に灰色を呈す。 外側には黒色塗付物が付着する。 焼成は堅質。	M-19 砂利層。
図版44 3	図版10 2	口縁部 径12.0 高4.7  天井部 直立する口縁部。端部は内傾する面となる。 わずかにふくらみをもつが、中央部は平坦面となる。口縁部との境に棱をもつ。 外側の%を時計回りにヘラ削りする。 内面はほぼ全面をナダ調整。	0.1cm前後の砂粒を含む。 外側は淡褐色。内面は茶褐色。 焼成はやや軟質。	M-19 砂利層。
図版44 4	図版10 4	口縁部 大井部 径13.6 高4.7  天井部 直立する口縁部。端部は平坦面となる。 ふくらみをそれほどもたず、平坦な面となる。 口縁部との境に棱をもつ。外側のほぼ全面を時計回りにヘラ削りする。 内面の中央部はナダ調整。	0.1cm前後の砂粒を含む。 全体に淡褐色。 焼成はやや軟質。	M-21 砂利層。
図版 5		口縁部 径11.8 高4.4  天井部 直立する口縁部。端部はわざかに内傾する面となる。 ふくらみをそれほどもたず、中央部はほぼ平頭。天井部と口縁部をわける棱は鋭さを失く。外側のほぼ全面を時計回りにヘラ削りする。中央部内面はナダ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を少量含む。 全体に灰色。 外側の一部暗褐色。 焼成は堅質。	M-19 砂利層。

### 杯身C

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版44 6	図版10 6	口縁部 径9.8 高4.7  受部 体部 たちあがり 内傾したのち直立する。端部は内傾する面となる。 水平に突出する。端部は鈍い棱となる。 丸みをもち、外側の%を時計回りにヘラ削りする。中央部内面はナダ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 全体に灰色。 焼成は堅質。	M-21 砂利層。
図版44 7		口縁部 径9.4 高4.6  受部 体部 たちあがり 内傾したのちやや立つ。端部は内傾する面となる。 水平に突出する。端部は鈍い棱となる。 丸みをもち、外側の%を時計回りにヘラ削りする。中央部内面はナダ調整。	0.1cm前後の砂粒を少量含む。 全体に淡褐色。 焼成は堅質。	M-21 砂利層。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版44 8	口 器 径10.2 高4.4	たちあがり 内傾したのちや立つ。端部は薄く突っておわる。 受部 水平に突出する。端部は純い縁となる。 全体 底部は平垣で中央部がやや隆む。外側の縁を時計回りにへら削りする。中央部内面はナゲ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 全体は暗灰色、その他の部分は灰色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。
図版44 9	口 器 径10.4 高5.1	たちあがり わずかに内傾しながら高く立つ。端部は丸くなっている。 受部 水平に突出する。端部は薄く縁となる。 全体 底部は平垣な面となり、外側の縁を時計回りにへら削りする。内面は回転ナゲ。	0.1~0.2cmの砂粒を多く含む。 全体に灰褐色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。
図版44 10	口 器 径10.8 高5.4	たちあがり 内傾したのち直立する。端部はわずかに内傾する面となる。たちあがりは貼付け。 受部 水平に突出する。端部は丸い。 全体 丸みをもつて深い。外側の縁を時計回りにへら削りする。底部内面はナゲ調整。	0.1cm前後の砂粒を少し含むが精良な粘土を使用。 全体に暗灰色。 焼成は堅緻。	I-29 灰色砂層。
図版44 11	口 器 径10.7 高5.4	たちあがり 内傾したのち立つ。端部は丸くなっている。 受部 外上方に突出する。端部は縁をもつ。 全体 精良な粘土を使用。内面は淡灰褐色、外側は灰褐色。 丸みをもつて深い。外側の縁を時計回りにへら削りする。底部内面はナゲ調整。	0.1cm前後の砂粒を少し含むが精良な粘土を使用。 内面は淡灰褐色、外側は灰褐色。 焼成はやや軟質。	M-19 砂利層。
図版44 12	図版10 9	たちあがり 内傾したのち立つ。端部は丸くなっている。 受部 水平に最もく突出する。端部は丸い。 全体 丸みをもつて深い。外側の縁を時計回りにへら削りする。底部内面はナゲ調整。	精良な粘土を使用。内面は茶灰色、外側は灰褐色。 焼成はやや軟質。	M-23 灰色砂混り粘土層。
図版44 13	口 器 径10.8 高4.8	たちあがり 内傾する。端部は内傾する面となる。 受部 外上方に短く突出する。端部は純い縁となる。 全体 底部は尖りがみで、外側の縁を時計回りにへら削りする。内面は回転ナゲ。	精良な粘土を使用。内面は黒灰色(黑色塗付物が付着)、外側は灰褐色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。

### 杯身D

I期の杯と器形はそれ程変わらないが、調整に省略が目立つものである。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版44 14	口 器 径10.3 高5.1	たちあがり 内傾したのち立つ。端部は丸くなっている。たちあがりは貼り付け。 受部 ほぼ水平に突出する。端部は丸い。 全体 底部は尖りがみで、外側の縁を時計回りにへら削りする。内面は回転ナゲ。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 内面は暗灰褐色、外側は灰褐色。 焼成は軟質。	M-21 砂利層。
図版44 15	口 器 径10.5 高5.1	たちあがり 内傾する。端部には内側に回転ナゲによる凹縫がある。 受部 外上方に突出する。端部は純い縁となる。 全体 底部は平垣面となる。外側の縁を時計回りにへら削りする。	0.1cm前後の砂粒を含む。 全体に暗灰色。 焼成は堅緻。	M-21 砂利層。
図版44 16	口 器 径11.4 高5.0	たちあがり 内傾したのち直立する。端部は丸くなっている。内側に回転ナゲによる凹縫がある。 受部 水平に突出する。端部は純い縁をもつ。 全体 浅く、底部は平垣面となる。外側の縁を時計回りにへら削りする。底部内面はナゲ調整。	0.1~0.4cmの砂粒を含む。 全体に灰色。 焼成はやや軟質。	O-19 河川右岸部下層砂混り粘土層。
図版44 24	口 器 径12.0 高4.3	たちあがり 内傾したのちや立つ。端部は丸くなっている。下方に切削する面をもって突出する。端部は純い縁をもつ。 受部 浅く、中央部が突きひずみによって窪む。外側の縁を逆時計回りにへら削りする。底部内面は同心円文をナゲ調整する。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に深灰色。 焼成は堅緻。	M-19 粘土層砂利層。

## 杯身

図版番号	法尺(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版44 23	口 器 径13.8 高5.7	たちあがり やや内傾する。端部は薄く尖っておわる。 受 部 外上方に短かく突出する。端部は丸い。 体 底部に平坦面をもつ。外面の辺を逆時計回りにへら削りする。底部内面はナゲ調整。	0.1cm前後の砂粒を少 量含むが精良な粘土を 使用。 内面は灰褐色、外面は 灰色。 焼成はやや軟質。	M-21 砂利層。
図版44 25	浅版 口 器 径13.5 高6.2	たちあがり 内傾したのち短く立つ。端部は丸い。 受 部 外上方に短かく突出する。端部は丸い。 体 深く、外面の辺を逆時計回りにへら削りする。底部内面は回転ナゲ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を含 む。 内面は茶褐色、外面は 暗灰色。 焼成は堅緻。	M-21 砂利層。
図版44 26	口 器 径13.5 高5.9	たちあがり 内傾したのち立つ。端部は丸い。 受 部 外上方に短かく突出する。端部は丸い。 体 外辺の辺を逆時計回りのへら削り。底部内面はナゲ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を含 む。 全体に茶褐色ないしは 灰褐色。 焼成は軟質。	M-19 砂利層。
図版44 27	図版33 口 器 径13.1 高5.7	たちあがり 内傾したのち立つ。端部は薄く尖っておわる。 受 部 水平に突出する。端部は丸い。 体 外辺の辺を逆時計回りにへら削りする。底部内面は回転ナゲ調整。	0.1~0.2cmの砂粒を含 む。 全体に茶褐色ないしは 灰褐色。 焼成は軟質。	M-19 砂利層。
図版44 28	口 器 径14.6 高5.6	たちあがり 内傾したのち直立する。端部はわざ かに内傾する出をもつ。 受 部 やや下方に傾斜する面をもって突出する。 体 端部は丸い。 比較的浅い。 外面の辺を逆時計回りにへら削りする。底部内面は細い回転ナゲ調整。	0.1cm前後の砂粒を含 むが精良な粘土を使用。 内面青褐色、外面灰青 色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。 底部外面にヘラ記号N が捺される。
図版44 29	口 器 径12.3 高4.1	たちあがり 内傾したのち短く立つ。端部は丸い。 受 部 外上方に突出する。端部は丸い。 体 底面は尖りきる。 外面の辺を逆時計回りにへら削りする。底部内面はナゲ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を少 量含む。 内面は暗褐色、外面は 灰色。 焼成は堅緻。	M-23 灰褐色泥混じ粘土層。
図版44 17	図版35 口 器 径11.0 高3.9	たちあがり 内傾したのち短く立つ。端部は薄く 尖っておわる。 受 部 外上方に突出する。端部は丸い。 体 底部外側にへら切りの痕跡。底部内面は ナゲ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を少 量含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。 底部全体に黑色塗付物 が付着。
図版44 18	図版35 口 器 径10.9 高4.3	たちあがり 内傾したのち短く立つ。端部は薄く 尖っておわる。 受 部 外上方に突出する。端部は丸い。 体 丸みをもつ。 外面の辺を逆時計回りにへ ら削りする。体部内面はほぼ平面をナ ゲ調整。	砂粒をほとんど含まない 精良な粘土を使用。 全体に茶褐色。 焼成は堅緻。	M-19 粘土混り砂利層。 体部内面に黑色塗付物 が付着。 体部外面に白 粉が付着。

## 蓋

図版番号	法尺(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版44 19	口 器 径11.2 高4.7	口縁部 直立する。端部は内傾する面をもつ。 天井部 平坦面をもち、中央部につまみを有す。 口縁部との境には凹線で区切られる。 外面の辺を逆時計回りにへら削りする。中 央部内面はナゲ調整。	0.1cm前後の砂粒を少 量含むが精良な粘土を 使用。 内面は灰褐色、外面は 暗灰色。 焼成は堅緻。 天井部に重ね焼きの痕 跡。 高井32とセッタで出土。	M-19 砂利層。 天井部に重ね焼きの痕 跡。 高井32とセッタで出土。
図版44 20	口 器 径13.4 高4.8	口縁部 内傾し、そのまま天井部へと続く。端部 は内傾する面となる。 口縁部との境には凹線による細い凹線 が形成される。外面の辺を逆時計回りに へら削りする。中央部内面はナゲ調整。	0.1cm前後の砂粒を少 量含むが精良な粘土を 使用。 内面は茶褐色、外面は 灰褐色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。 天井部にヘラ記号N が捺される。
図版44 21	浅版 口 器 径16.6 高5.9	口縁部 内傾ぎみに立つ。端部には内傾する面を もつ。 天井部 口縁部との境には浅い凹線がめぐる。ふ くらみをもち、中央部につまみを有す。 外面の辺を逆時計回りにへら削りする。 天井部内面は全体を回転ナゲ調整。回転 ナゲのうえに指圧痕がみられる。	0.1~0.2cmの砂粒を含 む。 全体に灰褐色。 焼成は堅緻。	M-19 粘土混り砂利層。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版44 22	口径 径16.2 高 4.5	口縁部 内側がみに立つ。端部は内傾する面となる。 天井部 ふくらみをもつ。口縁部との境は鋸い破をもつ。外側の弓を時計回りにヘラ削りする。削りを行なったヘラのタッチはやや不明瞭。中央部内面はナデ調整。	0.1cm前後の砂粒、0.5 cmの石粒を含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。

### 有蓋高杯C

杯部の形状が杯身にCに類似するものである。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版44 30	口径 径11.0 杯部 高 5.0	杯 部 たちあがりは内傾したのち立つ。端部はわざかに内傾する面となる。 受部はほぼ水平に突出し、端部は鋸い破をもつ。 体部は外側の弓を時計回りにヘラ削りする。底部内面はナデ調整。 欠失するが短脚一段透しのものと思われる。	0.1~0.2cmの砂粒を多く含む。 全体に灰褐色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。
国版44 32	口径 径10.4 杯部 高 4.5 高 9.3	杯 部 たちあがりは内傾したのち立つ。端部は内傾する面となる。 受部は外上方に突出し、端部は鋸い破をもつ。 体部は外側の弓を時計回りにヘラ削りする。底部内面は回転ナデ調整。 短脚一段透しの脚部。透しは長方形。4孔の開脚で3方向に穿つ。	0.1~0.2cmの砂粒を少量含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。 杯部の受部に重ね焼きの痕跡あり。
国版44 35	口径 径10.0 杯部 高 4.9 高 9.2	杯 部 たちあがりは内傾する。端部は内傾する面となる。 受部はほぼ水平に突出し、端部は鋸い破をもつ。 体部は外側の弓をヘラ削り(方向不明)する。 底部内面は回転ナデ調整。 短脚一段透しの脚部。透しは長方形で3方向に穿つ。	砂粒を含まない精良な粘土を使用。 全体に暗灰色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。
国版36 国版18 36 3	口径 径11.1 杯部 高 5.0 高 9.7	杯 部 たちあがりは内傾し、長い。端部は内傾する面となる。 受部は外上方に突出し、端部は縦をもつ。 体部は回転ナデ仕上げ。底部内面のみナデ調整。 短脚一段透しの脚部。透しは長方形で3方向に穿つ。外側にカキ目がみられる。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 内面は茶褐色、外側は灰色(杯体部外側は暗灰色)。 焼成は堅緻。	M-21 砂利層。

### 無蓋高杯C

杯部の形状が杯蓋Cを逆にした恰好のものである。

国版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版44 33	口径 径12.0 杯部 高 5.2 高 14.0	杯 部 口縁部はわざかに外傾し、端部は内傾する面となる。 体部は口縁部との境に棱をもつ。外側の弓を時計回りにヘラ削りする。底部内面は回転ナデ調整。 脚部で脚部は上下に肥厚する。透しなく、かわりに円孔が3方向にみられる。	0.1cm前後の砂粒を少 量含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	O-17 粘土混り砂利層。
国版44 国版18 34 2	口径 径13.5 杯部 高 4.6 高 9.8	杯 部 口縁部は外傾し、端部には内傾する面をもつ。 体部は口縁部との境に棱をもつ。外側全 体が回転ナデ仕上げ。底部内面はナデ調整。 基部が断くしまり「ハ」の字形にひらく縫 部をもつ。 脚柱部と底部の境に縫隙がめぐる。脚柱 部に3角形を呈する小さな透し孔が3方 向にめぐる。脚部端部はそのまま直面とな っておる。接地面は内側にある。	0.3~0.5cmの砂粒、石 粒を少量含む。 全体に灰褐色。 焼成は堅緻。	P-6 灰色砂混り粘土層。

## 蓋付椀

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 22	口 径35.4 体 部 径21.4	たらあがり 内傾する。端部はそのまま丸となつておわる。 受 部 外上方に傾斜する面をもち、体部との境に一束の凸縁がめぐる。端部は純い板となる。 体 部 ふくらみをもち、底部は欠失する。外面に細かい波状文が一帯めぐる。裏面の方 向は時計回り。 調整は回転ナデによって行ない、内面下 半はナデ調整する。	砂粒を含まない純真な 粘土を使用。 全体に灰色、体部外面は黒色。 焼成は堅緻。	O-17 粘土混り砂利層。 体部外面に黒色塗付物 が付着。

## 翫

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 17	口 径10.0 胸 部 径13.1 高12.2	口縁部 口縁部は2段に外反し、端部近くに凸縁が一束めぐる。外面に波状文が一帯施文 されている。 脚 部 大きく脚が張り、尖りぎみの丸底をもつ。中央部に径1.2cmの円孔を穿つ。円孔を はさんで上下にそれぞれ2束の凹縁がめぐり、この区間に11本/cmの波状文が 一帯施文されている。底部外面には細筋 の叩き目がそのまま残っている。脚下半 部内面はナデ調整する。	砂粒を含まない純真な 粘土を使用。 全体に灰青色。 焼成は堅緻。	O-21 河川右肩部粘土層。

## 無蓋高杯

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)	
図版44 31	図版104 4	口 径15.1 杯 部 高 4.3 高 8.7	杯 部 楔状の杯部。口縁部と底部の境はないが ヘラによる沈縫が一束めぐっている。 内 外面ともあらい回転ナデ調整を行な っている。 脚 部 短い脚柱部に、大きく広がる脚部がつく。 内、外とも回転ナデ調整を行なっている。 調整は杯部より丁寧である。	0.1cm前後の砂粒を含 む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M-23 砂利層。
図版44 37	口 径10.6 杯 部 高 4.9 高 16.7	杯 部 水平にのびる底部より、外等ぎみに口縁部が立つ。底部内面はナデ調整、その後 部分は回転ナデ調整を行なう。 脚 部 長脚2段造し脚の形容。透しまはもない。 脚柱中位には凹縫が2束めぐる。透しまを 穿ってあれば、上にわかるる後となる。 脚柱部上半の内面にしばり痕がみられる。	0.1cm前後の砂粒を含 む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	Q-17 灰色砂層。	

## 長颈甌

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)	
図版45 12	図版104 5	肩 径17.0 現 在 高19.4	口縁部 欠失する。 脚 部 脚の張った丸底の器体。底部に一段造し の脚がつく。 肩部外面に凹縫2束。底部外面に叩き目 がみられる。叩き目の原体はH11.5cm、 部状の回転ナデ。底部内面はナデ調 整を行なっている。	0.1~0.4cmの砂粒を含 む。 全体に灰青色。脚部外 面の一部茶灰色。 焼成は堅緻。	M-19 粘土混り砂利層。

## 観

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)	
国版45 23	国版34 5	口径16.7、口縁部 径28.6 高27.8 脚 部	脚部から外折したち外側する。端部は 粘土を折り返すことで外面に幅広く肥厚 させている。 裏の張った球形、丸底の形状。 外面は叩きを行なったうえにカキ目を施 している。内面は同心円文がそのまま残る。	0.1cm前後の砂粒を少 量含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	O-21 河川右岸部、灰色砂 漠り粘土層。 外面全体に焼付着、脚 部内面に有機物付着。

## 小型丸底土器Db

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)	
国版45 18	国版100 1	L 径9.8 深10.5 高8.2 口縁部高2.5 脚 高5.7	口縁部 外上方にのびる短いV線は、わずかに外 側する。  脚 部 瘤球形の器体で、外面の刷毛目は、器体 中位の最大径部以上を日の細かい縦方向 の刷毛目で調整し、最大径部以下を日の 粗い縦方向の刷毛目で調整する。 内面は、最大径部以上を指圧棒ナダで 行ない、以下をヘラで擗いて調整してい る。	0.1~0.3cmの砂粒を含 む。雲母の微紋を含む。 内面、外側とともに灰 色褐色。	脚部外面は灰黒色を呈 し、2次焼成による器 表面の剥離がみられる。 M-21 灰色砂漠り暗茶褐色 ・粘土層。
国版45 19	国版8 2	L 径9.2 深8.1 高9.4 口縁部高3.0 脚 部 高6.4	口縁部 外上方に外側しつつ長くのびる。  脚 部 器身中位に最大径を有する瘤盤玉に近い 形態を呈す。 器表面は、序説のためか調整後の残りは わらく、わずかに口縁部と脚部の境に縦 方向の刷毛目が認められるだけである。 内面は、粘土膜の積み上げ板をそのまま 残している。	0.1cm前後の砂粒を多 く含み、軟質である。 云母の微紋を少量含む。 内面、外側ともに赤褐 色。	M-21 灰色砂漠り暗茶褐色 ・粘土層。

## 土師器検

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版45 14	L 径15.8 高5.5	口縁部 内押し、端部は内側に丸く肥厚する。 体 部 底部に平坦な面をもつ。 調整は、外面を指成形ナダで調整。 内面は全体をナダ調整する。	砂粒をほとんど含まない 精良な粘土を使用。 云母、石英の微紋を含む。 須恵器生焼け品のよう な焼き上がりを示す。 全体に茶褐色。	N-23 灰色砂層。

## 土師器発

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)	
国版45 15	国版8 10	L 径12.3 径13.6 高12.3 脚 部	口縁部 直立したのち、わずかに外反する。端部 は薄くなっている。 最大径部は張りをもたず、丸底の底部に つづく。 調整は外面をナダ調整し、内面は底部に 指圧痕がみられるほかはナダ調整する。	0.1cm前後の砂粒を含 む。 全体に茶褐色。	M-19 粘土漠り砂利層。 脚部外面に焼付着。脚 部上部と口縁部内面に 有機物付着。

## 土師器高杯Cの脚部

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
国版45 20	脚 高6.0 脚 部 径9.6	脚 部 脚柱部からゆるやかに脚部に立る。境界 は漸移的である。 2方向に径1.3cmの円孔を穿つ。穿孔は 外面から内面に向って行なわれている。 調整は、脚柱部内面がほり抜一へラ削 り、脚部内面は横方向(左から右)に刷 毛目調整する。	精良な粘土を使用。 云母の微紋を少量含む。 全体に赤褐色ないし黄 褐色(スリップ模が残 る部分は黄褐色)。	M-21 砂利層。

土師器型Eを模倣した土器

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 21	口径16.4 底径24.6 現存高14.7	口縁部 単純に外反し、底部はそのまま面となつておわる。 側部 やや長手の器体。下平部は欠失する。外面に縱方向の印き目を施したのも、スリ消し状ナデ調整する。内面は横方向(右から左)にヘラ削りする。底厚は最大径部で0.4cm程度。	0.1~0.2cmの砂粒を多く含む。 全体に灰褐色。 窓窓呑出焼け品のような焼きあがりを呈す。	O-15 粘土混じ灰褐色。

河川上層出土の土器  
型

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 1	図版104 4	口径18.0 底径24.4 側部 外反する口縁部の口端には外側に粘土を補充して仕張する。 腹部 外面は縱方向の印き目十カキ目を施し、内面はあらい円心円文を残す。	0.1~0.2cmの砂粒を少し含むが精良な粘土を使用。 外面は灰青色、内面は灰褐色。 焼成は堅緻。	側部に焼付着する。 G-37 灰褐色。

型

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 2	口径9.9 高3.4	口縁部 口縁端部がわずかに外反し丸くなつておわる。天井部との境界を区切ることはできない。 天井部 ヘラ切り(逆時計回り)による。 内面は金合と圓輪ナデ調整する。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に灰褐色。 焼成は堅緻。	M-19 灰褐色。
図版45 3	図版105 3	口径11.2 かえり部径8.6 器高3.1 天井部 口縁部は丸くなつておわる。内面にかえりをもつ。天井部中心に宝珠形のつまみがつく。ふくらみをもたない天井部は外側をヘラ削り(方向不明)し、内面を回転ナデ調整する。内面中央部はナデ痕調整する。	精良な粘土を使用する。 全体に灰褐色を呈し、焼成は堅緻。	I-35 灰褐色。
図版45 4	口径16.9 高5.1	口縁部 端部に内傾面を有する。調整は同上。 天井部 余りふくらみをもたず、中央部で窪む。 口縁部との境は、接をもたず、わずかな凹凸で区別される。 外面の外には逆時計回りのヘラ削りが施され、内面は中央部に円弧文、その他は回転ナデを行なっている。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 全体に灰青色。 焼成は堅緻。	G-37 灰褐色。
図版45 5	口径14.4 高5.4	口縁部 天井部との境界を区切ることは出来ない。 天井部 口縁端部よりは、底部に内傾面を有する。 ふくらみをもたず、中央部は平坦面となる。中心に隆起のつまみがある。外面は、逆時計回りにヘラ削りを行ない、内面は粗い回転ナデを行なう。	精良な粘土を使用。 全体に灰褐色を呈し、焼成は堅緻。	I-33 灰褐色。
図版45 6	図版105 4	口径16.4 かえり部径14.0 器高2.6 天井部 かえりを有し、口縁端部よりも下方に出する。 低平な窓形で、中央部に窓平な形をなしたつまみがつく。外側は、全体を逆時計回りにヘラナデして仕上げている。	0.1cm前後の砂粒を少々含むが精良な粘土を使用。 全体に灰青色。 焼成は堅緻。	M-21 灰褐色。

杯身

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 7	図版105 6	口径8.1 高3.0 受部上方に突出する。器厚は分厚く、端部は丸い。 体部 底部はヘラ切りによって平坦な面となる。底面と体部の境にヘラ切りの際に生じた沈線がめぐる。内外とも回転ナデ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 内面は淡灰色、外側は灰褐色。 焼成は堅緻。	O-17 茶褐色。

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 8	口 縁 部 径 高 5.4	口縁部 外反する口縁部の端部は鋭い棱となっておわる。	0.1cm前後の砂粒を含むが精良な粘土を使用。 外表面は灰褐色、内面は黒色微付物が付着。 焼成は堅緻。	I-29 灰色砂利層。
		底 部 平坦な底面にはハラ切り痕が認められる。 口縁部との境は時計回りのハラ削りが行なわれている。		
図版45 9	口 縁 部 径 高 16.3 10.4 4.4	口縁部 外上方にのびる口縁部の端部は丸くなつておわる。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 外表面は灰青色、内面は灰褐色。 焼成は堅緻。	K-27 灰色砂利層。
		底 部 平坦面には垂直に立つ低い高台を晒り付ける。調整は、内底面をナメ、その他の部分を回転ナメにて行なう。		

### 高杯

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 10	口 縁 部 径 高 12.6 4.1	口 縁 部 たちあがりは短く内傾し、端部は丸くなつておわる。全体は浅く、底部外縁を時計回りにハラ削りする。内面はあらい回転ナメによる。	0.1cm前後の砂粒を含む。 全体に灰青色。 焼成は堅緻。	G-37 砂利層。
		脚 部 及脚二段造し高杯の形態である。上段の透しと下段の透しとは2条のハラ沈線で区画する。脚柱部内面はハラ削り、その後の部分は回転ナメ調整。		
図版45 12	口 縁 部 径 高 14.6 11.4	脚 部 及脚二段造し高杯の形態である。上段の透しと下段の透しとは2条のハラ沈線で区画する。脚柱部内面はハラ削り、その後の部分は回転ナメ調整。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻である。	I-33 灰色砂層。

### 高台付趾

図版番号	法量(cm)	個々の特徴	胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版45 11a b	脚 縁 部 径 高 8.6 6.3	口縁部 欠失する。 脚 部 脚が強り、底部に平坦な面をもつ筒形。底部には外方に踏んばった形の短い高台が付く。座面はそのまま平面をしておわる。蹲面は内側にある。脚部の円孔が穿たれている部分は、注口に適した受口状の唇形をなしている。	0.1~0.2cmの砂粒を少量含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	G-35 粗砂層。

# 上池部分出土木製品一覧表

種類	遺物番号	形態の特徴	備考
葉	1	現存長10.5cm、幅5.7cm、厚さ2.2cmを測る。全面に黒漆がぬらされている。つか部には、0.3cm幅の茎をきこむ部分がもうけられており、裏面全体にわたって糸状のものをいた痕跡が認められる。材質は広葉樹系のものであろう。	河川中層砂混り粘土層
小型劍状木製品	2	全長27.5cm、幅2cm、厚さ0.35cmを測る。劍と類似形態であるが小型である。材質は針葉樹系のものであろう。	砂混り粘土層
木劍	3	全長54.8cm、幅3.1cm、厚さ1.1cmを測る。全面に刀子痕が明りょうに認められる。また身部には柄を削った痕跡が確認された。ところで本品にはまめつ抜筋が認められない。材質は針葉樹系のものであろう。	河川下層 粘土混り砂層
木刀	4	全長46.8cm、幅3cm、厚さ1.5cmを測る。全面にわなたてで、いねいに仕上げられている。木品も水刷毛で同様に痕跡は認められない。材質は針葉樹系のものであろう。	河川下層 砂混り粘土層
	5	全長46.5cm、幅4.4cm、厚さ1.5cmを測る。上記の木刀とは若干柄の部分のつくりが異なっており、特に柄から身に移行する部分には細かい網目模様が認められる。また上記の木刀と比較してみると、柄の表現は明確であるが、全体的にはつくりは荒い。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
刀先状木製品	6	全長38.5cm、幅2.7cm、厚さ1cmを測る。一端は刃先状に削られているが、施縫は痕跡の為不明である。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	7	全長96cm、幅4.2cm、厚さ1.8cmを測る。一端を刀先状に削っている。全般的に削りは荒く大まかである。	河川中層 砂混り粘土層
杵	8	全長91.7cm、最大径は9.6cm、最小径は2.6cmであり。断面は円形の身部と柄部からなる。両端部とともにまめつ抜筋が認められるが、一方は他方に比してそれが特に著しい。身部には施縫の著しい部分がみられる。材質は広葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
鎌	9	一見ナスピ状を呈す。現存長42cm、幅14.3cm、厚さは最厚部で1.1cmあり。刃先部は0.4cmと薄くなっている。また先端部よりは10cm上方から側面に若干のくびれ部を有し、先端部に重っているが、この部分には既に刃先がつけられたものと思われる。	河川下層 砂混り粘土層
	10	9と同様ナスピ状を呈するものと思われる。現存長は23.8cm、幅11.7cm、厚さは最厚部で1.3cmである。ところでこの鎌のくびれ部から刃先方向に5cmの間に附縫面には約0.3cm幅の溝状筋が数ヶ所みうけられる。	河川下層 粘土混り砂層
	11	一見ナスピ状を呈するが、身の大半が欠損している為二又状になる可能性を有している。現存長24cm、幅10.6cm、最厚部1.4cmである。ところで残存する部分は厚さが一定していない。つまり、片側半分は他方よりも約0.3cmほどすく下っている。	河川下層 砂利混り砂層
	12	形態はスコップ状を呈し、柄と身は一本でつくられている。現存長は51.8cmであり、そのうち柄の現存長は25.8cmである。ところで、身から柄に移行する部分は既に比して、かなり厚みをもっている。たとえば、柄についでみてみると柄の身と接する部分は3.9cmの厚みをもつて、これより先端部では少しあげつな円形を呈するが、端部付近は3cmの厚みで断面はほぼ円形を成している。身の場合、頭部付近は3.7cmの厚みをもつて先端部に近くなるほど薄くなっている。ところで9-12の鎌の材質は広葉樹系のものと推定される。	河川上層 粘土混り砂利層
叉鍬	13	長さ18.3cm、幅31.1cm、最厚部は2.6cmである。油壺孔は円形であり、油壺孔は一面にのみ隆起をつくり出している。壺角度は、身に対しても65°である。ところで隆起部のある面以外の面は身の上端部から刃先に向って30-40度のところまでは他の身に対して10°の角度をもっている。つまりその部分は若干隆起部のある面に細いていく。また身は、刃先になるに従って薄くなっている。材質は広葉樹系のものであろう。	粘土混り青灰色砂層
鍔柄	14	現存長11.5cm、現存する柄の上端部付近の径は2.3cmである。また、柄の下端部には次ぎがつくりだされている。全面でいねいに仕上げられている。材質は広葉樹系のものであろう。	
相の子	15	全長13.4cm、最大径7.4cm、くびれ部の径3.2cmを測る。刀子痕跡が認められる。一次・二次剥離をあわせると数個体分の破片が出土している。材質は広葉樹系のものであろう。	河川右斜部 灰色細砂層
下駄	16	全長23.5cm、現存幅9cm、古板の厚さは1.2mm、齒の厚さは1.9mmを測る。鼻緒孔は、前面、後面の前方にそれぞれ穿たれており、前ワホは中軸より上に偏っている。その為本品は、左足用のものと思われる。また古板表面及び両面には使用痕跡が認められる。前面は前方に後面は後にそれぞれ若干ふぶくあり隙間につくられている。ところで、後ヅガ後方左側面にはV字状の切り込みがみられる。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂利層

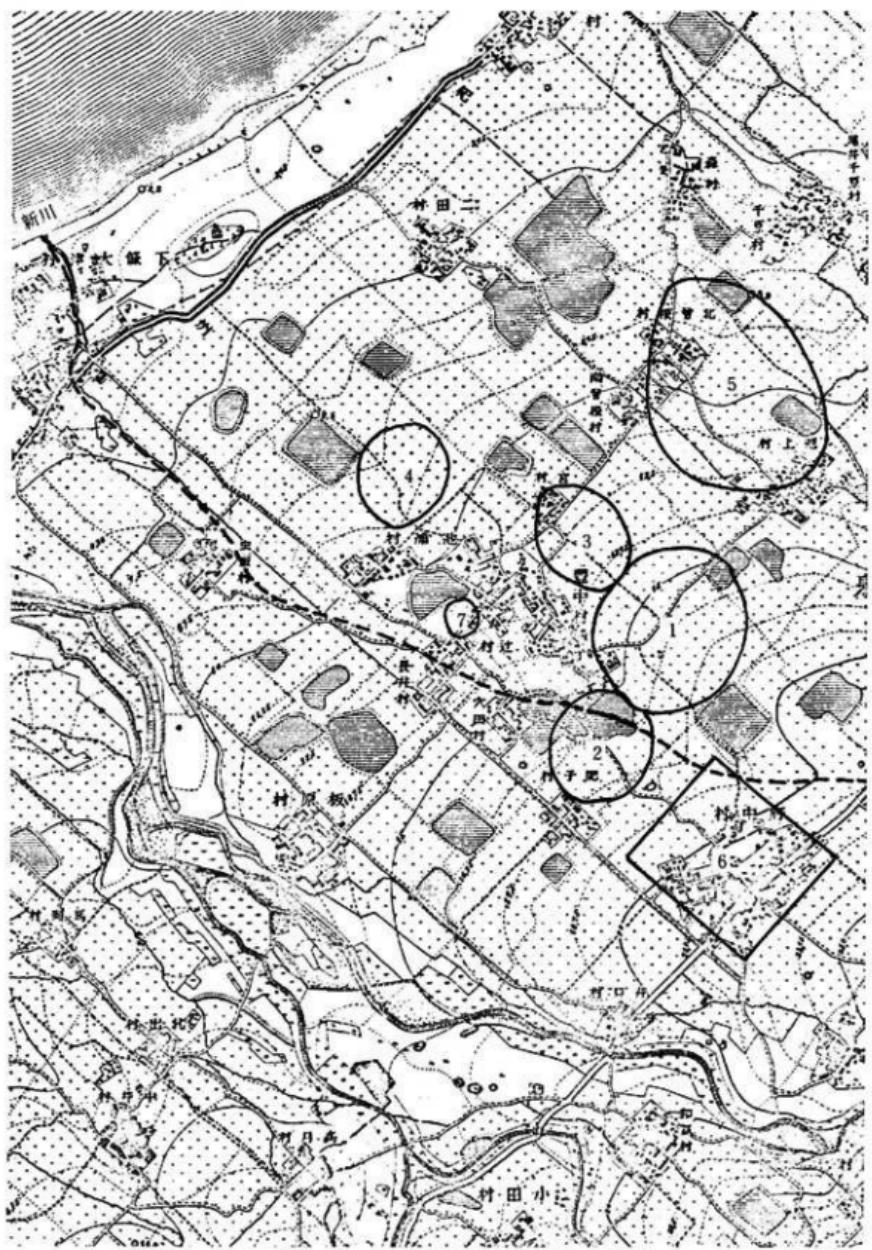
種類	遺物番号	形態の種類	備考
下駄	17	全長22.6cm、幅9.9cm、古板の厚さ1.3cm、底の厚さ1.1cmを測る。鼻孔は前歯、後歯の前方にそれぞれ穿たれており、前ツガは中軸より左に倒っている。その為本品は右足用のものと思われる。使用痕跡については16とはほぼ同様であるが、後歯は前歯に比して著しくまめつしている。ところでは左側面にV字状の切り込みがあらわれている。本品も左側面が長さ3cm近くえぐられている。	河川中層 砂利層
紡錘状木製品	18	直径8.4cm、厚さ1.5cmを測る。中央には孔が存在する。一方の面には平底であるか他面は若干丸味をもつ。丸味をもつ面には部分的に刀子によると思われる削り痕跡が認められる。側面にも若干削り痕跡がみられる。重量は6g（水分を含む）である。	河川中央部上層 砂利混じ砂層
竿柱状木製品	19	全長47.5cm、幅4cm、厚さ1.6cmを測る。両端に突起をつくり出しているが、一方の突起付近にはかすかに压痕が認められる。また一方の突起は他方の突起と比してその長さが異なっている。厚さは全体的にはほぼ一定である。	河川中層 砂利混じ粘土層
チキリ状木製品	20	全長51.8cm、幅4.5cm、厚さ1.5cmを測る。一面は若干丸味をもっており刀子痕が認められるが、他面は平底であり一部擦痕がみられる。また次端部について一方は削り痕が明瞭に認められ、他方には压痕が認められる。厚さは、一部分を除いてほぼ平均している。	河川中層 粘土混じ細砂層
	21	全長51.8cm、幅4.5cm、厚さ1.5cmを測る。一面は若干丸味をもっており刀子痕が認められるが、他面は平底であり一部擦痕がみられる。また次端部について一方は削り痕が明瞭に認められ、他方には压痕が認められる。厚さは、一部分を除いてほぼ平均している。	河川中層 粘土混じ細砂層
	22	全長51.7cm、幅4.4cm、厚さ1.1cmを測る。一面は若干丸味をもち刀子痕が認められる。突起部には前方に圧痕及び刀子痕がみられる。一方の次端部には身と接する部分に垂直方向の切り込みが認められる。ところで本品は一方の側面のみ突起部の下前の身の一部分（角の部分）を切りおとしている。	河川中層 砂利混じ粘土層
	23	全長55.2cm、幅4.9cm、厚さ1.6cmを測る。一面は若干丸味をもっており刀子痕が認められる。突起部についても若干刀子痕は認められ、その付近には削り痕が認められる。厚さはほぼ一定しており、材質は針葉樹系のものと思われる。	河川右岸 砂利混じ粘土層
人形状木製品	24	現存長15.7cm、幅2.2cm、厚さ0.5mmを測る。全体的にごくわずかに内側しており、表面には一帯に刀子痕が認められる。一見人形状を疑すが、左右対称ではなく。一方の側面は他方の側面よりその表現がかなり異なっている。	河川右岸部上層 粘土混じ砂層
箱形木製品	25	長辺25.7cm、短辺16.3cm、高さ6.8cm、底辺の厚さは2.8cmを測る。周縁に半透間を開け内部をくり抜いてつくられている。底外側はほぼ平底だが、蓋形をほどこしていない。前面のコーナーは圓と直線とに削られている。蓋側面上面には幅1.7cmほどの浅いくぼみがある。所見に記載される。前面は削りぬれた観察部。底の刃先をもつ工具によつて製作されたことが推察される。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川東端部 南面灰色細砂層
舟舟状木製品	26	内部をくり抜いてつくられたもので、全長61cm、現存幅14cm、高さ10.1cm、深さ7.4cmを測る。両端には短辺部で2.6cm、長辺部で3.1cm、それぞれ較大幅の半透間がある。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中央部上層 礫石混じ灰砂利層
	27	現存長240cm、幅47cmを測る。	青灰色細砂層
管状木製品(A)	28	内部をくり抜いてつくられたもので、全長54.9cm、幅25.5cm、高さ7.4cmを測る完形品である。両端辺部には内側にはば3mmの部分にそれれ最も大幅で4cmの溝状のものが平行にはしる。上面はひねりに仕上げられ若干内側するが、底面は少々内側しつつ、上面に比してつくりは荒い。	麻績土混じ砂層
管状木製品(B)	29	現存長29.7cm、現存幅30mm、高さ8cmの破片である。底面には脚部をつくり出している。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂利混じ粘土層
古株木製品	30	全長28.1cm、幅15.1cm、高さ6.7cmを測る。脚部はかなり高くつくり出されており、底面から4.6cm前後を測る。また脚部は、両方の長辺部にそってつくれられており多少外側にふんばっている。	河川下層 粘土層

種類	遺物番号	形態の特徴	備考
小型舟形木製品	31	全長21.7cm、現存幅6.8cm、高さ6.1cm、厚さ(最深部)12.4cmを測る。周縁には短辺部で1.1cm、長辺部で0.9cmの最大幅の平坦面を有す。また一方の長辺部と短辺部が接する部分(端縫部)には底面0.3cmの穿孔がなまめに貫通している。ところで上面には削り痕が認められるがつくりは非常に多い。側面にも削り跡が認められる。本体は模造品の可能性も考えられる。材質は針葉樹系のものであろう。	河川右岸下層 砂混り粘土層
大型舟形木製品	32	全長73cm、現存幅19cm、高さ12cm、厚さ9.1cmを測り、全体の13は2/3が現存する。内部をくり抜いて作られており、手斧痕が認められる。周縁には短辺部で6cm、長辺部で5cmの平坦面がある。底面内面には△形内の焼け痕が二ヶ所認められる。材質は不明。	河川中層 砂混り粘土層
小型舟形木製品(A)	33	全長31.8cm、幅3.5cm、厚さ1.6cmを測る完形品である。ほぼ全面に刀子状のくびきられ両端部は尖頭状につくられている。一面は全体にわたって浅くえぐらされているが切り口は荒い。他面は平坦である。材質は針葉樹系のものであろう。	東畦野 暗茶褐色粘土層
小型舟形木製品(B)	34	全長25.3cm、幅3.8cm、厚さ3.3cmを測る完形品である。周縁は刀子状の工具で削られた痕跡状に作られている。径4~5cmぐらいの太さの木を加工して作ったものと思われる両端面に丸味をのこしている。一面は歓人幅2.5cm、深さ1.5cm、底さ18mmにわたってえぐらされているが下面は1.6cm幅で長さ約12cmにわたって平坦に削られている。材質は不明。	河川中層 砂混り粘土層
小型実頭木製品	35	全長10.9cm、幅3.1cm、厚さ3.4cmを測る。各所に刀子痕が認められる。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
建築用材	36	現存長61.2cm、最大幅14.3cm、底面幅14.3cmを測る。一方の端部から約13cmの部分からなまめに削りを施している。破損部の厚さは5.8cmである。全面焼けている。材質不明。	河川中央部中層 暗茶褐色粘土層 灰色細砂層
	37	現存長92.2cm、最大幅16.0cm、最小幅3cmを測る。かなりの部分が焼かれており、一方の端部は、施かれてかなり細くなっている。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	38	現存長98cm、最大幅8.2cmを測る。一本の一端をとがらせたもので、一端に施いた痕跡が認められる。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	39	現存長125cm、最大幅16.5cm、最厚部12cmを測る。(12)中央部は6cm前後幅をもって、側面方向に舟型をしている。両面には手斧痕が認められる。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	40	全長150.5cm、幅21.5cm、厚さ3cmを測る。両面に手斧痕が見られる。材質は不明。	河川中層 砂混り粘土層
	41	全長92.2cm、幅9.9cm、厚さ3.8cmを測る。一方の端部付近に手斧痕が認められる。両面はほぼ平坦である。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	42	全長156cm、幅11.1cm、厚さ3.2cmを測る。両面に一方向に手斧痕が認められる。手斧痕で明確なものは4.4cmの幅をもつ。	河川中層 砂混り粘土層
	43	現存長168cm、最大幅9.6cmを測る。一本から作られており各所に方形のくぼみがみられ、それらのいくつかから2.1cm幅の削り痕が認められる。また突起部には全面に削り痕がみられる。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	44	全長193.2cm、最大幅10.8cmを測る。一本からなり一端は尖らしており端部は表面が異なる。ほほ全体に手斧痕が認められその明確なもので4.7cm幅をもつ。また半分近く焼けている。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 粘土混り砂層
	45	全長121.8cm、最大幅21.4cmを測る完形品である。半分の断面はほほ円形を成し、残分の断面は長方形を成す。両面に手斧痕が認められ、その明確なもので4.3cm幅をもつ。材質は広葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂混り粘土層
	46	現存長27.2cm、幅11.8cm、厚さ7.5cmを測る。一面に比して、他面は極めて荒くつくられている。材質不明。	河川中層 灰色粗砂層
	47	現存長37.8cm、最大幅8.6cmを測る。端面及び、その付近には明確に削り痕跡が認められる。材質は広葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
柱材	48	全長74.8cm、幅7.8cm、厚さ2.1cmを測る。一方の端部には削り痕が認められる。一方半分は他方半分よりかなりうすい。材質は針葉樹と推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	49	全長82cm、幅13.8cm、厚さ3.1cmを測る。両穴出部の底面には外側に向って削り痕がみられる。また上面に削り痕がみられ、ニッ所ほどは△形内の焼け痕がみられる。また突出部舟形の両方のえぐり部にはそれぞなめに穿孔がみられ貫通している。上面は若干傾斜するが底面はほほ平坦である。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部中部 黒色粘土層

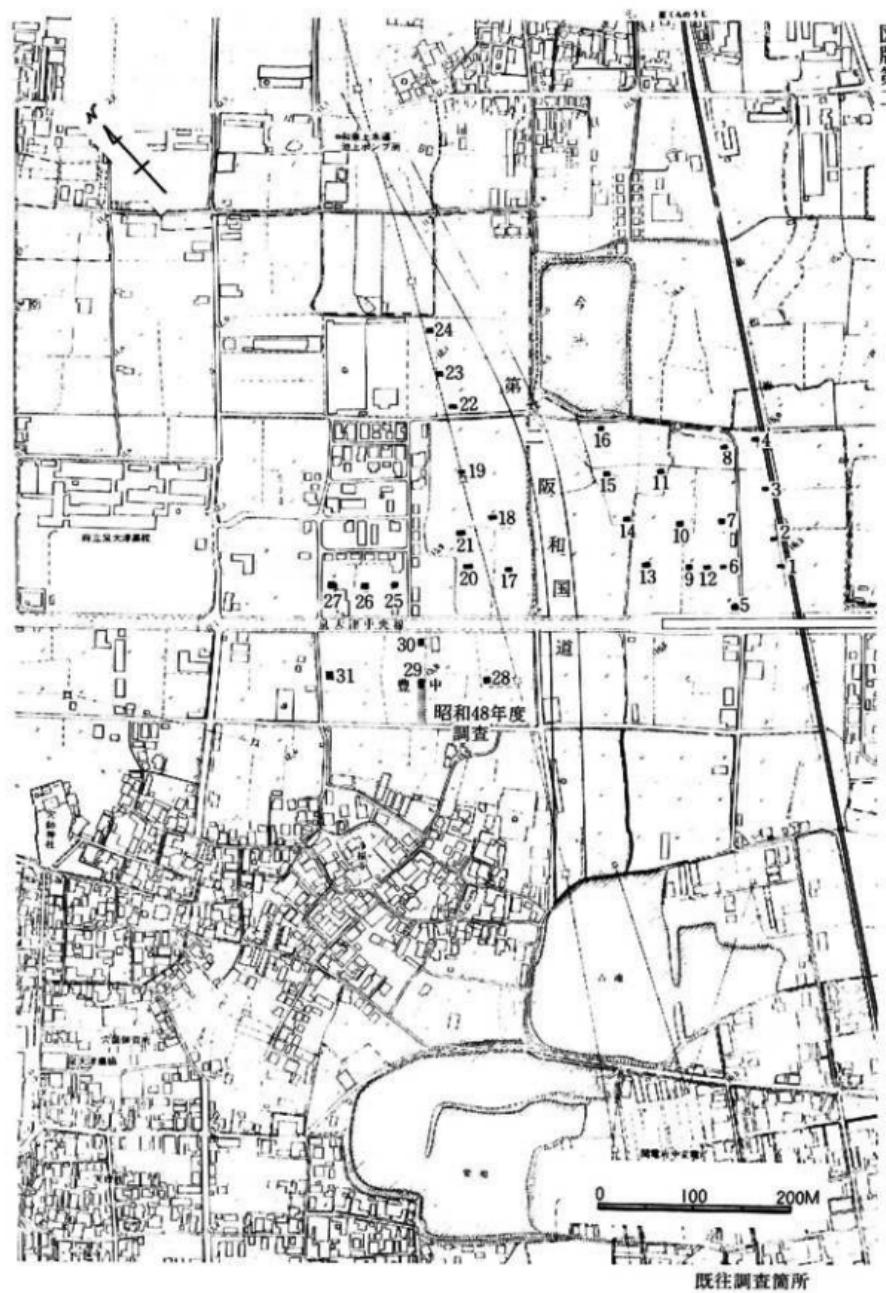
種類	遺物番号	形態の特徴	備考
組材	50	全長53.5cm、幅5.9cm、厚さ1.1cmを測る。一方の端部から約3cm内側まで平坦であるが、それ以外の部分はえぐられ彫曲している。本品は全体的に内壁する。岡突起部の表現もかなり異なっている。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 灰色細砂層
	51	全長38.7cm、幅8.8cm、厚さ1.4cmを測る。一方の袖部は他方よりうすく削られている。材質は針葉樹系のものであろう。	河川上層 砂混り粘土層
	52	全長21.6cm、幅7.4cm、厚さ1cmを測る。一方の突出部は他方に比してかなりうすく削かれている。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 腐植土混灰色砂利層
	53	全長35.9cm、幅11.9cm、厚さ3.3cmを測る。切断面はていねいに仕上げている。両面は平坦。材質は針葉樹系のものであろう。	河川右側部上層 粘土混り砂層
有孔木製品	54	現存長21cm、幅4.6cm、厚さ1.1cmを測る。本品は計14の穿孔を有する。それらはかなり不規則に位置している。画面には刀子痕が細かく認められる。その削り方の方向は同一である。また厚さはほぼ一定しており材質は針葉樹系のものと推定される。	茶褐色粘土層
	55	現存長28.6cm、幅5.1cm、厚さ1.2cmを測る。両面はほぼ平坦である。一部に穿孔が生存しなじみで貫通している。破損したのも含めて本品には計5の孔がみられる。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中央部中層 茶褐色粘土混り細砂層
	56	全長35.9cm、幅6.3cm、厚さ1cmを測る。胸面はほぼ平滑。計3の孔が存在しその中に穿孔したもののもある。両端部は削りおとされている。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	57	現在長18.7cm、幅5.5cm、厚さ2.4cmを測る研片である。一面に比して他面は若干削除する。また一面には數ヶ所研磨がみとめられる。孔は被覆したものも含めて計4である。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川下層 粘土層
	58	全長65.4cm、幅22.6cm厚さ4.4cmを測る。全面に手斧痕が認められ、削りはすべて同じ方向である。裏面はは中央部には、刃あたりらしく無数の切り込みがみられる。材質は針葉樹系のものであろう。	西畔町 暗茶褐色粘土層
	59	全長81.5cm、幅15.5cm、厚さ5.3cmを測る。材質は針葉樹系のものと思われる。	
	60 (1)	現存長38.5cm、最大幅4.1cm、厚さ1.5cmを測る。一方の端部は円孔の一部分が残存する。またその端部から約2cm内側には段がついている。材質不明。	河川下層 黃褐色砂利層
	61 (II)	現存長65.1cm、幅3.1cm、厚さ1.4cmを測る。さらにその端部から1.5cm内側に段がつき、それよりさらに4cm内側にももう一段が存在する。4つの小穴孔はすべて右下の方に向て貫通している。材質不明。	河川上層 茶褐色砂混り粘土層
	62 (III)	現存長23.7cm、幅4.6cm、厚さ2.2cmを測る。60、61と同様、一方の端部には円孔の部分が残存している。さらにその端部から約2cm外側に端には段がつく。また他方の端部附近はその他の部分に比してうすくなっている。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川上層 粘土底り砂利層
部分材	63	現存長33.1cm、幅3.7cm、厚さ3.6cmを測る。両方の穴は貫通してはいるが本体によりそれをさまたげている。若干丸味をもち、各所に压痕がみられる。材質不明。	河川上層 粘土底り砂層
	64	現存長21.8cm、幅3cm、厚さ1.2cmを測る。はば全面に刀子痕が認められ、一方の端部附近には切り込みがみられる。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 砂粉混り砂層
	65	現存長26.2cm、幅6.9cm、厚さ1.3cmを測る。一方の端部から少し内側に円孔の部分が残存する。また一面には部分的に無数の切り込みがみられる。材質は針葉樹系のものであろう。	砂混粘土層
尖頭棒状木製品	66	現存長21.5cm、幅1.8cm、厚さ1.1cmを測る。一端を尖頭状につくり出され、一端は丸味をもつ。他面は荒い。枝を利用したもののようである。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 青灰色砂利層
	67	現存長35.6cm、最大幅1.8cmを測る。全体に削り痕がみられる。一端は尖頭状につくり出し、他端は0.1~0.2cm幅の切り込みがみられる。材質は針葉樹系のものであろう。	河川上層 砂混り茶褐色粘土層
杖状木製品	68	全長59.5cm、最大径10.1cm、最小径2cmを測る。丸味をもつ箇所もみられるが、かなり荒い面も認められる。全体の2/3には、ある部分は細かく、またある部分は大まかな手斧痕がみられる。この手斧痕から鉄製の刃先による加工が推定される。削りは一定方向である。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川下層 砂混り粘土層

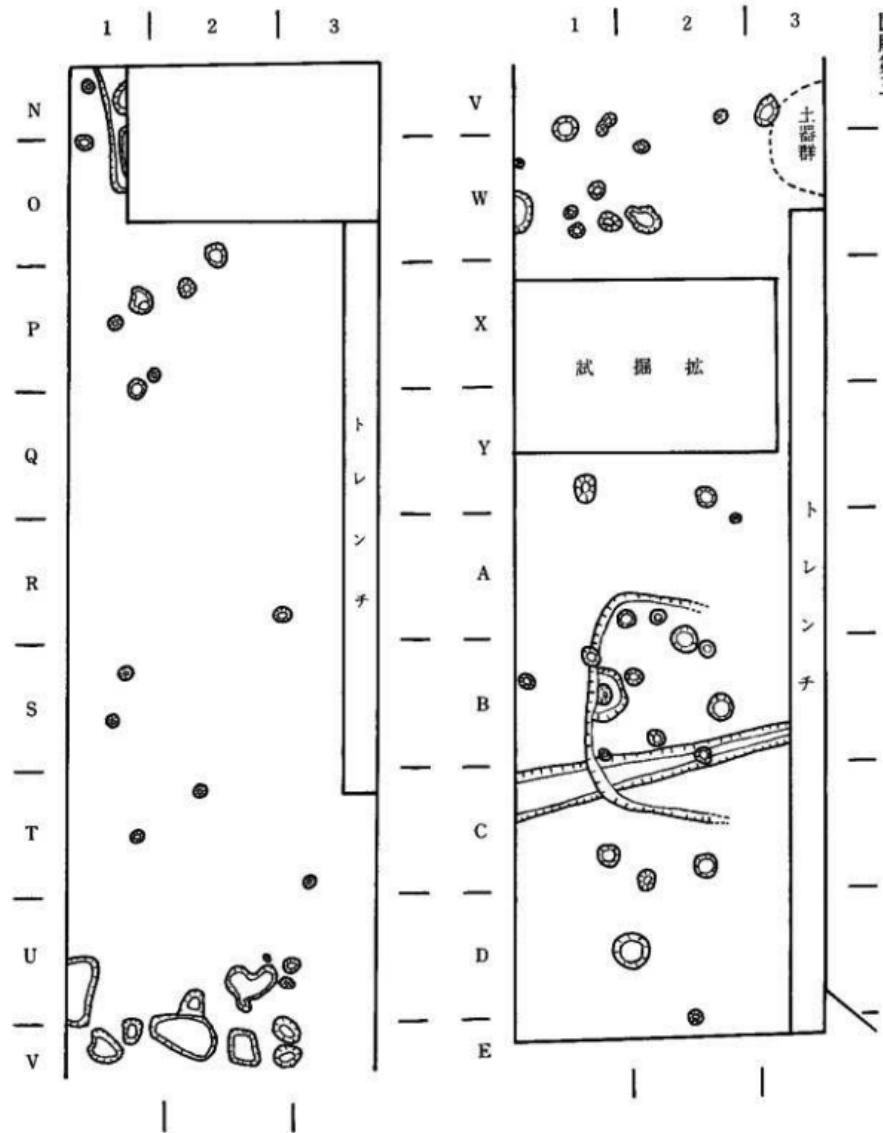
種類	遺物番号	形態の特徴	備考
棒状木製品	69	全長27.5cm、幅1cm、厚さ0.5cmを測る。全体に厚さが一定でなくつくりも無い。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川下層 暗茶褐色粘土層
	70	現存長38.6cm、最大径2.1cmを測る。全面に刀子痕が認められる。本品には4ヶ所刃痕が存在する。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	71	現存長43.2cm、幅2.9cm、厚さ2.8cmを測る。不明確ではあるが部分的に刀子痕が残存する。一部刃痕も認められる。材質不明。	河川中央部上層 砂利混り砂層
板材	72	全長104cm、幅14.8cm、厚さ1.4cmを測る。両端部から内側にそれぞれ20cmほど10cmの部分に段差がある。その面は全面に手斧痕が認められ、明確なもので、U字状のようがみられる。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川下層 砂混り粘土層
	73	長辺部75cm、短辺部28cm、厚さ2.1cmを測る。一方の端部付近には突出部がみられるが、他方の端部にも欠損の為明らかではないが突出部がつく可能性もある。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 暗茶褐色粘土層
	74	現存長14.3cm、幅20.7cm、厚さ1.8cmを測る。両面に削り痕が認められる。U字状のようがみられる。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 灰色砂層
	75	現存長16.5cm、幅41.1cm、厚さ2.8cmを測る。両面には平坦。えぐりを入れている。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 砂利層
	76	全長32.4cm、幅11cm、厚さ1.1cmを測る。一面は手斧痕が細かく認められるが、他面は両端部内側の方形の孔の周辺にのみ手斧痕がみられる。また手斧痕は確かに認められる面にはほぼ一定間隔で四本の切り込み跡がみられる。手斧痕は一定方向である。この手斧痕の觀察から鉄の方先をも手斧であることがいかがわれる。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	77	全長30.1cm、幅10.6cm、厚さ1cmを測る。両面に手斧痕が細かく認められる。この手斧痕の観察から鉄の方先をも手斧の存在が考えられる。手斧痕は一定方向ではない。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	78	全長25.3cm、幅4.5cm、厚さ1cmを測る。全体的に若干内凹する。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂利層
ヘラ状木製品	79	現存長28cm、幅3.4cm、厚さ2.1cmを測る。刀子痕が認められる。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中央部上層 砂利層
	80	全長35.8cm、幅3.7cm、厚さ1.4cmを測る。刀子痕が認められる。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川上層 粘土混り砂利層
把手付板材	81 (I)	長辺部79.8cm、短辺部35cm、最厚部4.4cm、把手部の最大径3.8cmを測る。一方の把手部にはその基部に刃痕がみられる。また側面部には1ヶ所穴孔が存在する。材質不明。	河川中央部中部 黒色粘土層
	82 (II)	長辺部76.5cm、短辺部33.7cm、最厚部4cm、把手部の最大径3.8cmを測る。一面には孔が長辺部に向って、貫通する。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂混り粘土層
	83 (III)	長辺部72cm、短辺部56cm、厚さ4.3cm、把手部の最大径3.5cmを測る。本品も81、82同様、背面面に把手部がつくものと思われる。一方の把手のみ残存。一面には、短辺部に対して平行方向に孔が貫通する。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 淡青灰色細砂層
	84 (IV)	長辺部49.7cm、短辺部39.2cm、厚さ4.6cm、把手部の最大径4.8cmを測る。一面にはのみ削り痕が認められる。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 暗茶褐色粘土層
その他	85 (A)	全長18.5cm、幅3.1cm、厚さ1.3cmを測る。一面には全体に刀子痕が認められ、他面は両端部付近以外はほとんどえぐられている。材質不明。	青灰色粘土混り砂層
	86 (B)	現存長21.8cm、幅7.9cm、厚さ1.9cmを測る。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 灰色砂層
	87 (C)	全長56cm、身部幅19.8cm、身部厚さ2.2cm、柄部幅4.1cm、柄部厚さ2.6cmを測る。身部の前面には削り痕が認められる。柄部は基部から徐々に幅を増し先端部にいたる。両面には平坦。材質は広葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂利層
	88 (D)	現存長38.8cm、身部幅22.6cm、身部厚さ4cm、柄部幅2.5cm、柄部厚さ2.6cmを測る。一面には数ヶ所にこぼみがみられる。両面には平坦。材質は針葉樹系のものと推定される。	灰茶褐色粘土層

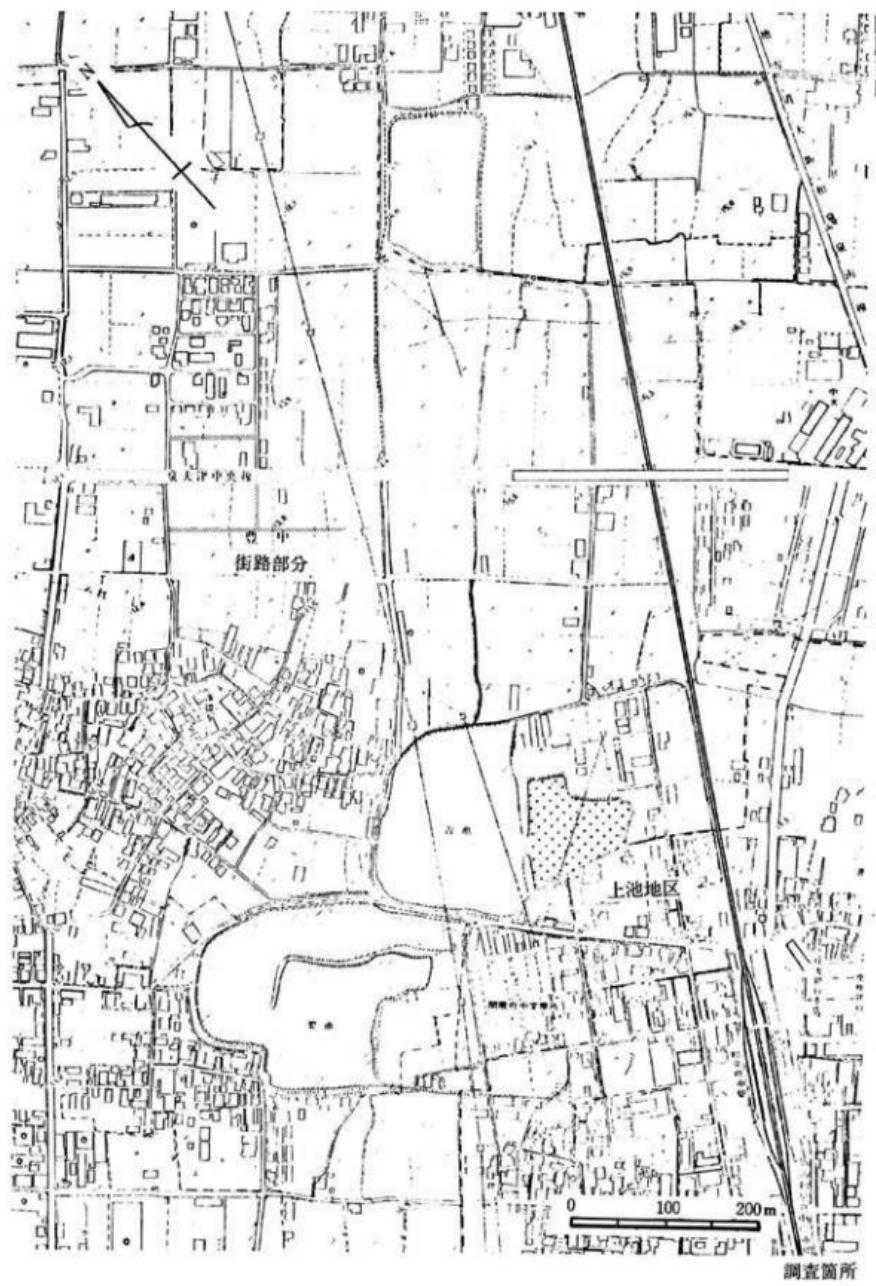
図 版

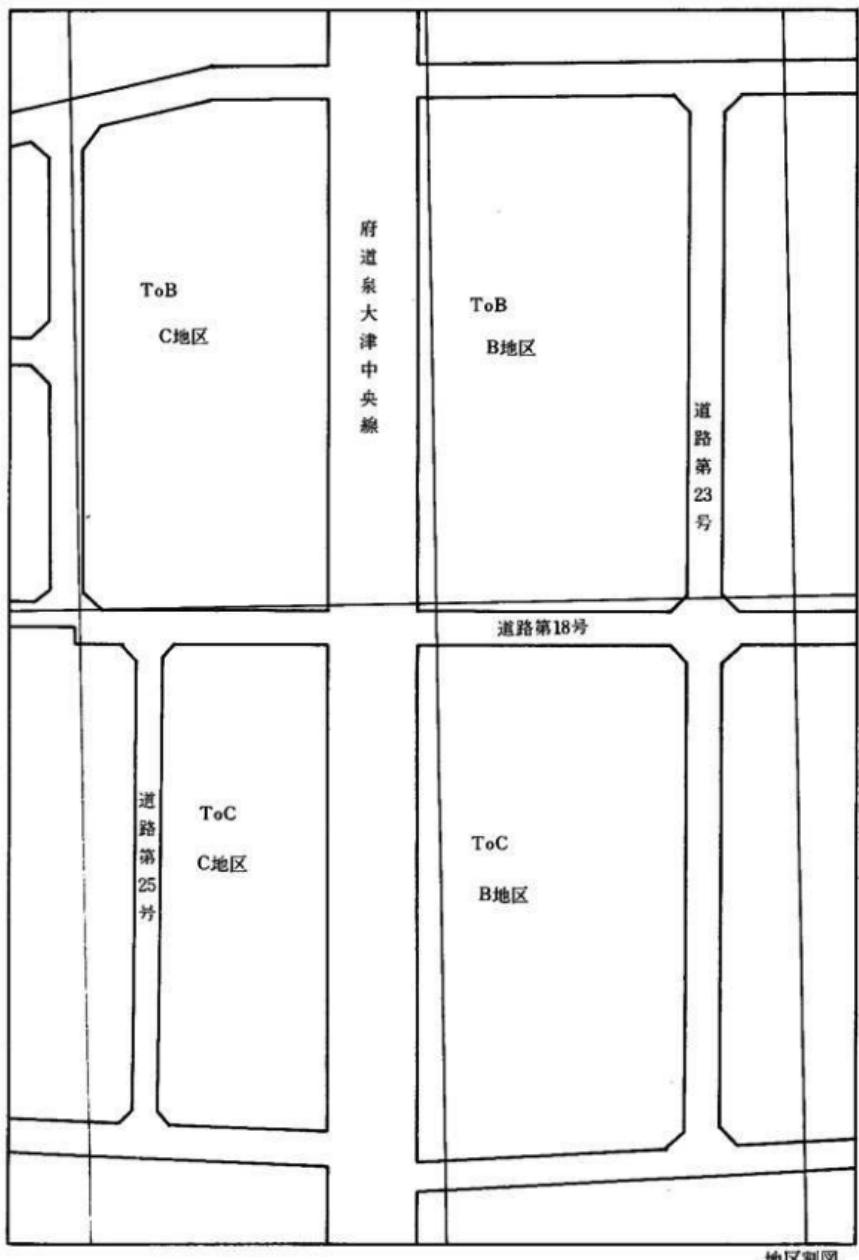


1. 豊中遺跡 2. 古池遺跡 3. 七ノ坪遺跡 4. 池浦遺跡  
5. 池上・曾根遺跡 6. 国府跡 7. 六師薬師寺跡 周辺の遺跡

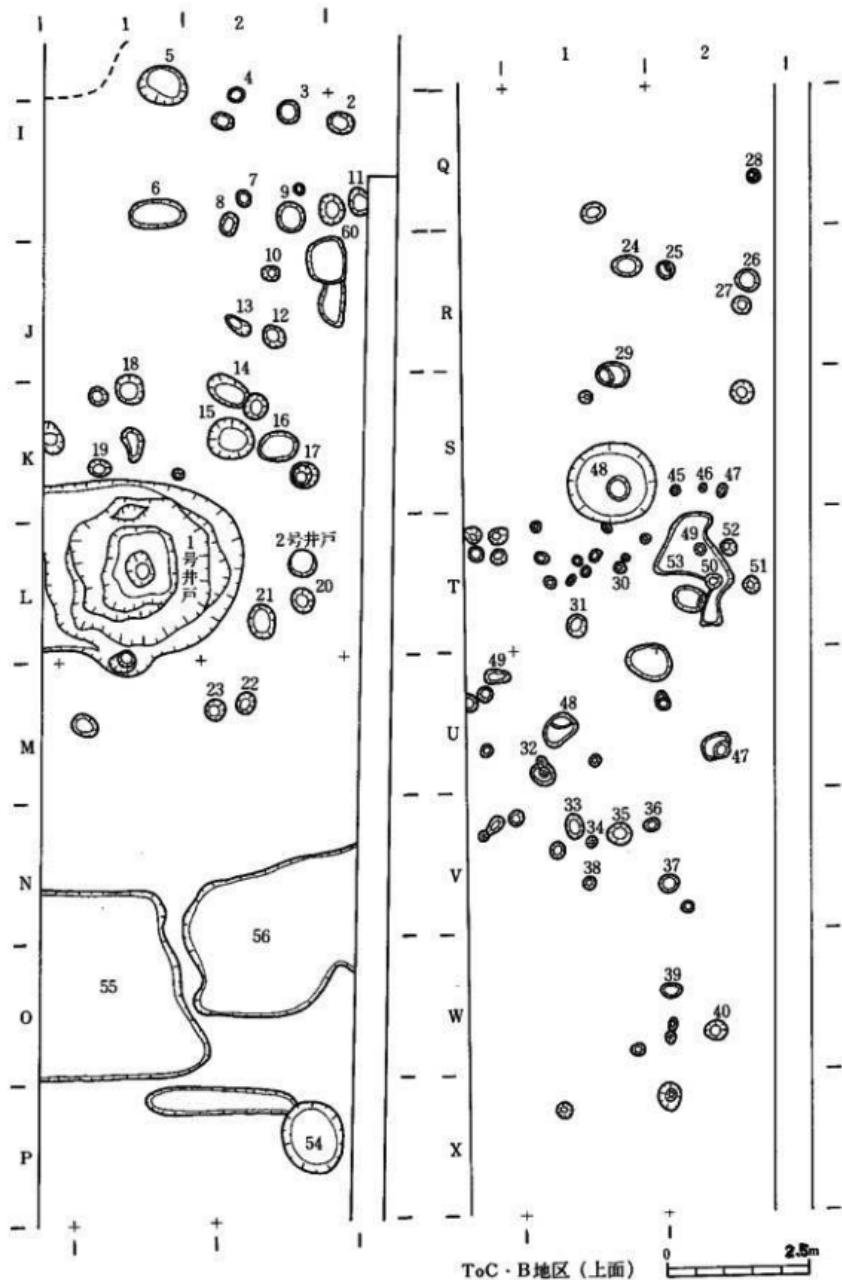


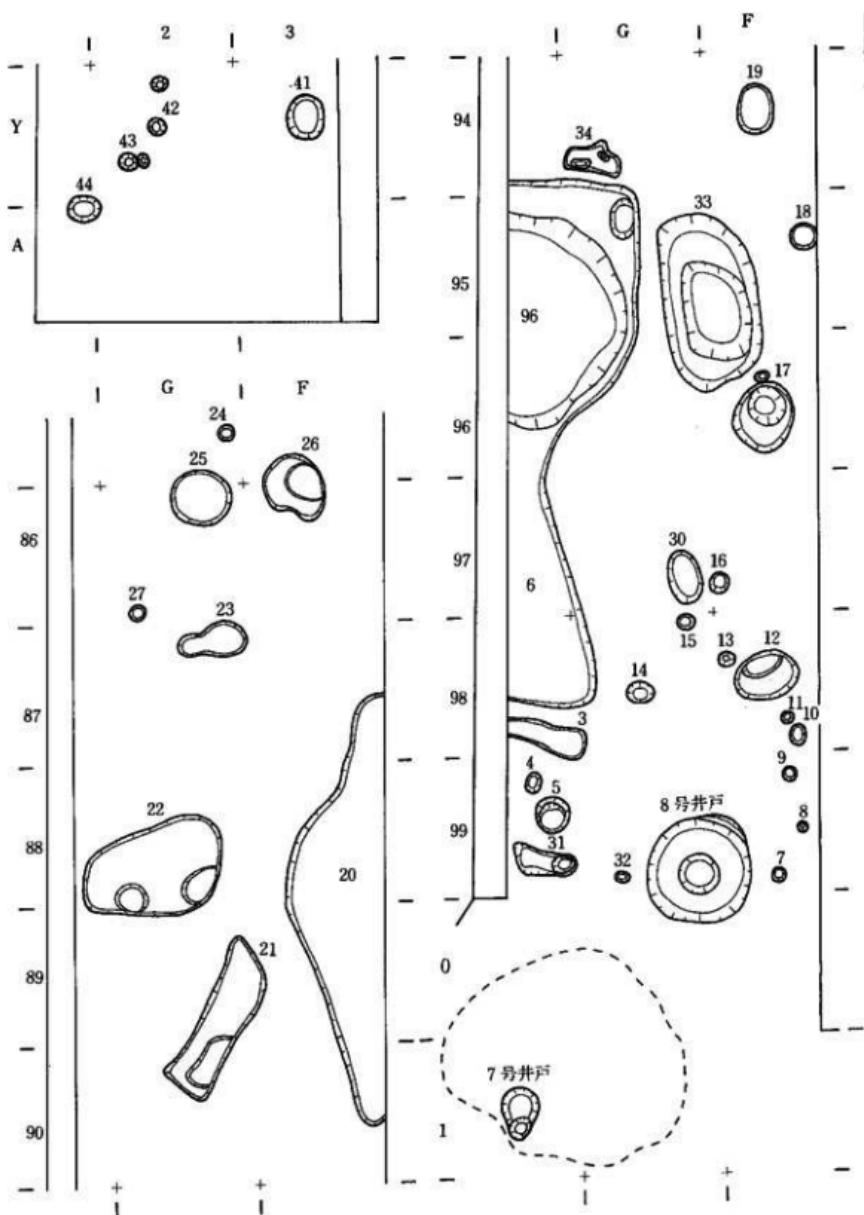




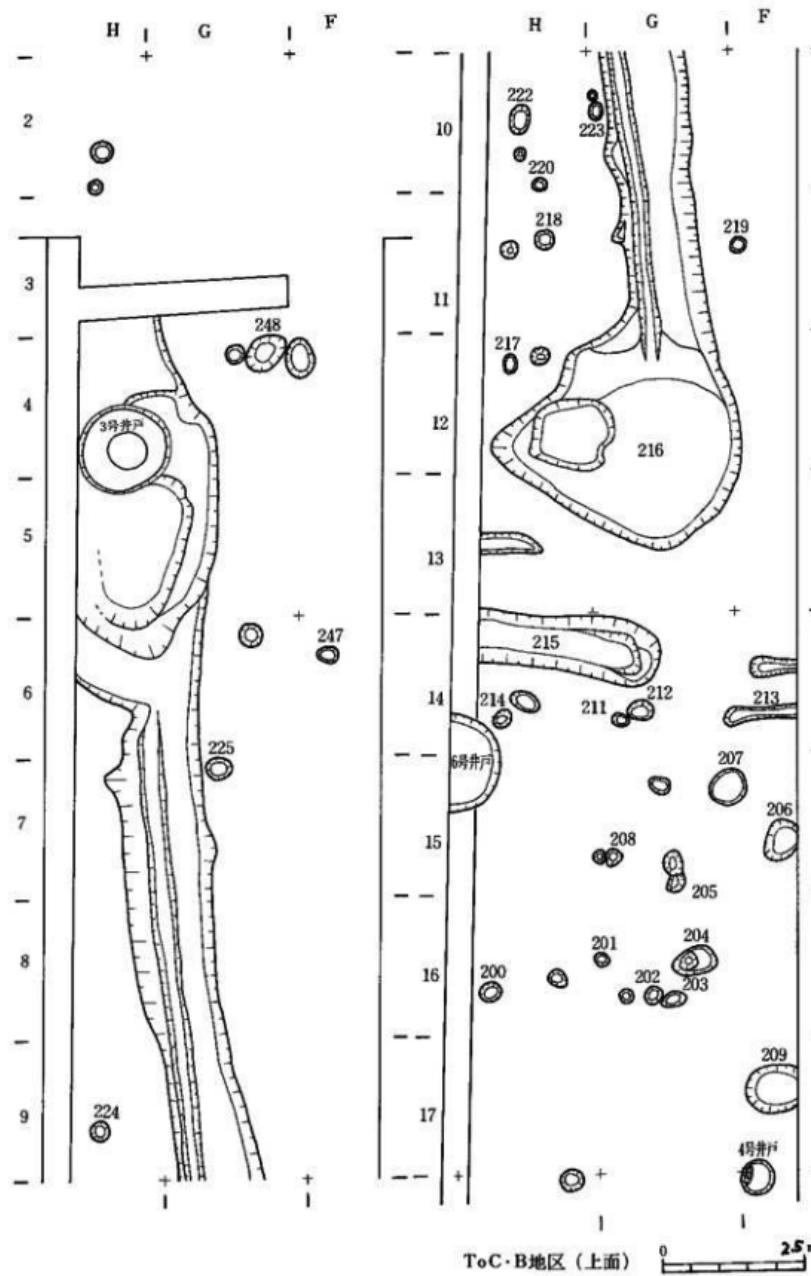


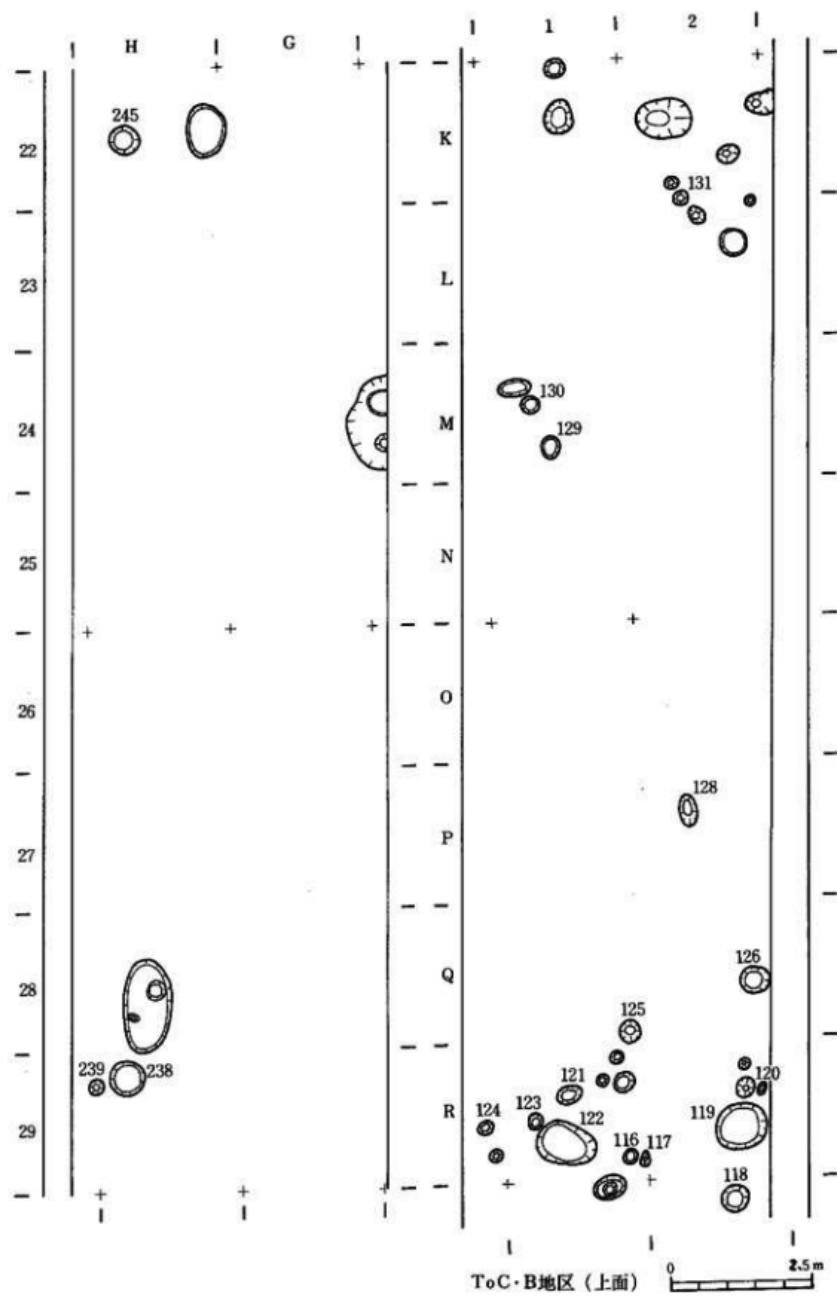
地区割図

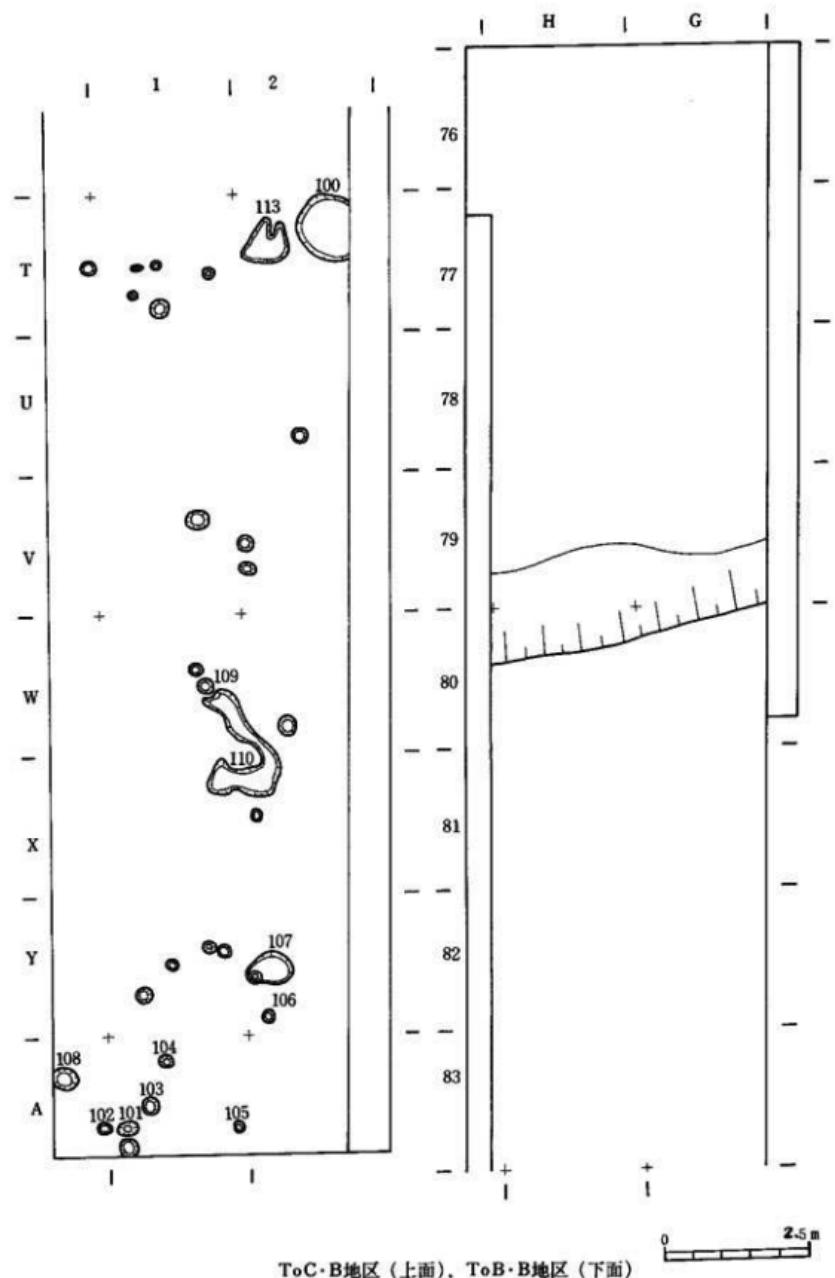


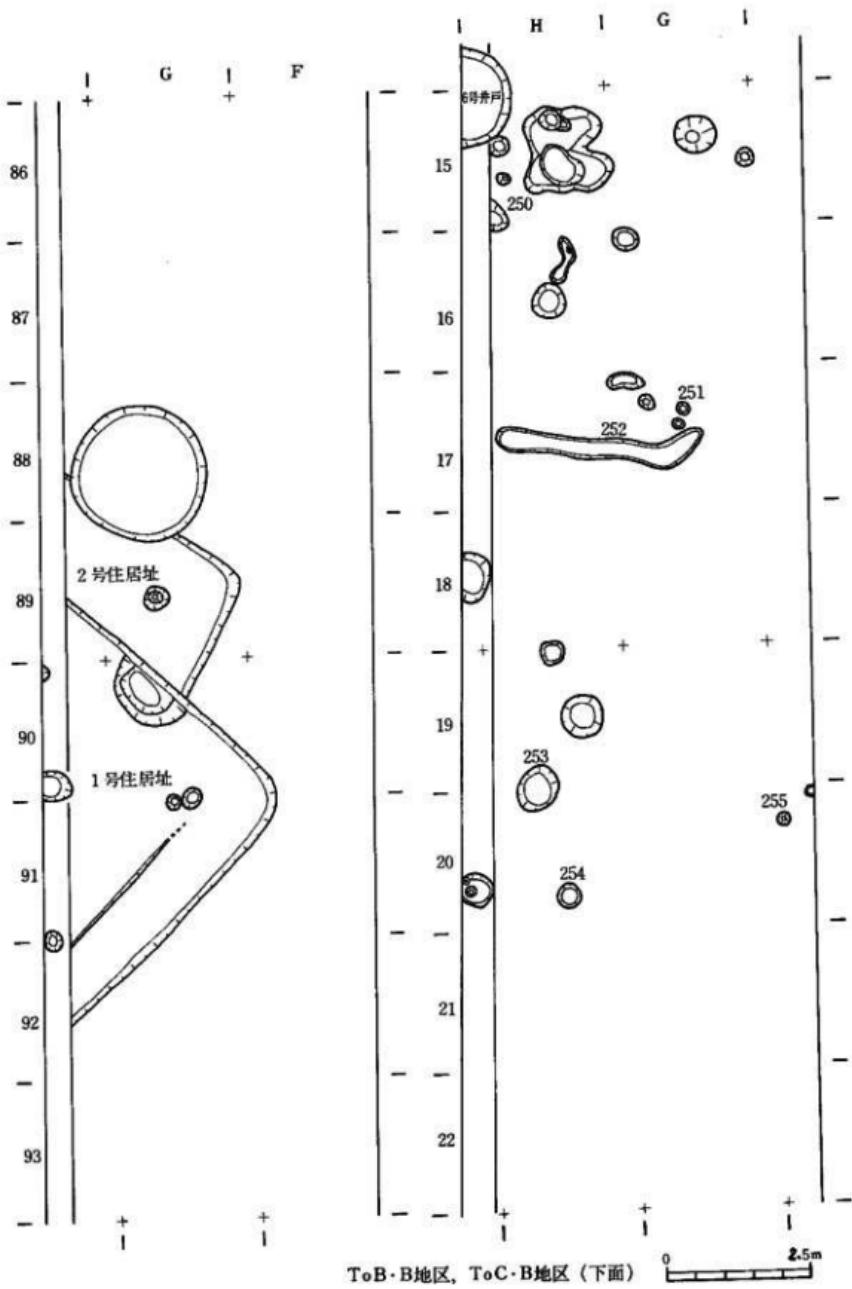


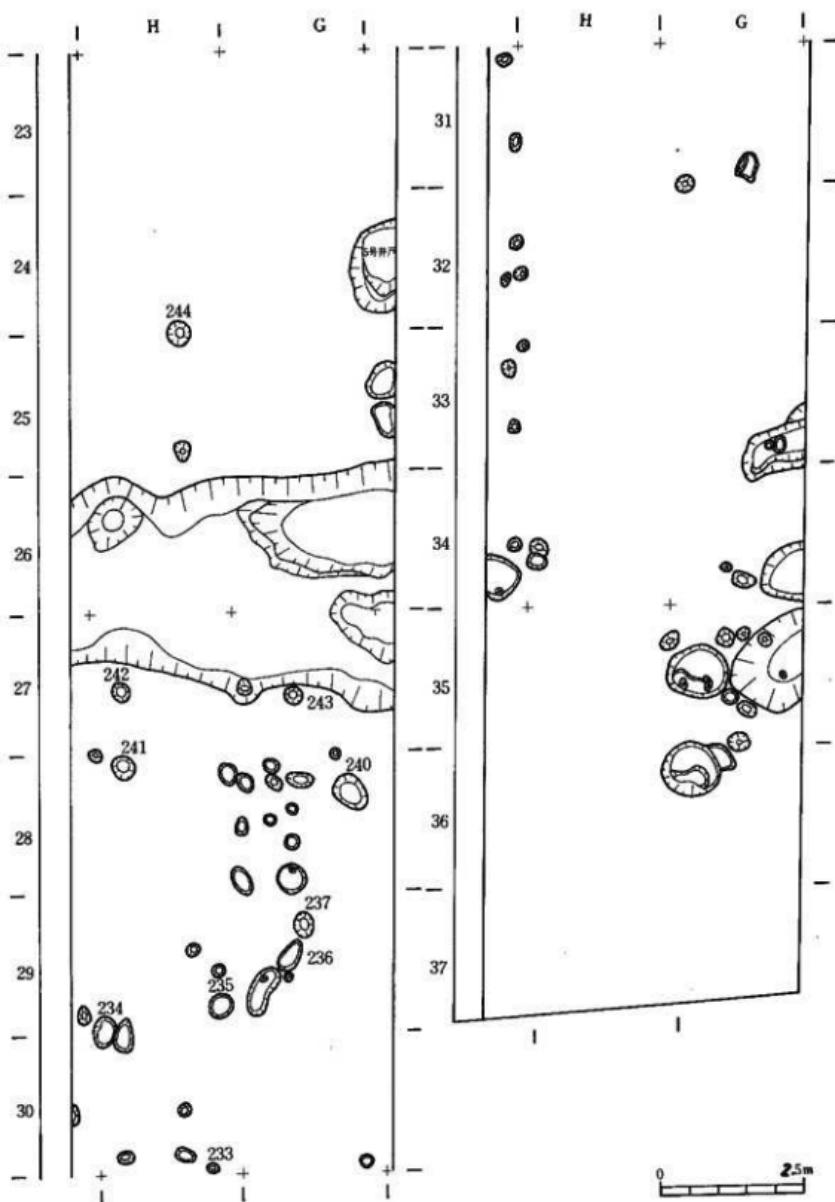
ToC-C地区, ToB-C地区(上面)



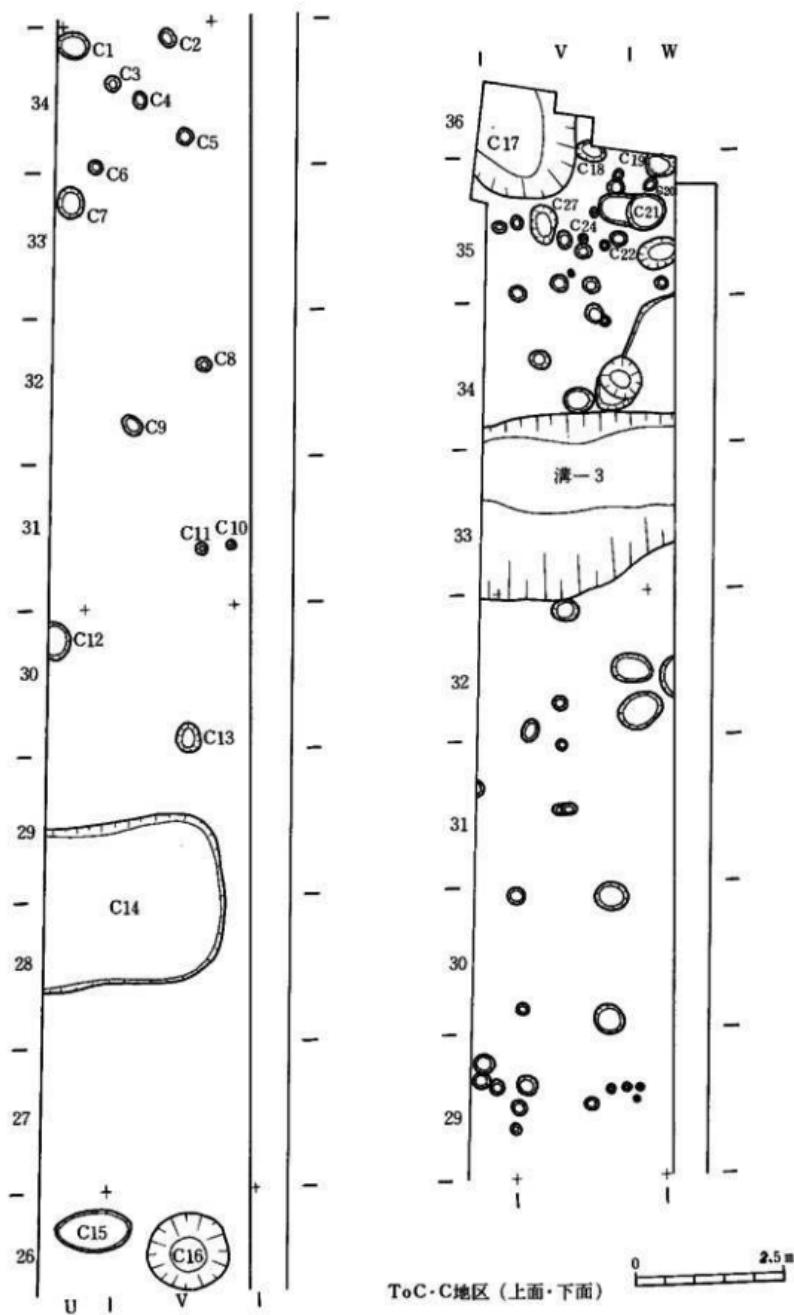


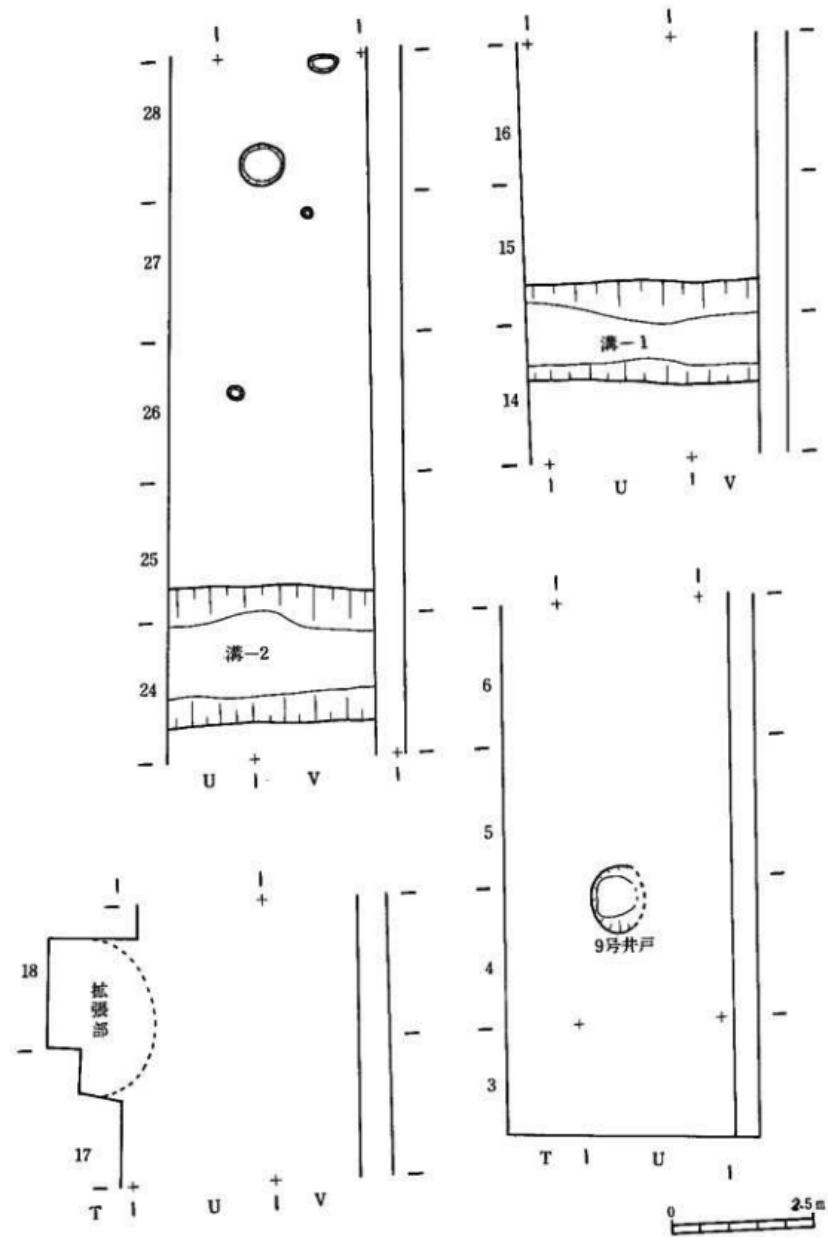




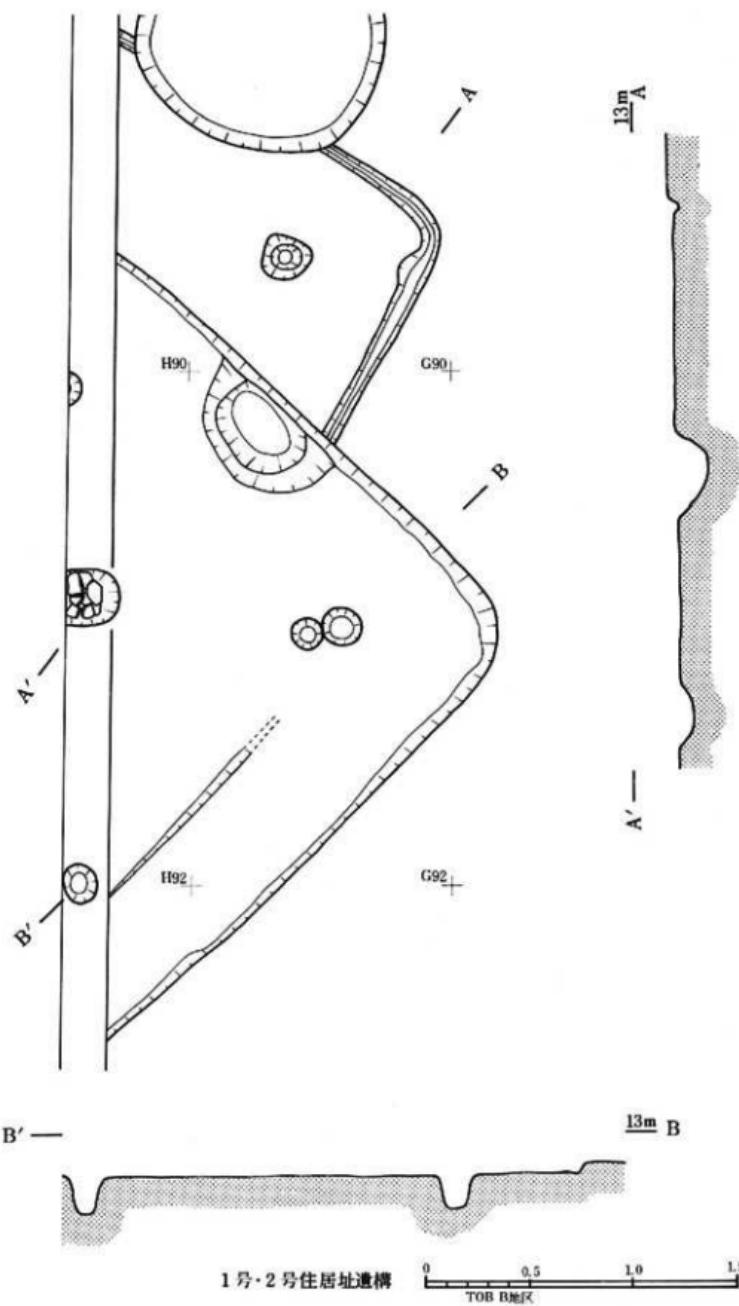


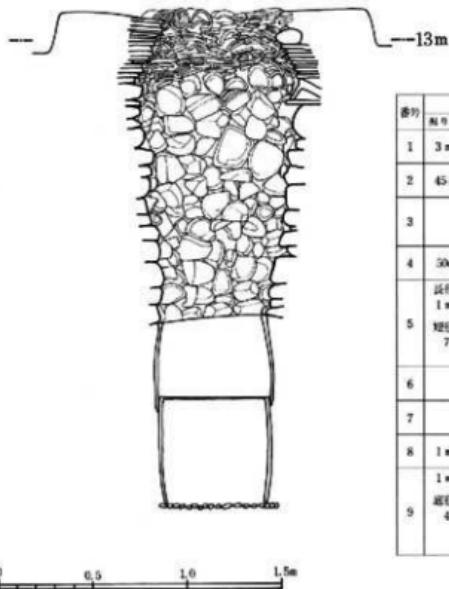
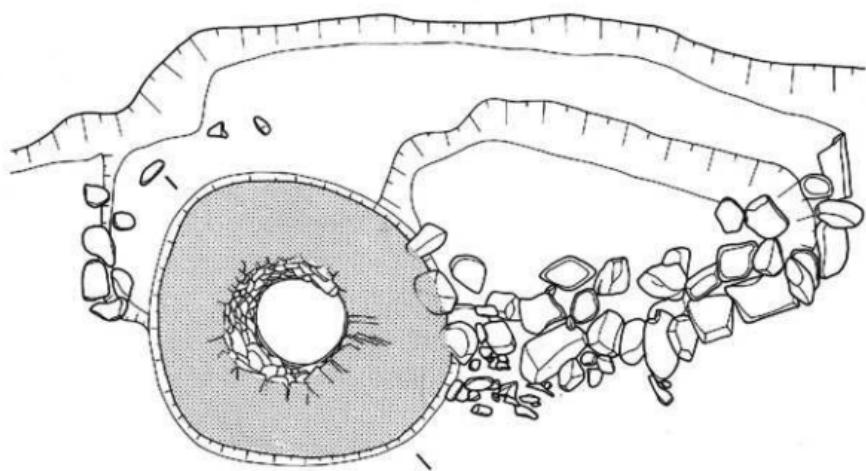
ToC・B地区（下面）





ToC・C地区（下面）

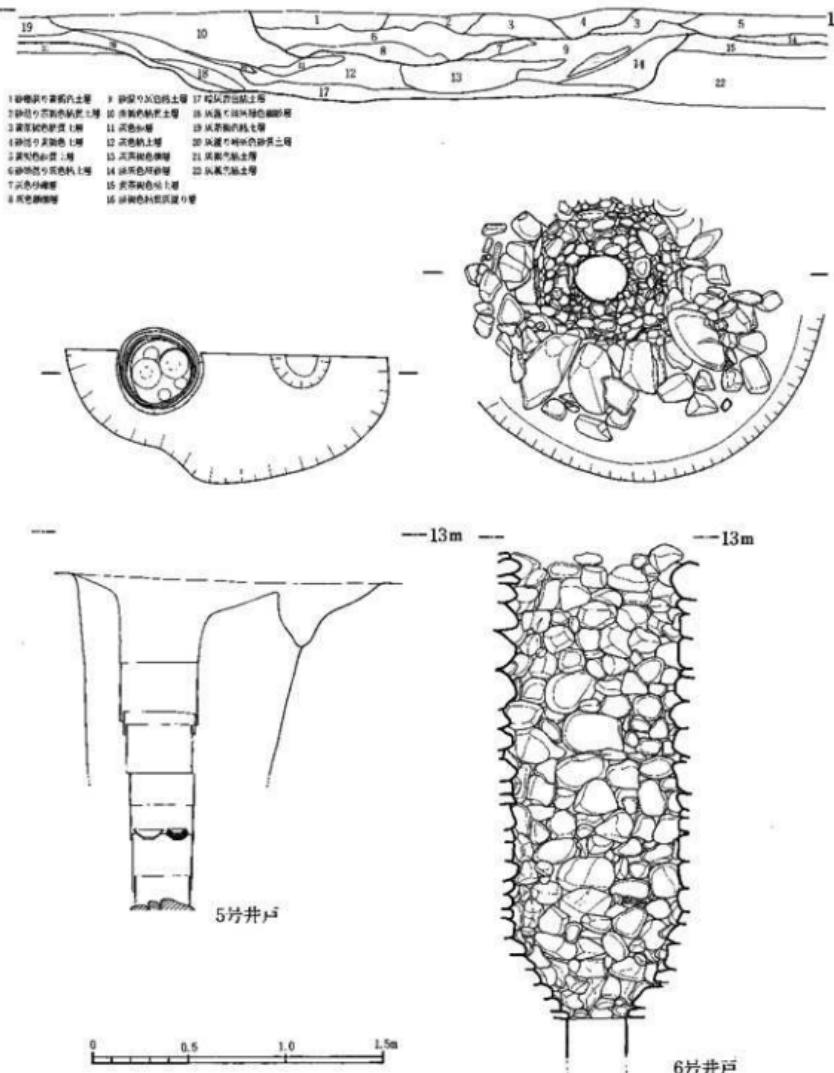




井戸一覧表

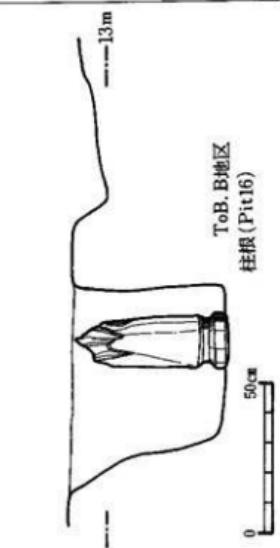
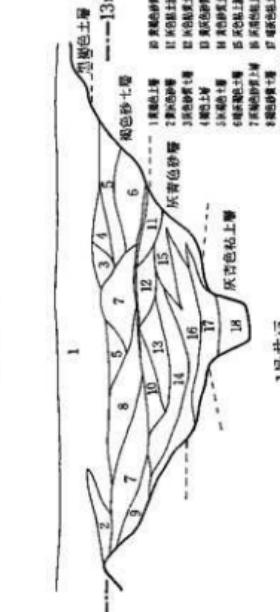
番号	既 現			井戸 槽 構	
	掘り方	深さ	底		
1	3m50	1m		ナシ	瓦器片 木片・下駄
2	45cm	60cm	40cm	曲物	瓦器片 2 枚
3		2m65	60cm	瓦+河原石+陶器	瓦器片 木造り瓦
4	50cm	85cm	30cm	曲物+土基	瓦器 9
5	長径 1m65 短径 70cm	41cm上段 38 34 33 31 28 下段	41cm上段 38 34 33 31 28 下段	曲物(6段)	瓦器片 7 灯明皿 5
6		2m50	80cm(石) 41cm(陶)	河原石+曲物	瓦器片
7		55cm	40cm	土基(3段)	ナシ
8	1m95 短径 40cm	47cm上段 44cm下段	47cm上段 44cm下段	曲物(2段)	土師器片 瓦器片
9	1m50	1m	42 44 39 38 35 下段	曲物6段	ナシ

3号井戸造構、井戸一覧表

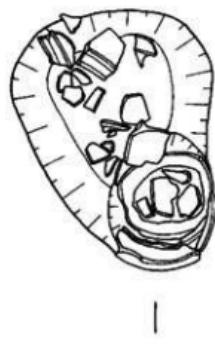


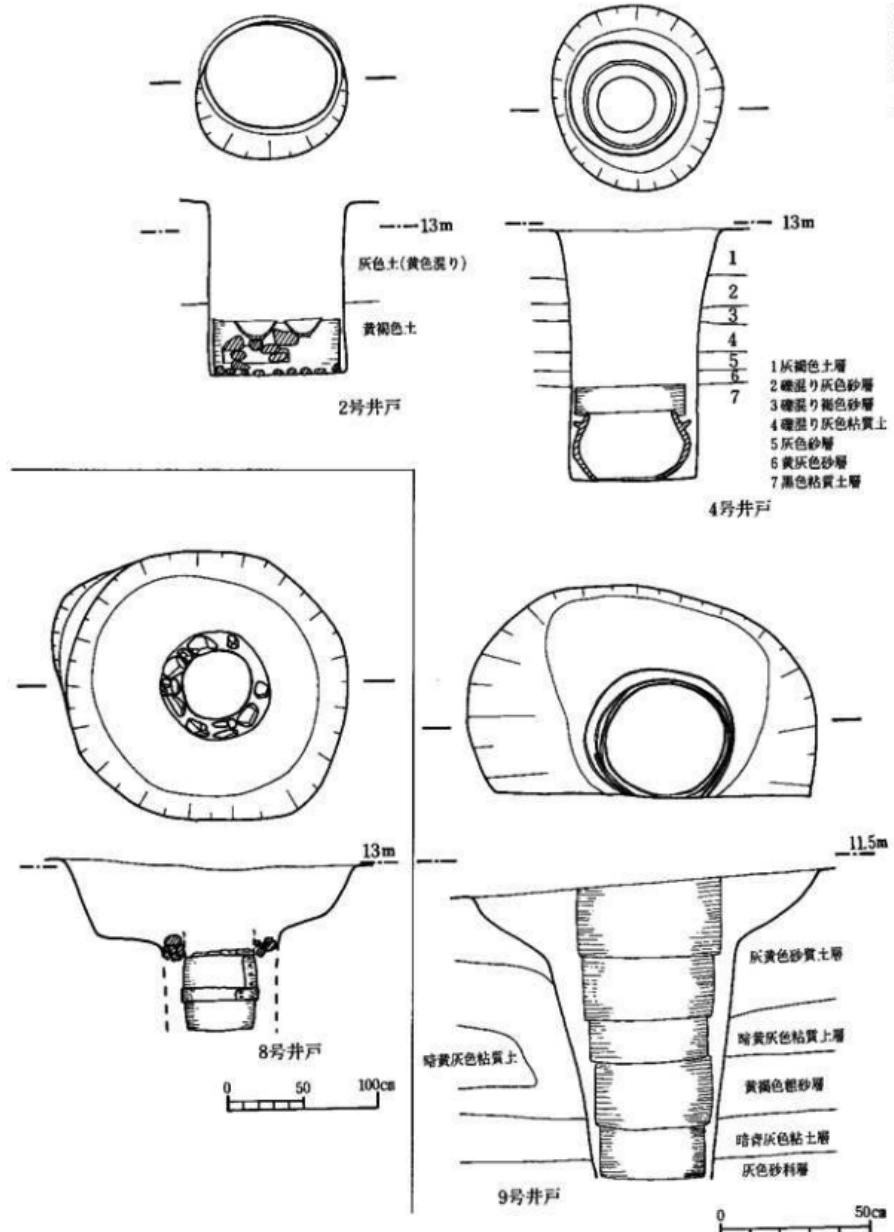
旧河川上層断面、5号・6号井戸造構

八一 第四区

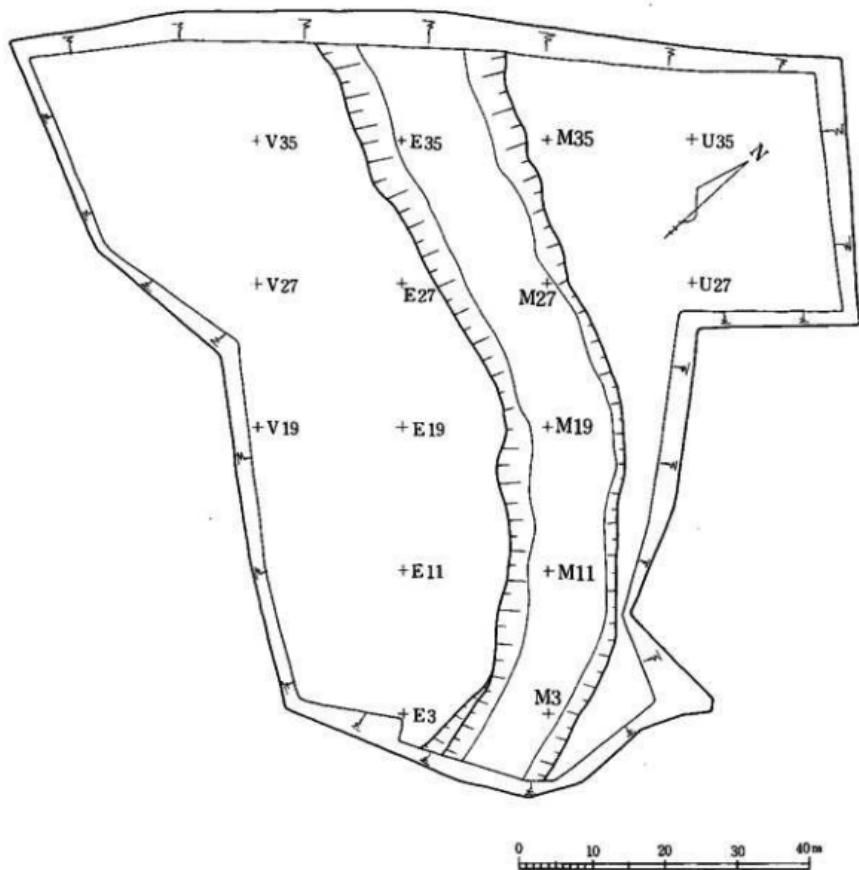


1号・7号井戸造構、柱根 (Pit 16)

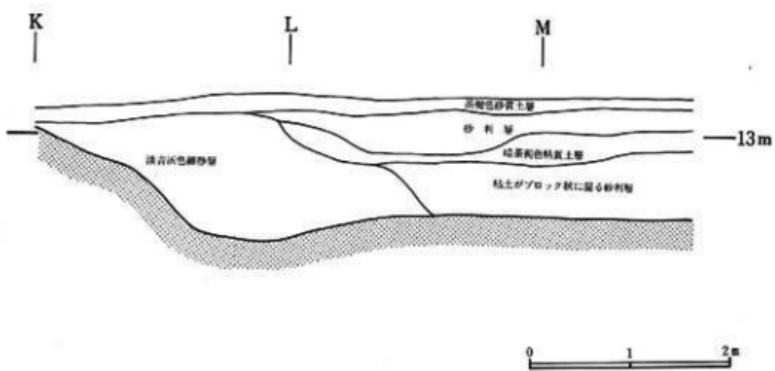
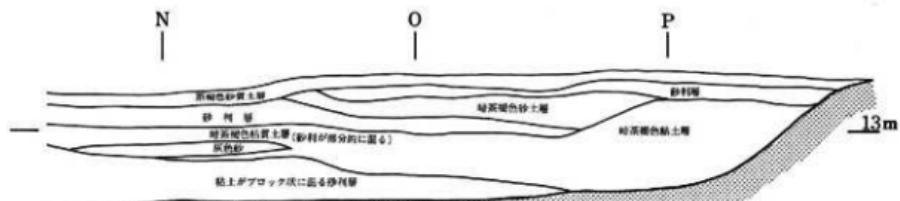
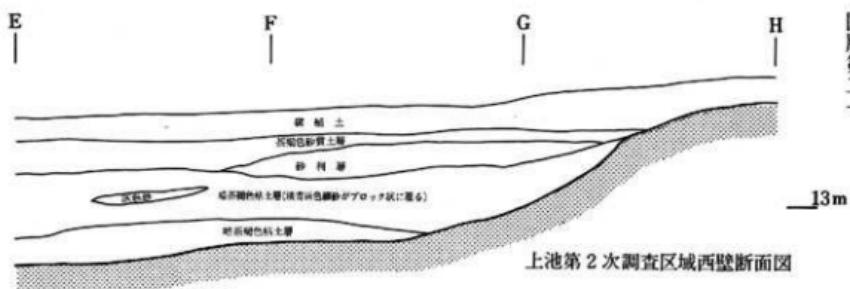




各種井戸構造



上池部分



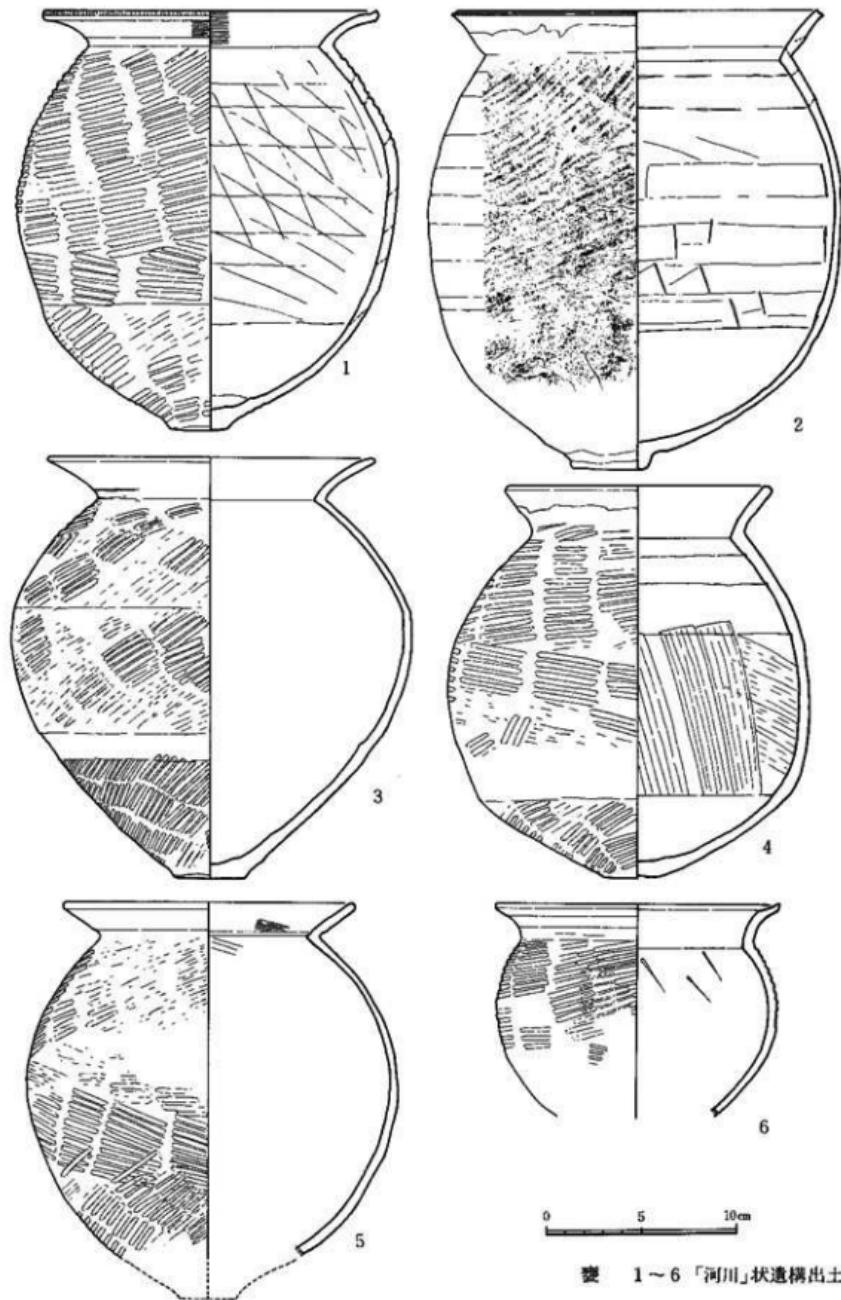


表 1~6 「河川」状遺構出土

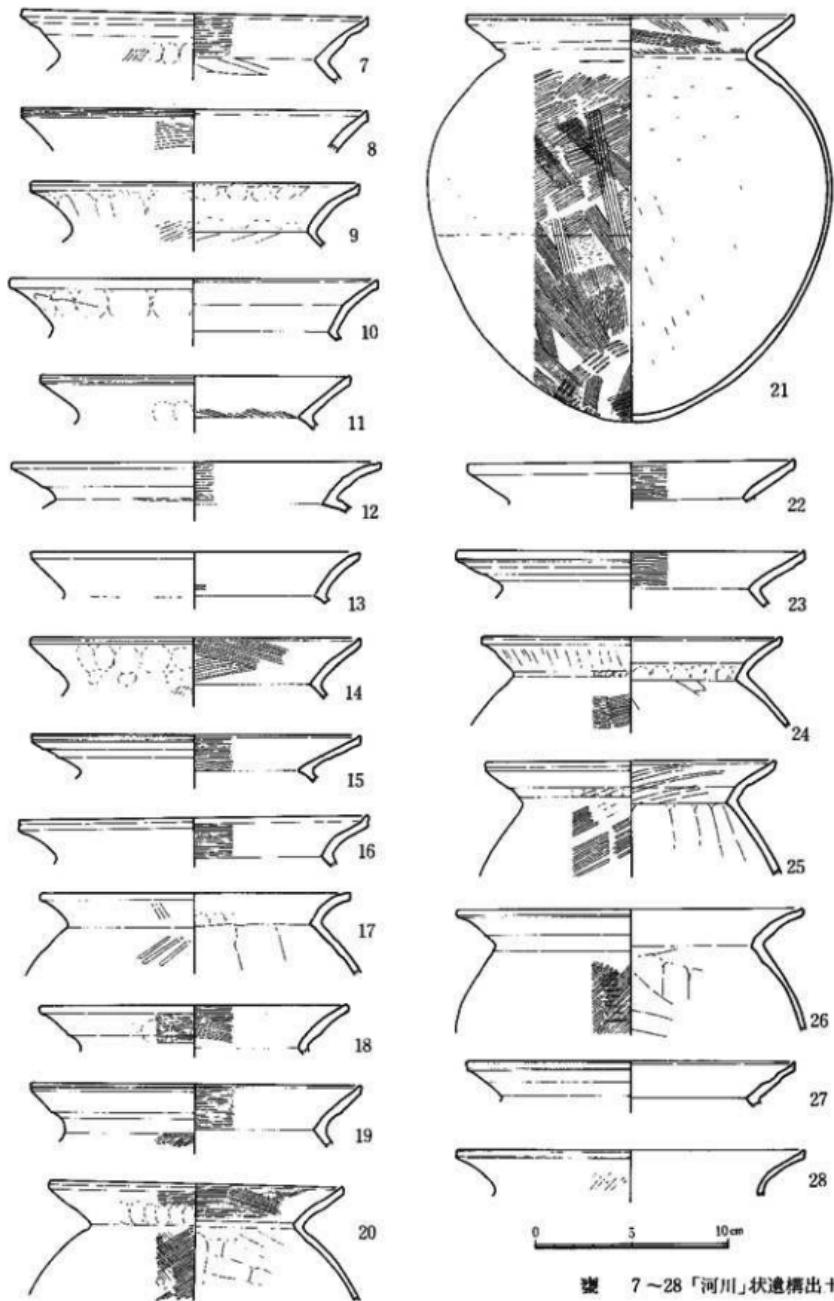
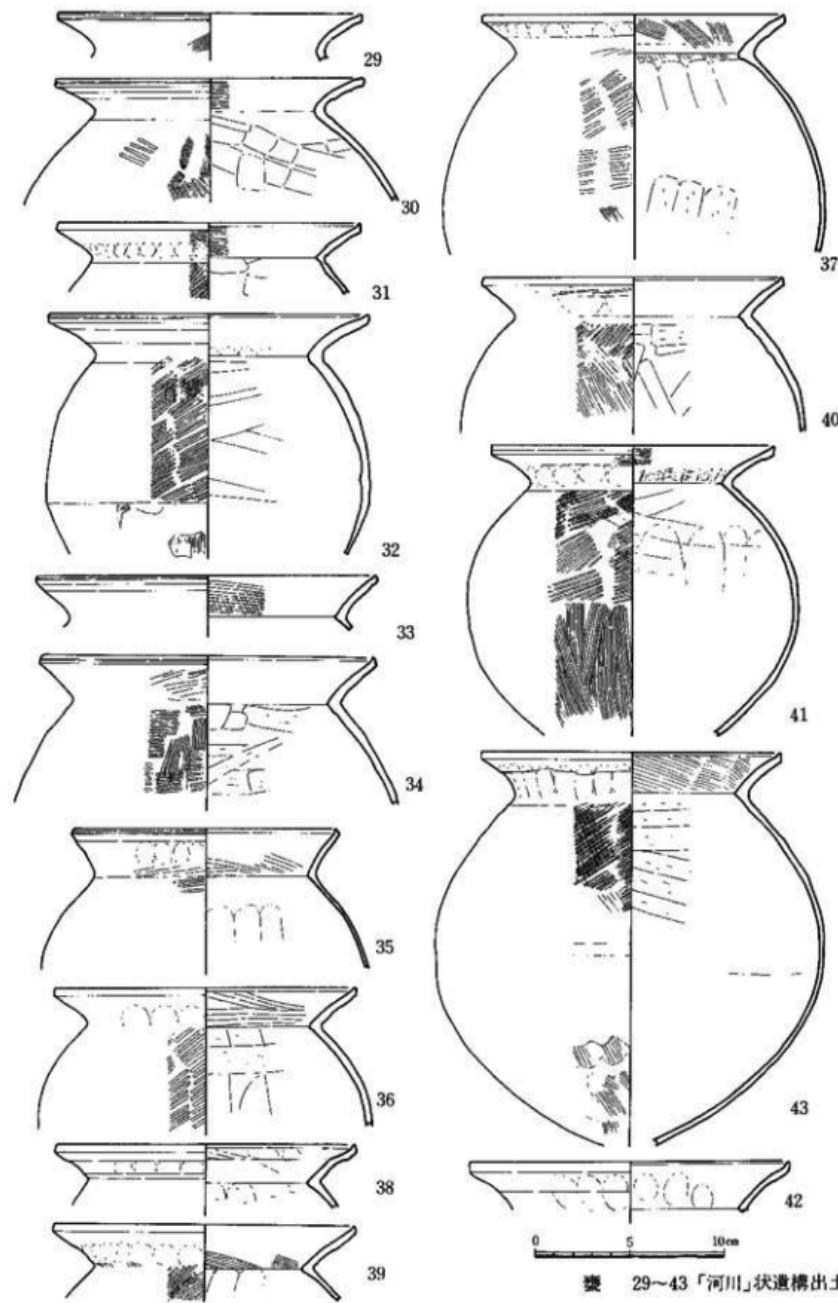


圖 7~28 「河川」状遺構出土



29~43 「河川」状遺構出土

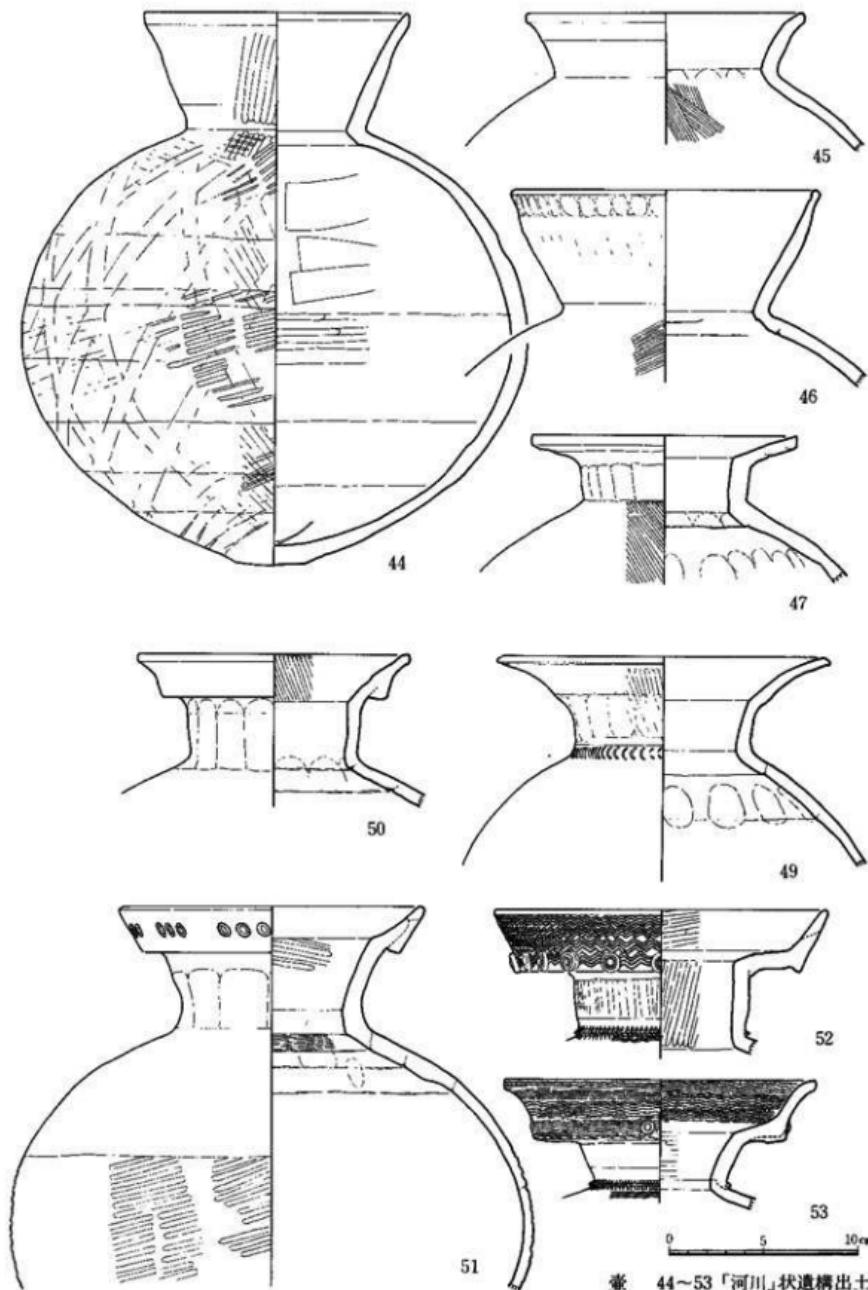
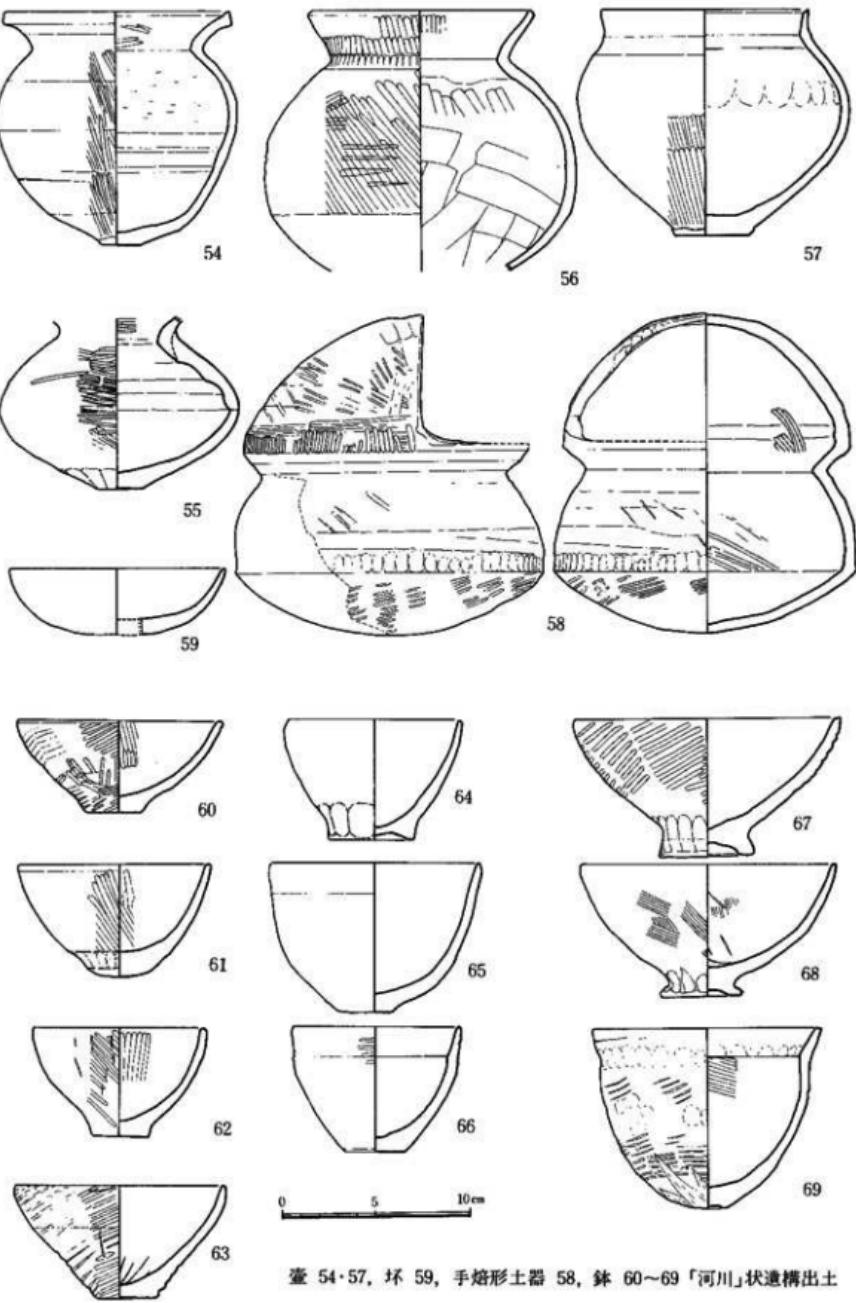
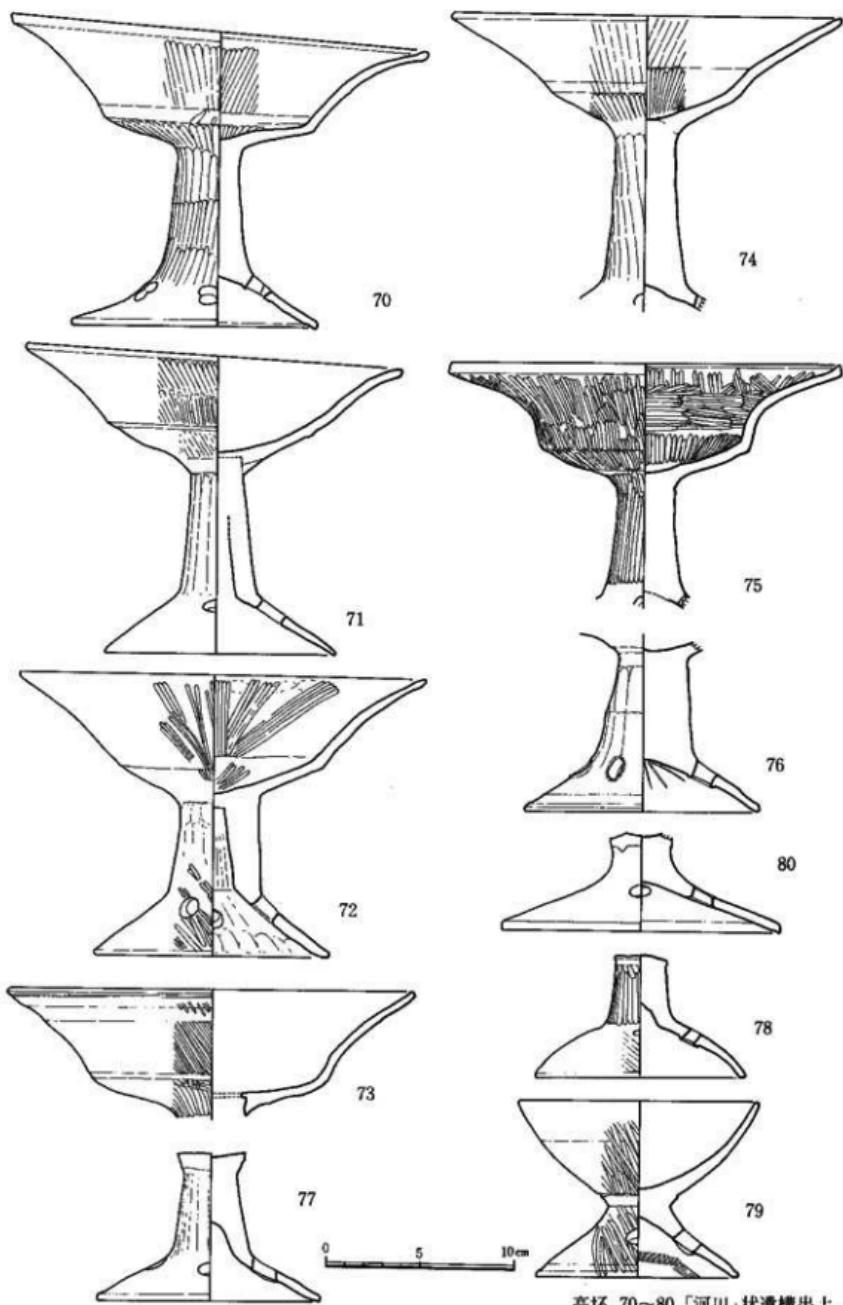


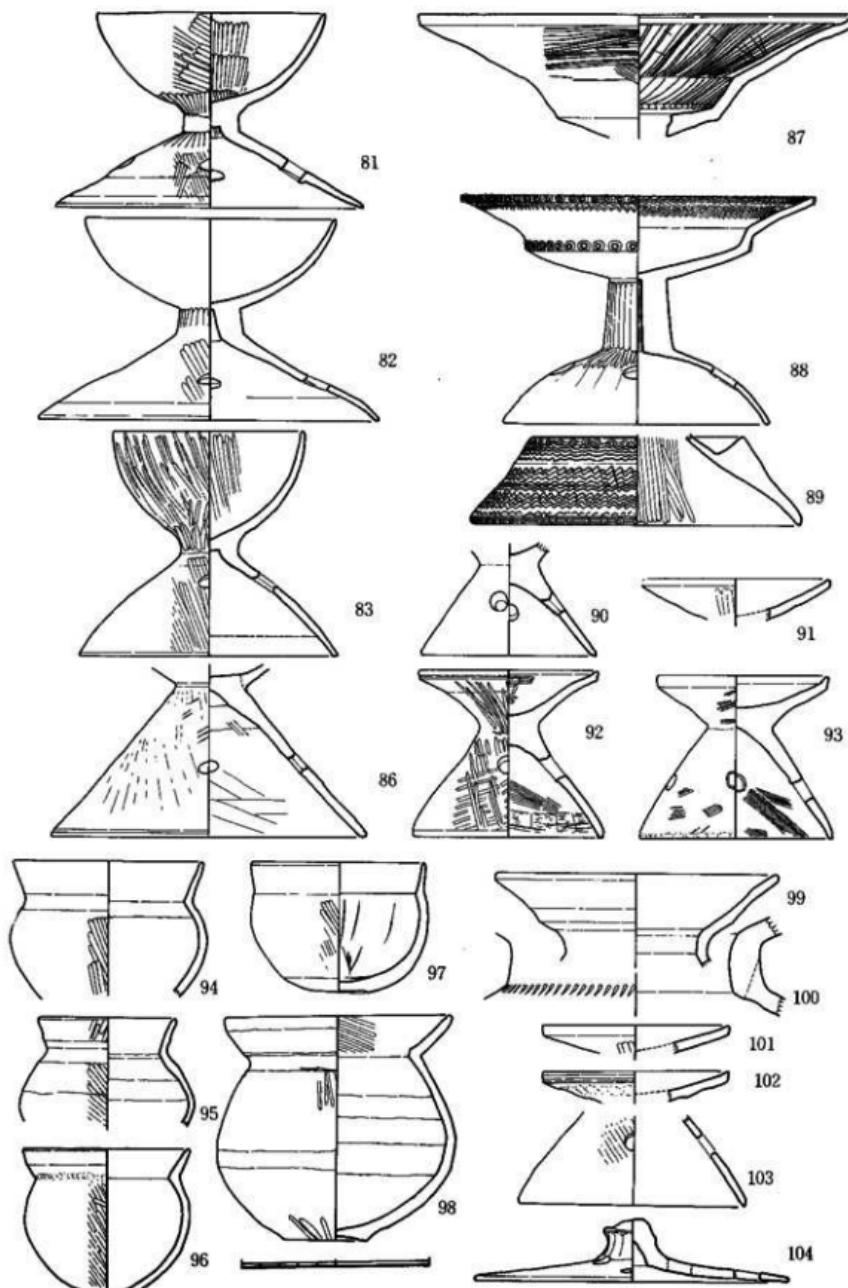
図 44~53 「河川」状遺構出土



壹 54·57，坯 59，手焙形土器 58，鉢 60~69「河川」状遺構出土



高环 70~80「河川」状造構出土



高坏 81~89, 小型器台 90~93, 墓 94~98「河川」状遗構出土  
99~104 住居址出土

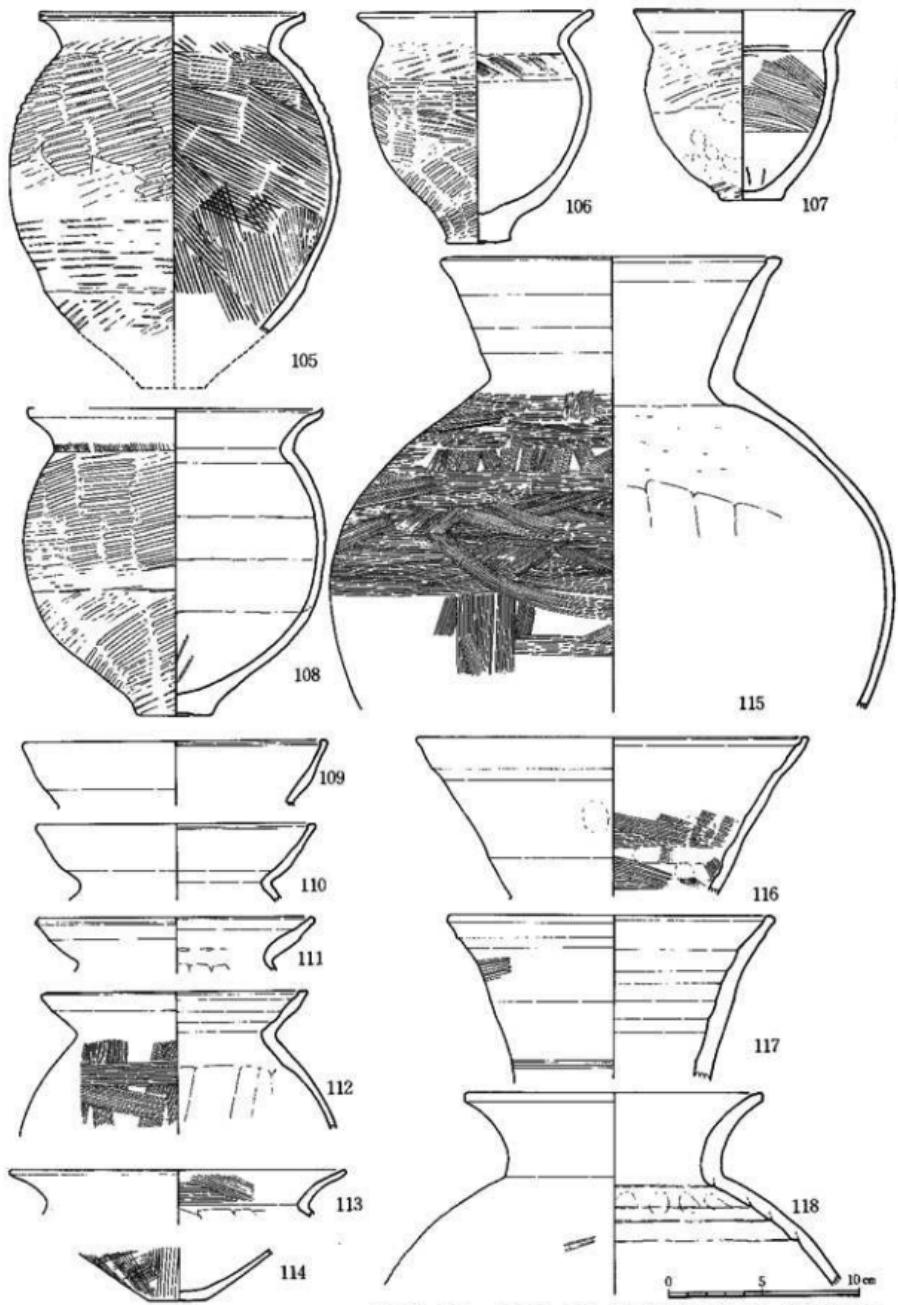
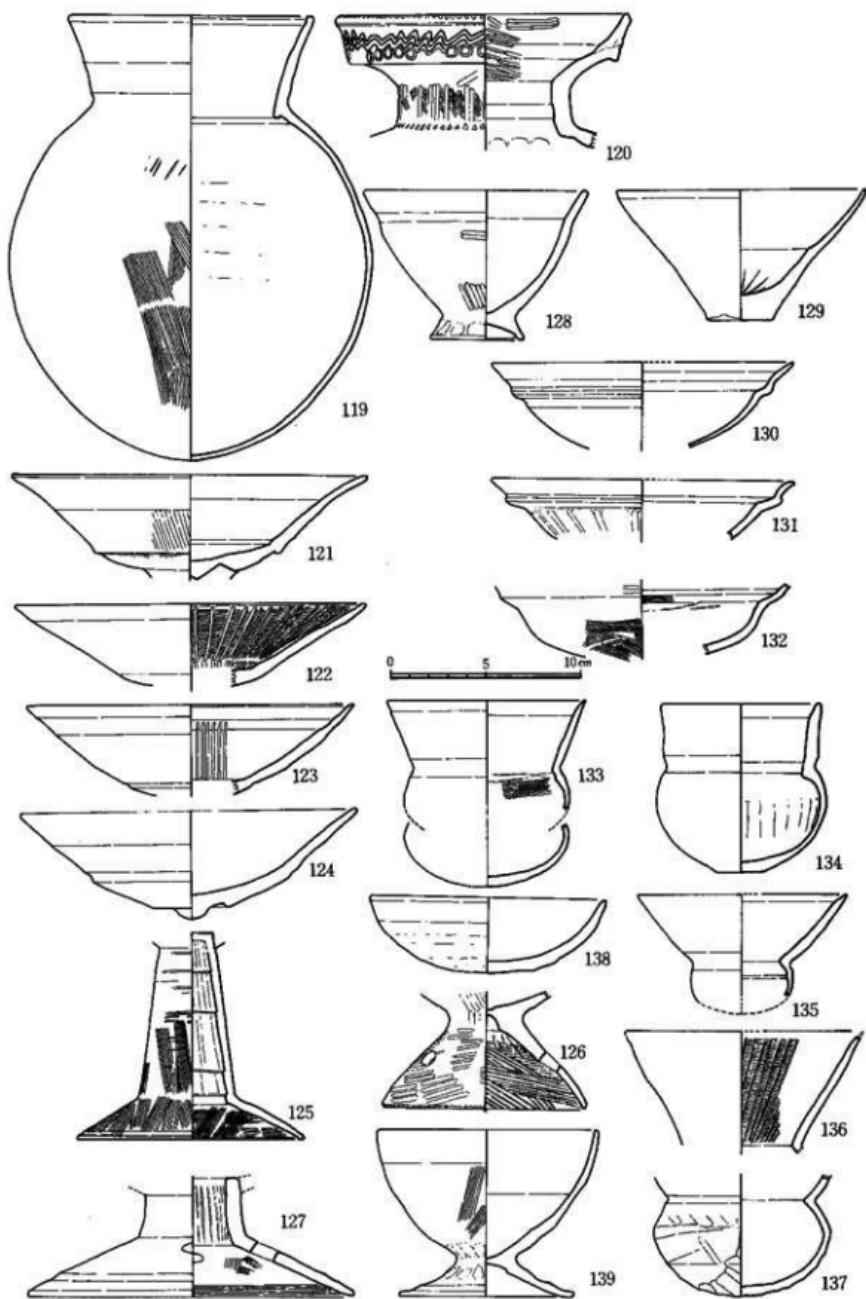
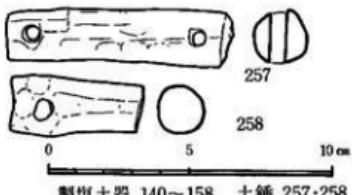
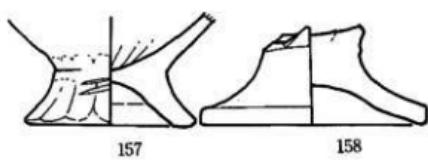
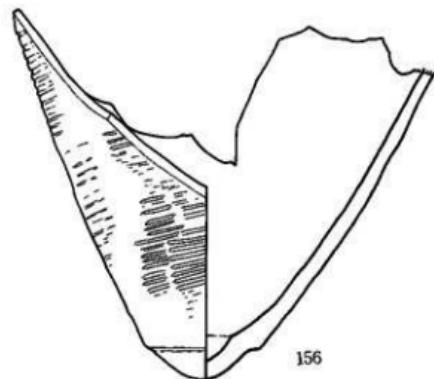
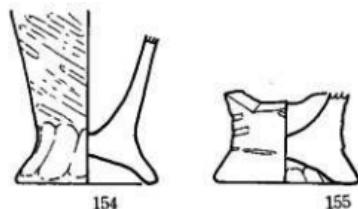
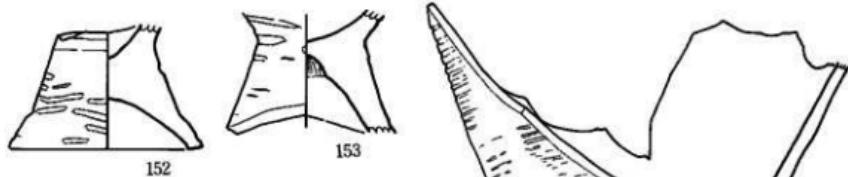
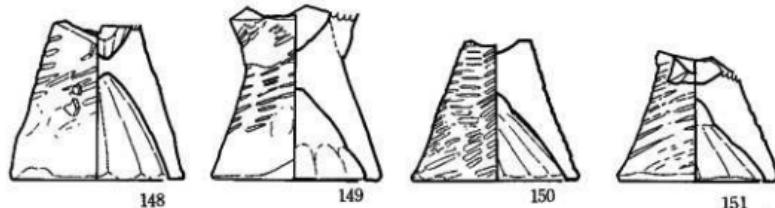
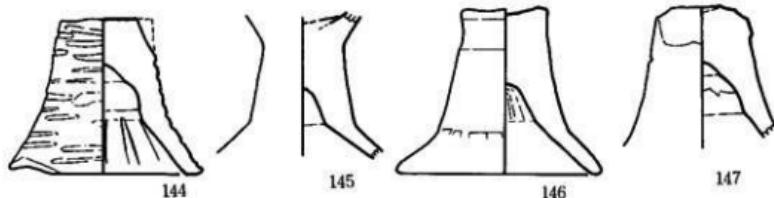
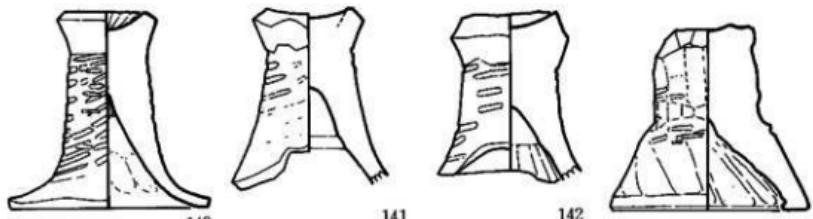


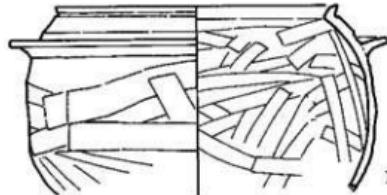
図 105~114, 壺 115~118 ToC南北トレンチ・拡張部出土



壺 119-120, 鉢 128-129, 高環 121~127, 台付椀 139, 环 138, 小型鉢 130~132,  
小型丸底壺 133~137 ToC南北トレンチ・拡張部出土



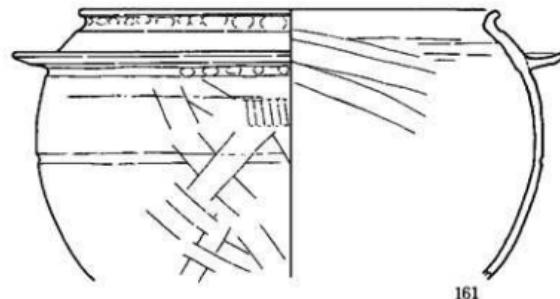
製塙土器 140~158, 土錘 257·258



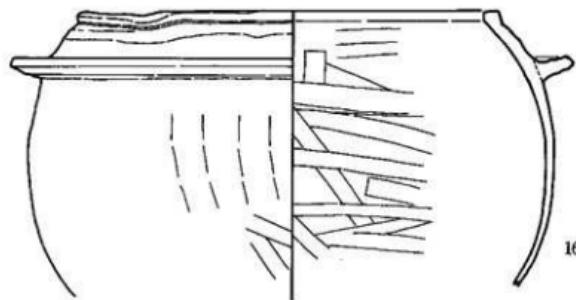
159



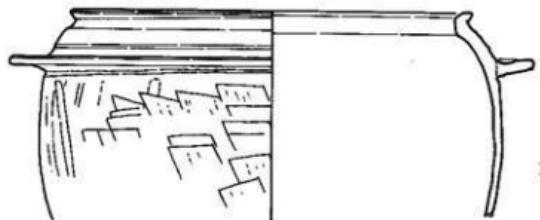
160



161



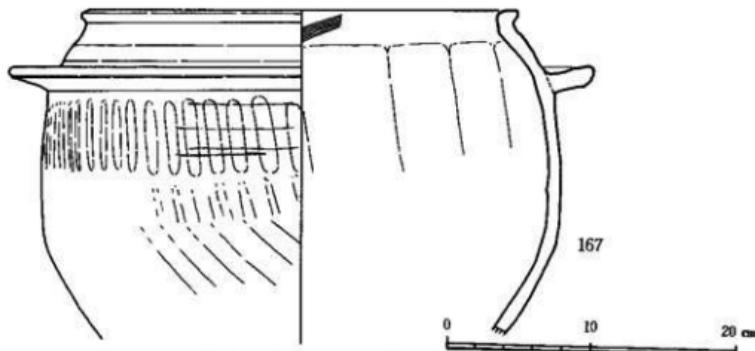
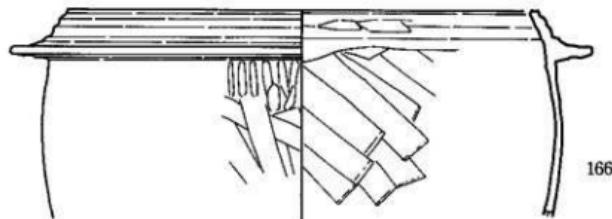
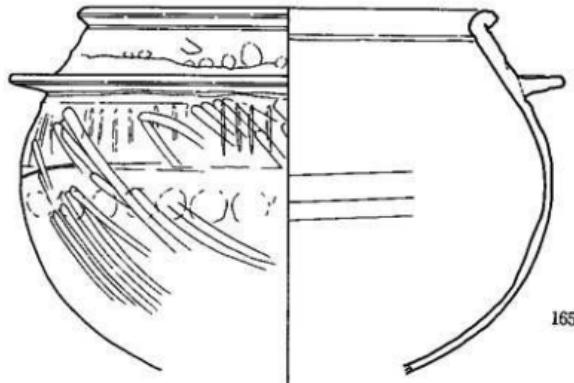
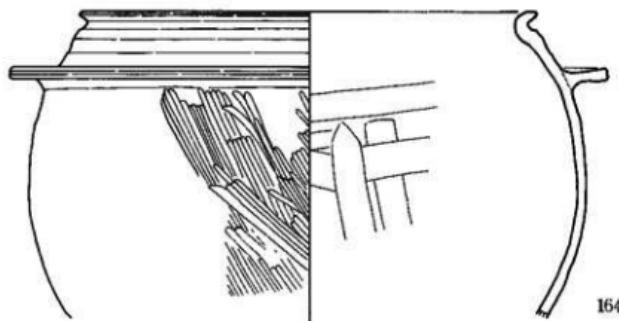
162



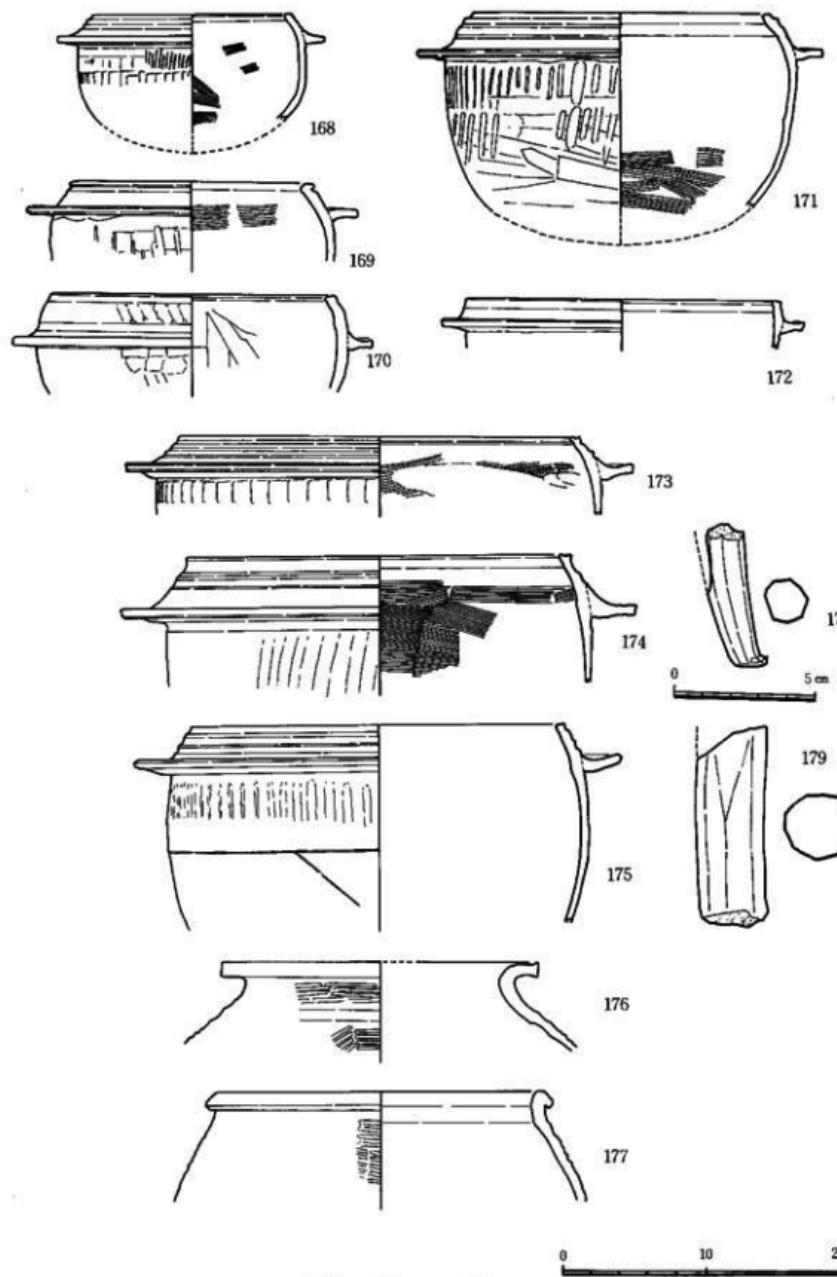
163

0 10 20 cm

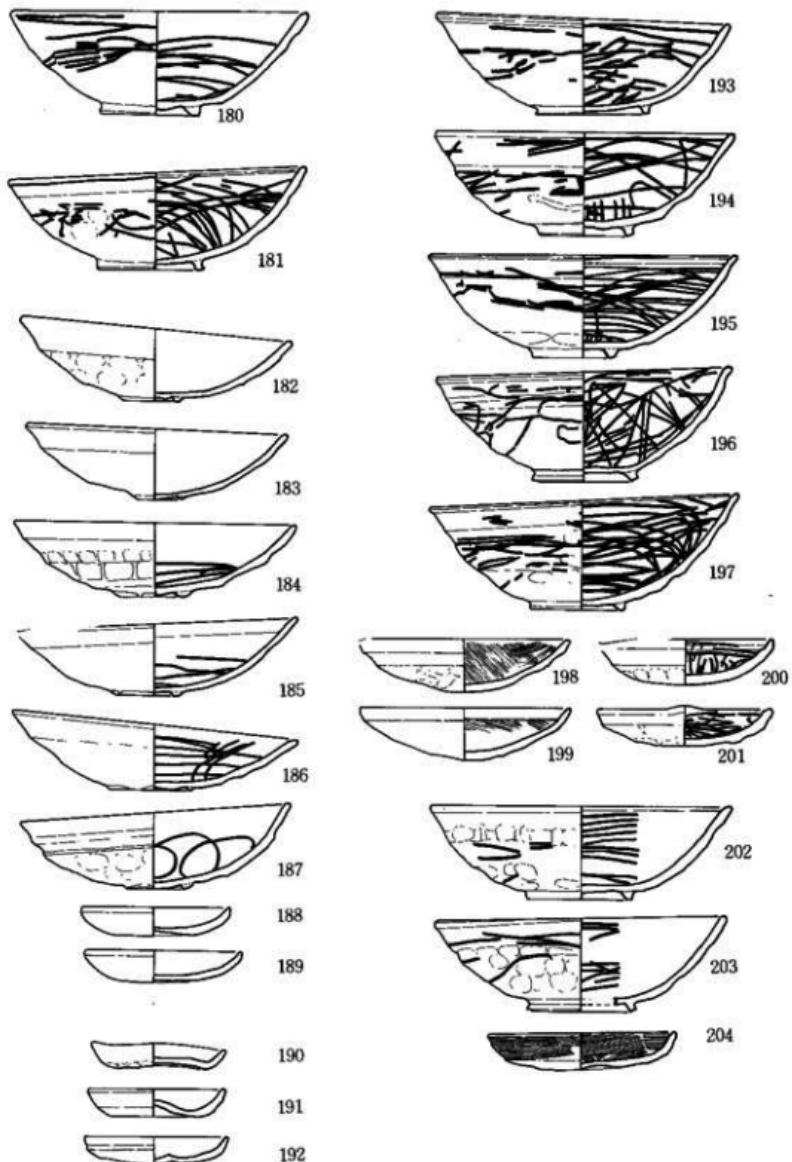
羽釜 159~161 4号井戸出土、162·163 7号井戸出土



羽釜 164~166 7号井戸出土上, 167 BH15-BG15褐色砂礫層出土

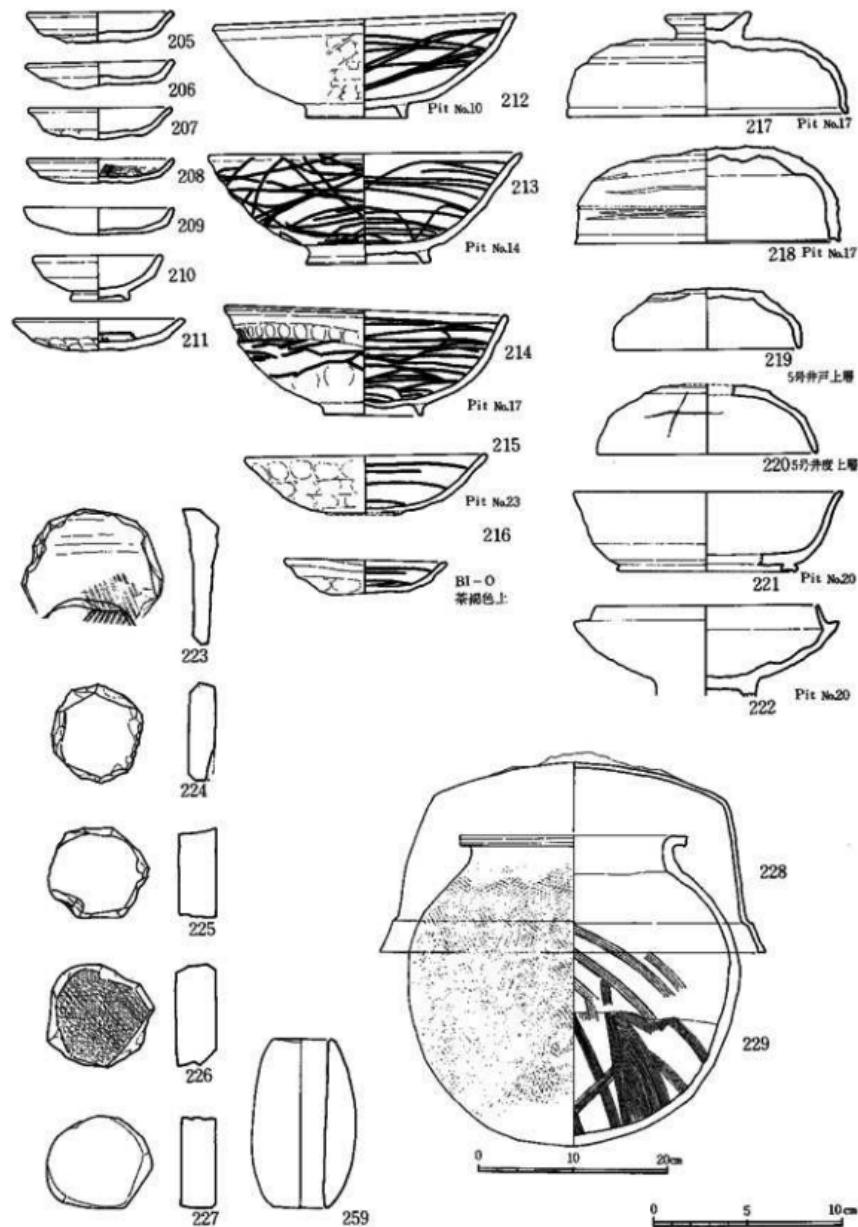


羽釜 168~175 瓦質土器, 176·177 三足片, 178·179 小碟群出土



0 5 10cm

瓦器他 180 1号井戸, 181 2号井戸, 182~192 4号井戸, 193~204 5号井戸 出土

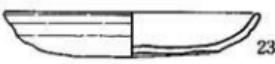


瓦器・須恵器他

205~211 小砾群, 212~222 各種ピット他出土, 円板 223~227, 骨壺 228·229, 土錘 259



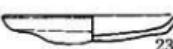
230



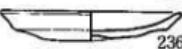
234



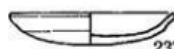
231



235



236



237



238



232

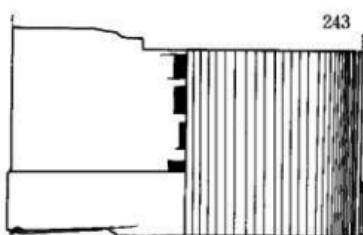


239

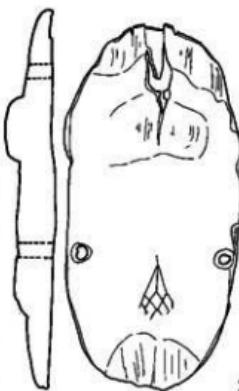
0 5 10 cm



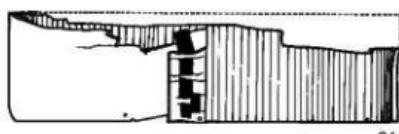
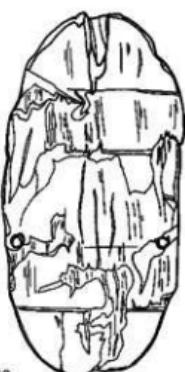
242



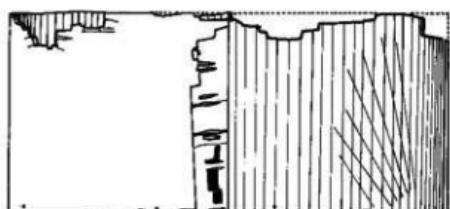
243



246



244



0 10 20 cm 245



247

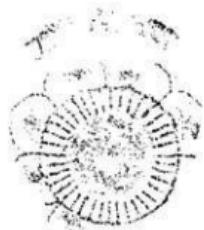


248

0 5 10 20 cm

瓦器他 230~238 ToC溝 2, 240~241 ToC溝 3, 239 ToC C-16

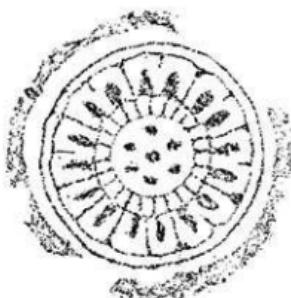
木製品 242 3号井戸, 243·244 5号井戸, 2458分井戸, 246 1号井戸, 247 2号井戸, 248 ピット5 出土



249



252



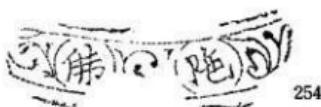
250



253



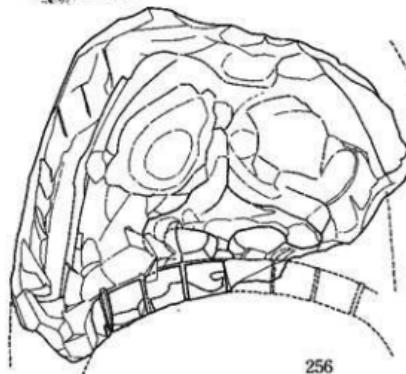
251



254



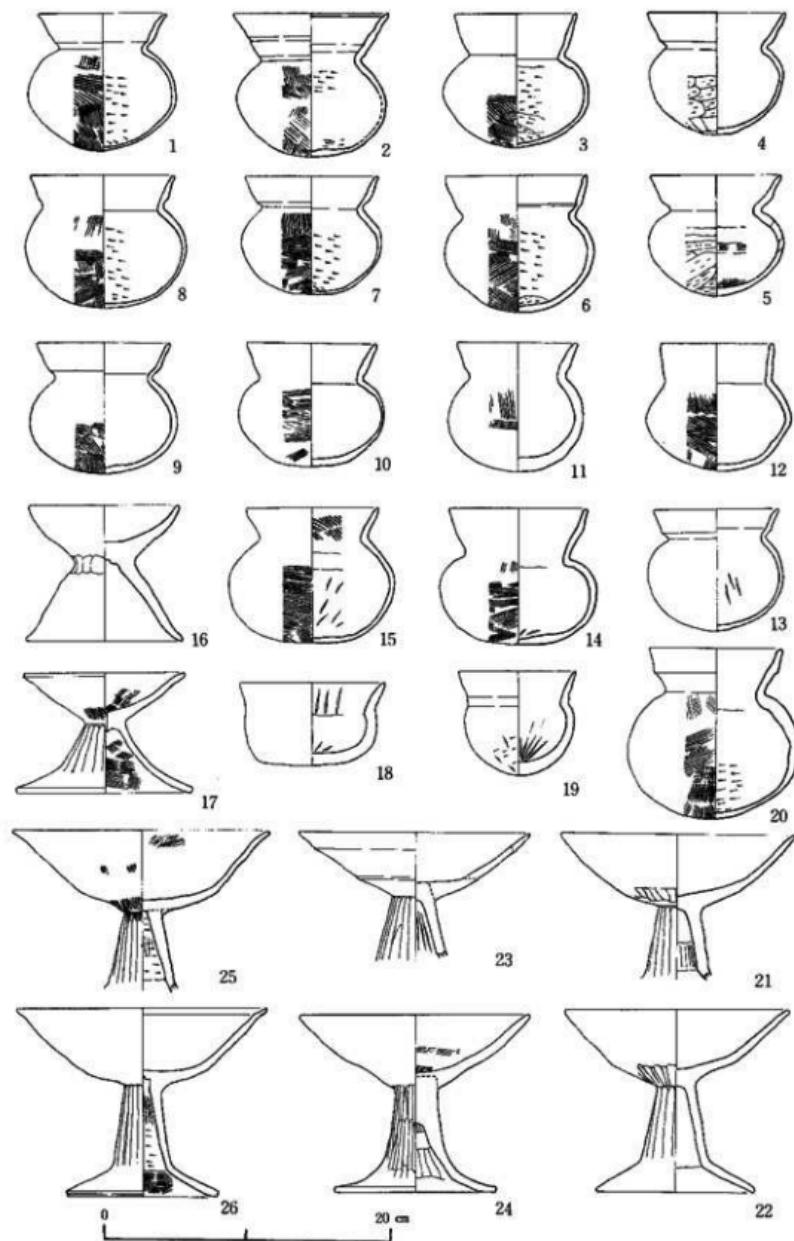
255



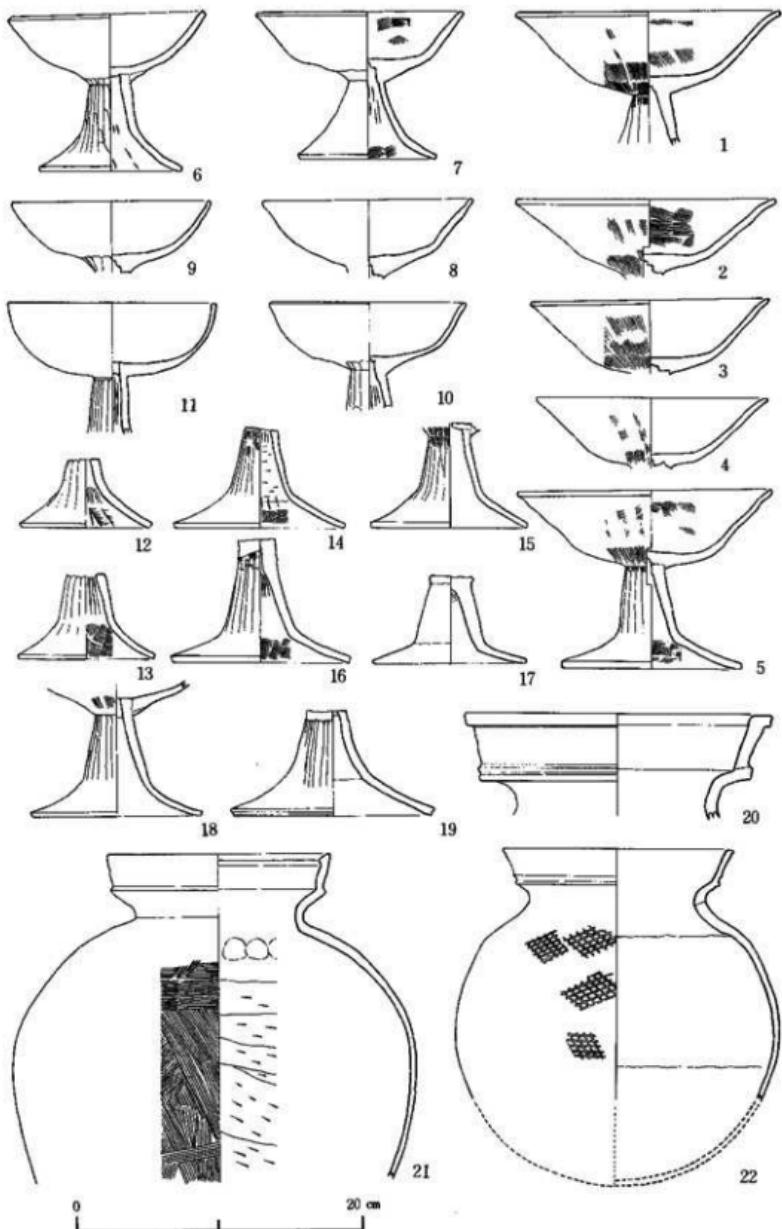
256



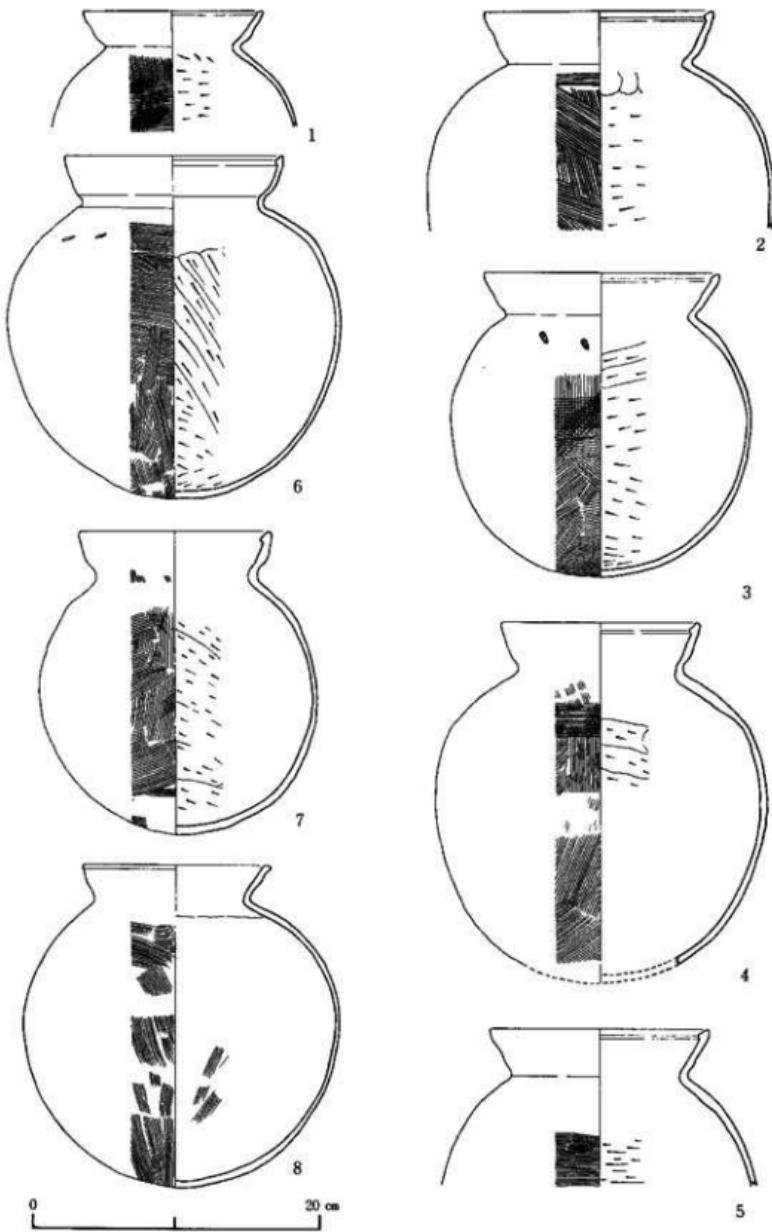
0 10 20cm



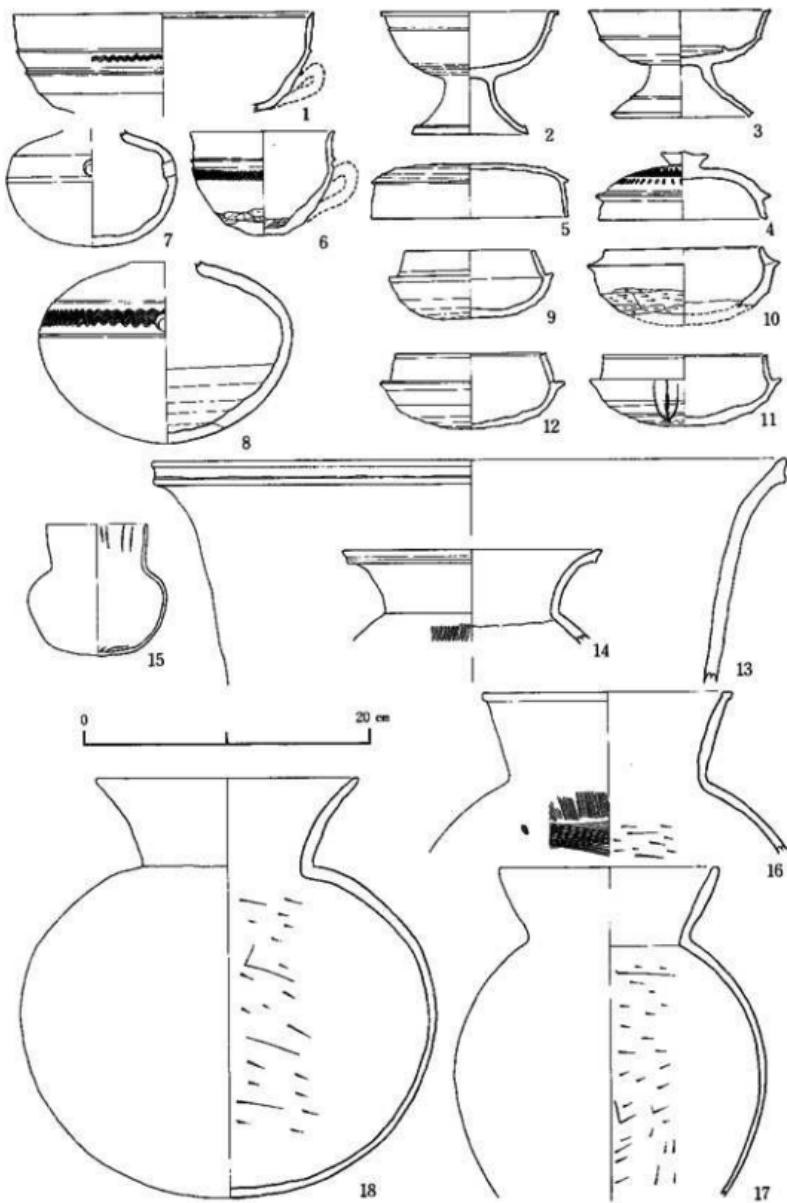
旧河川状遺構南岸堆積土(淡青灰色細砂層)および西端部(暗茶褐色粘土層)出土遺物



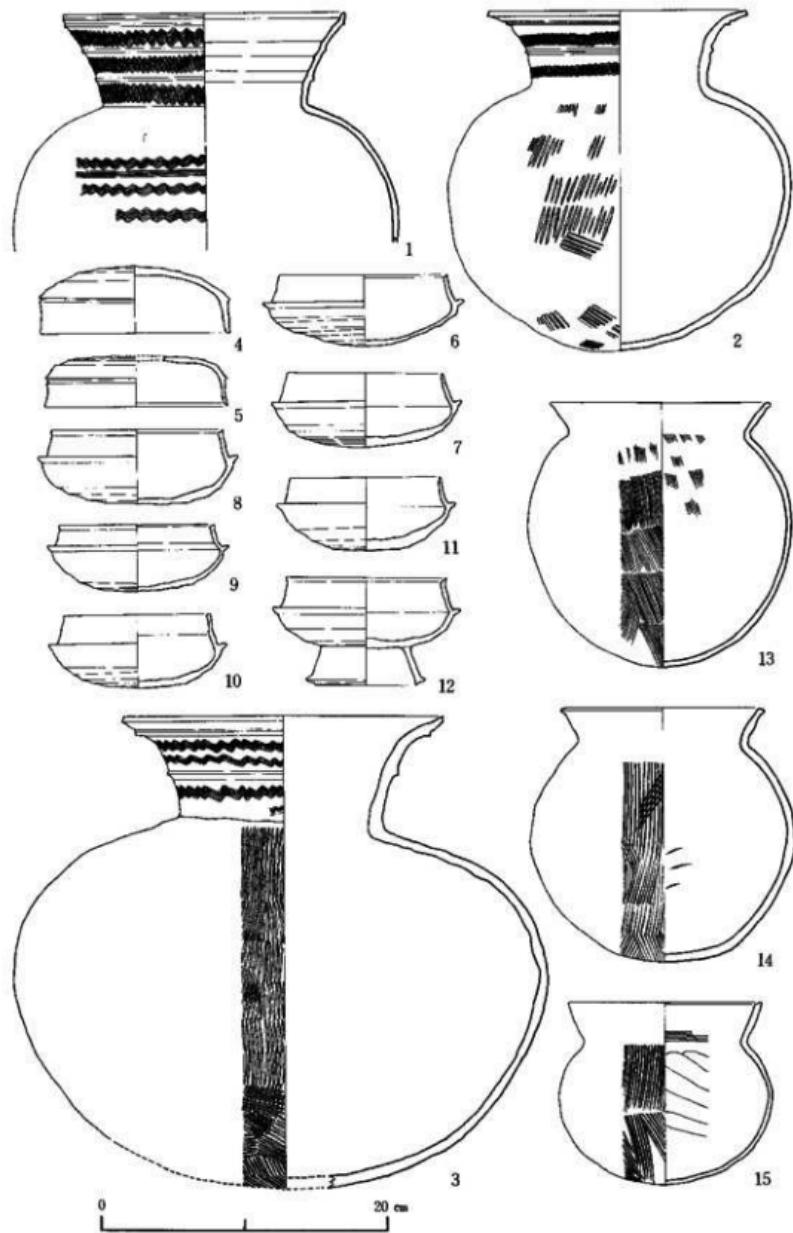
旧河川状造構南岸堆積土(淡青灰色細砂層)および西端部(暗茶褐色粘土層)出土遺物



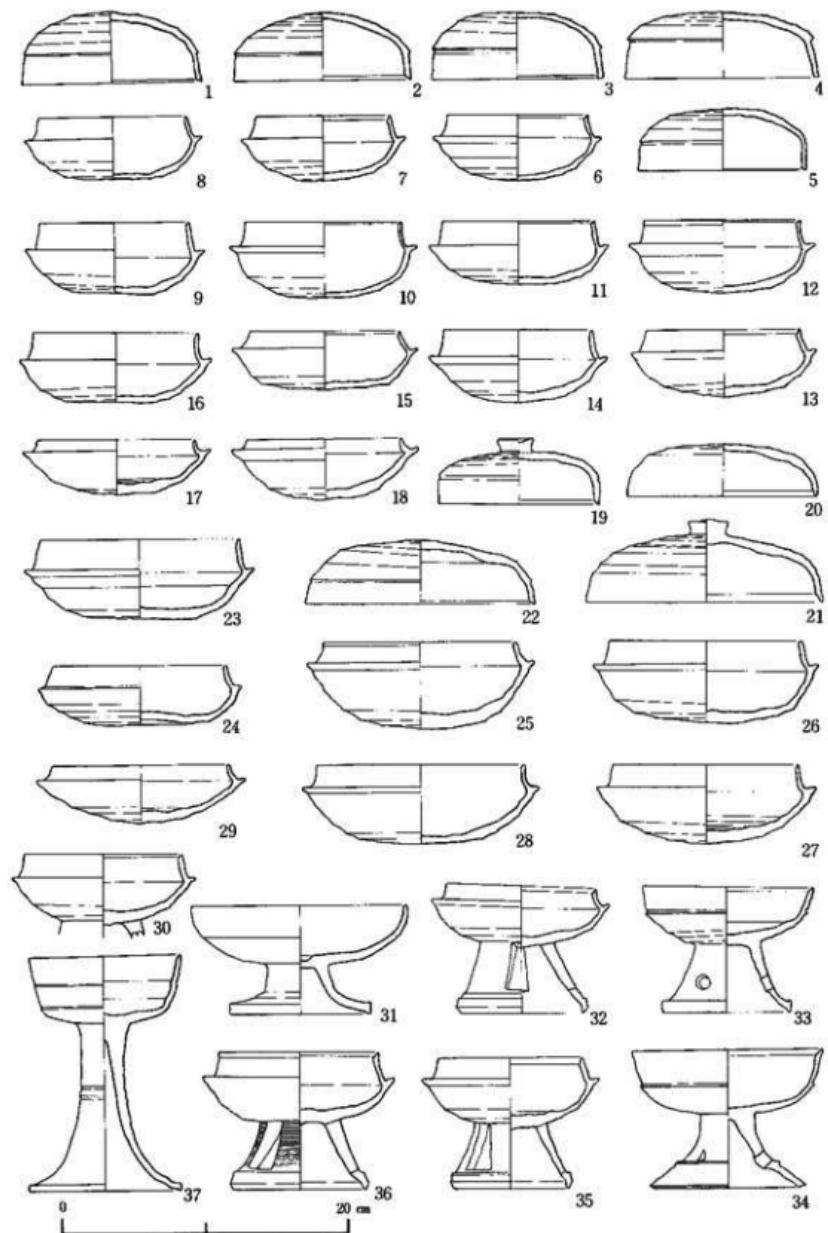
旧河川状遺構南岸(淡青灰色細砂層)ならびに西端部(暗茶褐色粘土層)出土遺物



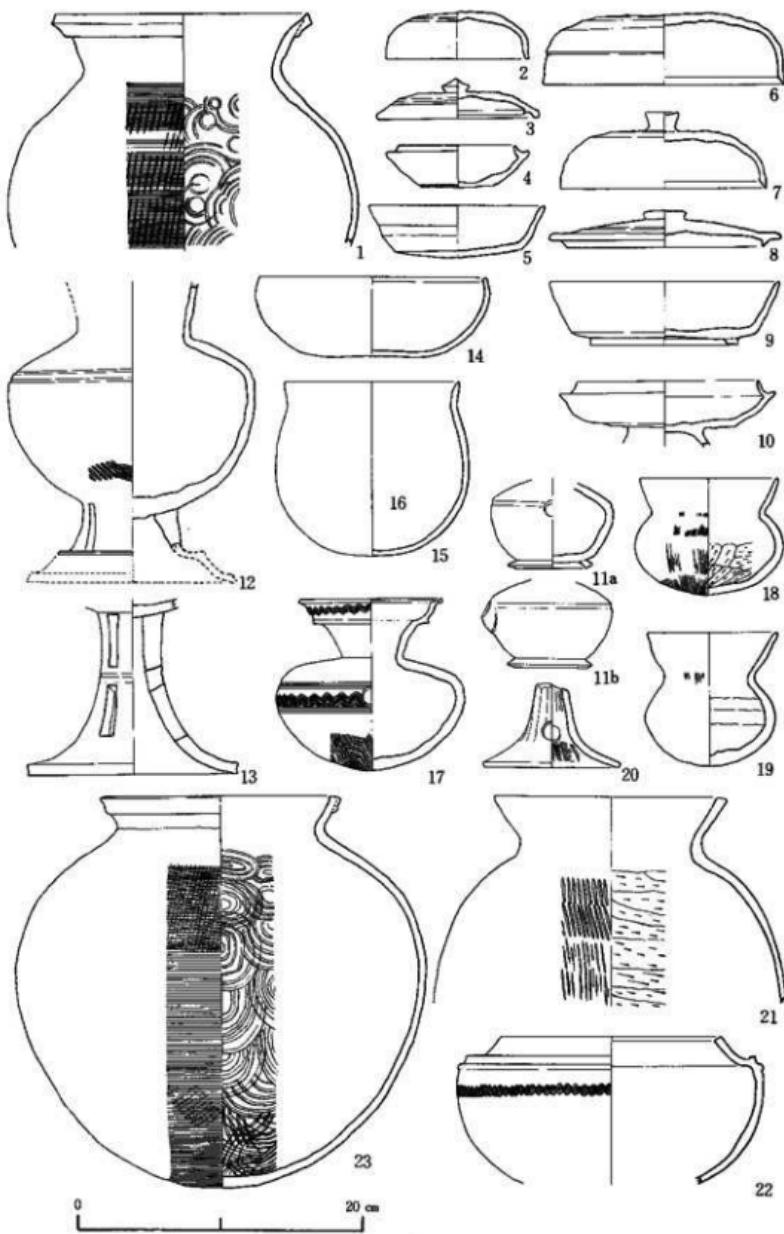
旧河川状造構南岸(淡青灰色細砂層)ならびに西端部(暗茶褐色粘土層)出土遺物



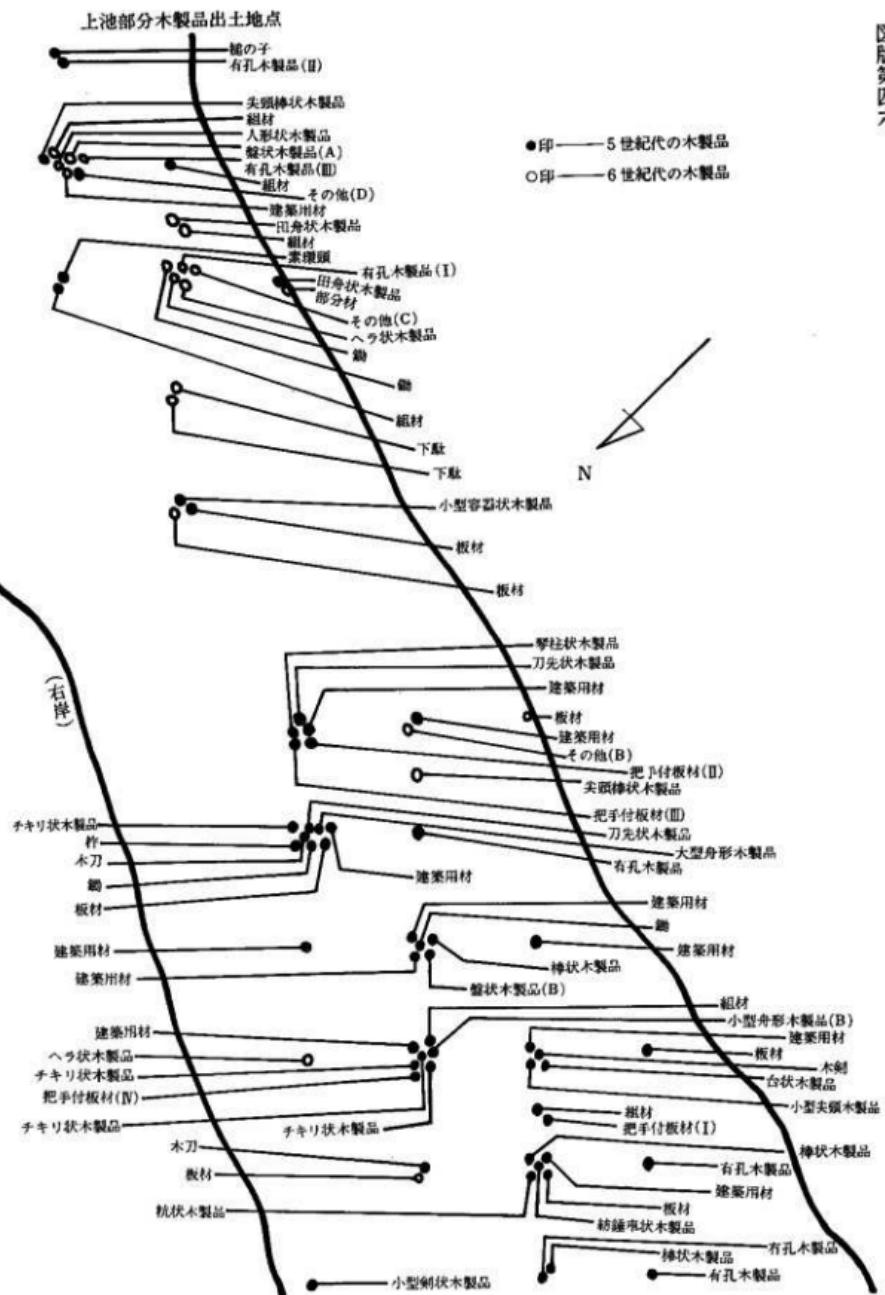
I-27地区周辺河川堆積土(暗茶褐色粘土混り灰色砂層)出土遺物

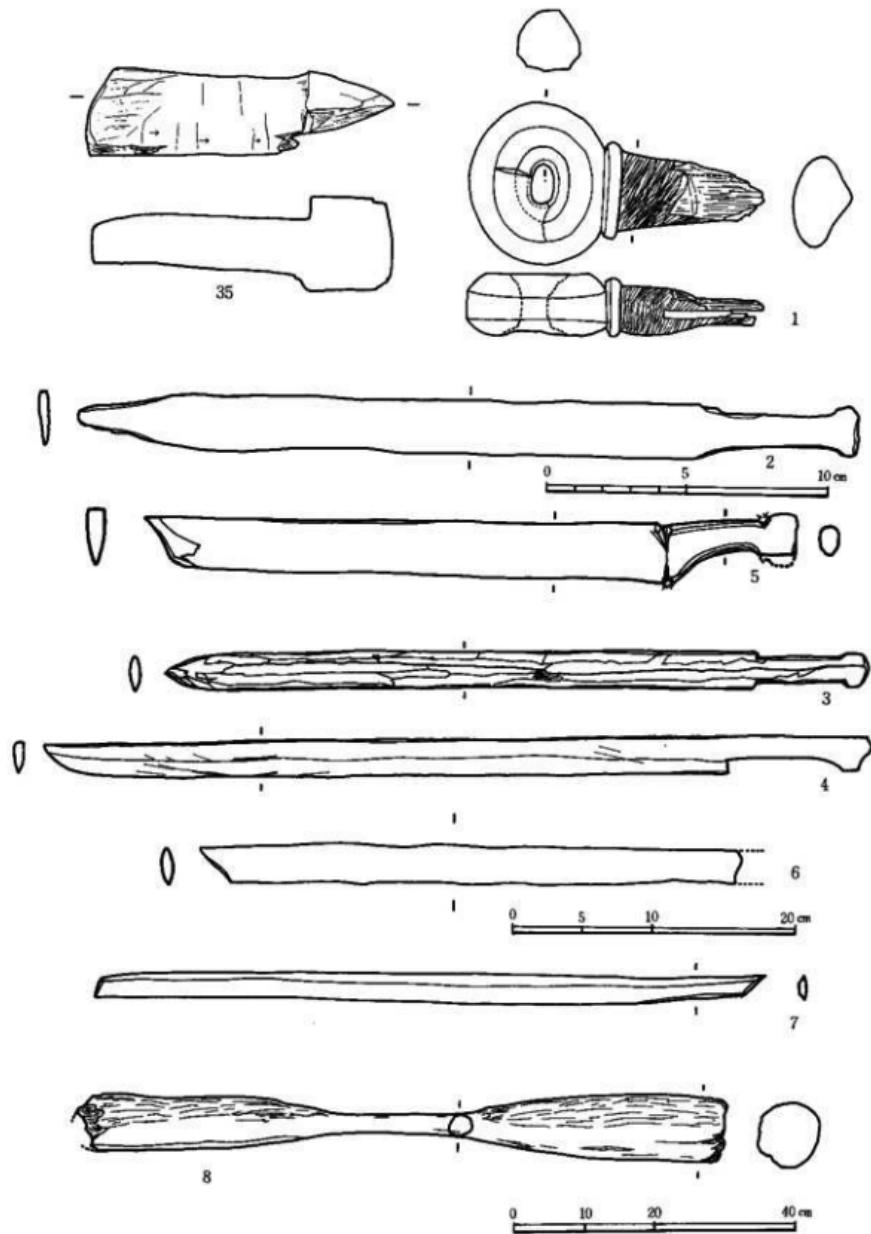


M—19地区周迎出土遗物

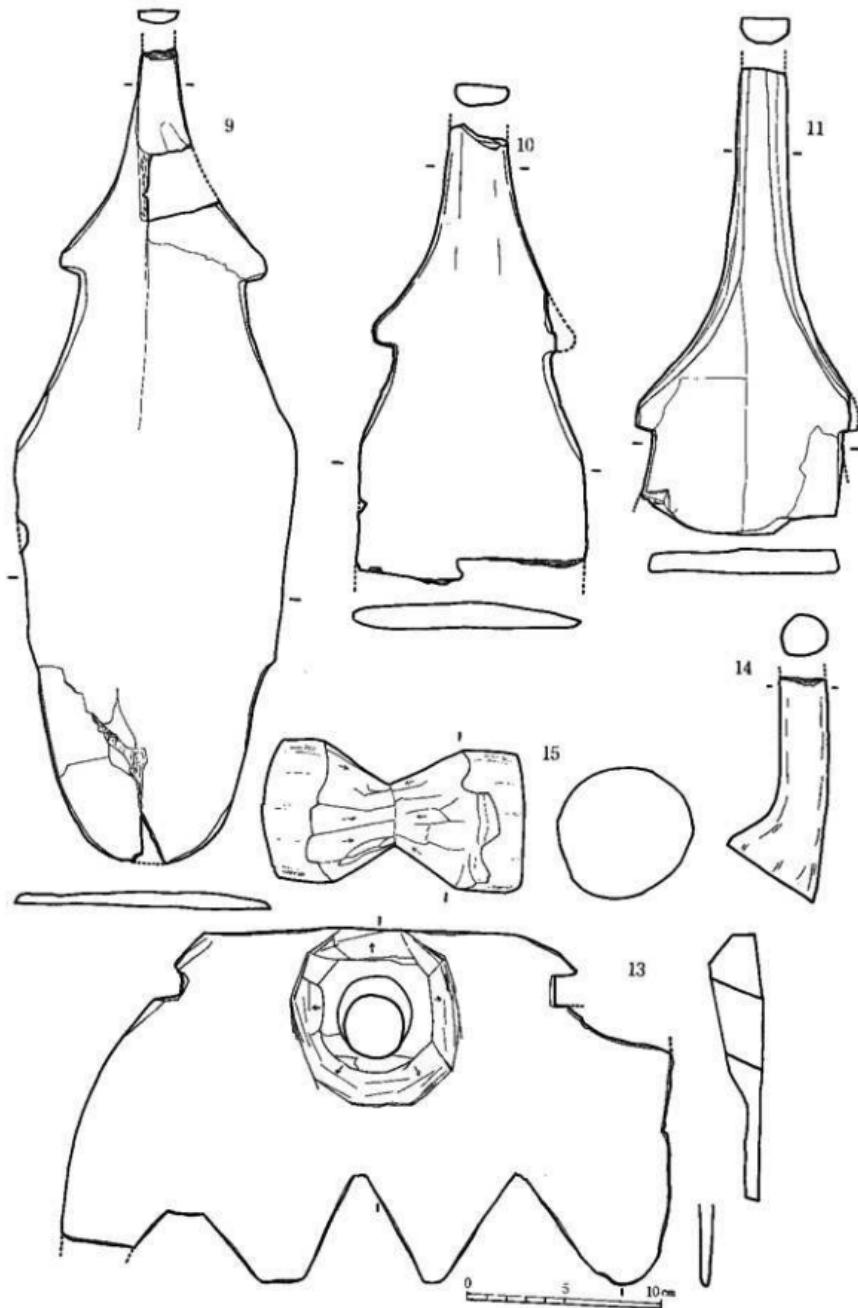


M-19地区周辺出土遺物、河川上層出土遺物

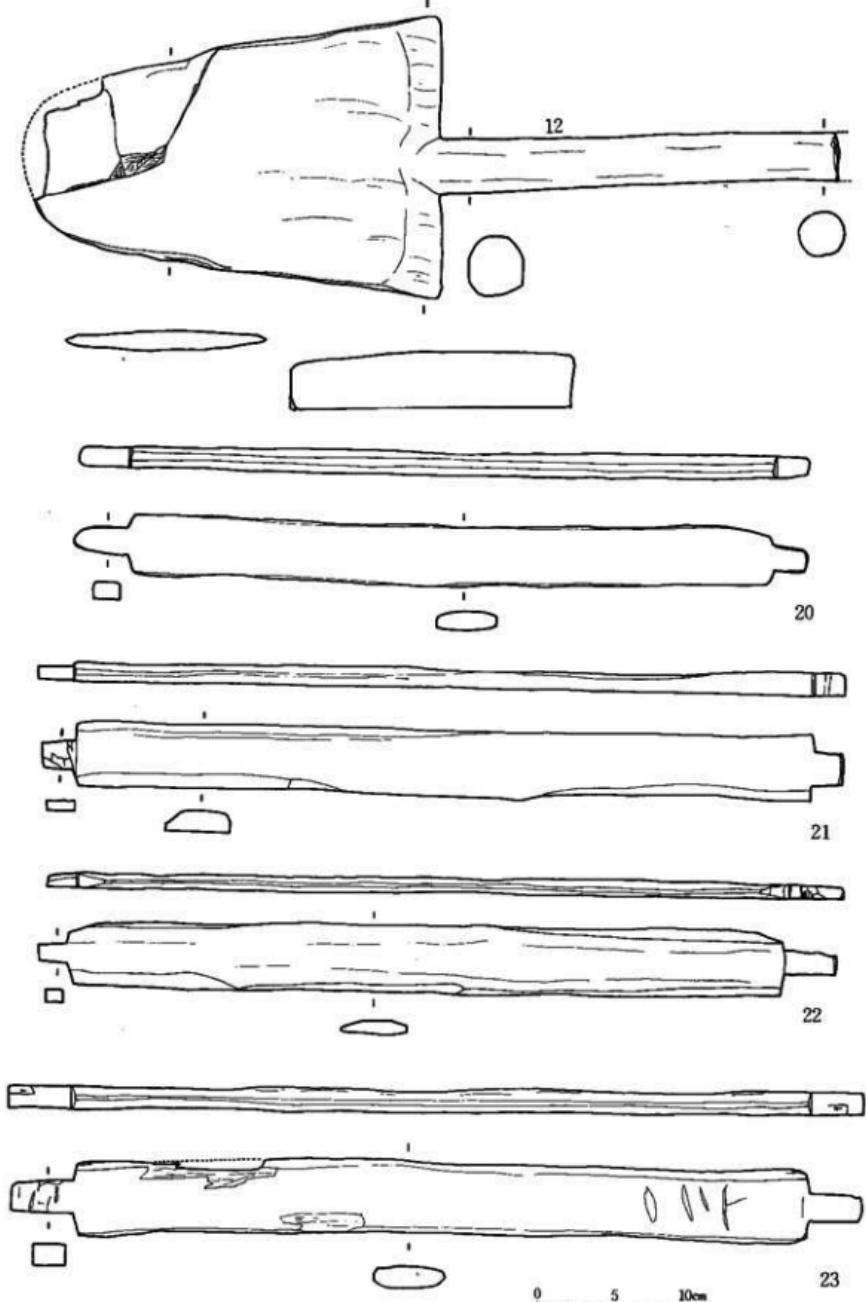




35 小型尖頭木製品，1 素環頭，2 小型劍狀木製品，3 木劍，4～5 木刀，6～7 刀先狀木製品，8 斧

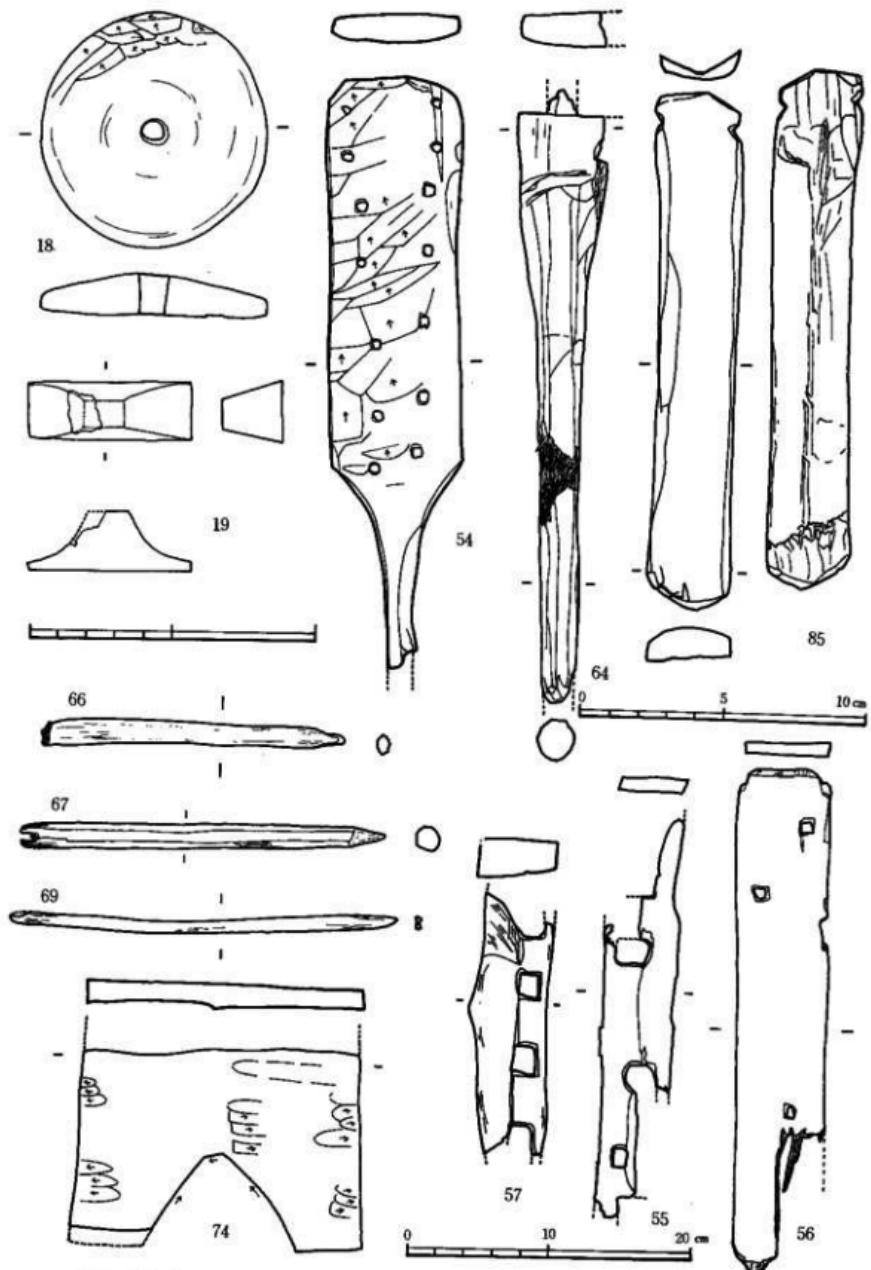


9～11 鰭，13 叉歛，14 鰭柄，15 様の子

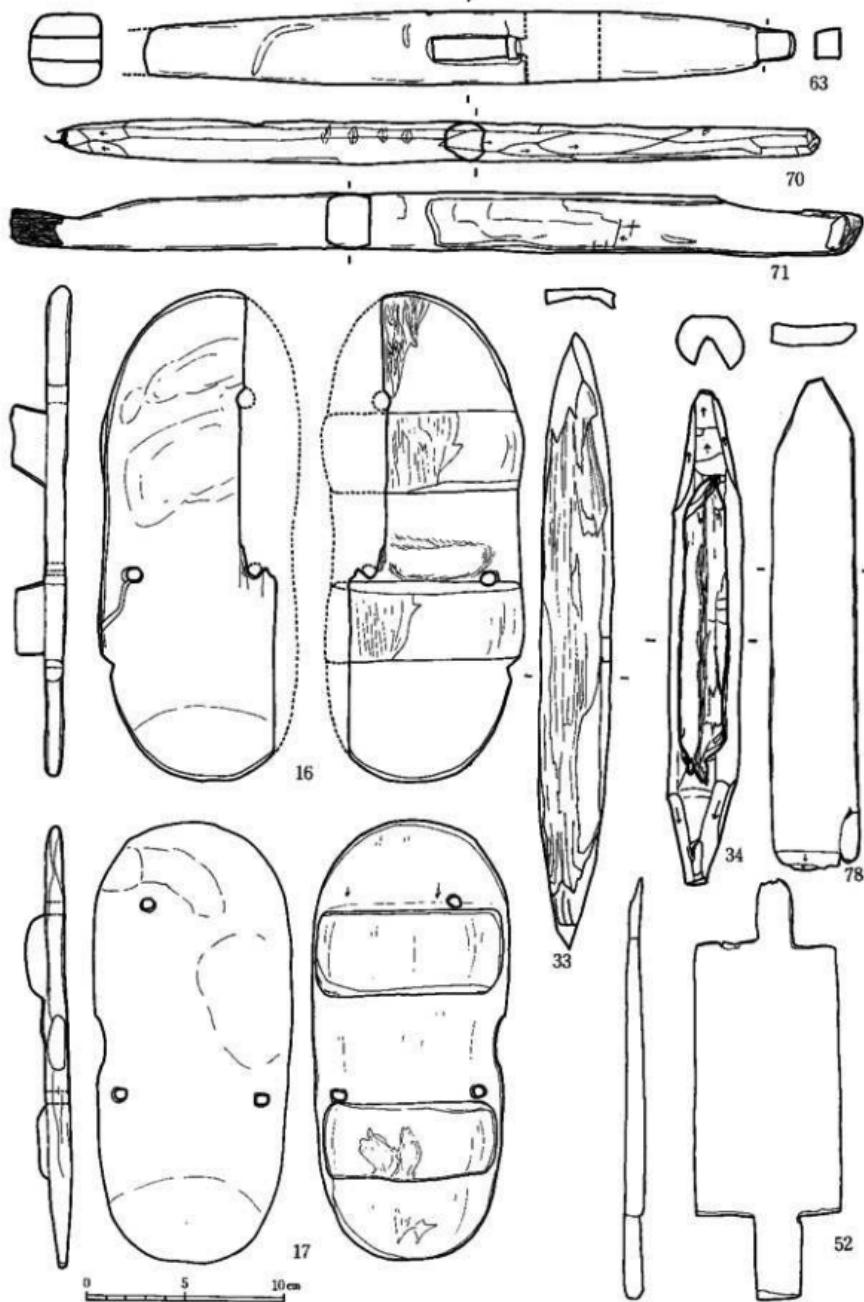


0 5 10cm

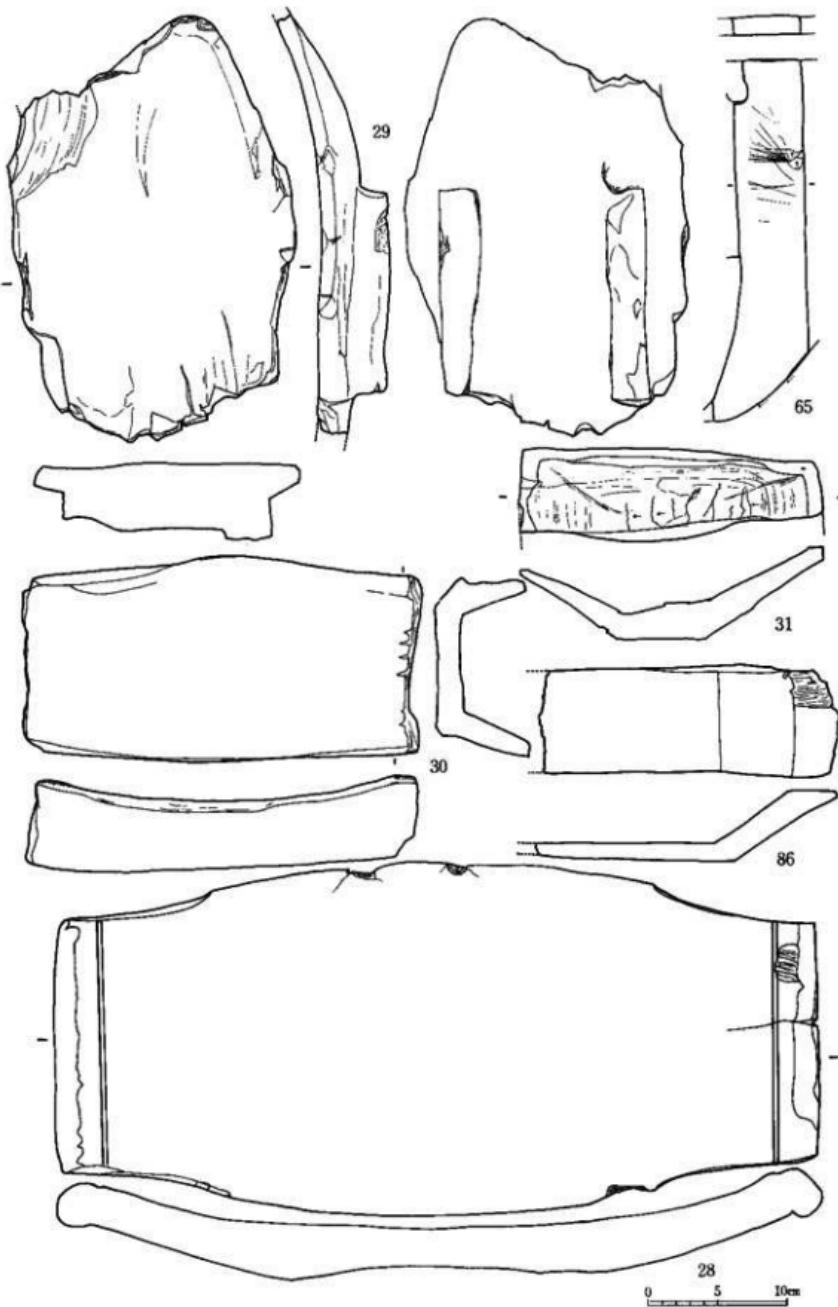
12 鋤, 20~23 チキリ状木製品



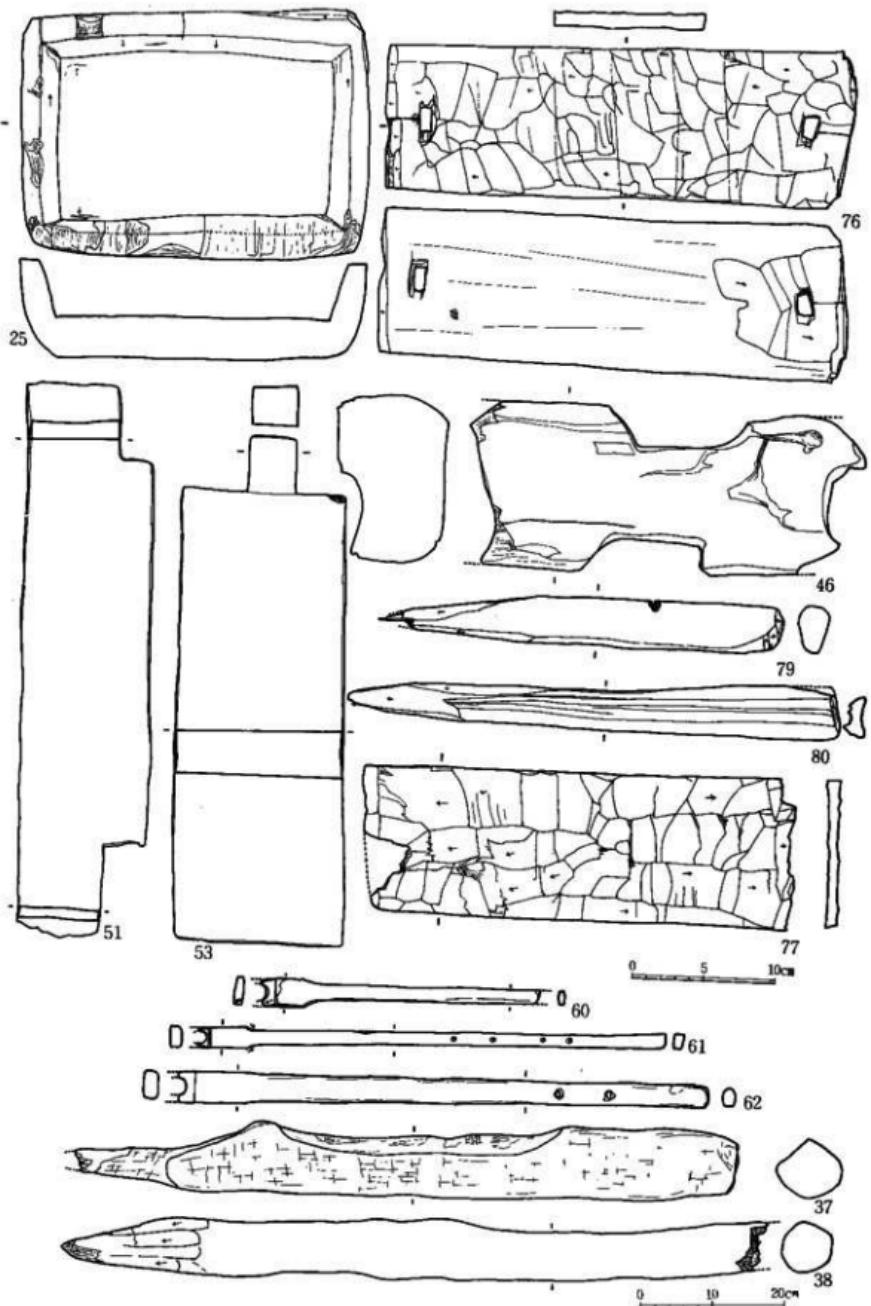
18 紡錘車状木製品, 19 琴柱状木製品, 54~57 有孔木製品, 64 部分材, 66~67 尖頭状木製品  
69 棒状木製品, 74 板材, 85 その他(A)



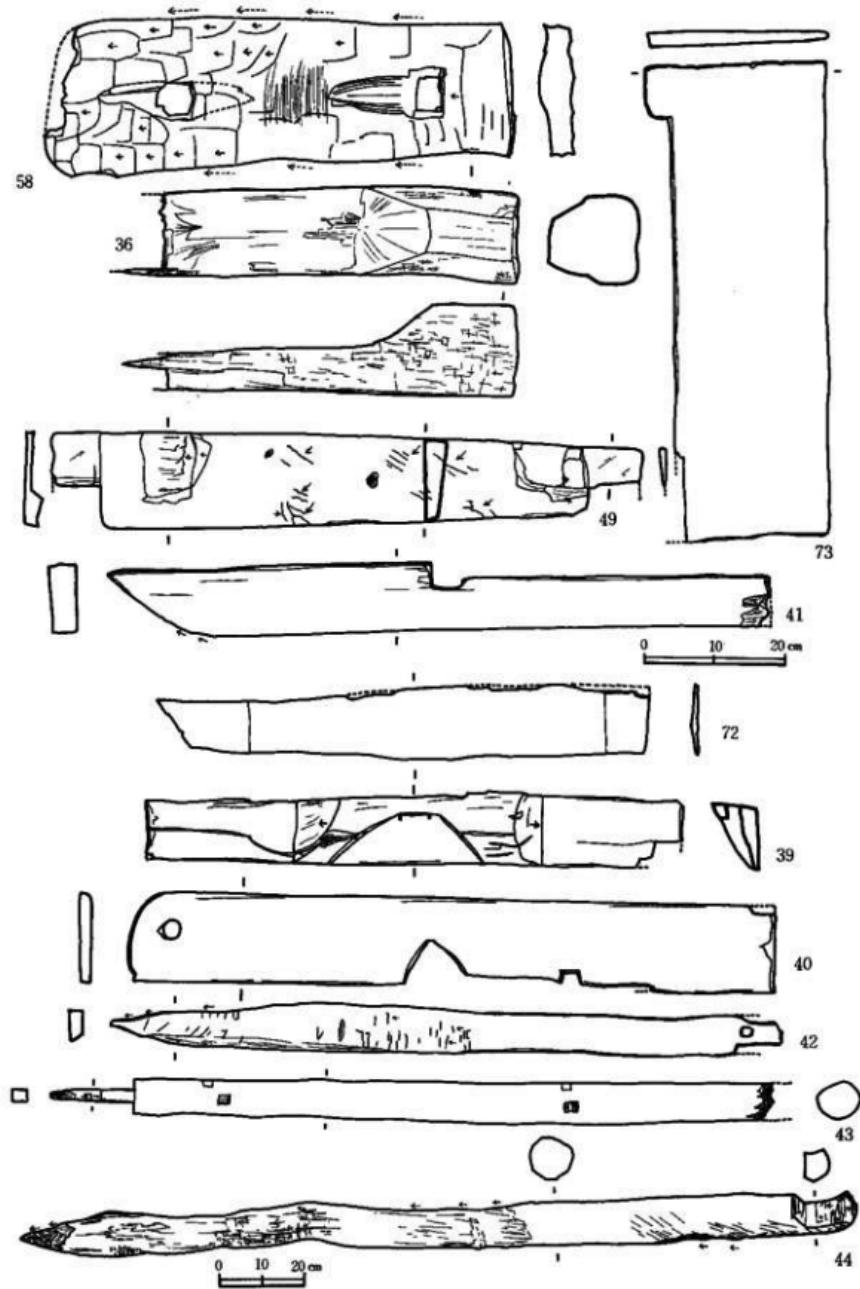
16~17 下駄, 33~34 小型舟形木製品, 52 組材, 63 部分材, 70~71 棒状木製品, 78 板材



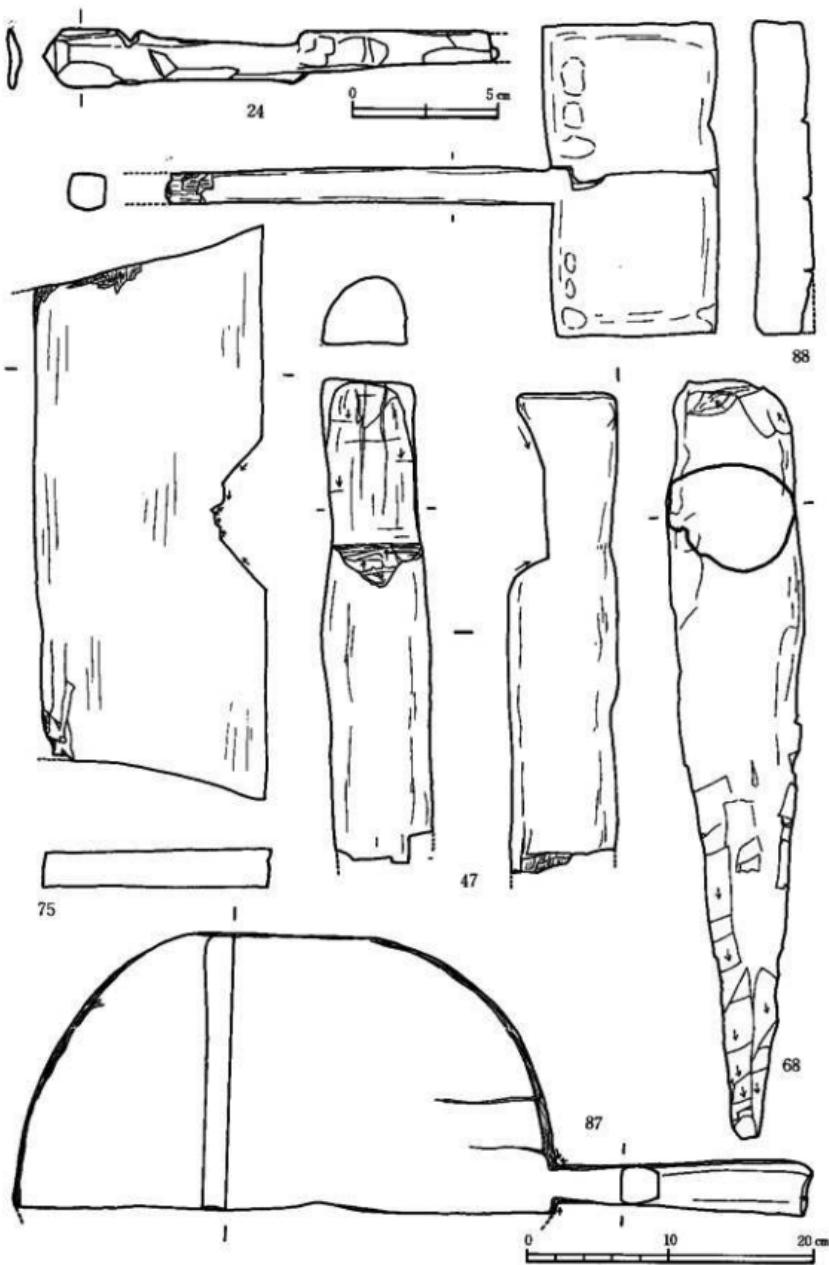
28~29 盤状木製品, 30 台状木製品, 31 小型容器状木製品, 32 部分材, 33~35 その他(B)



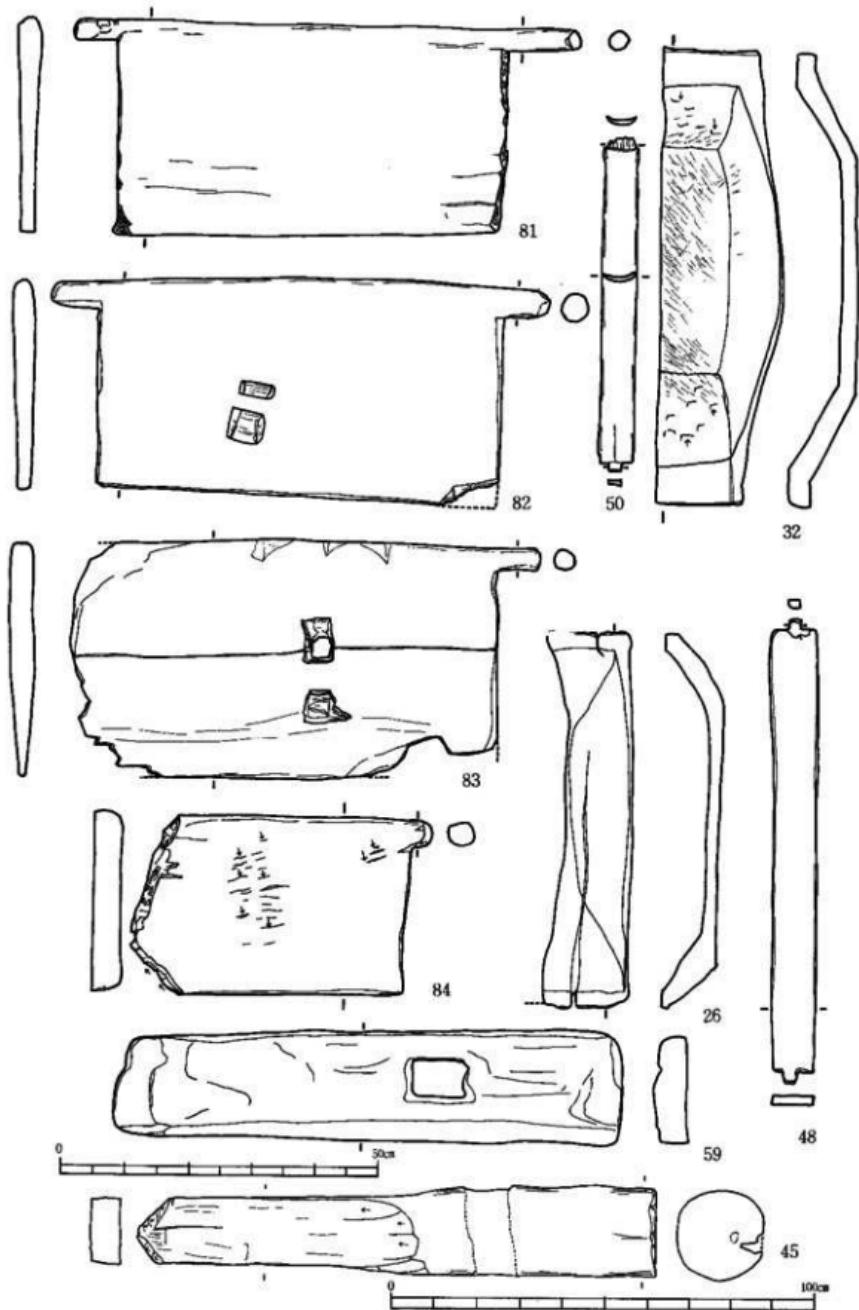
25 箱形木製品, 37~38·46 建築用材, 51~53 組材, 60~62 有孔木製品, 76~77 板材  
79~80 ヘラ状木製品



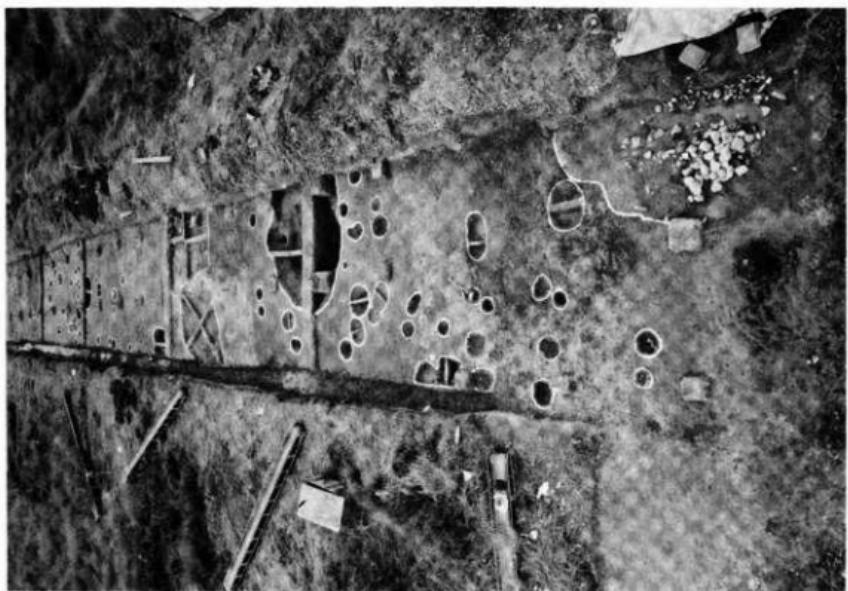
36·39~44 建築用材, 49 組材, 58 有孔木製品, 72~73 板材



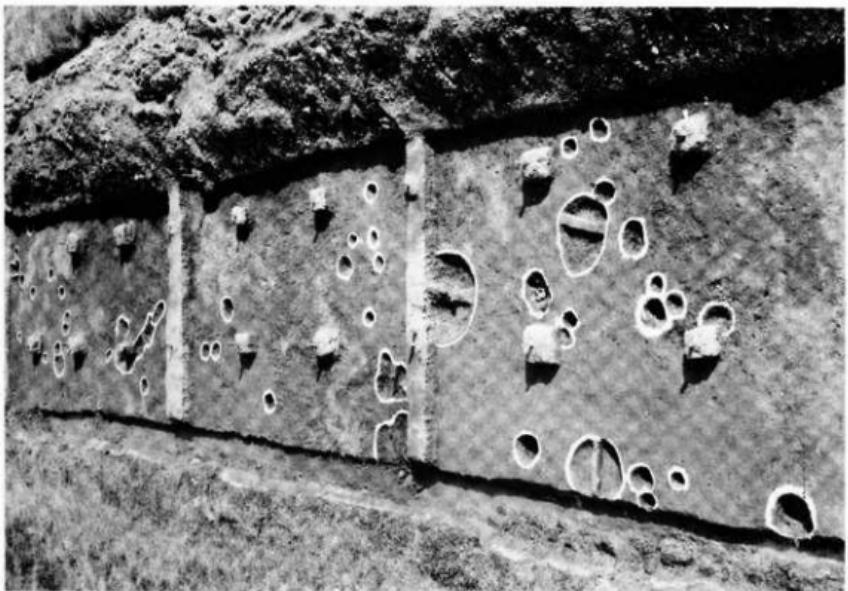
24 人形状木製品, 47 建築用材, 68 杖状木製品, 75 板材, 87~88 その化木製品



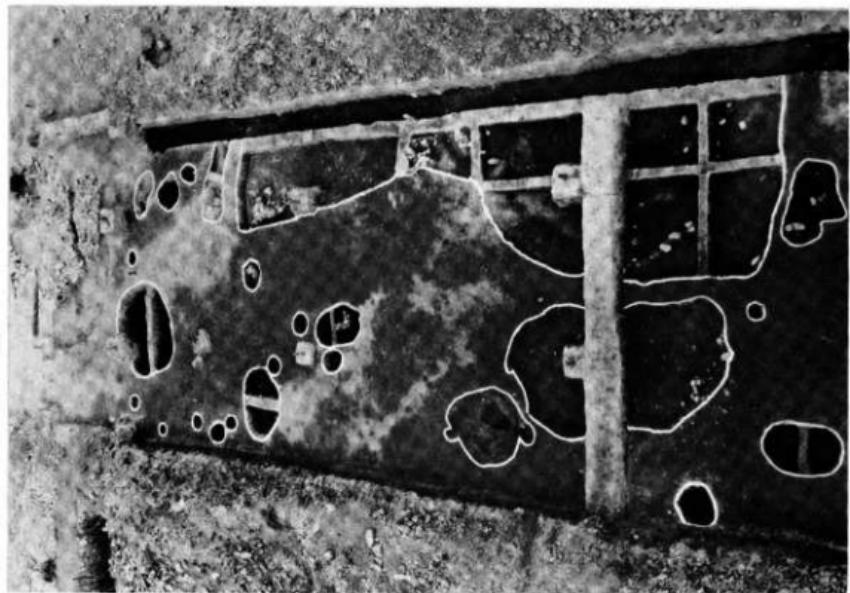
26 田舟状木製品, 32 大型舟形木製品, 45 建築用材, 48-50 組材, 59 有孔木製品, 81~84 把手付  
81~84 把手付板材



ToC B地区(道路18号)上面



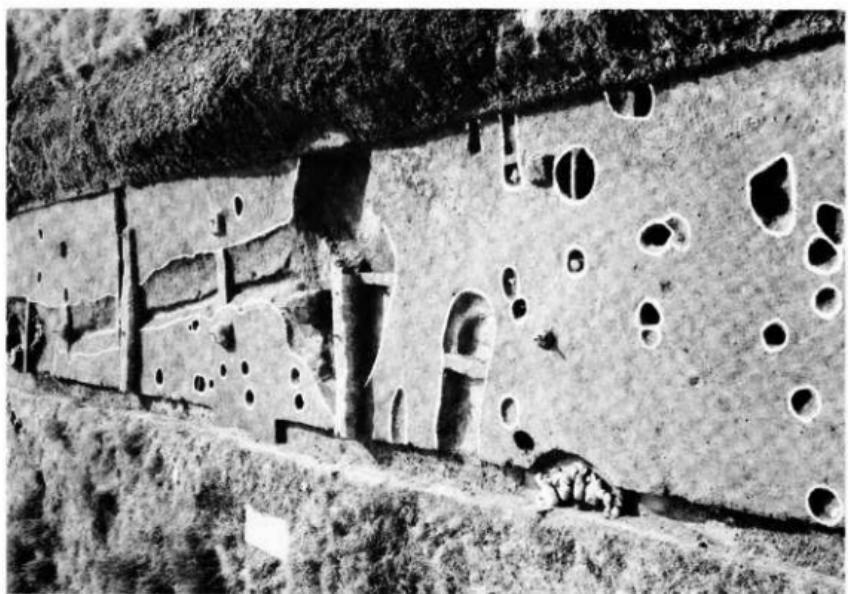
ToC B地区(道路18号)下面



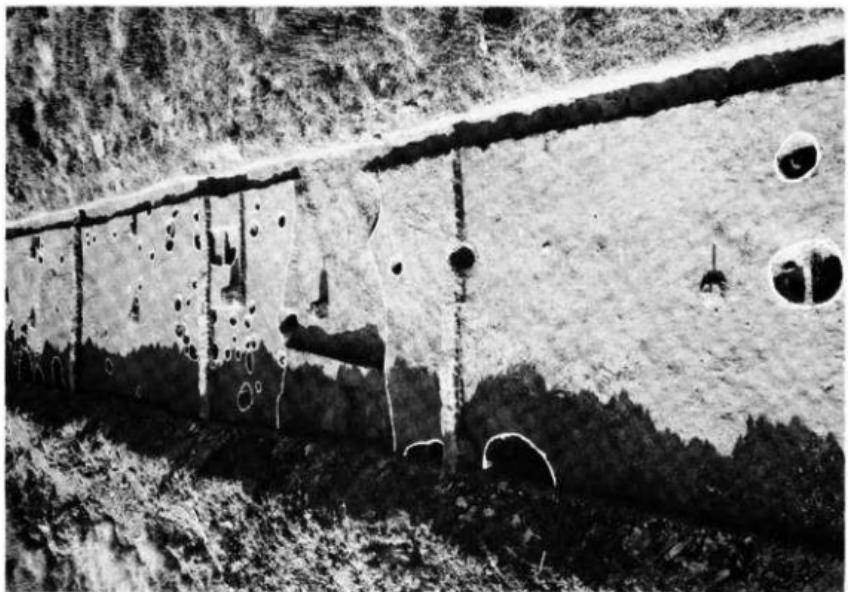
ToB B地区(道路23号)上面



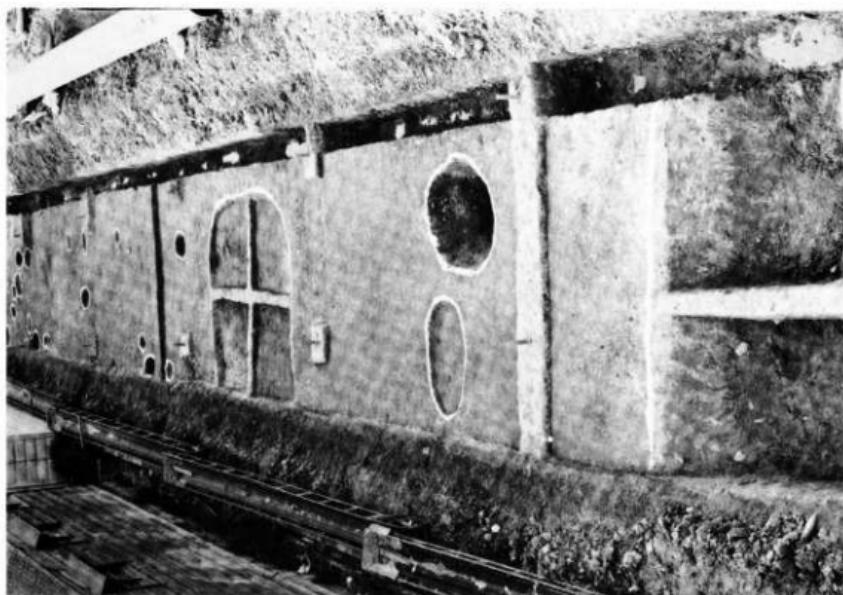
ToB B地区(道路23号)下面



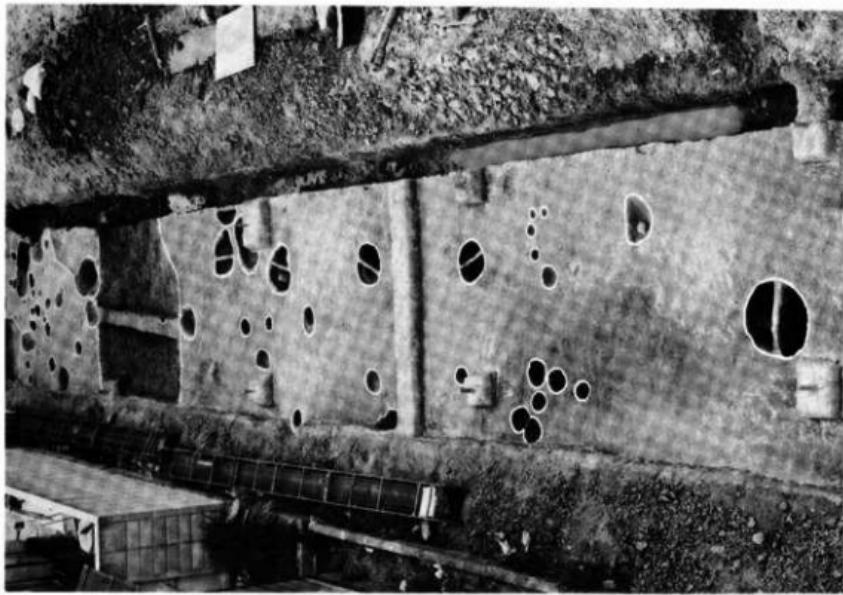
ToC B地区(道路23号)下面



ToC B地区(道路23号)下面



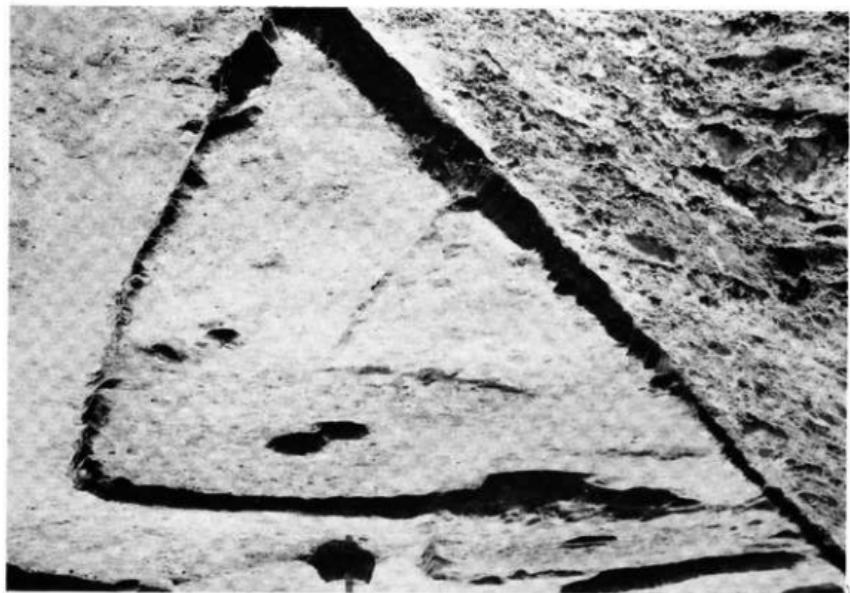
ToC C地区(道路25号)上面



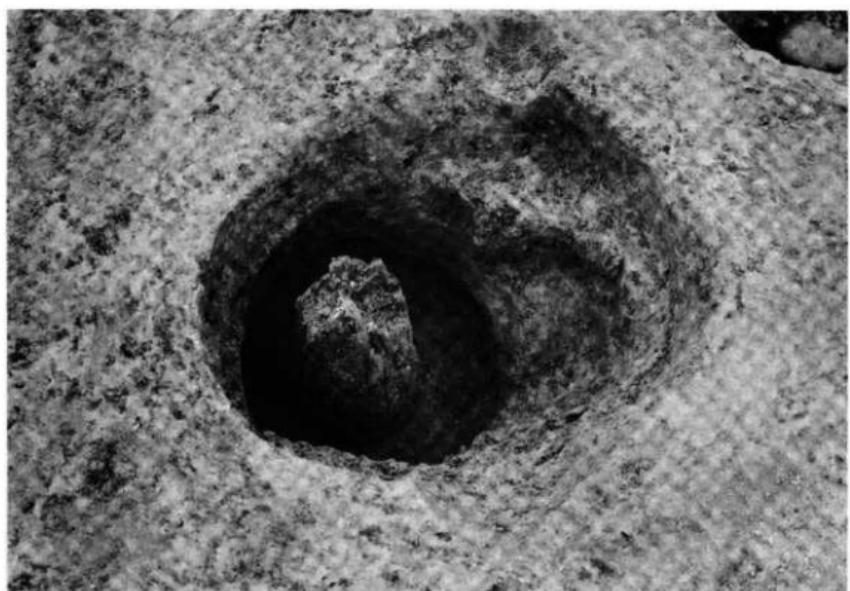
ToC C地区(道路25号)下面



住居址 (ToB B地)



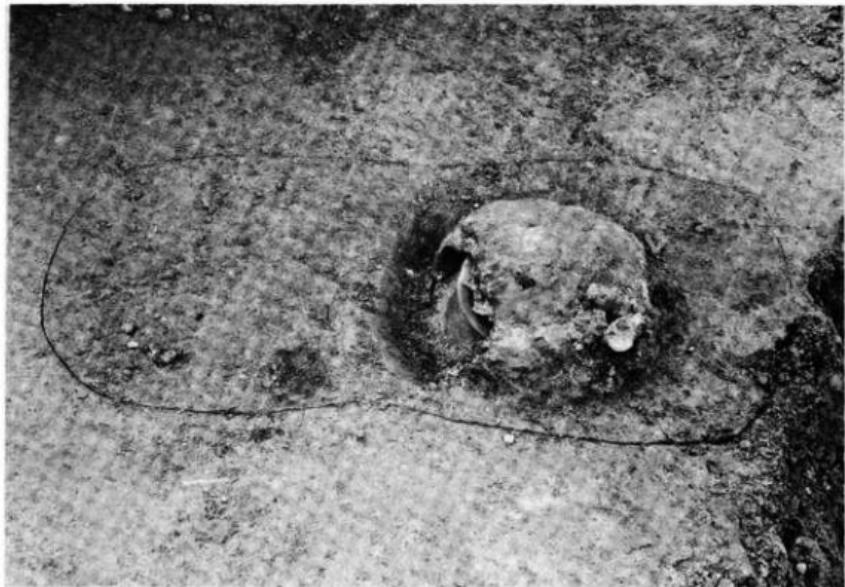
河川内土器出土状態 (ToB B地区)



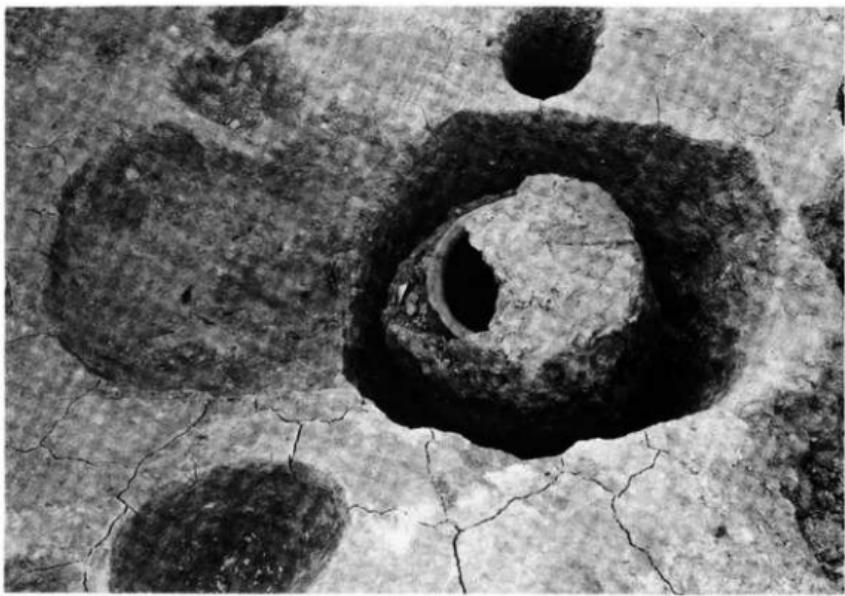
柱根 (ToB B地区)



柱根 (ToB B地区)



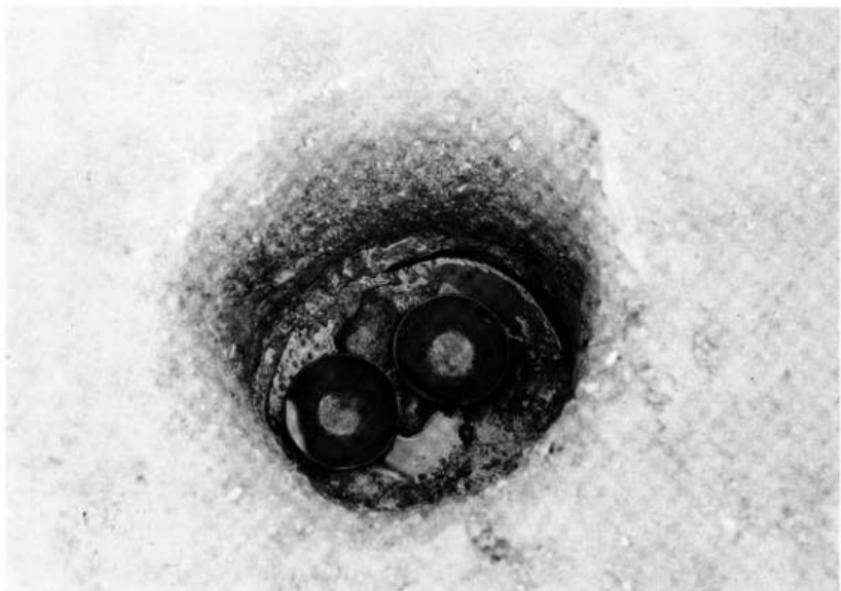
骨壺 (ToC C地区)



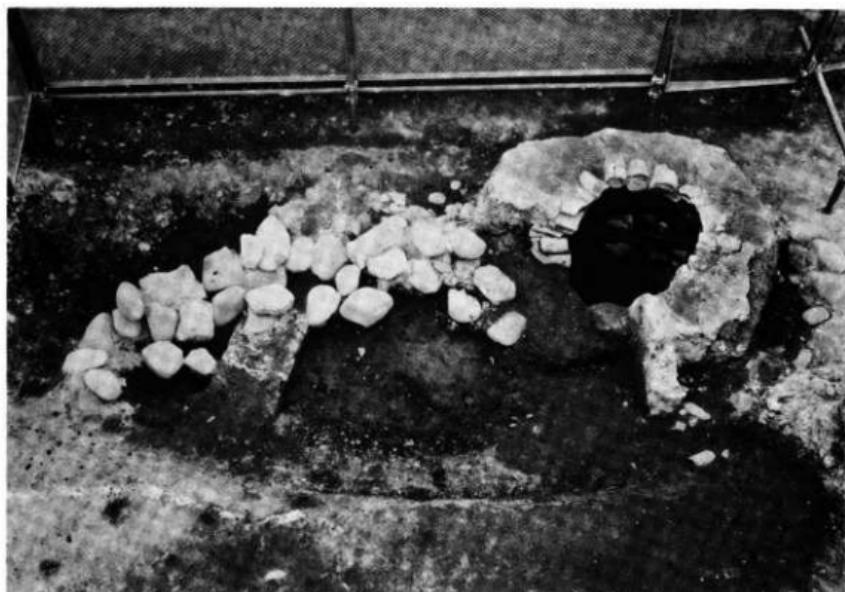
骨壺 (ToC C地区)



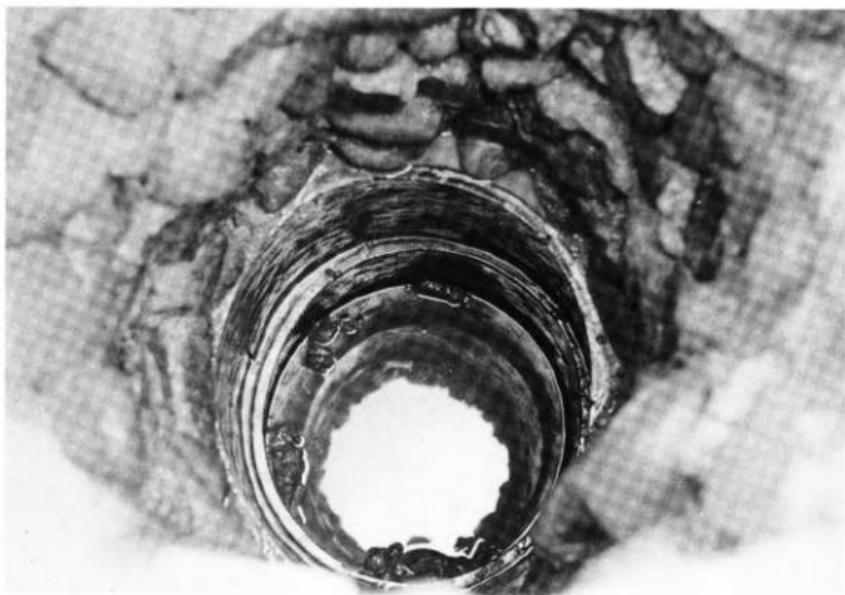
1号井戸



2号井戸



3号井戸



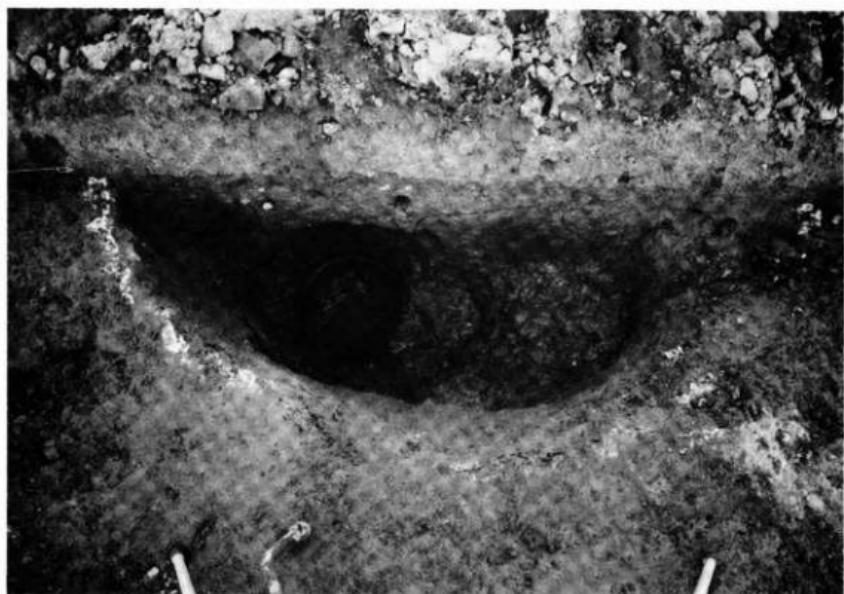
3号井戸（内部）



4号井戸



4号井戸



5号井戸



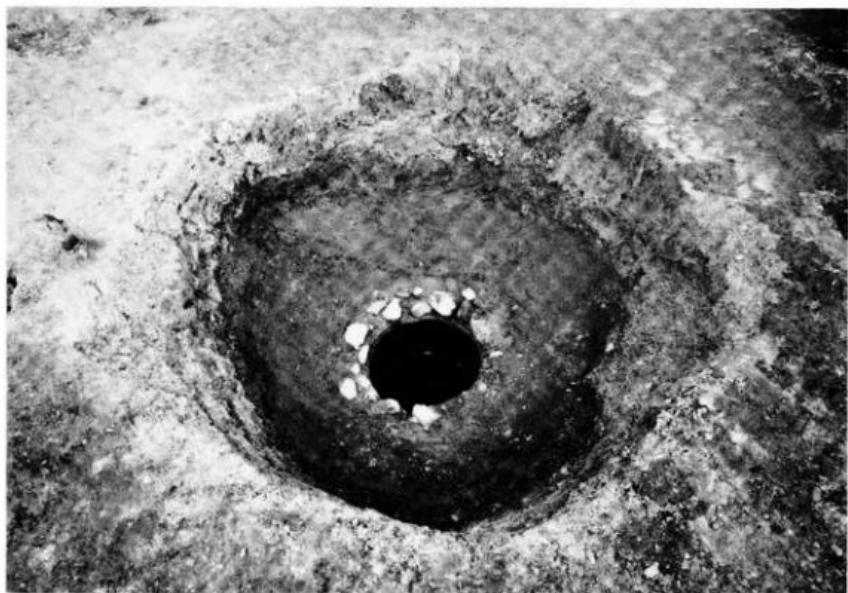
5号井戸



6号井戸



7号井戸



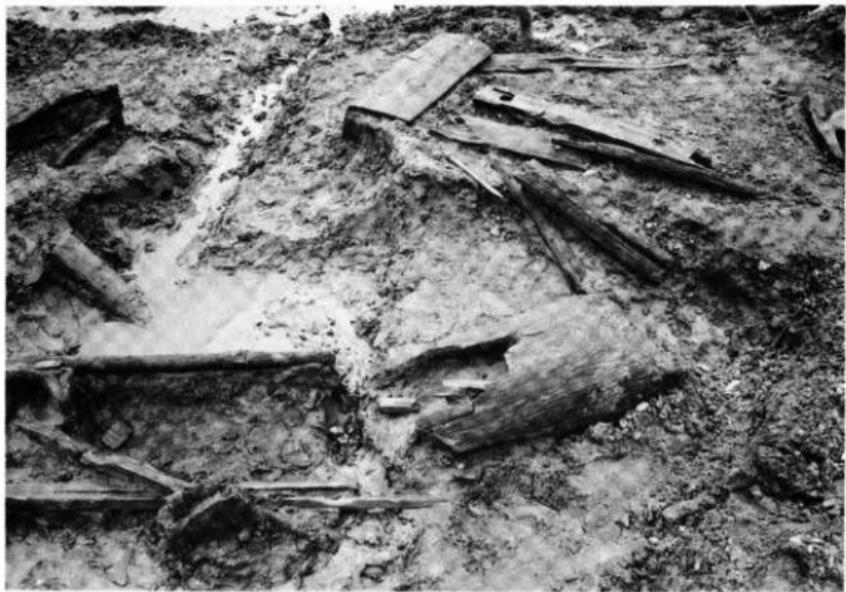
8号井戸



9号井戸



旧河川（一次調査）



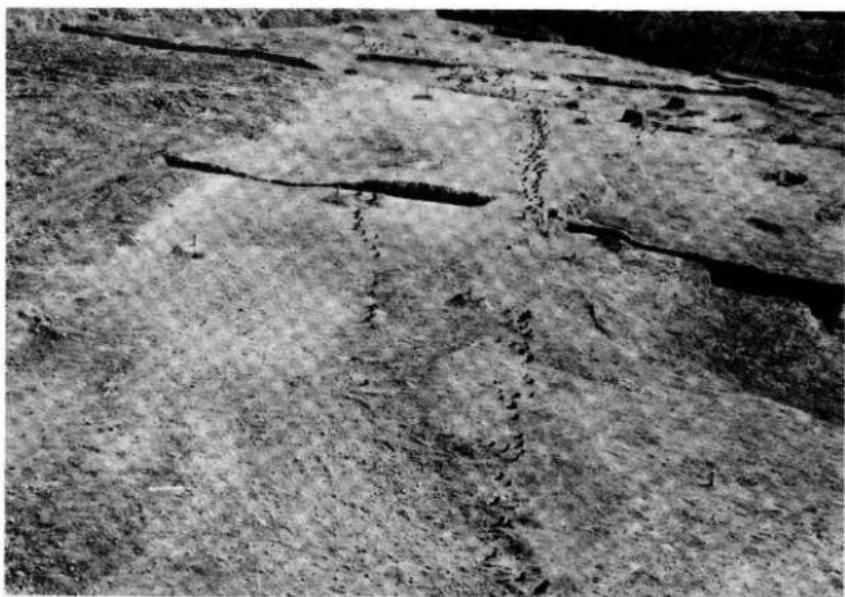
木製品出土状態



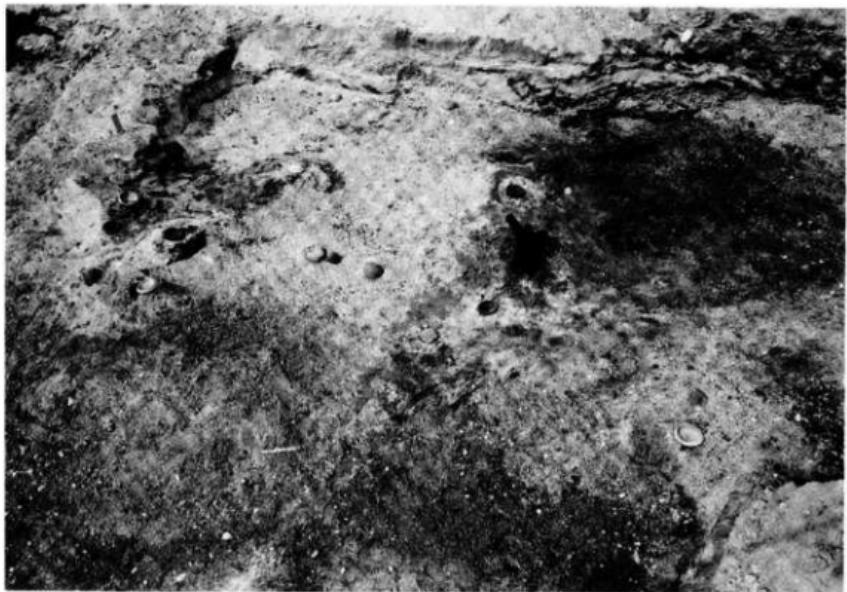
旧河川全景（二次調査）



旧河川（東より）



旧河川右岸杭列



土器出土状態



1



2



3



4



5

6



21

43



44



51



49



54



52



53



57



55



56



59



58



58'



60



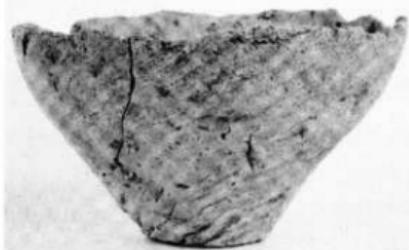
61



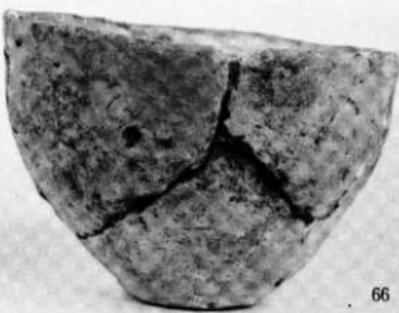
62



63



64



65



66



67

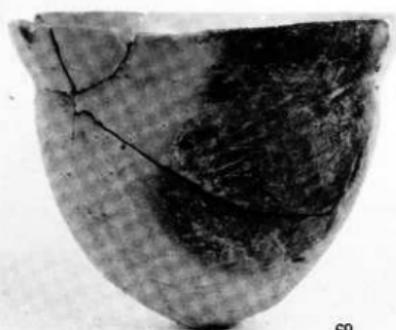
「河川」状遺構出土



68



70



69



71



72



73



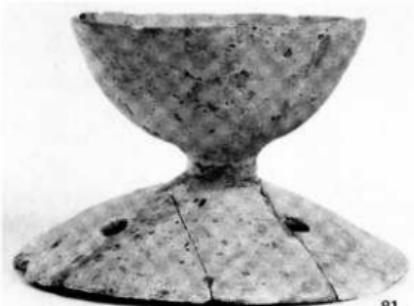
74



79



88



81



82



87



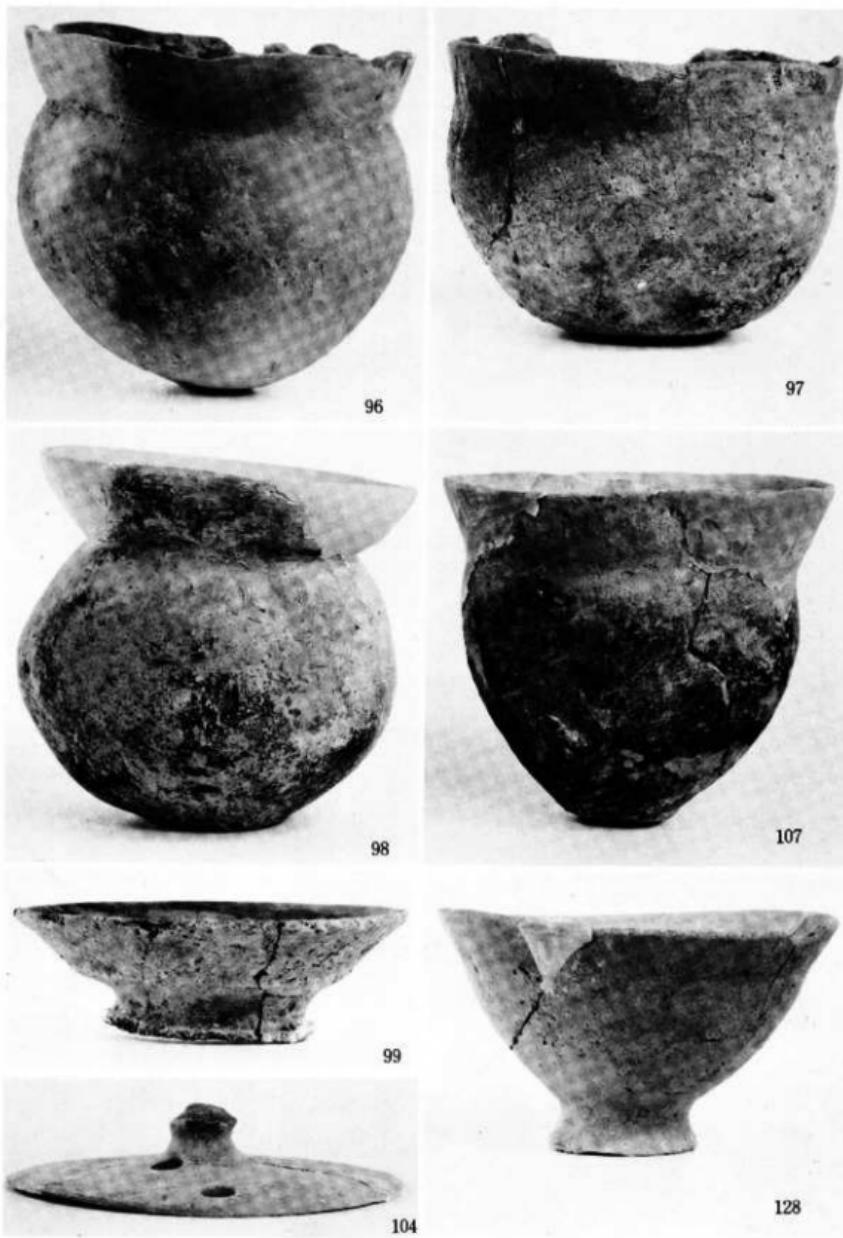
80



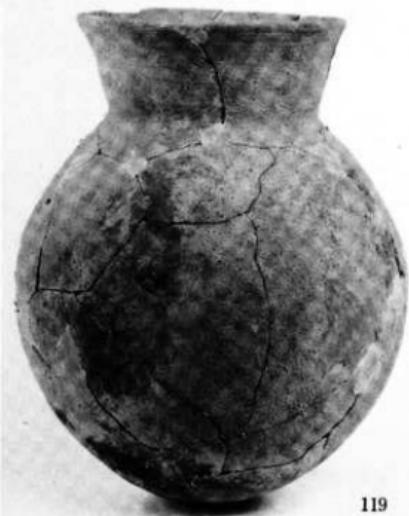
92



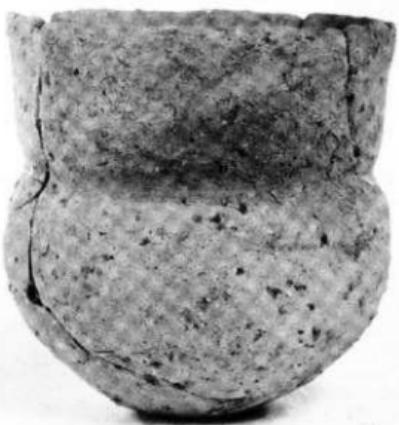
93



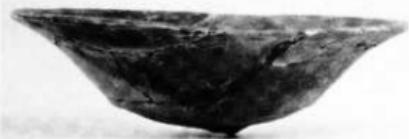
96~98 「河川」状造構 99 ピット20 104 住居址 107·128 Toc地区出土 T-O-C地区出土



119



134



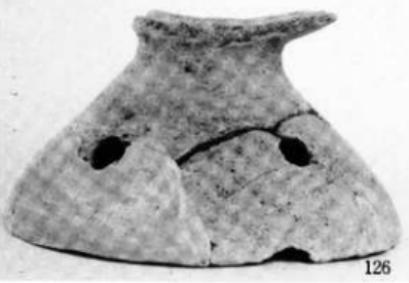
121



139



124

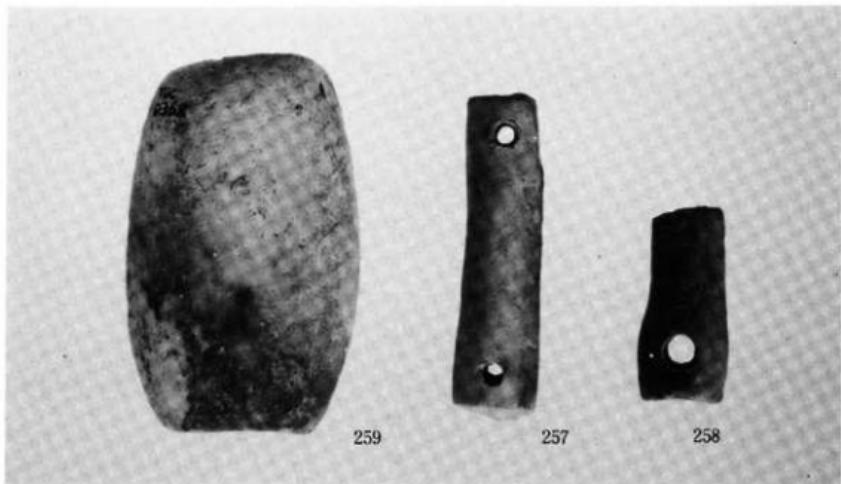
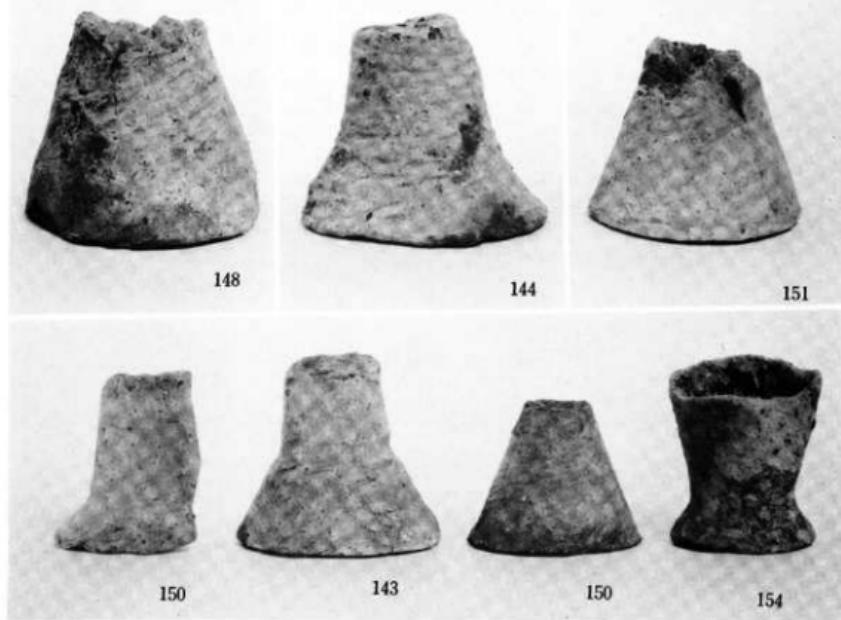


126



127

T·O·C地区出土



製塙土器 土鍤



159



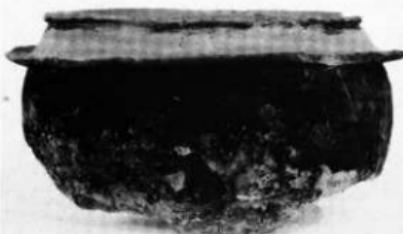
162



160



163



161



164



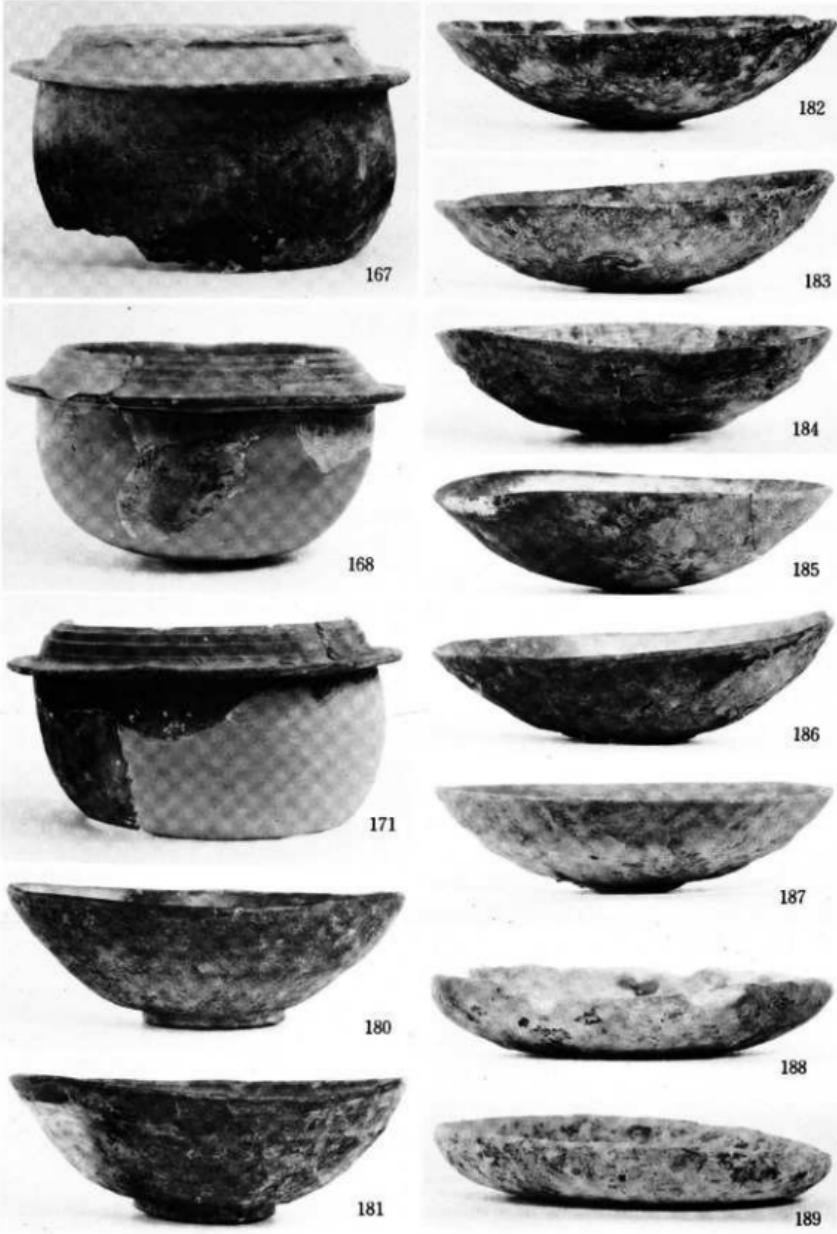
166



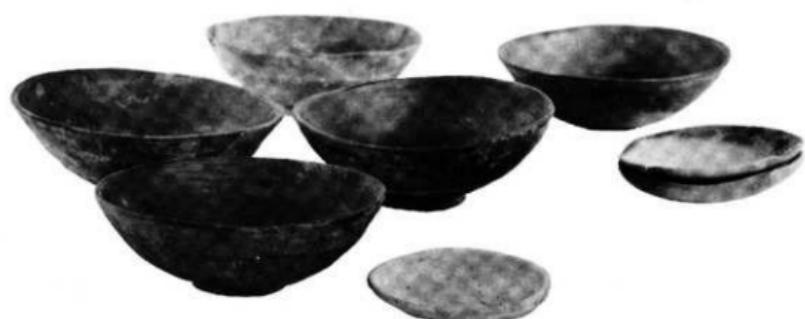
165

159～161 4号井戸

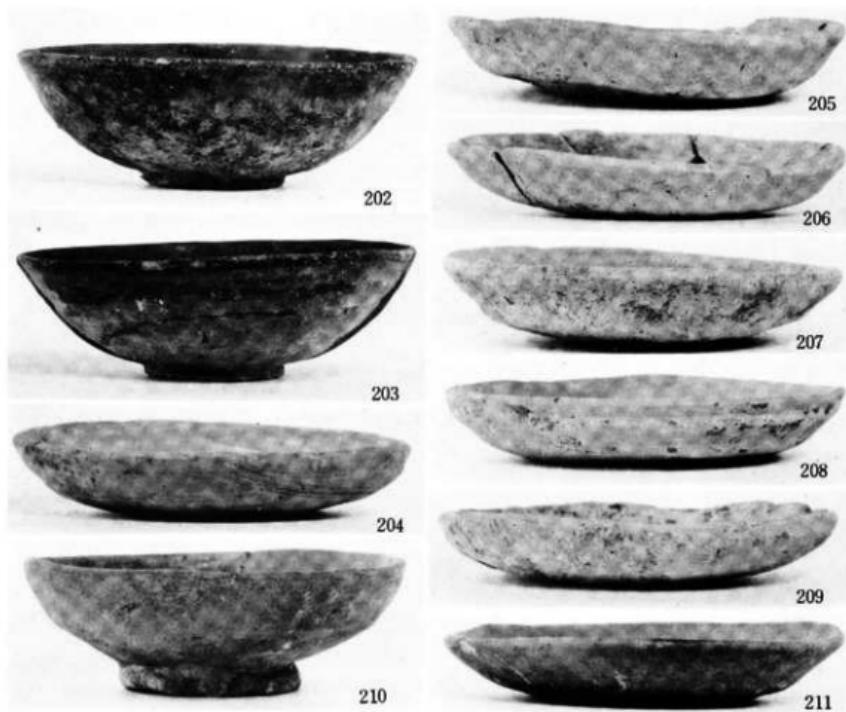
162～166 7号井戸出土



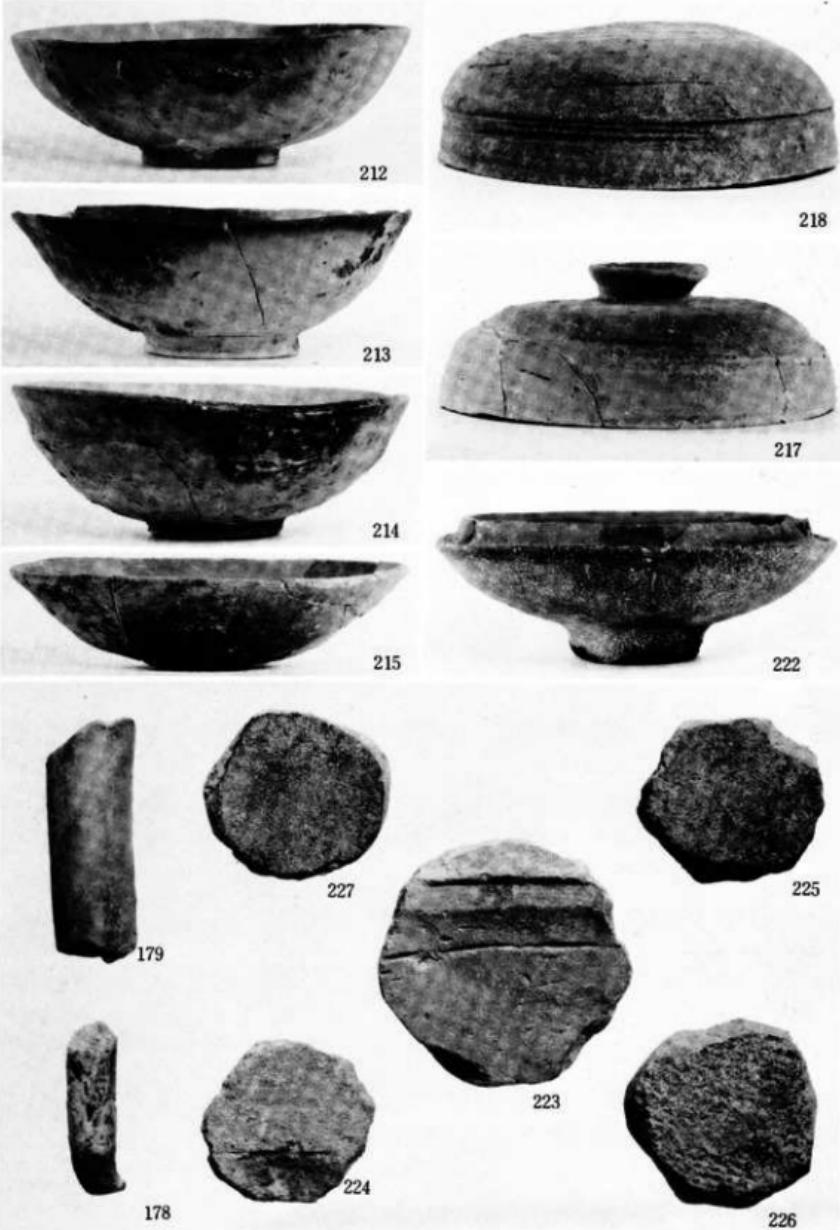
167 BH-BG15褐色砂礫層 168-171 小碟群 180 1号井戸 181 2号井戸 182~189 4号井戸出土



193~201



193~204 5号井戸出土 205~211 小砾群出土



212~215・217・218・222 各種ピット地出土 三足片 円板



243



246\*



246



246'



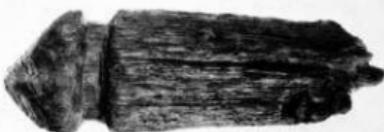
244



247



245



248



242



261



262

242 3号井戸 243・244 5号井戸 245 8号井戸 246 1号井戸 247 2号井戸 248 ピット5  
261 TOC.C 262「河川」状遺構出土



260



228



228

229



229



249



252



250



253



254



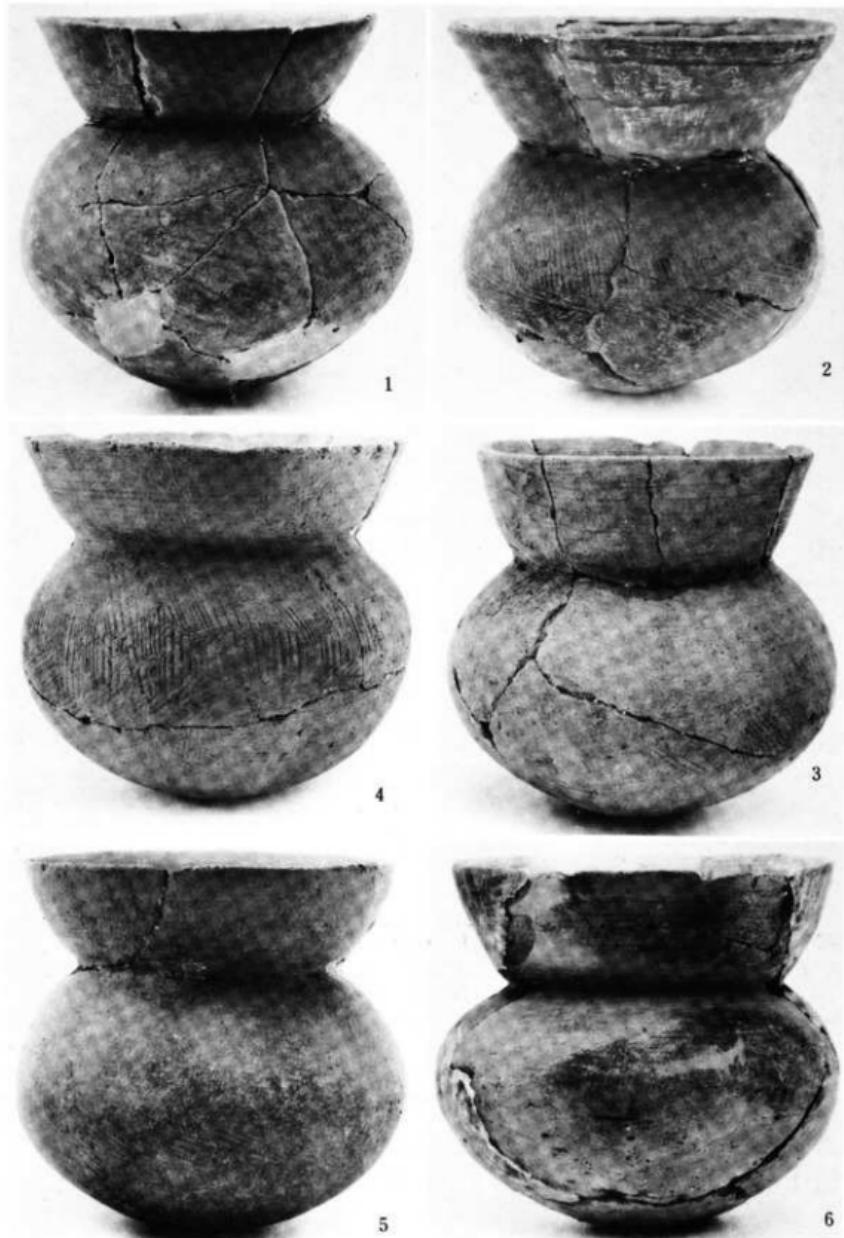
255



251



256



淡青灰色細少層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



1



2



4



3

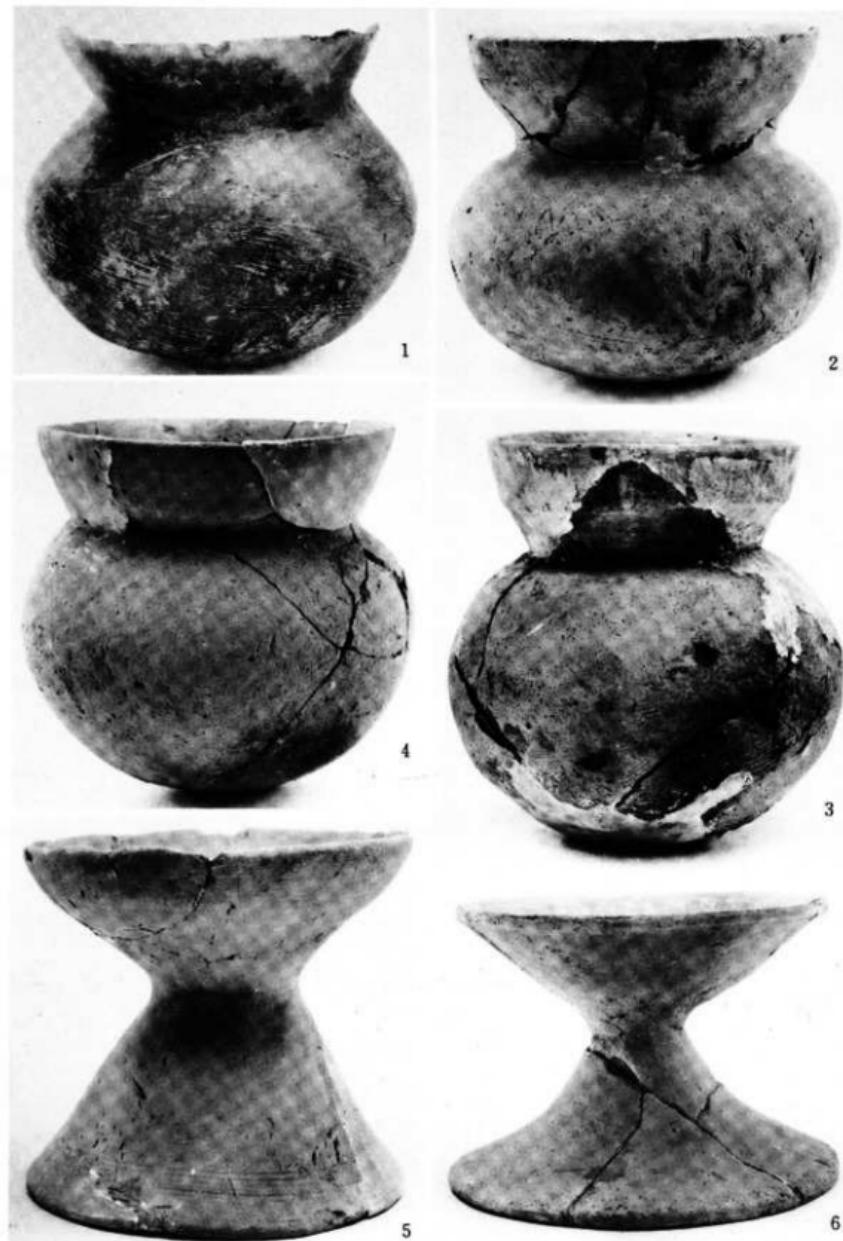


5

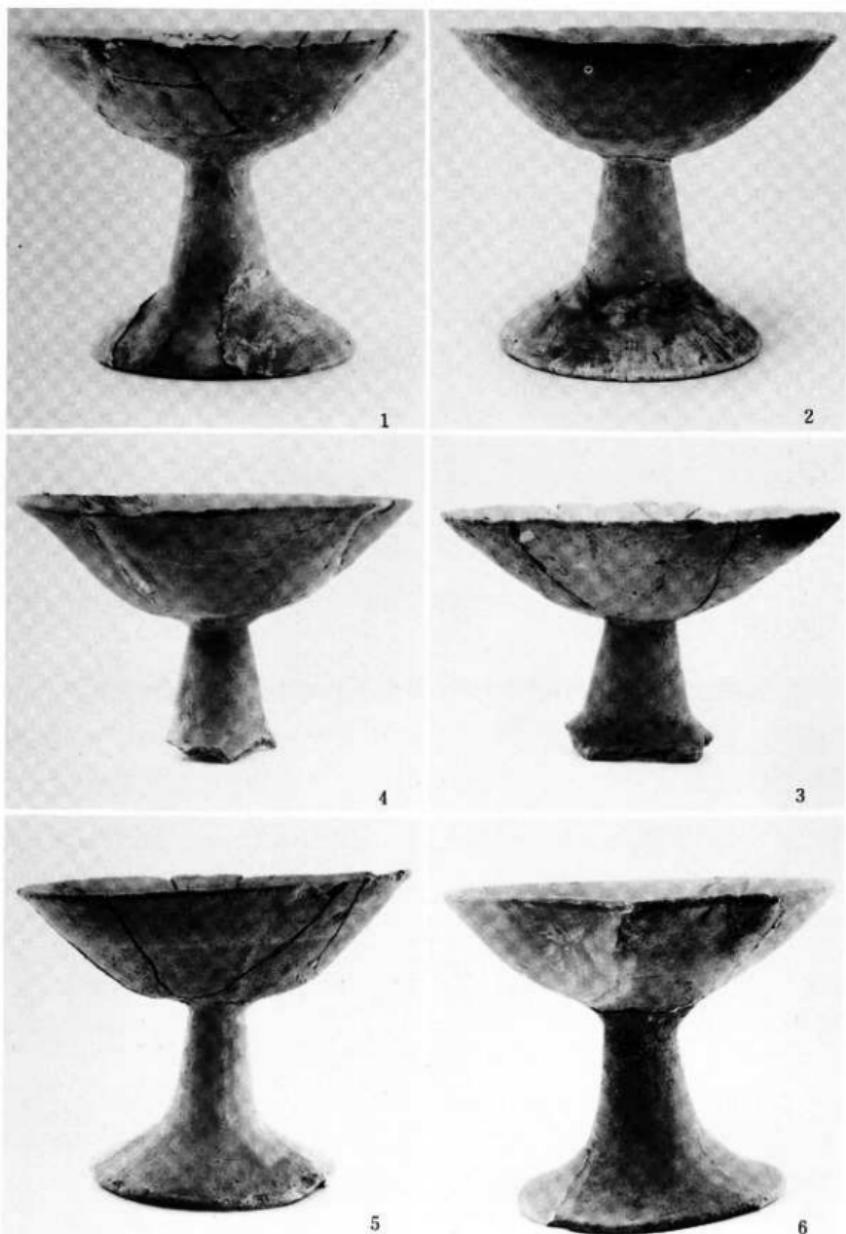


6

淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



1



3



4



2



5



6

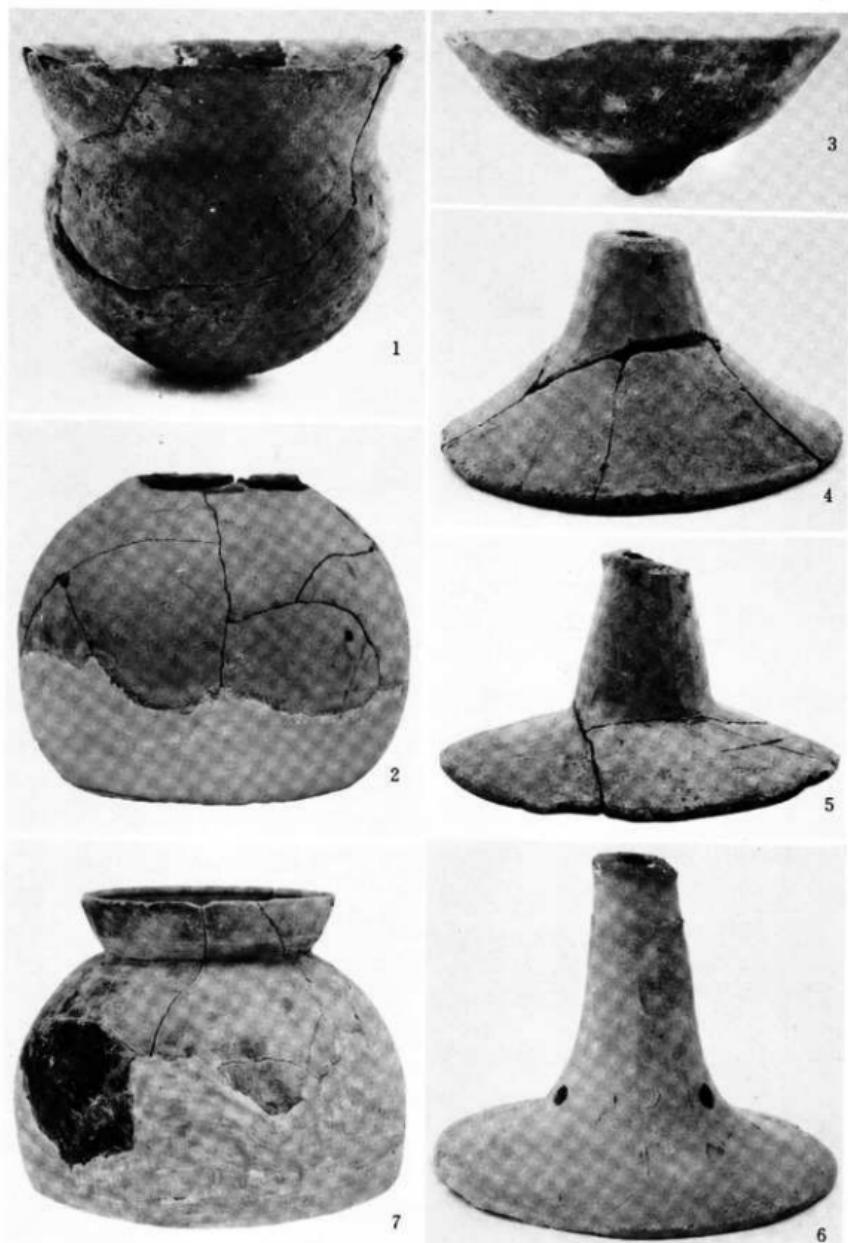


8



7

淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



1



2



4



3

淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色細砂層出土土器



1



2



3



5



4

淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



1



2-a



4



3



5



6

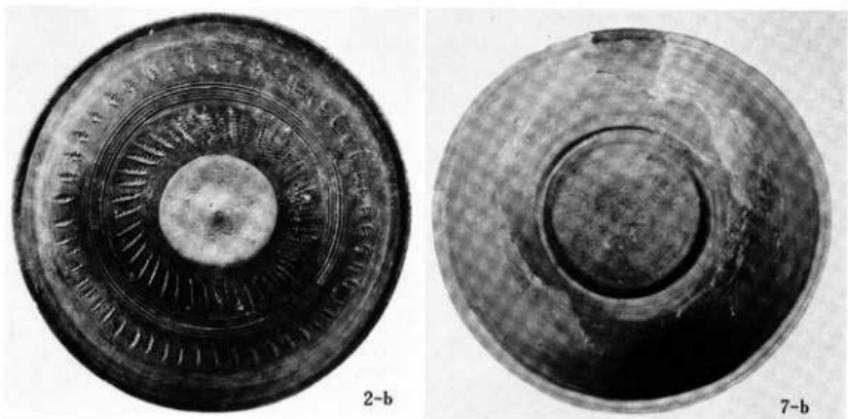


8



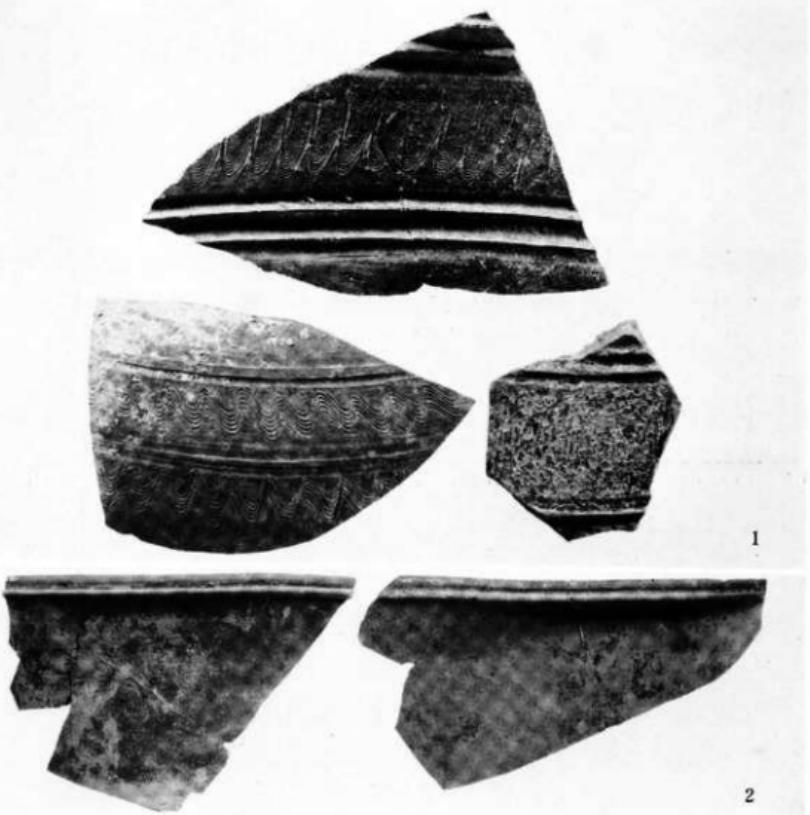
7-a

淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



2-b

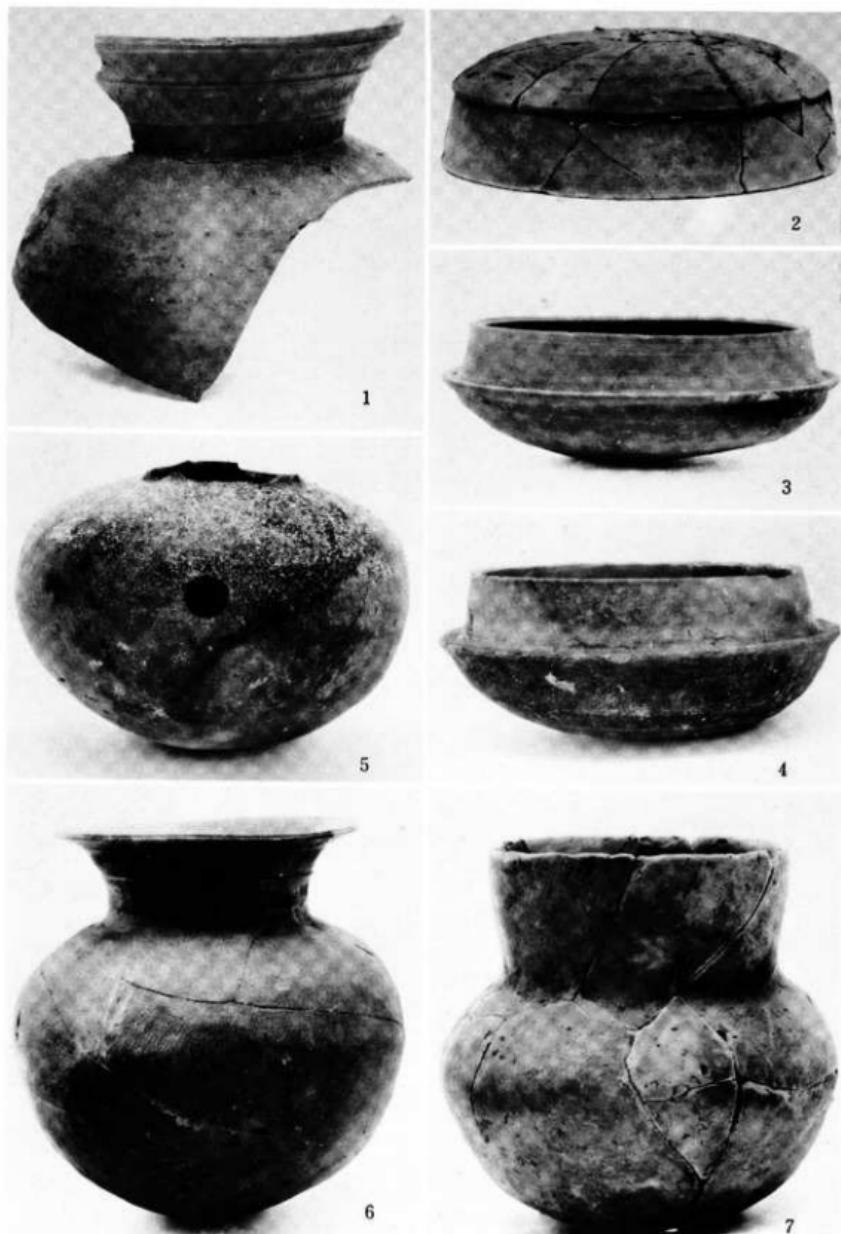
7-b



1

2

淡青灰色細砂層出土土器



淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器 (1・5・7)  
I-27地区周辺粘土混り灰色砂層出土土器 (2~4・6)



1



2

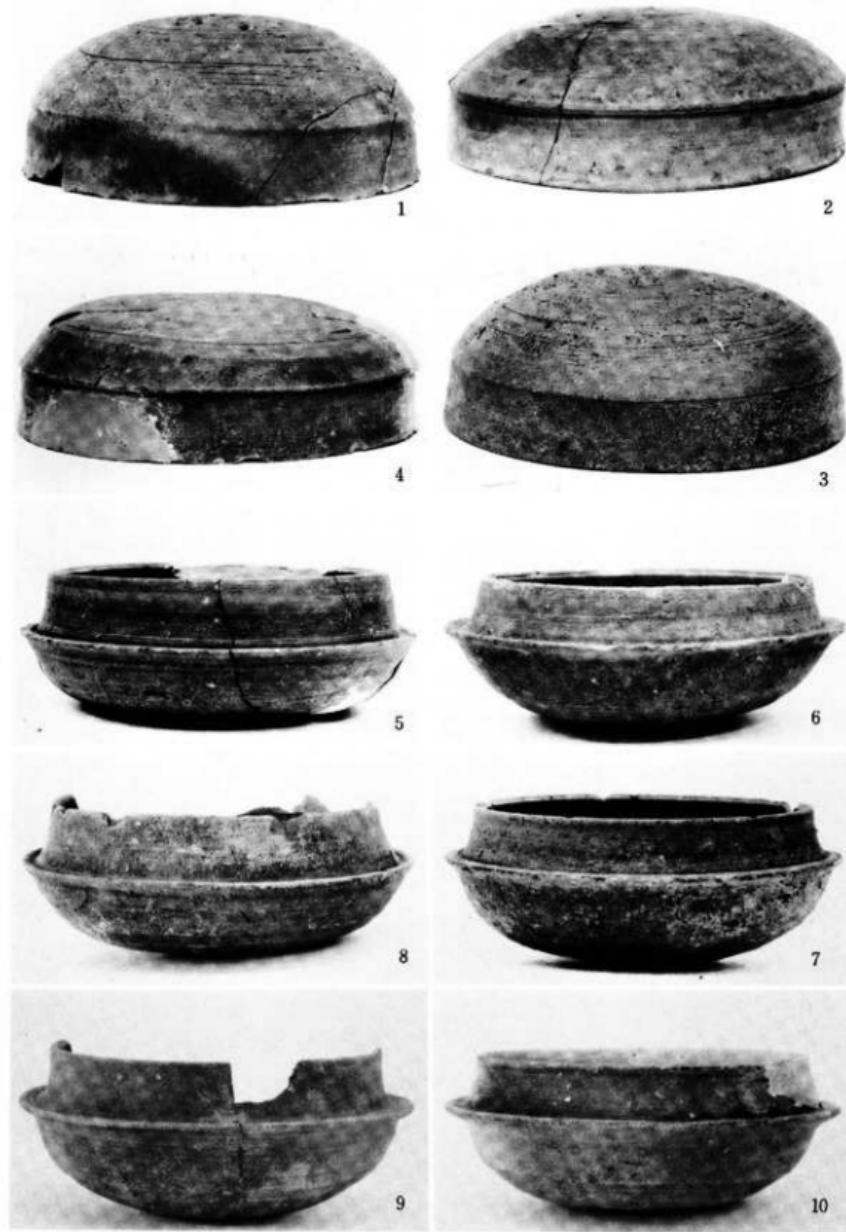


4

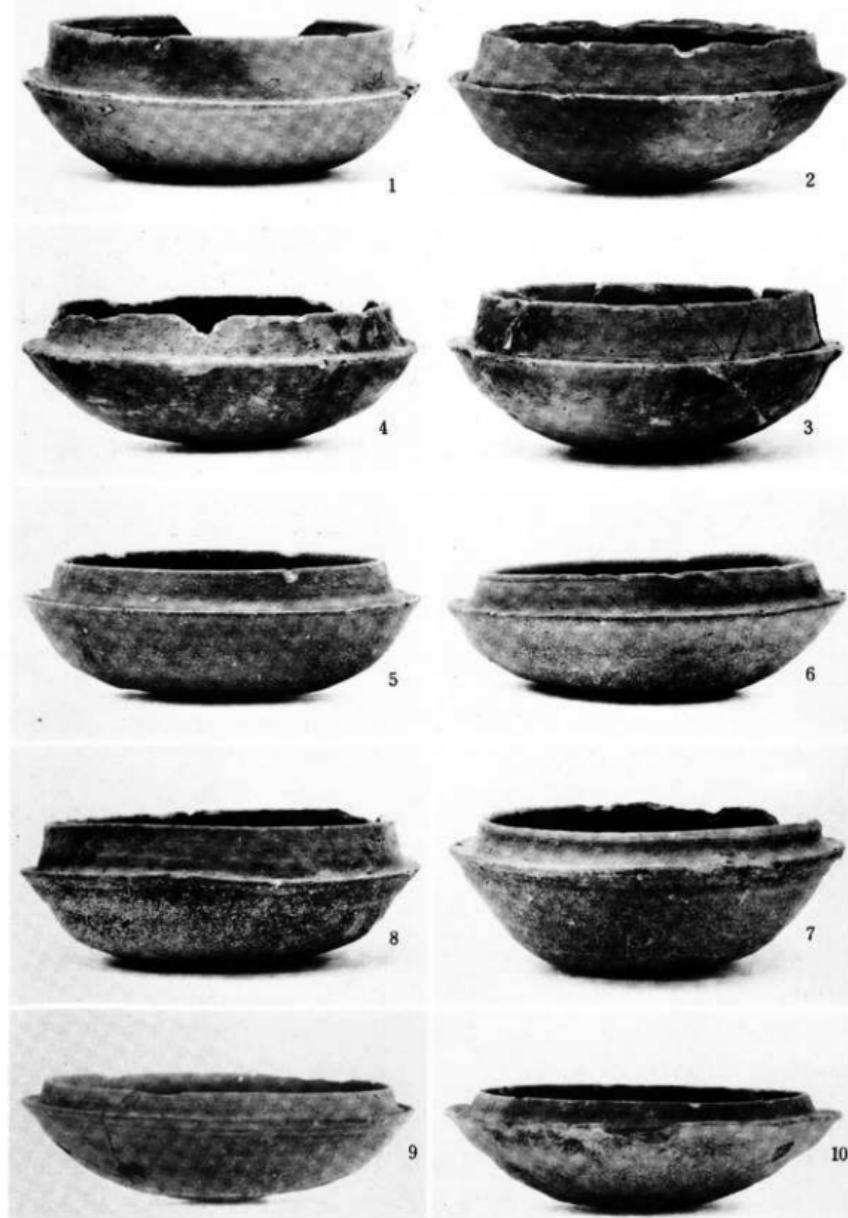


3

I-27地区周辺粘土混り灰色砂層出土土器（1～3）  
M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器（4）



M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器



M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器 1～4は煤付着の杯



1



2



4



3

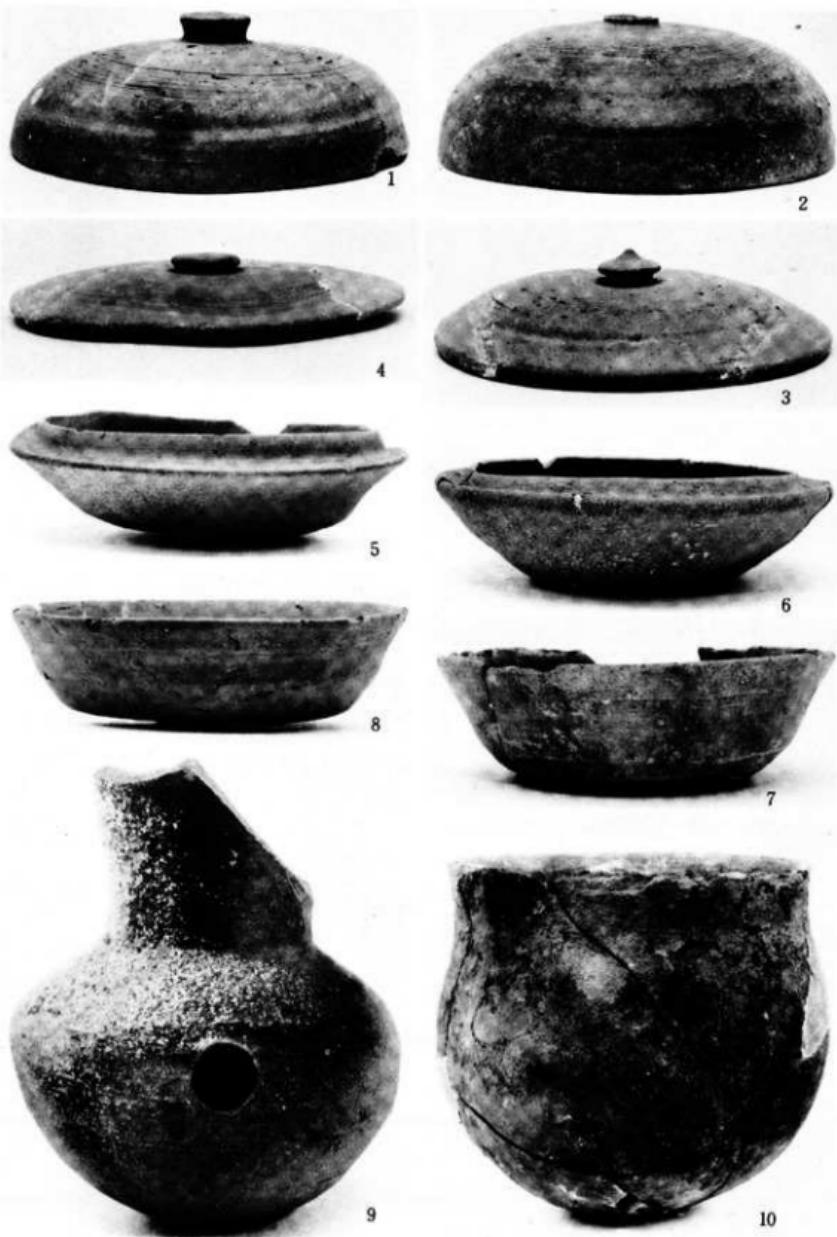


5



6

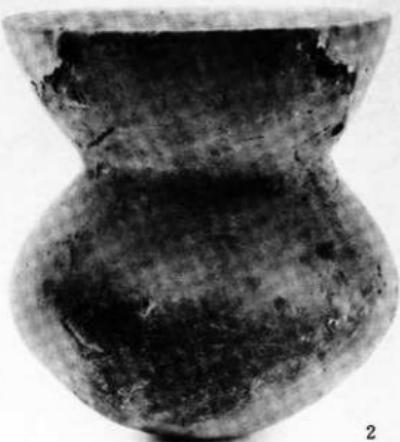
M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器



M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器（1・2・9・10）  
河川上層茶褐色砂質土層出土土器（4～7）



1



2



4



3



5



6

M-19地区周辺粘土混り砂利層出土土器（1～3・5・6）  
河川西端部砂利層出土土器（4）



K-27河川底部砂利層出土繩文式土器



豊中遺跡A地区溝内遺物出土状況



2



5



3



4



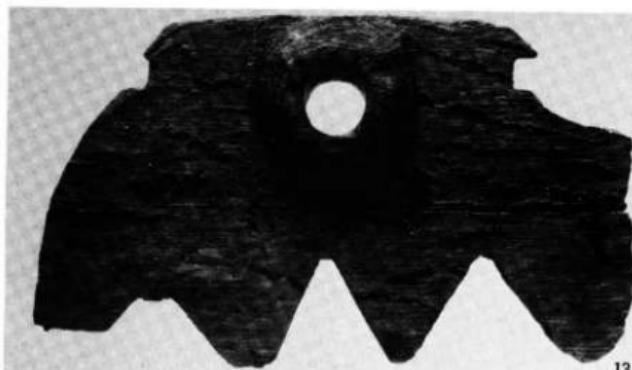
1



7



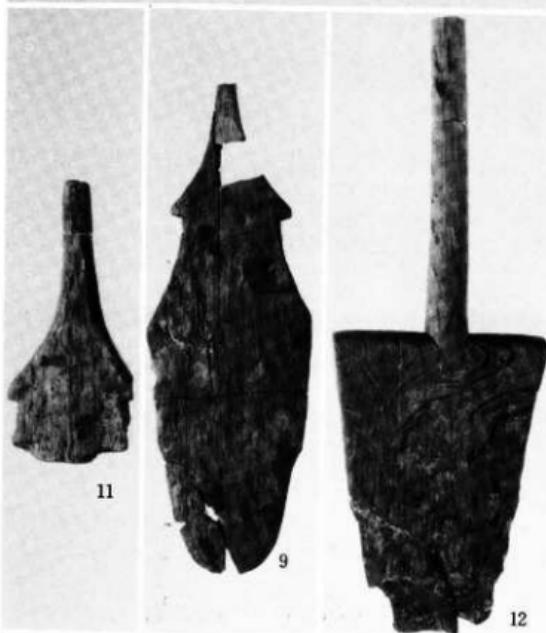
8



13



14



11



9



12



15



8



20



21



22



23



34



33



63



60



61



62



48



35



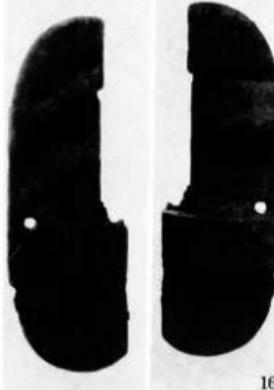
18



35



86



16



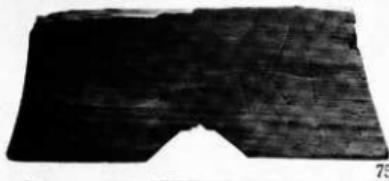
17



53



46



75



51



47



37



38



39



40



41



42



43



44



45



45



79



80



87



24



73



36



36



52



65



31



72



66



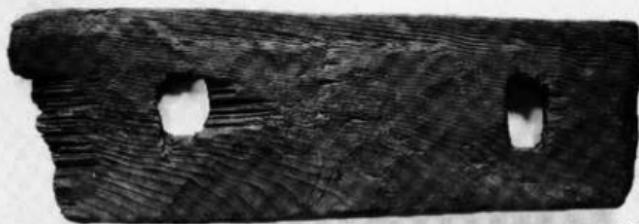
67



57



55



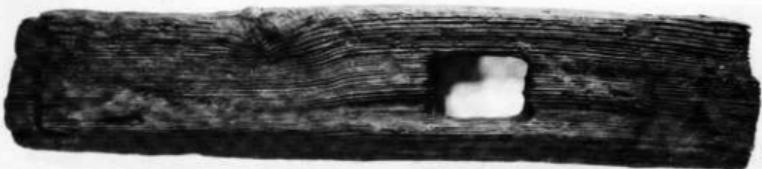
58



56



68



59

69

64

70

71

54

74

25

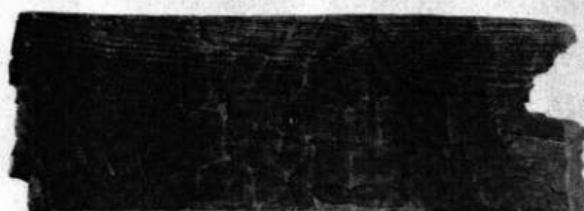
49



76



76



77



77



26

図版第一一八 木製品



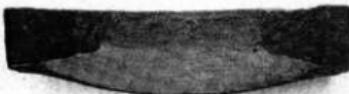
28



29



30



28



32

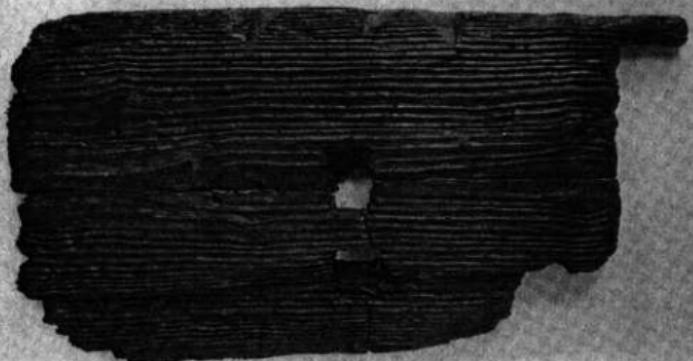
34



81



82



83



